

市道仏生山円座線新設改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

萩前・一本木遺跡Ⅲ

2021年 3 月

高松市教育委員会



第2調査区完掘（北西から）



第7調査区完掘（西から）



第9調査区完掘（北東から）



7・8- 竪穴 14 完掘（北から）



出土遺物



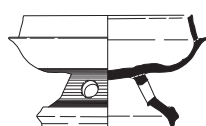
出土遺物

例 言

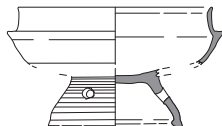
- 1 本書は、香川県高松市仏生山町に所在する萩前・一本木遺跡Ⅲの発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、市道仏生山円座線新設改良事業に伴うものである。本書には、平成24年度、25年度、26年度、28年度、29年度の成果を収録した。
- 3 調査は、高松市教育委員会が実施した。
- 4 調査期間と調査区名は、以下のとおりである。
平成24年10月15日～11月21日 第25・26調査区
平成25年12月19日～平成26年3月14日 第1調査区、第2調査区
平成26年8月18日～8月27日 第10調査区、8月21日～9月3日 第11調査区、10月15日～21日・12月22・23日 第12調査区、10月21日～11月5日 第13調査区
平成28年1月6日～1月19日 第15調査区、3月22日～3月28日 第16調査区
平成29年3月15日～4月1日 第3調査区、3月29日～4月25日 第4調査区、4月20日～5月15日 第5調査区、5月9日～5月15日 第6調査区、5月19日～6月26日 第7調査区、6月27日～7月25日 第8調査区、10月3日～11月2日 第9調査区、12月13日～2018年1月13日 第14調査区
- 5 現地調査は、高松市創造都市推進局文化財課（平成24年度は高松市教育委員会教育局文化財課）文化財専門員 舩築 紀子、波多野 篤、池見 渉、香川 将慶、同課非常勤嘱託職員（令和2年度から高松市創造都市推進局文化財課会計年度任用職員（文化財専門員））磯崎 福子、上原 ふみ、大迫 敏美、中西 克也が担当した。
- 6 本報告書の執筆は、第1章第1節を高松市創造都市推進局文化財課文化財専門員 高上 拓が、それ以外を中西が行った。編集は中西が行った。
- 7 現地調査と整理作業にあたっては、下記の方々の御協力と御指導・助言を賜り、記して感謝する次第である。（順不同・敬称略）
機関：香川県教育委員会、香川大学創造工学部
- 8 以下の業務については、委託業務として行った。
基準点打設業務委託：株式会社 イビソク
空中写真測量業務委託：株式会社 イビソク
遺物写真撮影業務委託：西大寺フォト
出土鉄器の保存処理及び実測：株式会社 イビソク
- 9 発掘調査で得られたすべての資料は、高松市教育委員会で保管している。
- 10 地理的・歴史的環境については、既刊第177集『萩前・一本木遺跡Ⅰ』を参照されたい。

凡 例

- 1 本書で使用した座標系は、平面直角座標系第Ⅳ系（世界測地系）、標高は東京湾平均海水面基準とした。
土層注記及び遺物観察表（土器・土製品）の色調表記は、『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術
会議事務局 監修・財団法人 日本色彩研究所 色票監修）によった。
- 2 遺構名の表記は、原則として調査区名－遺構種別－個別番号の数字の組み合わせで統一する。調査区名に
ついては、別の調査区にまたがる遺構の場合には全ての調査区名を付ける。遺構種別については、付属施
設を伴う堅穴（堅穴建物）、掘立（掘立柱建物）、柵列は漢字表記、単体の遺構はSD（溝）、SK（土坑）、SP（ピ
ット）、SX（性格不明遺構）といった遺構記号とする。個別番号は、原則として調査当時に付した番号を
踏襲する。
例）第2調査区と第3調査区にまたがる堅穴建物1は「2・3－堅穴1」とする。
- 3 1～9・14～16調査区は、細かく12調査区に設定されて調査を実施したが、異なる調査区にまたがる
遺構が多数存在することから、大きく一つの調査区として報告する。また、第10～13調査区は隣接する
のでまとめて報告する。
- 4 堅穴建物内部の遺構については、「カマド」や「周壁溝」、「支柱穴」、「ピット」等の名称を与えることとする。
- 5 挿図の縮尺は、遺構の平・断面図が1/40を基本とするが、各挿図に縮尺を記す。出土遺物の実測図は、
土器は1/4、鉄器は1/2、玉類は1/2、石器は1/2、1/4を基本とするが、各挿図に縮尺を記す。
また、写真図版における遺物の縮尺はすべて任意である。
- 6 挿図の土層注記は、調査時の原図を尊重して、そのまま記載する。
- 7 遺物実測における種別ごとの網掛けは以下の通りである。



須恵器



須恵器（焼成不良）

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第Ⅱ章 調査の成果	3
第1節 調査の方法	3
第2節 基本土層	3
第3節 遺構と遺物	3
1 第26調査区	3
(1) 竪穴建物	3
(2) 掘立柱建物	4
(3) 溝	13
(4) 土坑	19
(5) ピット	21
(6) 柵列	21
(7) 性格不明遺構	21
(8) 包含層出土遺物	24
2 第1～9・14～16調査区	25
(1) 竪穴建物	27
(2) 掘立柱建物	69
(3) 溝	82
(4) 土坑	95
(5) ピット	109
(6) 性格不明遺構	111
(7) 包含層出土遺物	120
3 第10～13調査区	124
(1) 竪穴建物	124
(2) 溝	124
(3) 土坑	132
(4) ピット	136
(5) 性格不明遺構	137
(6) 噴礫	143
4 第25調査区	144
第Ⅲ章 まとめ	145
第1節 遺構の変遷	145
第2節 居館区画に伴う建物に関する一考察	150

挿 図 目 次

図 1	調査区配置図	2	図 40	7-竪穴 5 平・断面図	48
図 2	第 25・26 調査区 遺構平面図	5・6	図 41	7-竪穴 5 カマド 平・断面図、出土遺物実測図	49
図 3	26-竪穴 18 平・断面図	7	図 42	7-竪穴 6 平・断面図	50
図 4	26-竪穴 18 カマド 平・断面図、出土遺物実測図	8	図 43	7-竪穴 6 カマド 平・断面図、出土遺物実測図	51
図 5	26-竪穴 45 平・断面図	9	図 44	7-竪穴 7 平・断面図	52
図 6	26-竪穴 45 カマド 平・断面図	10	図 45	7-竪穴 7 出土遺物実測図	53
図 7	26-掘立 52 平・断面図	11	図 46	7-竪穴 10 平・断面図	54
図 8	26-掘立 53・54 平・断面図	12	図 47	7-竪穴 10 出土遺物実測図	55
図 9	26-SD 1・17 平・断面図	13	図 48	7-竪穴 11 平・断面図	56
図 10	26-SD20 平・断面図、出土遺物実測図	14	図 49	7-竪穴 11 カマド 平・断面図、出土遺物実測図	57
図 11	26-SD29 平・断面図、出土遺物実測図	15	図 50	8-竪穴 12 平・断面図	58
図 12	26-SD35 平・断面図	16	図 51	8-竪穴 12 カマド 平・断面図、出土遺物実測図	59
図 13	26-SD40・41 平・断面図、出土遺物実測図	17	図 52	7・8-竪穴 14 平・断面図	61・62
図 14	26-SD42・44・46 平・断面図	18	図 53	7・8-竪穴 14 カマド 平・断面図、出土遺物実測図	63
図 15	26-SK 2・6・37・49 平・断面図、出土遺物実測図	20	図 54	9-竪穴 1 平・断面図	64
図 16	26-SP 3 平・断面図、出土遺物実測図	21	図 55	7・14-竪穴 8 平・断面図	65
図 17	26-柵列 55 平・断面図	22	図 56	7・14-竪穴 8 カマド 平・断面図	66
図 18	26-SX33・38・39 平・断面図、出土遺物実測図	23	図 57	14-竪穴 10 平・断面図、出土遺物実測図	67
図 19	26-SX51 平・断面図	24	図 58	15-竪穴 12 平・断面図	68
図 20	第 26 調査区包含層 出土遺物実測図	24	図 59	1-掘立 1 平・断面図	69
図 21	第 1～9・14～16 調査区 遺構平面図	25・26	図 60	2・3-掘立 1 平・断面図、出土遺物実測図	71・72
図 22	2・3-竪穴 20 平・断面図、出土遺物実測図	28	図 61	2・3-掘立 2 平・断面図、出土遺物実測図	73
図 23	2・3-竪穴 30 平・断面図	29	図 62	4-掘立 3 平・断面図、出土遺物実測図	74
図 24	2・3-竪穴 30 カマド 平・断面図、出土遺物実測図 (1)	30	図 63	4-掘立 4 平・断面図	76
図 25	2・3-竪穴 30 出土遺物実測図 (2)	31	図 64	4-掘立 4 出土遺物実測図	77
図 26	2・4-竪穴 58 平・断面図	32	図 65	4-掘立 5 平・断面図	77
図 27	2・4-竪穴 58 カマド 平・断面図、出土遺物実測図	33	図 66	2・5-掘立 6 平・断面図、出土遺物実測図	79
図 28	3-竪穴 70・80 平・断面図、出土遺物実測図	35	図 67	2・3-掘立 7 平・断面図	80
図 29	3-竪穴 90 平・断面図	36	図 68	9-掘立 1 平・断面図、出土遺物実測図	81
図 30	3-竪穴 100 平・断面図、カマド 平・断面図、出土遺物実測図	37	図 69	1-SD17・18 平・断面図	82
図 31	4-竪穴 110 平・断面図	38	図 70	1・16-SD20 平・断面図、出土遺物実測図	83
図 32	4-竪穴 110 カマド 平・断面図、出土遺物実測図 (1)	39	図 71	16-SD50 平・断面図	84
図 33	4-竪穴 110 出土遺物実測図 (2)	40	図 72	2・4・5-SD 1、2-SD 2・3 平・断面図、出土遺物実測図	85
図 34	4-竪穴 120 平・断面図、出土遺物実測図	40	図 73	2・4-SD 4、2-SD 8 平・断面図	86
図 35	4・14-竪穴 130 平・断面図、出土遺物実測図	41	図 74	2・3・5・8-SD 5 平・断面図	87
図 36	7-竪穴 1 平・断面図、出土遺物実測図	43	図 75	5-SD 2 平・断面図	87
図 37	7・9-竪穴 2 平・断面図	44	図 76	7・8・9-SD21 平・断面図、出土遺物実測図	89
図 38	7・9-竪穴 3 平・断面図	46	図 77	7-SD25 平・断面図	90
図 39	7・9-竪穴 3 カマド 平・断面図	47	図 78	7-SD39 平・断面図	91

図 79	7・8－SD60, 14－SD 4 平・断面図、 出土遺物実測図	92	図 102	8－SX13・59 平・断面図、出土遺物実測図	121
図 80	14－SD 5、15－SD 1 平・断面図、 出土遺物実測図	93	図 103	8－SX61、9－SX20 平・断面図	122
図 81	15－SD11・13 平・断面図、出土遺物実測図	94	図 104	9－SX29 平・断面図	123
図 82	1－SK13・19・21・22、2－SK 5・47、 2・4－SK 6 平・断面図	96	図 105	第 4・7 調査区包含層 出土遺物実測図	123
図 83	4－SK44・46～48・75 平・断面図、 出土遺物実測図	98	図 106	第 10～13 調査区遺構平面図	125・126
図 84	4－SK76・81・85、4・14－SK97 平・断面図、 出土遺物実測図	99	図 107	10－竪穴 1 平・断面図、出土遺物実測図	127
図 85	4－SK98, 4・14－SK140 平・断面図、 出土遺物実測図	101	図 108	10－SD 5・10 平・断面図、出土遺物実測図	128
図 86	6－SK30・32～35 平・断面図	102	図 109	10－SD15 平・断面図、出土遺物実測図	129
図 87	7－SK23 平・断面図、出土遺物実測図	103	図 110	11－SD 1 平・断面図、出土遺物実測図	130
図 88	7－SK24・26・27 平・断面図	104	図 111	12－SD 1・102 平・断面図、出土遺物実測図	131
図 89	7－SK30・40・43・47、8－SK51 平・断面図	106	図 112	10－SK 2・3・20・21 平・断面図、 出土遺物実測図	133
図 90	9－SK10～12・19・23 平・断面図	107	図 113	11－SK 3・14・21 平・断面図、 出土遺物実測図	134
図 91	9－SK24・25 平・断面図	108	図 114	12－SK 3・6・104、13－SK 3 平・断面図	135
図 92	15－SK10・14・15、16－SK57・58 平・断面図	109	図 115	10－SP16、11－SP 6 平・断面図、 出土遺物実測図	136
図 93	1－SP25、4－SP41、7－SP34、 15－SP 2 平・断面図、出土遺物実測図	110	図 116	11－SX 2 平・断面図、出土遺物実測図	138
図 94	1・9－SX10、1－SX15 平・断面図	111	図 117	11－SX17、12－SX101 平・断面図、 出土遺物実測図	139
図 95	2・6－SX 7、2・4－SX10 平・断面図、 出土遺物実測図	113	図 118	12－SX 2 平・断面図	140
図 96	2・5－SX24・40・50 平面図	114	図 119	12－SX 2 出土遺物実測図	141
図 97	2・5－SX24・40・50 断面図、2・5－SX24 出土遺物実測図	115	図 120	13－SX 2 平・断面図	142
図 98	2・5－SX40 出土遺物実測図	116	図 121	第 10・11 調査区噴礫 断面図	143
図 99	2・5－SX40・50 出土遺物実測図	117	図 122	第 25 調査区 平・断面図	144
図 100	7－SX 4 平・断面図、出土遺物実測図	118	図 123	遺構変遷図（1）	146
図 101	7・14－SX 9 平・断面図、出土遺物実測図	119	図 124	遺構変遷図（2）	147
			図 125	遺構変遷図（3）	148
			図 126	遺構変遷図（4）	149
			図 127	建物規模分布図	151

挿 表 目 次

表 1	調査区の面積・担当者	2	表 11	土器観察表（9）	160
表 2	整理作業工程表	2	表 12	土器観察表（10）	161
表 3	土器観察表（1）	152	表 13	土器観察表（11）	162
表 4	土器観察表（2）	153	表 14	土器観察表（12）	163
表 5	土器観察表（3）	154	表 15	土器観察表（13）	164
表 6	土器観察表（4）	155	表 16	土器観察表（14）	165
表 7	土器観察表（5）	156	表 17	土器観察表（15）	166
表 8	土器観察表（6）	157	表 18	土製品観察表	167
表 9	土器観察表（7）	158	表 19	金属製品観察表	167
表 10	土器観察表（8）	159	表 20	石器・石製品観察表	167

巻頭図版目次

巻頭図版 1 第2調査区完掘（北西から）

第7調査区完掘（西から）

巻頭図版 2 第9調査区完掘（北東から）

7・8－竪穴14完掘（北から）

巻頭図版 3 出土遺物

巻頭図版 4 出土遺物

図版目次

図版 1 (1) 第26調査区 完掘（南から）

(2) 第26調査区 完掘（東から）

(3) 第26調査区 完掘（西から）

図版 2 (1) 第25調査区 完掘（北から）

(2) 26－竪穴18 断面（南から）

(3) 26－竪穴18 断面（北西から）

(4) 26－竪穴18 カマド断面（西から）

(5) 26－竪穴18 P1断面（南から）

(6) 26－竪穴45 完掘（北西から）

(7) 26－竪穴45 カマド（南東から）

(8) 26－掘立52 SP4断面（西から）

図版 3 (1) 26－掘立52 SP9断面（南から）

(2) 26－掘立53 SP11・12断面（南東から）

(3) 26－SD1 断面（北から）

(4) 26－SD17 断面（南から）

(5) 26－SD20 断面（西から）

(6) 26－SD20 遺物出土（西から）

(7) 26－SD29 遺物出土（南から）

(8) 26－SD40 断面（南から）

図版 4 (1) 26－SK2 断面（西から）

(2) 26－SK37 断面（南から）

(3) 26－SP3 断面（南から）

(4) 26－柵列54 SP25断面（北から）

(5) 26－柵列54 SP26断面（北から）

(6) 26－SX33 完掘（南東から）

(7) 26－SX39 断面（西から）

(8) 26－SX51 完掘（東から）

図版 5 (1) 第1調査区（東側） 完掘（南から）

(2) 第1調査区（西側） 完掘（南から）

(3) 第15調査区（第2遺構面） 完掘（南から）

図版 6 (1) 第2調査区（西側） 完掘（東から）

(2) 第2調査区（東側） 完掘（西から）

(3) 第2調査区（東側） 完掘（南から）

図版 7 (1) 第3調査区 完掘（北から）

(2) 第4調査区 完掘（西から）

図版 8 (1) 第5調査区 完掘（南西から）

(2) 第7調査区 完掘（南西から）

図版 9 (1) 第8調査区 完掘（南東から）

(2) 第9調査区 完掘（北から）

図版 10 (1) 2・3－竪穴20 完掘（西から）

(2) 2・3－竪穴20 掘方完掘（南から）

(3) 2・3－竪穴20 カマド断面（西から）

(4) 2・3－竪穴30 完掘（南から）

(5) 2・3－竪穴30 カマド（南から）

(6) 2・3－竪穴30 遺物出土（東から）

(7) 2・4－竪穴58 完掘（南から）

(8) 2・4－竪穴58 カマド（南から）

図版 11 (1) 3－竪穴70 断面（南から）

(2) 3－竪穴70 完掘（北から）

(3) 3－竪穴90 断面（南から）

(4) 3－竪穴100 完掘（南から）

(5) 3－竪穴100 カマド（南から）

(6) 4－竪穴110 断面（南西から）

(7) 4－竪穴110 SP94断面（南から）

(8) 4－竪穴110 完掘（南から）

図版 12 (1) 4－竪穴110 カマド（南から）

(2) 4－竪穴120 完掘（南から）

(3) 4－竪穴130 完掘（南から）

(4) 7－竪穴1 SP1断面（南から）

(5) 7－竪穴1 完掘（南東から）

(6) 7－竪穴1 遺物出土（南から）

(7) 7・9－竪穴2 断面（南西から）

(8) 7・9－竪穴2 P3断面（南から）

図版 13 (1) 7・9－竪穴2 完掘（南から）

(2) 7・9－竪穴3 断面（東から）

(3) 7・9－竪穴3 カマド（南東から）

(4) 7－竪穴5 P3断面（南から）

(5) 7－竪穴5 断面（南東から）

(6) 7－竪穴5 完掘（南東から）

(7) 7－竪穴5 カマド（南から）

(8) 7－竪穴5 旧カマド（南から）

図版 14 (1) 7－竪穴6 断面（南西から）

- (2) 7-竪穴6 完掘 (南から)
 (3) 7-竪穴6 カマド (南から)
 (4) 7-竪穴7 断面 (南東から)
 (5) 7-竪穴7 完掘 (南から)
 (6) 7-竪穴7 遺物出土 (南から)
 (7) 7-竪穴10 P4断面 (南から)
 (8) 7-竪穴10 完掘 (南から)
- 図版 15 (1) 7-竪穴10 遺物出土 (西から)
 (2) 7-竪穴11 P2断面 (南から)
 (3) 7-竪穴11 完掘 (南から)
 (4) 7-竪穴11 カマド (南から)
 (5) 8-竪穴12 P3断面 (南から)
 (6) 8-竪穴12 完掘 (東から)
 (7) 8-竪穴12 カマド (南から)
 (8) 8-竪穴14 完掘 (北から)
- 図版 16 (1) 8-竪穴14 カマド (南から)
 (2) 8-竪穴14 掘方完掘 (北から)
 (3) 9-竪穴1 P1断面 (南から)
 (4) 9-竪穴1 P2断面 (南から)
 (5) 9-竪穴1 完掘 (南東から)
 (6) 7・14-竪穴8 完掘 (南東から)
 (7) 7・14-竪穴8 カマド (南から)
 (8) 14-竪穴10 断面 (南西から)
- 図版 17 (1) 14-竪穴10 完掘 (南西から)
 (2) 15-竪穴12 完掘 (南から)
 (3) 2・3-掘立1 SP33断面 (南から)
 (4) 2・3-掘立1 SP37断面 (北から)
 (5) 2・3-掘立1 完掘 (西から)
- 図版 18 (1) 4-掘立3 SP22断面 (南から)
 (2) 4-掘立3 完掘 (南から)
 (3) 4-掘立4 上面検出 (南から)
 (4) 4-掘立4 SP73断面 (北から)
 (5) 4-掘立4 完掘 (南から)
 (6) 2・5-掘立6 SP17断面 (南から)
 (7) 2・5-掘立6 SP20断面 (南から)
 (8) 2・5-掘立6 完掘 (東から)
- 図版 19 (1) 2-掘立7 SP23断面 (南から)
 (2) 2-掘立7 完掘 (北から)
 (3) 9-掘立1 SP2断面 (南から)
 (4) 9-掘立1 SP7断面 (北から)
 (5) 9-掘立1 完掘 (東から)
- 図版 20 (1) 1-SD20 完掘 (北から)
 (2) 16-SD50 完掘 (北から)
 (3) 2・4・5-SD1、2-SD2・3 (北から)
 (4) 2・4・5-SD1 断面 (南から)
 (5) 2・3・5・8-SD5 断面 (東から)
- 図版 21 (1) 5-SD2 断面 (東から)
 (2) 7・8・9-SD21 断面 (南から)
 (3) 7・8・9-SD21 断面 (南から)
 (4) 7-SD25 断面 (西から)
- (5) 7-SD39 断面 (南から)
 (6) 8-SD60 断面 (北から)
 (7) 14-SD4 断面 (南から)
 (8) 14-SD5 断面 (西から)
- 図版 22 (1) 15-SD1 断面 (東から)
 (2) 15-SD1 完掘 (西から)
 (3) 15-SD11 断面 (南から)
 (4) 15-SD11 完掘 (南から)
 (5) 15-SD13 断面 (南から)
 (6) 15-SD13 完掘 (南から)
 (7) 2-SK5 断面 (南から)
 (8) 2-SK47 断面 (南西から)
- 図版 23 (1) 4-SK47 断面 (南東から)
 (2) 4-SK75 断面 (西から)
 (3) 4-SK76 断面 (西から)
 (4) 4・14-SK97 断面 (南から)
 (5) 7-SK23 断面 (北東から)
 (6) 7-SK27 断面 (東から)
 (7) 7-SK30 断面 (東から)
 (8) 9-SK23 断面 (南から)
- 図版 24 (1) 16-SK57 断面 (南から)
 (2) 1-SP25 断面 (南から)
 (3) 2・4-SX10 断面 (南から)
 (4) 2・5-SX40・50 断面 (東から)
 (5) 2・5-SX40 遺物出土 (東から)
 (6) 2・5-SX40 断面 (南西から)
 (7) 2・5-SX50 断面 (北東から)
 (8) 2・5-SX40・50 完掘 (南から)
- 図版 25 (1) 7-SX4 断面 (北東から)
 (2) 8-SX13 断面 (東から)
 (3) 9-SX29 断面 (南東から)
 (4) 第10調査区 完掘 (東から)
 (5) 第11調査区 完掘 (北東から)
 (6) 第12調査区 (南側) 完掘 (東から)
 (7) 第12調査区 (北側) 完掘 (南東から)
 (8) 第13調査区 完掘 (北東から)
- 図版 26 (1) 10-竪穴1 断面 (西から)
 (2) 10-竪穴1 遺物出土 (西から)
 (3) 10-竪穴1 P2断面 (南から)
 (4) 10-竪穴1 P3断面 (南から)
 (5) 10-SD5 断面 (北から)
 (6) 10-SD10 断面 (南から)
 (7) 10-SD10 遺物出土 (北西から)
 (8) 10-SD15 断面 (南から)
- 図版 27 (1) 11-SD1 断面 (南東から)
 (2) 11-SD1 完掘 (南東から)
 (3) 10-SK3 断面 (東から)
 (4) 10-SK20 断面 (北西から)
 (5) 10-SK20 遺物出土 (北から)
 (6) 11-SK14 遺物出土 (北から)

(7) 11－SK14 完掘（南から）

(8) 11－SK21 完掘（南から）

図版 28 (1) 12－SK 3 断面（南から）

(2) 13－SK 3 断面（北から）

(3) 11－SX 2 断面（北西から）

(4) 12－SX101 完掘（南東から）

(5) 第 10 調査区 噴礫断面（東から）

図版 29 (1) 第 11 調査区 噴礫断面（南東から）

(2) 調査風景

(3) 調査風景

(4) 調査風景

(5) 調査風景

図版 30 出土遺物

図版 31 出土遺物

図版 32 出土遺物

図版 33 出土遺物

図版 34 出土遺物

図版 35 出土遺物

図版 36 出土遺物

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

当該地において、高松市都市整備局道路整備課（以下、道路整備課）によって市道仏生山門座線の道路新設改良事業が計画された。対象地は東西に長い道路用地とことでん仏生山駅西側に整備された駅前広場で、既存の住宅等の移転調整によって、細かく区分けして五月雨式に調査を行った。試掘調査は平成24年10月、25年5月、26年6月、26年10月に道路整備課の依頼を受けて高松市創造都市推進局文化財課（以下、文化財課）が試掘調査を行った。結果、対象地において埋蔵文化財の包蔵状況を確認したため、県教育委員会に結果を報告したところ、周知の埋蔵文化財包蔵地として登録された（萩前・一本木遺跡の範囲変更）。これを受けて、開発に際しては適切な保護措置が必要な旨を事業者と協議した。

平成24年10月16日付け、25年12月20日付け、26年7月18日付け、29年3月15日付けで道路整備課から埋蔵文化財発掘通知が提出され、県教育委員会に進達したところ、同年3月30日付けで発掘調査を行う旨の行政指導がなされた。文化財課と道路整備課はこれを受けて計画を協議し、下記の期間で発掘調査を実施した。調査の経過は第2節のとおりである。

第2節 調査の経過

調査は、平成24年10月15日の第26調査区の調査開始から、30年1月13日の第14調査区の調査終了までの7年間にわたって断続的に実施された。各調査区の調査期間は、以下のとおりである。

第26調査区	平成24年10月～11月
第1・2調査区	平成25年12月～平成26年3月
第10～13調査区	平成26年8月～12月
第15・16調査区	平成28年1月～3月
第3～9・14調査区	平成29年3月～平成30年1月

整理作業は、平成24年度から令和2年度にかけて実施した。

調査日誌抄録

H 24.10/15～H 24.10/16	試掘調査
H 24.10/19～H 24.11/21	第25・26調査区調査
H 25. 5/ 8～H 25. 5/13	試掘調査
H 25.12/19～H 26. 1/23	第1調査区（東部）調査
H 26. 1/ 9	第1調査区（東部）空測
H 26. 1/ 6～H 26. 2/ 5	第2調査区（西部）調査
H 26. 2/ 5	第2調査区（西部）空測
H 26. 1/31～H 26. 2/ 7	第1調査区（西部）調査
H 26. 2/10～H 26. 3/14	第2調査区（東部）調査
H 26. 2/10	第1調査区（西部）空測
H 26. 3/ 4	第2調査区（東部）空測
H 26. 8/18～H 26. 8/27	第10調査区調査
H 26. 8/21～H 26. 9/ 3	第11調査区調査
H 26.10/15～H 26.10/21	第12調査区調査
H 26.10/21～H 26.11/ 5	第13調査区調査
H 26.12/22～H 26.12/23	第12調査区調査
H 28. 1/ 6～H 28. 1/19	第15調査区調査
H 28. 3/22～H 28. 3/28	第16調査区調査
H 29. 3/15～H 29. 4/ 1	第3調査区調査
H 29. 4/ 1	第3調査区空測
H 29. 3/29～H 29. 4/25	第4調査区調査
H 29. 4/25	第4調査区空測
H 29. 4/20～H 29. 5/15	第5調査区調査
H 29. 5/ 9～H 29. 5/15	第6調査区調査
H 29. 5/15	第5・6調査区空測
H 29. 5/19～H 29. 6/26	第7調査区調査
H 29. 6/26	第7調査区空測
H 29. 6/27～H 29. 7/25	第8調査区調査
H 29. 7/25	第8調査区空測
H 29.10/ 3～H 29.11/ 2	第9調査区調査
H 29.11/ 2	第9調査区空測
H 29.12/13～H 30. 1/13	第14調査区調査

表 1 調査区の面積・担当者

調査区	面積	担当者
25	4m ²	船築、磯崎
26	247m ²	船築、波多野、池見
1	180m ²	船築、中西
2	387m ²	船築、中西、上原
3	51m ²	船築、香川、中西、磯崎
4	287m ²	船築、香川、中西、磯崎、大迫
5	95m ²	船築、香川、中西、大迫
6	75m ²	船築、中西、大迫
7	304m ²	船築、中西、磯崎、大迫
8	255m ²	船築、中西、大迫
9	305m ²	船築、中西、上原、大迫
10	212m ²	船築、中西、磯崎、上原
11	103m ²	船築、中西、磯崎、上原
12	133m ²	船築
13	111m ²	船築
14	73m ²	船築、磯崎、大迫
15	34m ²	船築、中西
16	71m ²	船築

表 2 整理作業工程表

洗 浄	平成24年～令和元年
接 合・復 元	平成25年、令和元年
実 測	平成26年4月～5月 平成30年8月～平成31年1月
遺構トレース	令和元年～2年
遺物トレース	平成31年1月
写 真 撮 影	平成31年3月 令和元年10月・12月
レイアウト	令和2年8月
執筆・編集	令和2年8月～令和3年2月



図 1 調査区配置図

第Ⅱ章 調査の成果

第1節 調査の方法

調査区番号と遺構番号（図1）

調査は第1章で前述したように既存の建物等の移転の調整で数ヶ年に渡っており、細かく調査区が分割されている。調査区番号の設定は、基本的に調査開始順であり、第1～9調査区に関して平成25・28年に調査を開始した順番で番号を設定する。第10～13調査区は平成26年の調査であり、第1～4調査区としていたが、25・28年調査に際し重複する番号を付けたため新たに付け替えた。第14調査区は平成29年の調査区であり、北側と南側に分かれる。第15調査区は第1調査区と道路を挟んだ南側である。第16調査区は第1調査区の西側に隣接し、調査時は第1調査区追加と仮称した。第25・26調査区は香川県農業試験場跡地中央エリアで行った新病院整備事業に伴う調査で付けられた番号であり、調査の時期も新病院整備事業の調査と同じ24年である。

遺構番号は遺構の種類に関係なく、検出した順番で1から番号を与えた。ただし、第2～4調査区の竪穴建物は20・30・・・120・130という切りのいい数字を付けた。遺構の種類は、現地での調査所見を基に性格を判断し、番号の前に遺構の記号を冠した。整理作業において調査時と異なる性格と判断した場合、記号は変更するが、番号は変えていない。

第2節 基本土層

第1～9・14～16調査区は既存の住宅や倉庫があったため、最上層は攪乱を著しく受けているが、その下にある近世の条里型水田の直下が地山面となり、この面が遺構面である。第2調査区の西域は建物のコンクリート基礎が地山面以下に達しており、基礎の間のみを調査した。第10～13・26調査区は現在の耕作土と床土の下に近世の条里型水田の耕作土が堆積し、その直下が地山面である。第15調査区と第26調査区東端は数面の遺構検出面が確認でき、遺構を検出した。各面の調査終了後に地山面まで掘削し、調査を行った。結果として、第15調査区では4面、第26調査区では2面の遺構面を確認した。

第3節 遺構と遺物

1 第26調査区

（1）竪穴建物

26－竪穴18（図3・4）

第26調査区東端で検出した竪穴建物であり、26－SD17、26－SP30に切られる。調査区外に広がるため全体の形状は不明であるが、検出できた平面形は方形を呈する。主軸方位はN－0°－Wを示し、検出面の標高は35.4mである。規模は長辺約6.60m、短辺1.90m以上、深さ約0.40mを測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴（26－竪穴18 P1・3）、ピット（26－竪穴18 P2・26－SP36）を確認した。

埋土は灰黄褐細砂混じりシルトと黒褐細砂混じりシルトである。遺物は須恵器杯蓋（1）・杯身（2）・壺（3）、土師器甕（4・5）が出土した。

貼床は灰黄褐シルト混じり微細砂～細砂であり、ほぼ平坦である。掘方までの深さは0.06～0.2mである。

カマドは竪穴建物北側中央に作り付けられ、カマドの東半分は調査区外である。カマド構築材は黒褐細砂～シルトである。カマド内部には焼土と炭化材粒を含む層が確認でき、当時の機能面と考えられ、ほぼ貼床直上と同じ高さである。

支柱穴は2基確認できた。P1はやや不整な円形を呈し、直径0.50m、深さ0.17mを測る。断面形状は浅い皿状である。柱痕が確認でき、埋土は暗褐細礫混じり細砂～シルトと黒褐細礫混じり細砂～粘質シルトである。P3は円形と考えられ、直径約0.44m、深さ約0.16mを測る。断面は浅いU字形であり、埋土は黒褐シルト混じり細砂である。

SP36は円形を呈し、直径0.33m、深さ0.19mを測る。断面はU字形、埋土は黒褐細砂混じりシルト、極暗褐細砂混じりシルトである。P2は不整円形、直径0.60m、深さ0.17mを測る。北側に最深部を有する。埋土は暗褐シルト混じり細砂。

周壁溝は部分的に途切れているが、検出できた竪穴建物内ではほぼ検出した。幅0.15m、深さ0.04mを測り、埋土は黒褐シルト混じり細砂である。

出土遺物の年代から、MT15～TK10形式併行期と判断できる。

26-1 竪穴 45 (図 5・6)

第 26 調査区のほぼ中央において検出した竪穴建物である。竪穴建物の南側は調査区外に広がり、検出できたのは北東隅付近で建物全体の約 1 / 4 程度である。平面形は方形を呈し、主軸方位は N - 30° - W を示し、検出面の標高は 35.6m である。検出した規模は南北辺・東西辺共に 3.00 m、深さ約 0.25 m を測る。26-SP13・14 に切られる。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝を確認した。

埋土は黒褐シルト～粘土である。遺物は図化できないが、須恵器杯蓋・杯身、土師器甕が出土した。

貼床は暗褐シルト～粘土であり、ほぼ平坦である。掘方までの深さは 0.16 m である。掘方はやや凹凸がある。

カマドは竪穴建物北西側中央に作り付けられ、カマドの基底部のみが残存する。カマド断面設定に際しカマド主軸に対して異なる方向に設定している。カマド構築材は暗褐シルトであり、左右の基底部で非常にわずかであるが色調が異なる。煙道部はやや長く延びる。カマド内部上位には焼土と炭化材粒を多量に含む層が確認できる。

周壁溝は北東隅に途切れる部分があるが、検出できた竪穴建物内ではほぼ確認できた。周壁溝の幅は 0.20 m、深さ 0.04 m である。埋土は黒褐シルト～粘土である。

出土した土器が細片のため詳細な時期は確定できないが、古墳時代後期と判断できる。

(2) 掘立柱建物

26-1 掘立 52 (図 7)

第 26 調査区の中央やや西寄りで検出した 3 間×1 間以上の総柱の掘立柱建物である。26 - SP 4・7～10 の 5 基のみの検出であり、調査区の幅が狭いため建物の全様は不明である。主軸方位は N - 90° - E を示し、検出面の標高は 35.7m 前後である。検出した東西方向の全長は 4.13 m、南北方向 0.92 m を測る。SP 4 と SP 8 の中間の柱穴は 26 - SK 2 により削平され、SP7 の西側の柱穴は 26 - SK 6 により削平される。東西方向の柱間寸法は 1.45 ～ 1.25 m、南北は 0.90 m である。SP10 は東側にやや位置がずれる。

SP 4 は楕円形を呈し、長軸 0.86 m 以上、短軸 0.70 m、深さ 0.32m を測る。断面形状は U 字形であり、底面北端に直径 0.18 m、深さ 0.08 m の柱痕がある。埋土は柱痕が確認でき、柱痕が褐粘土、掘方が褐粘土と灰褐粘土である。SP 7 は隅丸方形を呈し、一辺 0.40m、深さ 0.20m を測る。断面形状は U 字形である。埋土は暗褐シルトの単一層である。SP 8 は隅丸方形を呈し、一辺 0.40 × 0.46 m、深さ 0.25m を測る。底面中央に直径 0.19 ～ 0.13 m、深さ 0.07m の柱痕が確認される。SP 9 は不正な円形を呈し、直径 0.43m、深さ 0.24 m を測る。断面形状は U 字形である。埋土はにぶい黄褐細砂～シルトと褐シルトである。SP10 は円形を呈し、直径 0.62 ～ 0.55m、深さ 0.16m を測る。断面形状は浅い皿状である。埋土は暗褐粘土と黒褐シルトである。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

26-1 掘立 53 (図 8)

第 26 調査区の中央やや西寄りで検出した掘立柱建物である。26 - SP11・15・48・50 の 4 基のみの検出であり、建物の全様は不明である。建物は南側の調査区外に広がる。検出した東西方向は 3 間であり、その方位は N - 80° - W を示し、検出面の標高は 35.7 m 前後である。東西方向の全長は約 4.25 m である。柱間寸法は約 1.40 m である。

SP15 は方形を呈し、一辺 0.50m、深さ 0.21 m を測る。断面形状は U 字形である。埋土は柱痕が確認でき、柱痕が暗褐シルト～粘土、掘方が黒褐粘土である。SP48 は方形を呈し、一辺 0.45m である。調査区南壁では深さ 0.35m を測る。断面形状は不整な U 字形である。埋土は柱痕が確認でき、柱痕が黒褐粘土、掘方が暗褐シルト～粘土と黒褐極細砂～シルトである。SP50 は円形を呈し、直径 0.35 m、深さ 0.04 m である。上部を 26 - SX51 に削平される。埋土は暗褐シルト～粘土である。SP11 は 26 - SP12 を切り、円形を呈し、直径 0.65 m、深さ 0.30m を測る。断面形状は U 字状であり、底面の南側がやや凹む。埋土は柱痕が確認でき、柱痕が暗褐粘土、掘方が暗褐シルトと灰黄褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明。

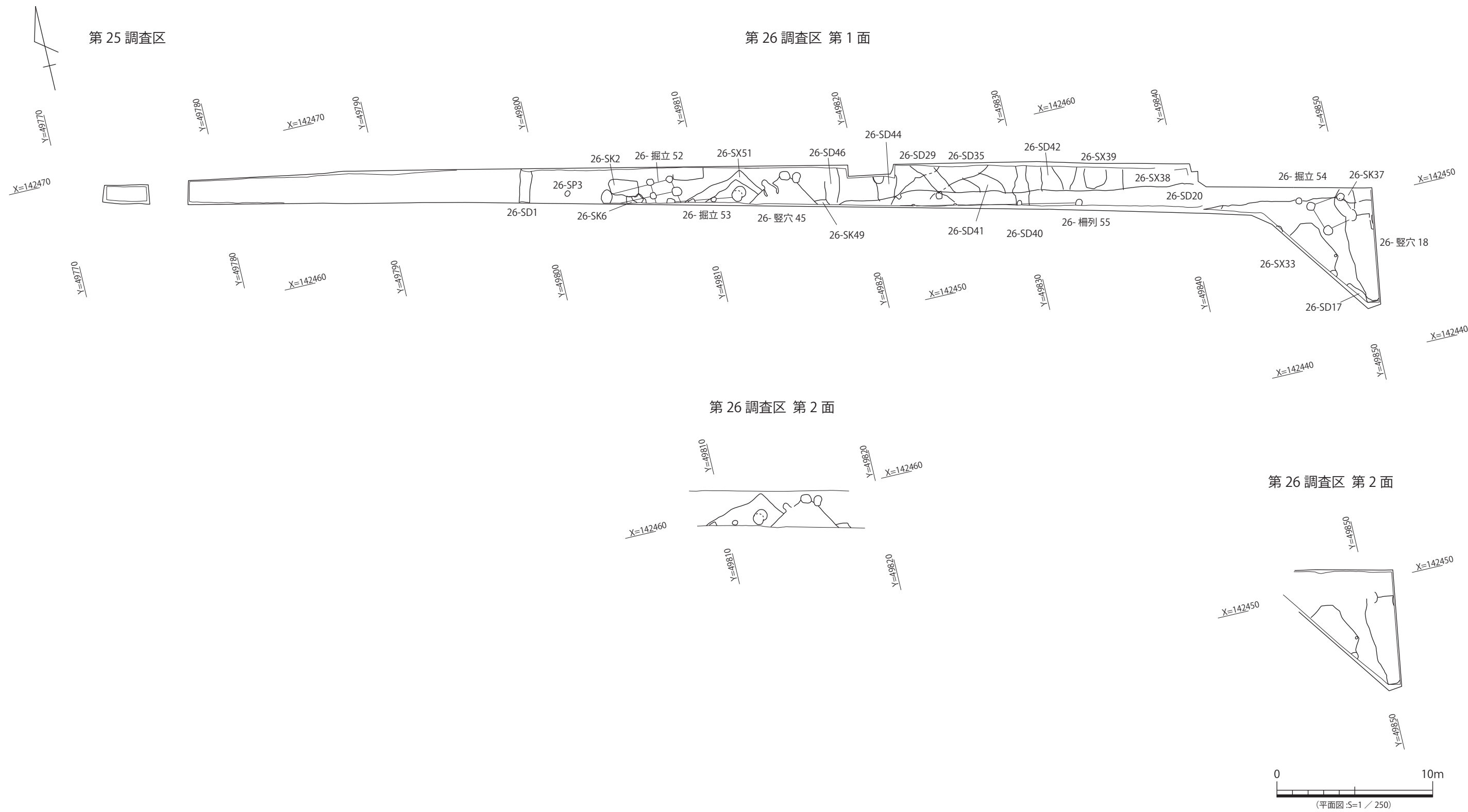


図 2 第 25・26 調査区 遺構平面図

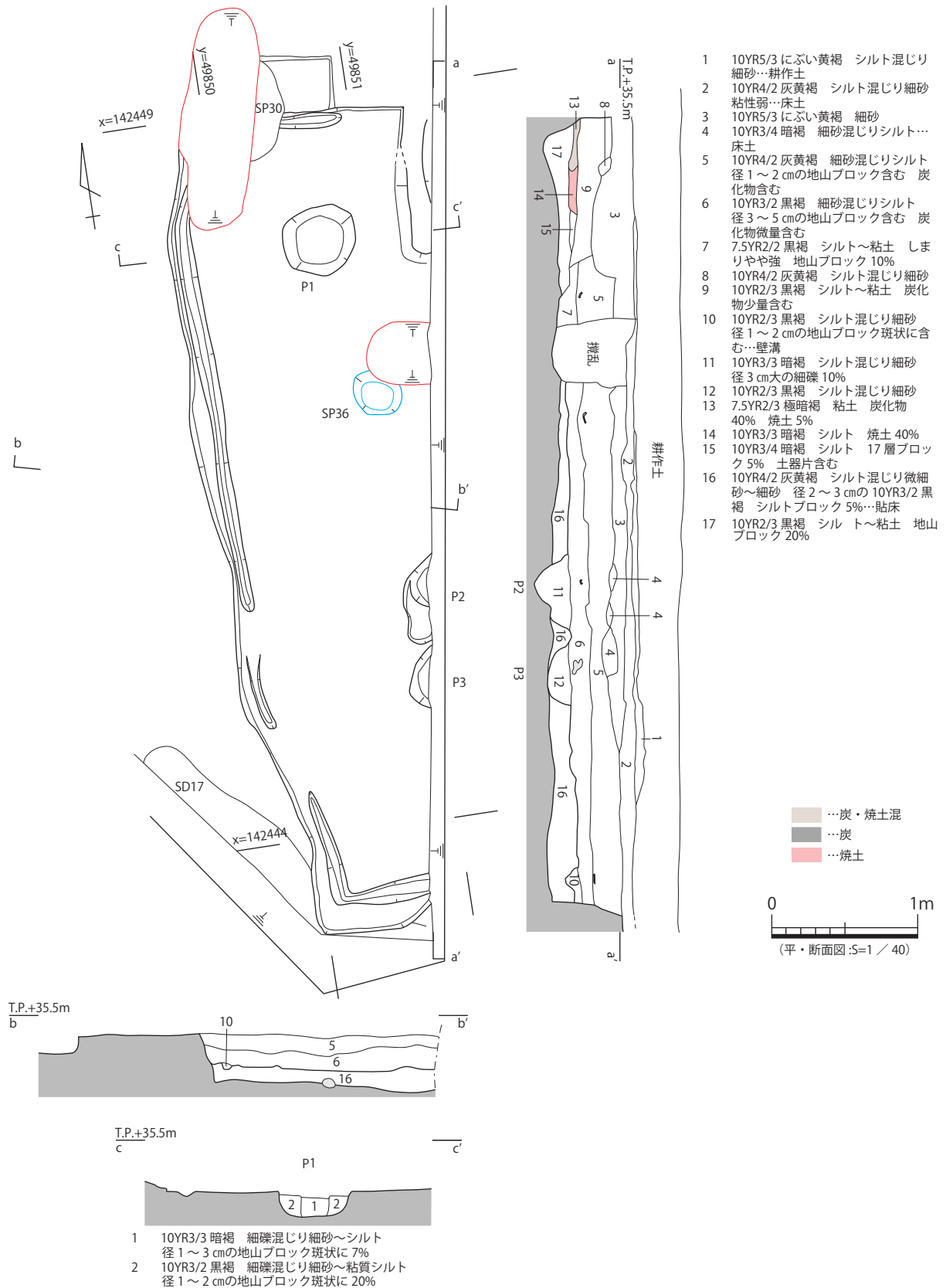


図3 26- 竖穴 18 平・断面図

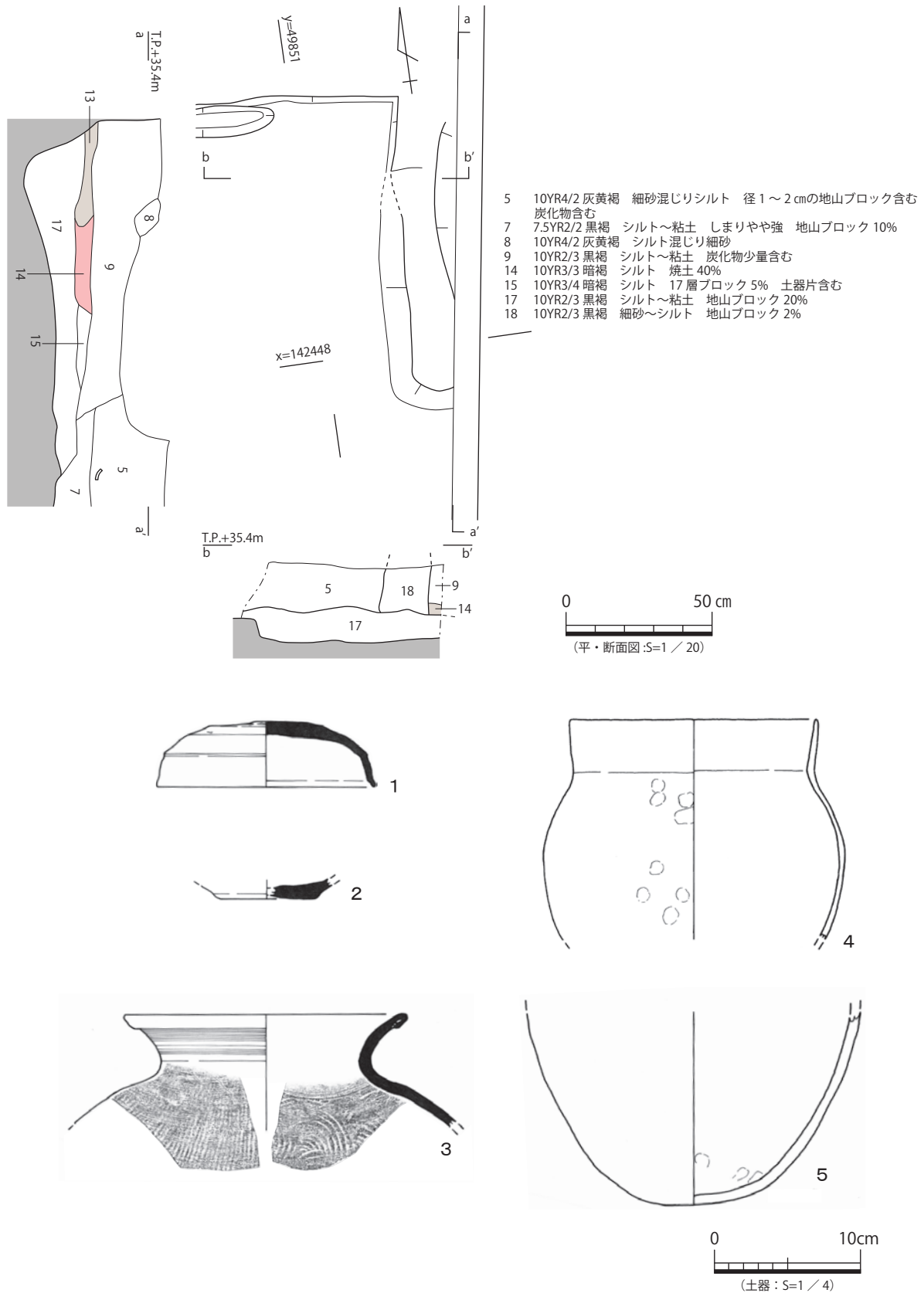


図4 26- 竪穴 18 カマド 平・断面図、出土遺物実測図

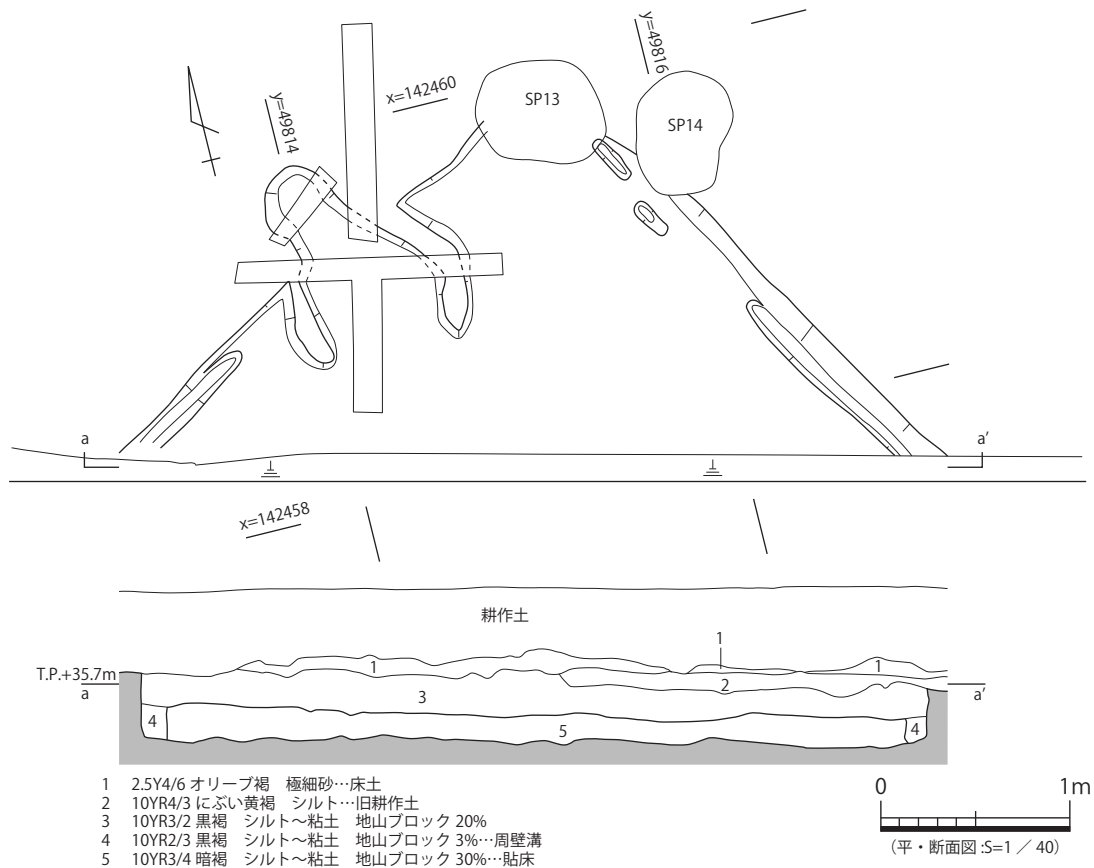


図5 26- 竖穴 45 平・断面図

26 - 掘立 54 (図8)

第26調査区の東端で検出した掘立柱建物である。26 - SP19・23・30・31の4基のみの検出であり、建物の全様は不明である。建物は北側・東側の調査区外に広がる。26 - 竖穴 18と26 - SK37を切る。検出できた規模は1×1間であり、その方位はN - 22° - Wを示す。検出面の標高は35.30 m前後である。南北方向の全長は約1.90 m、東西は約1.90 mであるが、26 - SP23とSP30の間隔は狭い。柱間寸法は約2.00～1.90 mである。

SP19は円形を呈し、直径0.50m、深さ0.29 mを測る。断面形状はU字形である。埋土は柱痕が確認でき、柱痕が地山ブロックを2%含む黒褐シルト、掘方が地山ブロックを2%含む黒褐シルト、地

山ブロックを7%含む暗灰黄細砂～シルトである。SP23は円形を呈し、直径0.48m、深さ0.19mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は柱痕が確認でき、柱痕が暗褐細砂～シルト、掘方が地山ブロックを2%含む暗褐細砂である。SP30は円形を呈し、直径0.70 m、深さ0.20 mである。断面形状は浅い逆台形である。埋土は黒褐シルトである。SP31は円形を呈し、直径0.60 m、深さ0.18mを測る。断面形状は浅い逆台形である。埋土は柱痕が確認でき、柱痕が黒褐細砂混じりシルト～粘土、掘方が地山ブロックを7%含む暗褐細砂～粘質シルトである。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

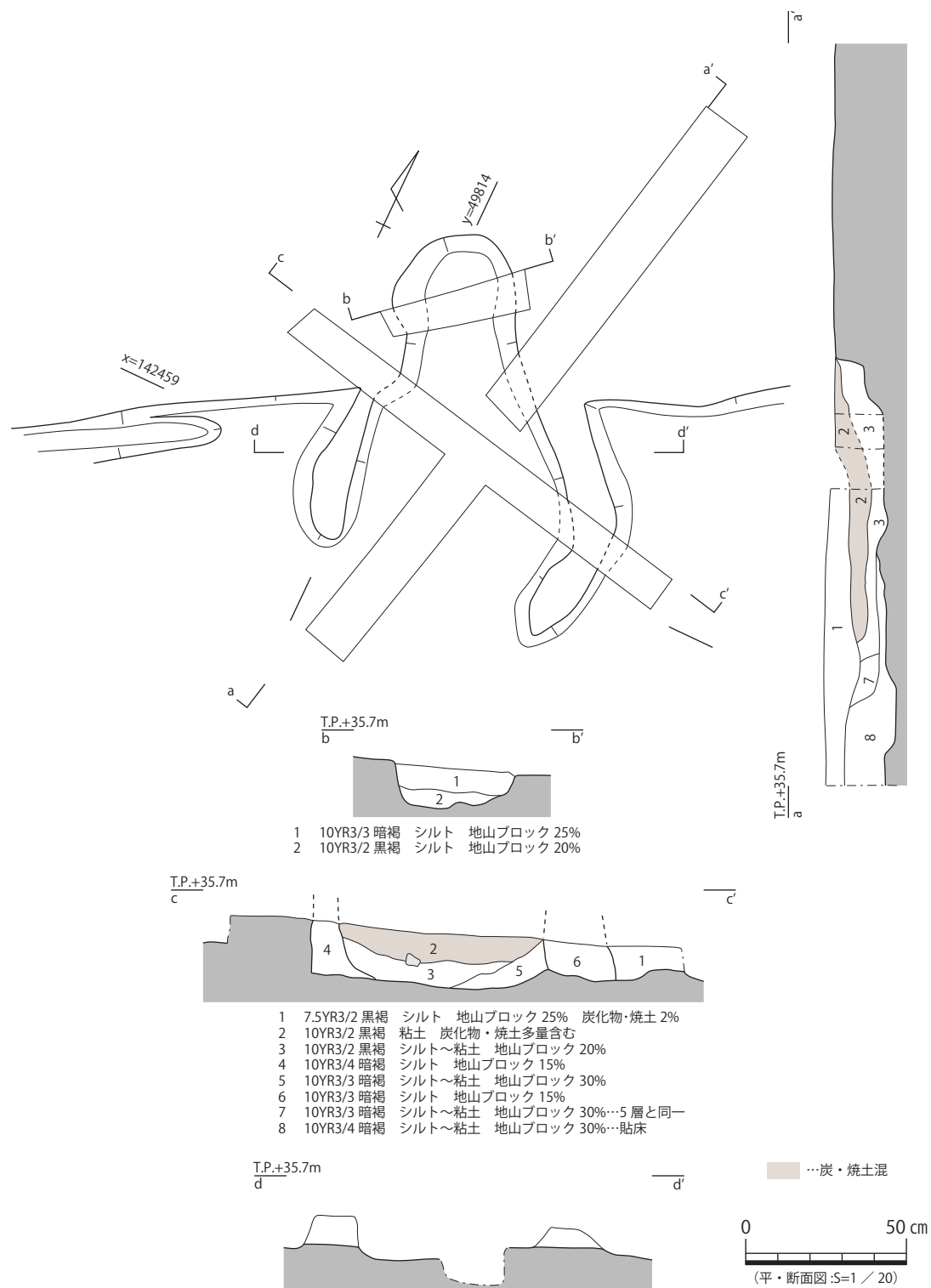


図6 26- 竪穴45カマド 平・断面図

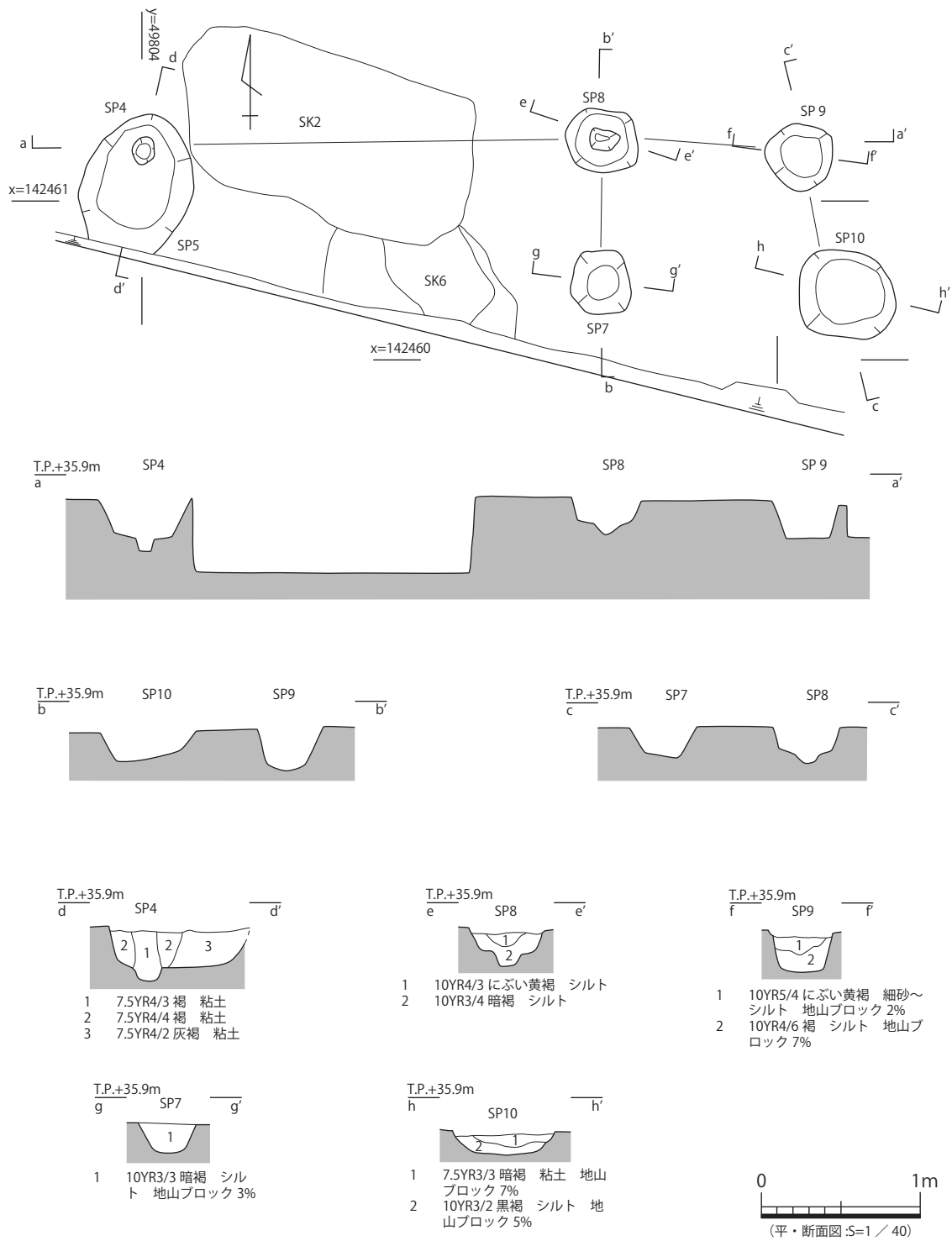
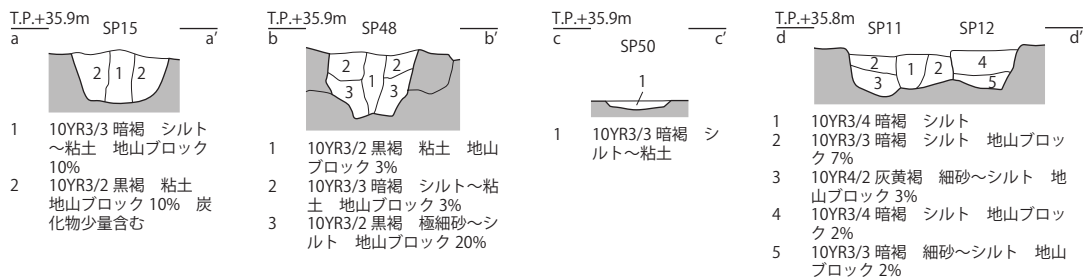
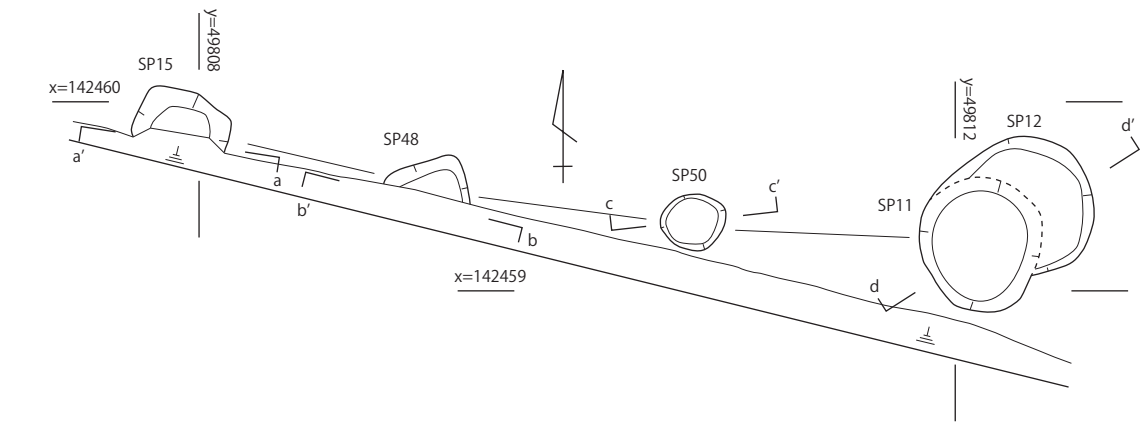
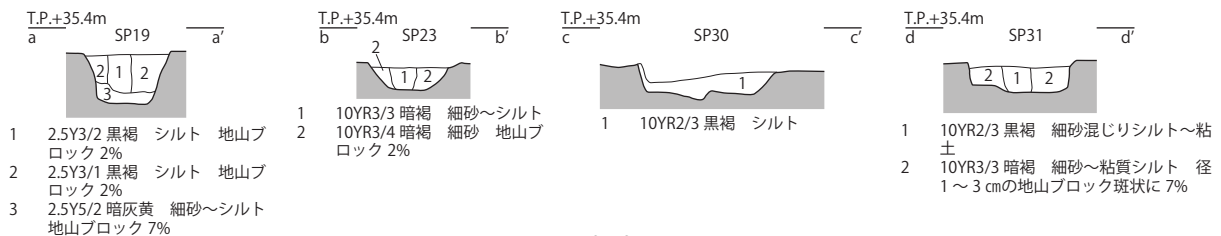
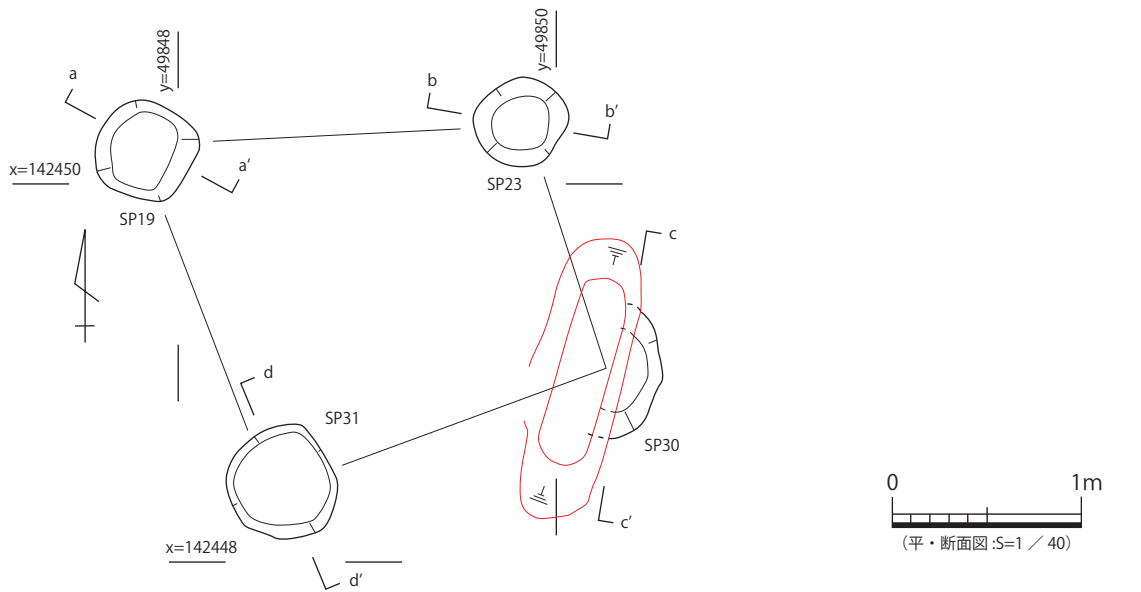


図 7 26- 掘立 52 平・断面図



26- 掘立 53



26- 掘立 54

図 8 26- 掘立 53・54 平・断面図

(3) 溝

26-SD 1 (図9)

第26調査区の中央西側で検出した直線的に延びる溝である。延伸方位はN-20°-Eを示し、検出面の標高は35.7 mである。

長さ2.15 mを検出し、南北の調査区外に延びる。幅は0.80～0.66 m、深さは0.33～0.17 mを測る。断面形状は逆台形である。底面は南から北に向かって下がる。

埋土は地山ブロックを10%含む黒褐粘土である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。本溝より西側には遺構が全く検出されておらず、区画としての機能を有する溝であると考えられる。

26-SD17 (図9)

第26調査区の東南端で検出した溝であり、26-縦穴18を切る。南側の調査区外に延び、溝西側の掘り込みは調査区外である。延伸方位はN-38°-Wを示し、検出面の標高は35.3 mである。

検出した長さは2.34 m、幅は0.31～0.13 m、深さ0.15～0.07 mである。断面形状は逆台形で

ある。底面は南から北に向かって緩やかに下がる。

埋土は黒褐シルトの単一層である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

26-SD20 (図10)

第26調査区の東端から中央部にかけて検出した東西方向へ直線的に延びる溝である。26-SD29・34・40～42・44、26-SP43、26-SX38・39を切り、26-SP22・23・25～28に切られる。延伸方位はN-78°-Wで、検出面の標高は35.0～35.5 mである。溝の東端では東側の調査区外に延び、西端では西側の調査区外に延びる。

長さ約33.80 mを検出した。溝の東1/3は北側の掘り込みが調査区外であり、残り2/3は南側の掘り込みが調査区外のため、正確な幅は不明であり、検出できた幅は1.50～0.30 mである。深さは0.47～0.11 mであり、底面の高さはほぼ水平である。断面形状は逆台形である。

埋土は、a断面で3層、b・c断面で2層に分層できる。a断面では上層から地山ブロックを10%含む黒褐シルト、地山ブロックを3%含む黒褐シル

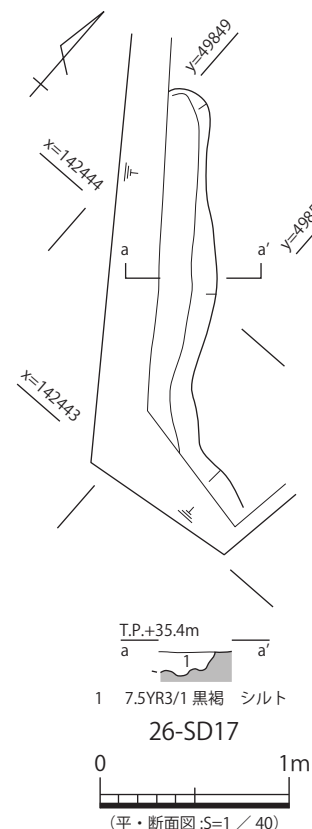
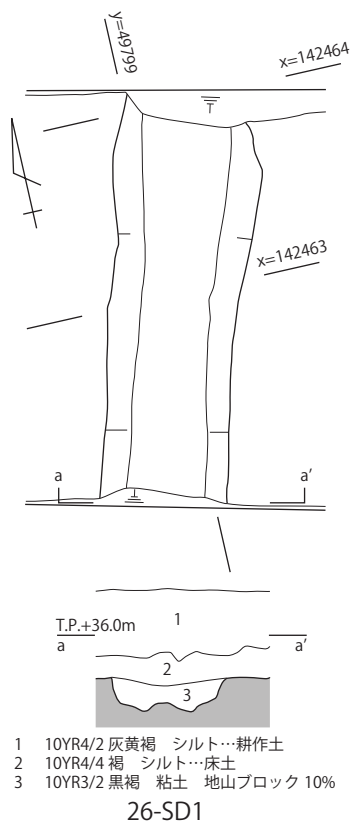


図9 26-SD 1・17 平・断面図

ト、地山ブロックを3%含む黒褐シルト混じり微細砂である。b断面では上層から地山ブロックを5%含む黒褐粗砂混じり粘質シルト、地山ブロックを5%含む黒褐粘土混じり極細砂である。c断面は、上層が地山ブロックを2%含む黒褐シルト、下層が地山ブロックを2%含む黒褐細砂～シルトである。

図化した遺物は、溝の中央において確認した土器集中部からの出土である。遺物は須恵器杯身(6)・無蓋高杯(7)・甕(8・9)、土師器甕(10・11)、須恵器杯蓋片・杯身片・甕片、土師器杯片・甕片が出土した。出土遺物の年代から、TK 43～TK 209形式併行期と判断できる。

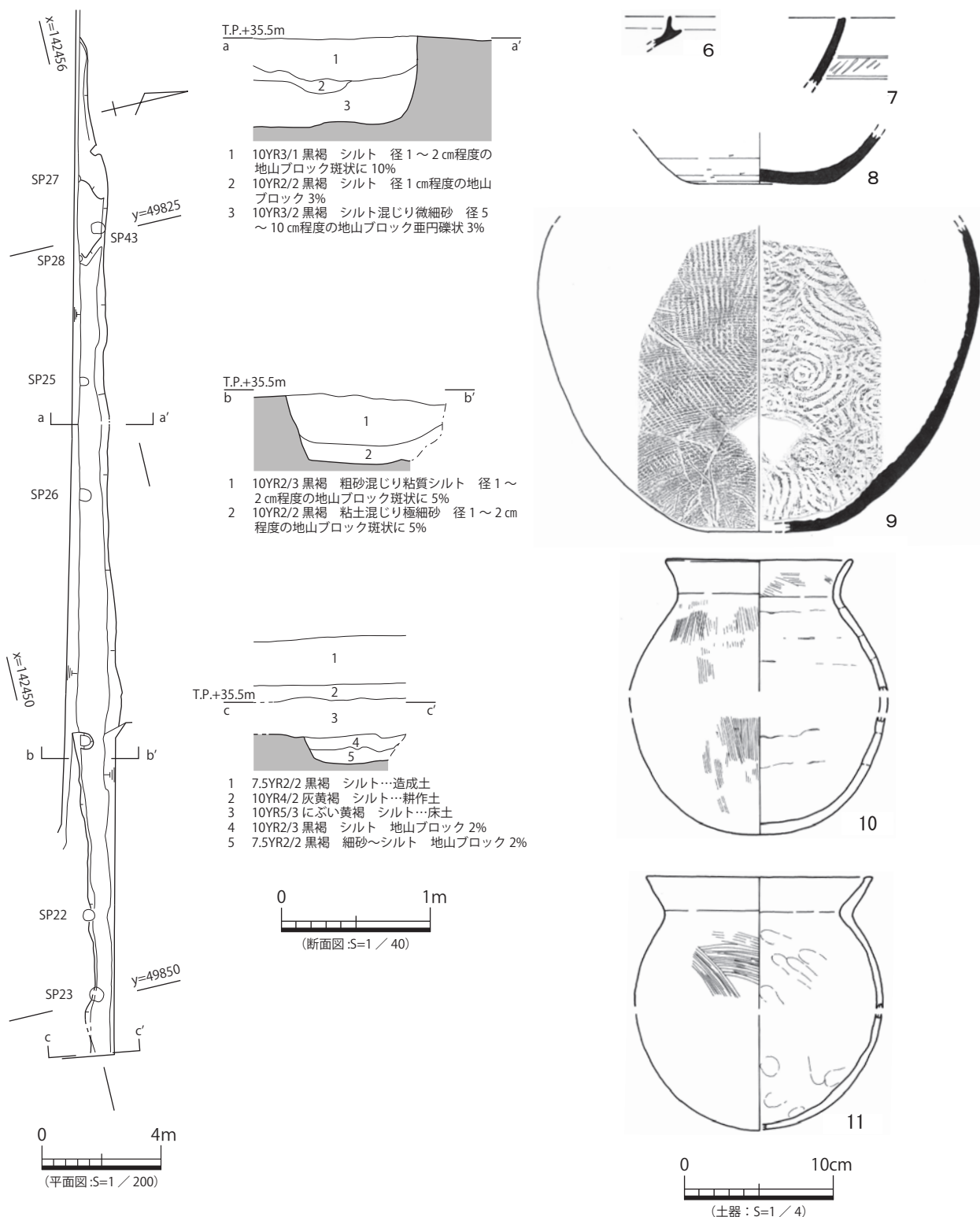


図10 26-SD20 平・断面図、出土遺物実測図

26 - SD29 (図 11)

第 26 調査区の中央やや東寄りで検出した溝である。26 - SD35 を切り、26 - SD20 に切られるが、掘り込みが 26 - SD20 の底面より深く、西側の掘方を検出した。延伸方位は $N-34^{\circ}-W$ で、検出面の標高は 35.5 m である。溝は直線的に延び、北側と南側は調査区外に延びる。

長さ約 4.00 m を検出した。幅は 0.85 m、深さは 0.64 ~ 0.44 m であり、底面は南から北に向かって緩やかに下がる。断面形状は傾斜の強い逆台形である。

埋土は、3 層に分層でき、上層は地山ブロックを 15% と径 5 cm 程度の円礫を含む黒褐シルト～粘土と地山ブロックを 30% 含む黒褐シルトであり、下層は地山ブロックを 10% 含む黒褐シルト～粘土である。堆積状況から判断すると溝の掘り直しが行われたと考えられる。

遺物は最上層から土師器甕 (12)、鉄斧 (13) が出土し、埋土より須恵器杯蓋片・杯身片が出土した。

出土遺物の年代から、古墳時代後期と判断できる。

26 - SD35 (図 12)

第 26 調査区の中央やや東寄りで検出した溝である。26 - SD29、26 - SD20 に切られるが、掘り込みが 26 - SD20 の底面より深く、掘方を検出した。延伸方位は $N-68^{\circ}-E$ で、検出面の標高は 35.55 m である。溝はほぼ直線的に延び、北側と南側は調査区外に延びる。

長さ約 5.14 m を検出した。幅は 1.80 m、深さは 0.73 ~ 0.55 m であり、底面は南から北に向かって下がり、その比高差は 0.18 m である。断面形状は傾斜の強い逆台形である。

埋土は、3 層に分層でき、上層から地山ブロックを 30% 含む黒褐シルト、地山ブロックを 30% 含む暗褐シルト、地山ブロックを 10% と径 2 cm の小礫を含む暗褐砂である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

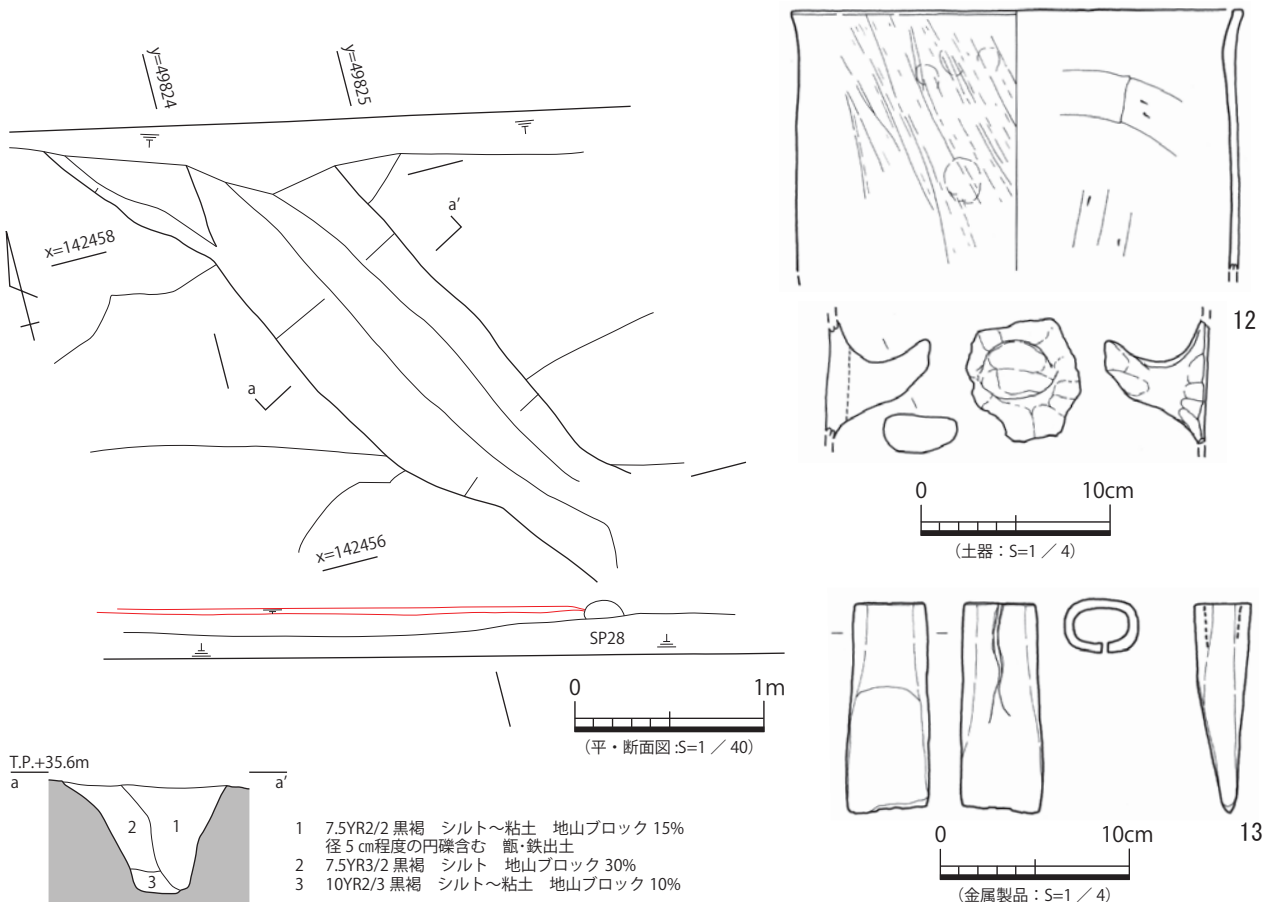


図 11 26-SD29 平・断面図、出土遺物実測図



図 12 26-SD35 平・断面図

26 - SD40 (図 13)

第 26 調査区の中央東寄りで検出した溝である。26 - SD20、26 - SP25 に切られるが、掘り込みが 26 - SD20 の底面より深く、掘方を検出した。延伸方位は N—11°—E で、検出面の標高は 35.35 m 前後である。溝は直線的に延び、北側と南側は調査区外に延びる。

長さ約 2.53 m を検出した。幅は 1.10 ～ 0.53 m を測り、中央で急激に幅が広くなる。深さは 0.90 ～ 0.77 m であり、底面は南から北に向かって緩やかに下がり、その比高差は 0.05m である。断面形状は非常に傾斜の強い逆台形である。

埋土は、3 層に分層でき、上層から地山ブロックを 15% 含む暗褐粘土、地山ブロックを 3 % 含む暗褐シルト、暗褐砂である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明。

26 - SD41 (図 13)

第 26 調査区の中央やや東寄りで検出した溝であ

る。26 - SD20、26 - SP35 に切られる。延伸方位は N—44°—W で、検出面の標高は 35.35 m 前後である。溝は 26 - SD20 近くで少し湾曲し、北側と南側は調査区外に延びる。

長さ約 2.20 m を検出した。幅は 1.15 ～ 0.80 m を測り、南側の幅が広くなる。深さは 0.20 m であり、底面は南から北に向かって緩やかに下がり、その比高差は 0.05m である。断面形状は逆台形である。

埋土は、2 層に分層でき、上層が炭化材を含む暗褐シルト、下層が地山ブロックを 5 % と炭化材粒を含むにぶい黄褐シルト混じり細砂である。

遺物は須恵器杯身 (14) が埋土から出土した。出土遺物の年代から、T K 209 形式併行期と判断できる。

26 - SD42 (図 14)

第 26 調査区の中央東寄りで検出した溝である。26 - SD20 に切られる。延伸方位は N—11°—E で、検出面の標高は 35.15 ～ 35.20 m である。溝は直

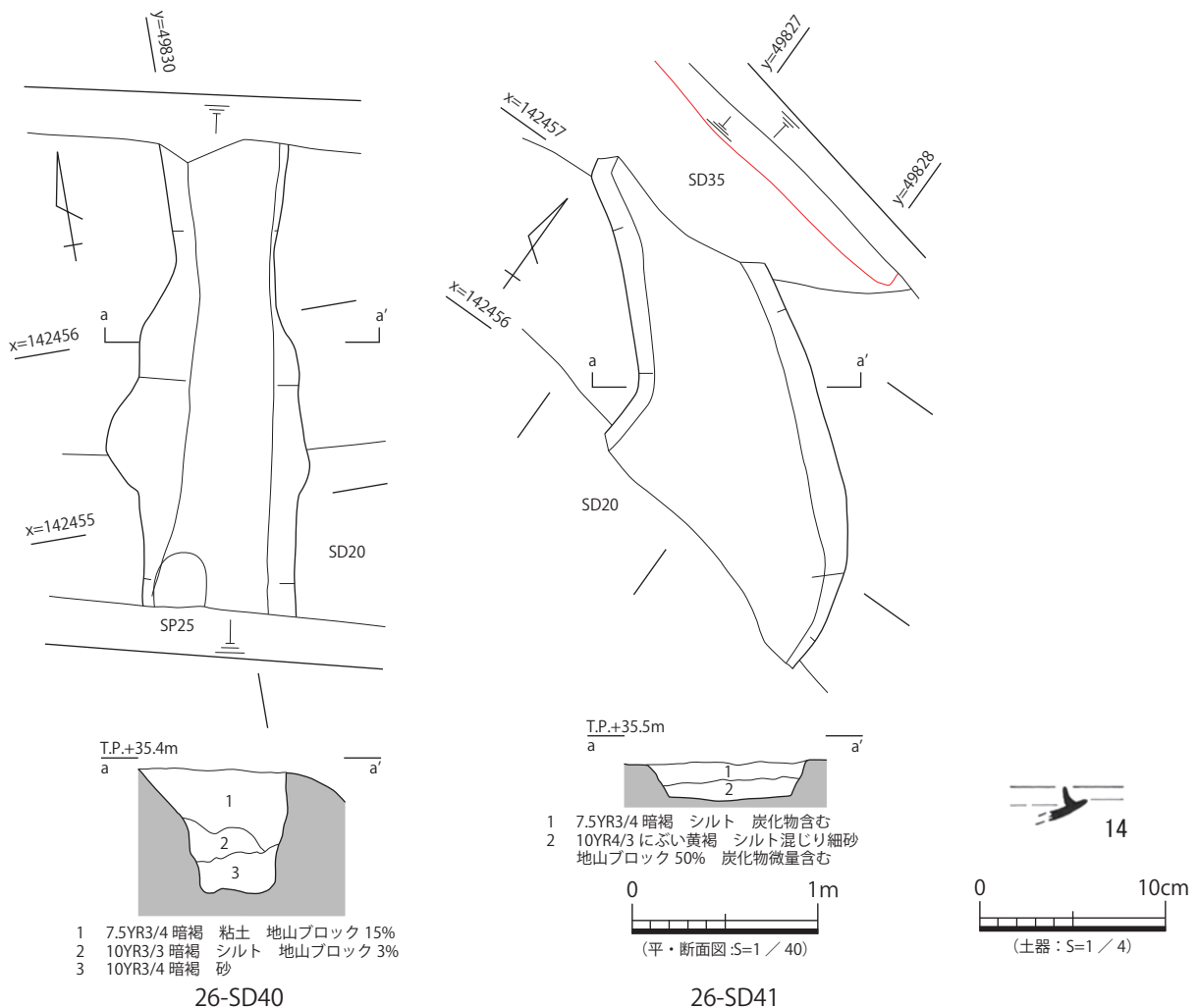


図 13 26-SD40・41 平・断面図、出土遺物実測図

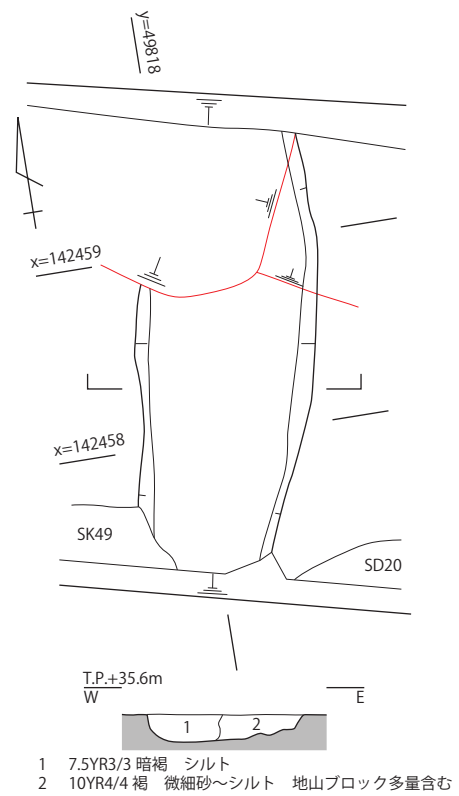
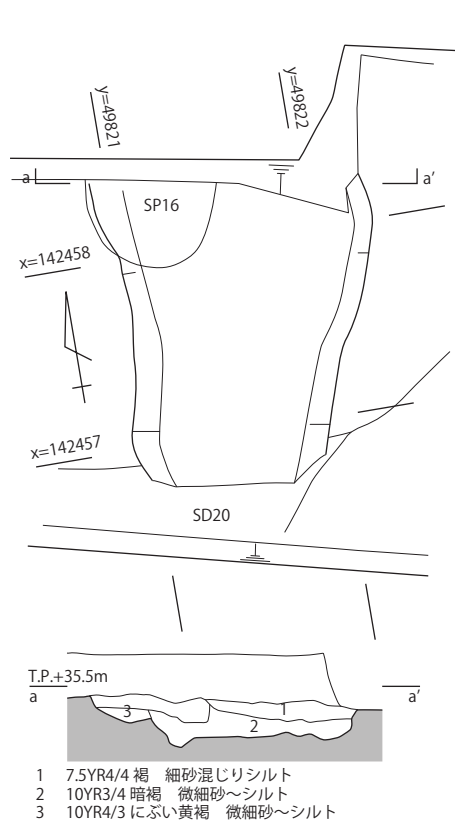
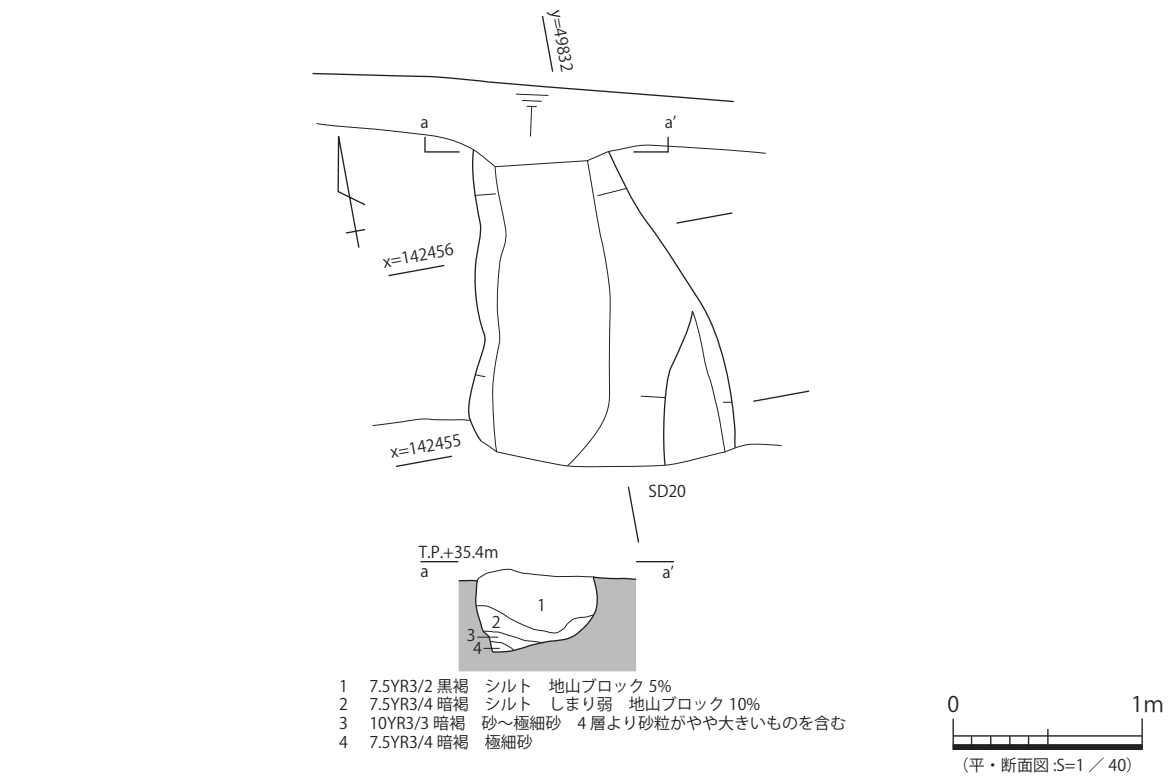


図 14 26-SD42・44・46 平・断面図

線的に延び、北側と南側は調査区外に延びる。

長さ約 1.60 mを検出した。幅は 1.42 ～ 0.73 mを測り、北端で急激に幅が狭くなる。深さは 0.35 mであり、底面は南から北に向かって緩やかに下がる。断面形状は非常に傾斜の強い逆台形であり、特に西側の掘り込みは急傾斜である。東側の掘り込みは段を有する。

埋土は、4 層に分層でき、上層から地山ブロックを 5 %含む黒褐シルト、地山ブロックを 10 %含む暗褐シルト、暗褐砂～極細砂、暗褐極細砂である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

26 - SD44 (図 14)

第 26 調査区の中央で検出した溝である。26 - SD20、26 - SP16 に切られるが、本遺構が 26 - SP16 の底面より深く、掘方を検出した。延伸方位は N-10°-E で、検出面の標高は 35.40 mである。溝は直線的に延び、北側と南側は調査区外に延びる。

長さ約 1.60 mを検出した。幅は 1.35 ～ 1.02 mを測り、北側で幅が広くなる。深さは 0.20 mであり、底面は南から北に向かって緩やかに下がり、その比高差は 0.05m である。断面形状は浅い逆台形であり、底面は少し凸凹である。

埋土は、3 層に分層でき、上層から褐細砂混じりシルト、暗褐微細砂～シルト、にぶい黄褐微細砂～シルトであり、暗褐微細砂～シルトが埋土の大部分を占める。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

26 - SD46 (図 14)

第 26 調査区の中央で検出した溝である。南端を 26 - SD20、26 - SK49 に切られ、北端は攪乱を受ける。延伸方位は N-12°-E で、検出面の標高は 35.45 mである。溝は直線的に延び、北側と南側は調査区外に延びる。

長さ約 2.35 mを検出した。幅は 0.95 ～ 0.75 mを測り、北側で幅が広くなる。深さは 0.14 mであり、底面はほぼ平坦であるが、北端でやや高くなる。断面形状は浅い逆台形であり、西側の底面が東側より若干深くなる。

埋土は、2 層に分層でき、暗褐シルト、地山ブロックを多量に含む褐微細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

(4) 土坑

26 - SK 2 (図 15)

第 26 調査区の中央やや西寄りで検出した土坑であり、26 - 掘立 52 を切る。検出面の標高は 35.70 mである。

平面形は南西隅が乱れる不整形を呈し、長軸 1.90m、短軸 1.04m、深さ 0.42 mを測る。主軸方向は N - 74°-W を示す。断面形状は方形であり、掘り込みはほぼ垂直であるが、北西隅は緩やかな傾斜である。底面はほぼ平坦である。

埋土は 4 層に分層でき、上層から地山ブロックを 10 %含む暗褐シルト～粘土、地山ブロックを 30 %含むにぶい黄褐シルト～粘土、地山ブロックを 15 %含む暗褐シルト～粘土、地山ブロックを 7 %含む黒褐粘土である。

遺物は須恵器甕 (15) である。出土遺物の年代から、古墳時代後期と判断できる。

26 - SK 6 (図 15)

第 26 調査区の中央やや西寄りで検出した土坑であり、26 - 掘立 52 を切り、26 - SK2 に切られる。検出面の標高は 35.75 mである。土坑の南側は調査区外である。

平面形は検出範囲が狭いため不明であるが、不整形である可能性が高いと思われる。長軸 1.25m、短軸 0.61m 以上、深さ 0.21 mを測る。主軸方向は N - 36°-W を示す。断面形状は逆台形であり、掘り込みは緩やかである。底面のほぼ中央に南北方向に延びる段を有し、東側が約 0.10 m低くなる。

埋土は 2 層に分層でき、上位に炭層が非常に薄く堆積し、その下に暗褐シルトが厚く堆積する。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

26 - SK37 (図 15)

第 26 調査区の東端で検出した土坑であり、26 - 竪穴 18、26 - SD20、26 - SP30 に切られるが、26 - SD20 より深く掘り込まれており掘方を検出する。南端部は攪乱を受ける。検出面の標高は 35.20 mである。土坑の北側は調査区外である。

平面形は検出範囲が狭いが、不整形円形である

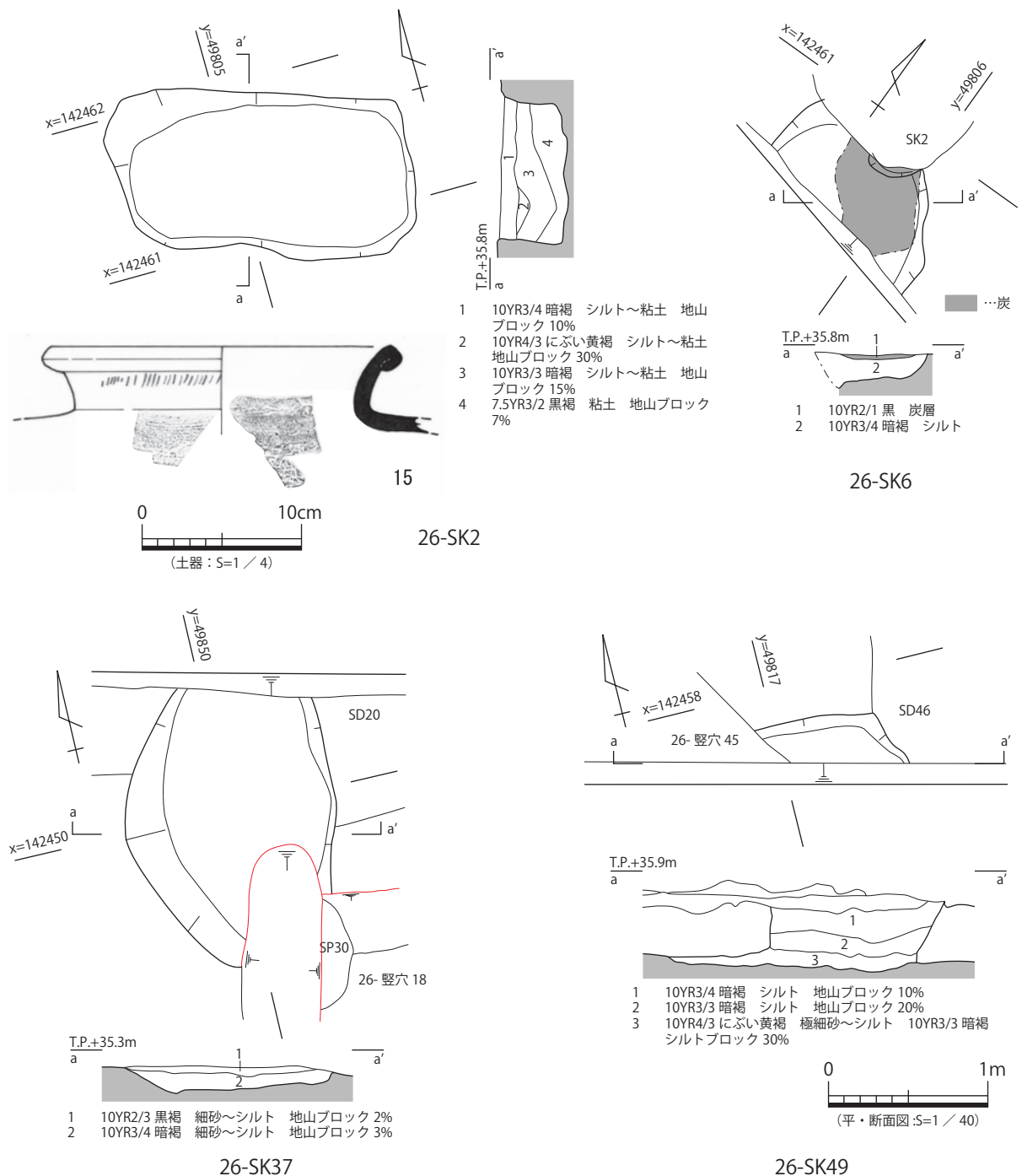


図 15 26-SK 2・6・37・49 平・断面図、出土遺物実測図

可能性が高いと思われる。長軸 1.72m 以上、短軸 1.30m、深さ 0.20 m を測る。主軸方向は N - 13° - E を示す。断面形状は逆台形であり、西側の掘り込みは非常に緩やかである。底面はほぼ平坦である。

埋土は 2 層に分層でき、上層から地山ブロックを 2 % 含む黒褐細砂～シルト、地山ブロックを 3 % 含む暗褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

26 - SK49 (図 15)

第 26 調査区の中央で検出した土坑であり、26 - 竪穴 45 に切られ、26 - SD46 を切る。検出面の標高は 35.60 m である。土坑の南側は調査区外である。

平面形は検出範囲が狭いため不明であるが、角張った平面形である。検出できた規模は長軸 0.75m、短軸 0.30m であり、深さ 0.46 m を測る。断面形状は逆台形であり、掘り込みは急傾斜である。

埋土は 3 層に分層でき、上層から地山ブロックを

10%含む暗褐シルト、地山ブロックを20%含む暗褐シルト、暗褐シルトブロックを30%含むにぶい黄褐極細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

(5) ピット

26－SP 3 (図 16)

第26調査区の中央の西寄りで検出した単独のピットである。検出面の標高は35.70 mである。

平面形は楕円形であり、長軸0.37 m、短軸0.30 m、深さ0.12 mを測る。断面形状は浅いU字形を呈する。

埋土は2層に分層でき、中心の灰黄褐シルトは柱痕と考えられ、左右はにぶい黄褐シルトである。

遺物はサヌカイト製の平基式石鏃(16)のみが出土し、詳細な時期は不明である。

(6) 柵列

26－柵列 55 (図 17)

第26調査区の中央東寄りで検出した3間の柵列である。南側は調査区外である。26－SP25～28の4基で構成する。26－SD20を切る。検出面の標高は35.05 mである。主軸方向はN－78°－Wで、検出した東西総延長は約11.00 m、柱間寸

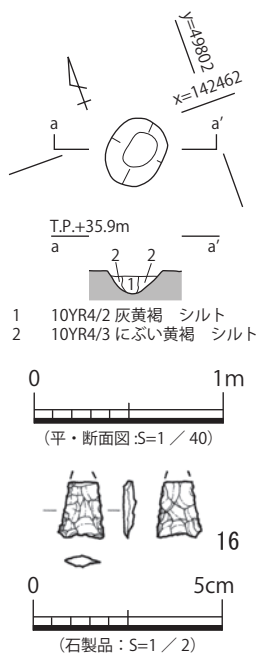


図 16 26-SP 3 平・断面図、
出土遺物実測図

法は4.10～2.75 mを測る。

SP25は楕円形を呈し、長軸0.30 m以上、短軸0.27 m、深さ0.74 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は3層に分層でき、上層から地山ブロックを10%含む黒褐粘質シルト、地山ブロックを5%含む黒褐粘土混じり微細砂、暗褐微細砂である。SP26は円形を呈し、直径は0.42 m、深さ0.15 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層から地山ブロックを15%含む黒褐シルト、地山ブロックを3%含む黒褐シルト、地山ブロックを30%含む黒褐シルトである。SP27は円形と推定でき、検出した径は0.35 m、深さ0.39 mを測る。断面形状は不整な逆台形である。埋土は地山ブロックを10%含む暗褐シルトの単一層である。SP28は円形と推定でき、検出した径は0.43 m、深さは0.44 mを測る。断面形状は2段の逆台形である。埋土は上層から地山ブロックを3%含む暗褐シルト、地山ブロックを3%含む黒褐極細砂である。

遺物は土器小片であり、詳細な時期は不明である。

(7) 性格不明遺構

26－SX 33 (図 18)

第26調査区の東端で検出した性格不明遺構であり、26－SP32に切られる。検出面の標高は35.20 m前後である。西側は調査区外である。

平面形は不整な方形である。検出できた長辺は約3.50 m、短辺は1.60 m、深さ0.25 mを測る。掘り込みは急傾斜で、底面は凸凹である。

埋土は5層に分層でき、上層の黒褐シルトが厚く堆積し、その下に地山ブロックを3%含む灰黄褐シルト、灰黄褐細砂～シルト、地山ブロックを7%含むにぶい黄褐細砂～シルト、地山ブロックを2%含むにぶい黄褐細砂～シルトが不規則に堆積する。

遺物は須恵器無蓋高杯(17)が出土し、その年代からTK10形式併行期と判断できる。

26－SX 38 (図 18)

第26調査区の東側で検出した性格不明遺構であり、26－SD20に切られる。検出面の標高は35.25 m前後である。検出は西辺のみであり、全体の平面形は不明である。北側と東側は調査区外である。

検出した規模は東西約5.00 m、南北約1.40 m、深さ0.15 mを測る。底面は凸凹である。

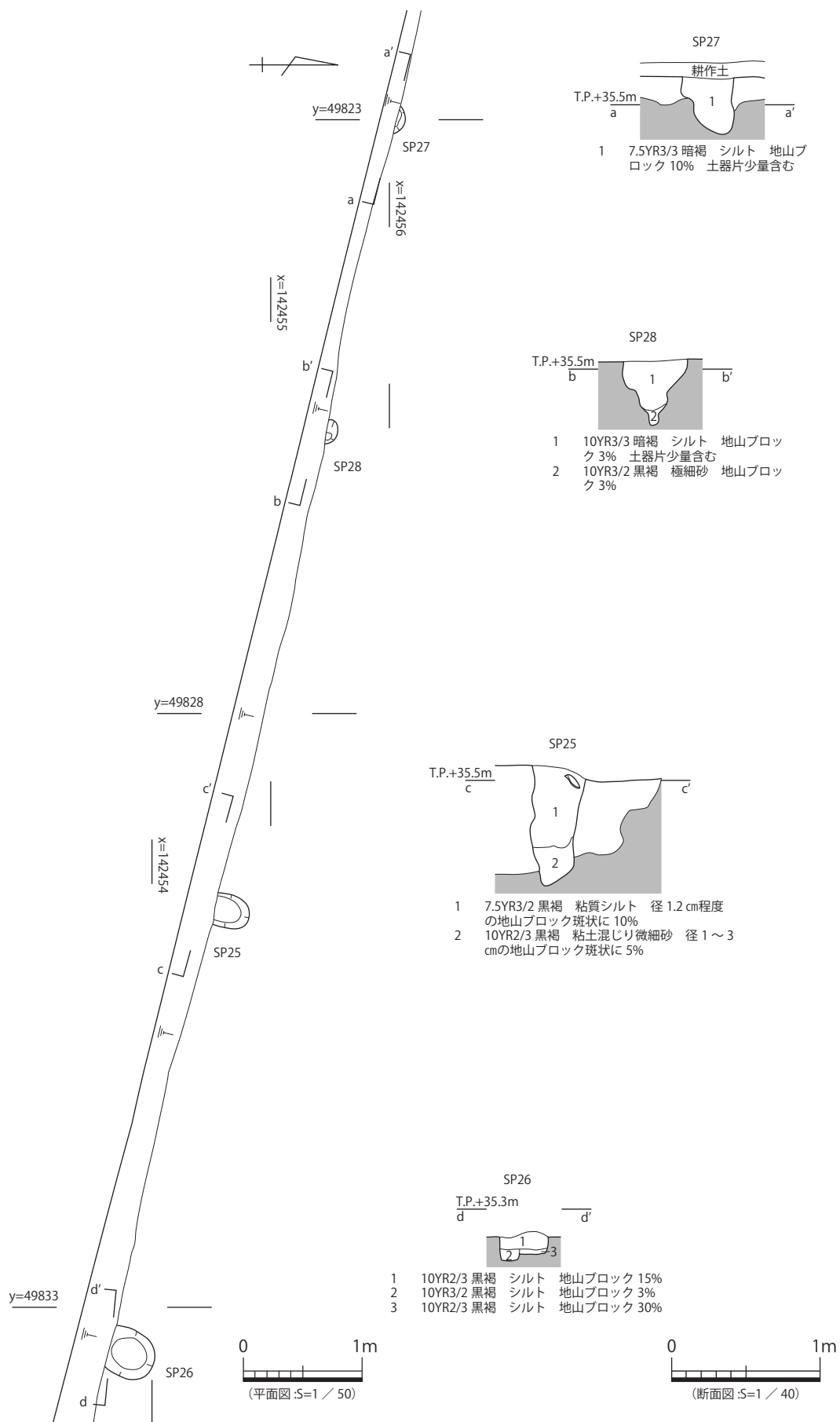


図 17 26- 柵列 55 平・断面図

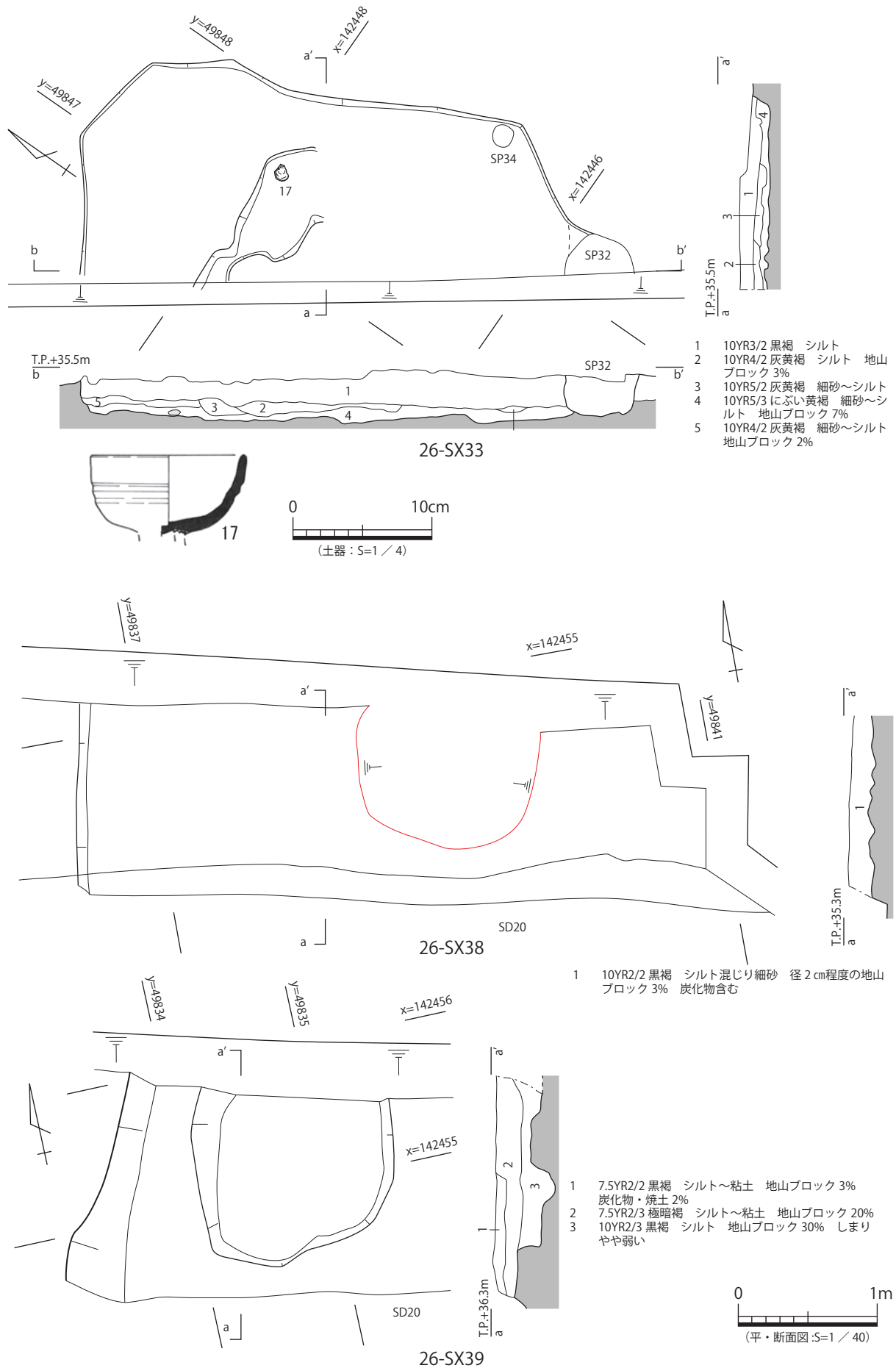


図 18 26-SX33・38・39 平・断面図、出土遺物実測図

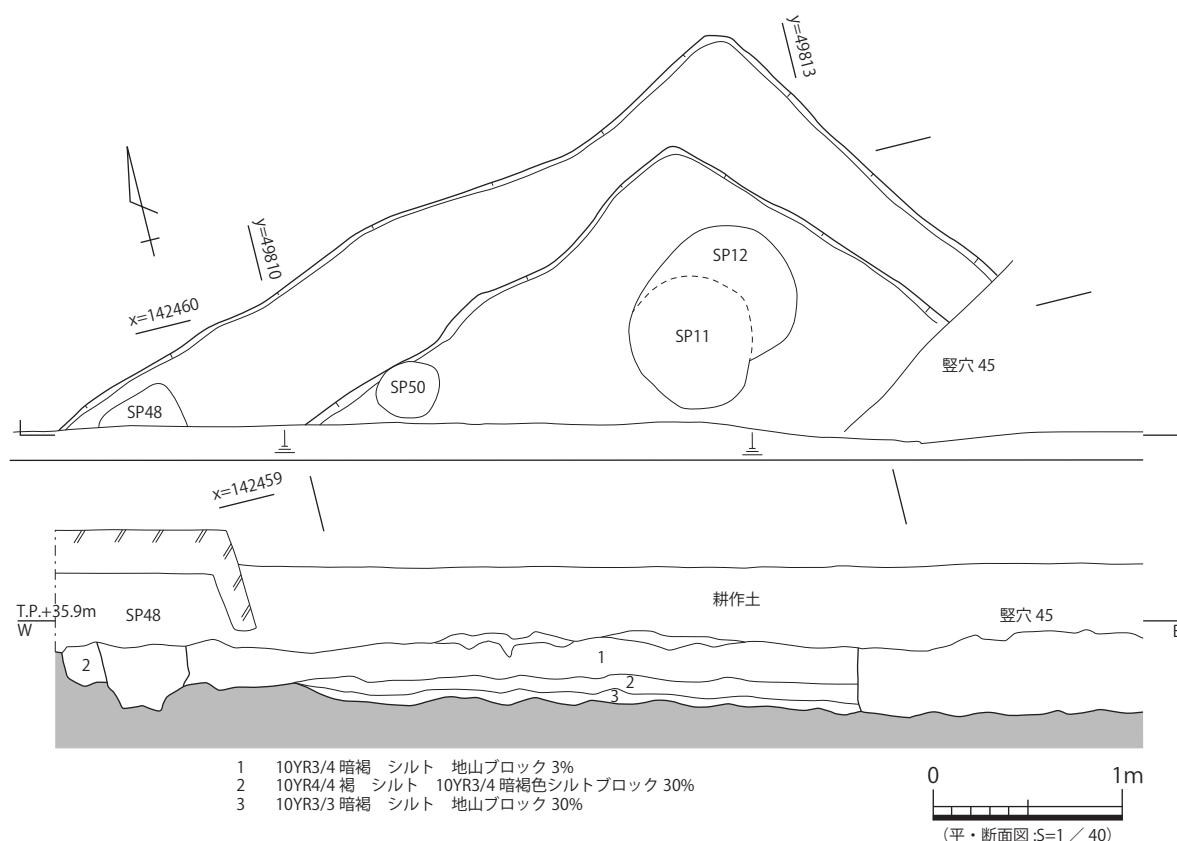


図 19 26-SX51 平・断面図

埋土は地山ブロックを3%と炭化材粒を含む黒褐シルト混じり細砂の単一層である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

26 - SX39 (図 18)

第26調査区の東側で検出した性格不明遺構であり、26 - SD20、26 - SX38に切られる。検出面の標高は35.25 mである。検出は西辺のみであり、全体の平面形は不明である。北側は調査区外である。

検出した規模は東西約3.40 m、南北1.52 m、深さ0.20 mを測る。底面には直径1.44 m、深さ0.15 mを測る不整円形の落ち込みがある。

埋土は3層に分層でき、上層から地山ブロックを3%と焼土・炭化材粒を含む黒褐シルト～粘土、地山ブロックを20%含む極暗褐シルト～粘土、地山ブロックを30%含む黒褐シルトである。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明。

26 - SX51 (図 19)

第26調査区中央で検出した性格不明遺構であり、26 - 竪穴 45、26 - 掘立 53に切られる。検出面の標高は35.60 mである。検出は西辺のみであり、全体の平面形は不明である。南側は調査区外である。

平面形は方形で、検出した規模は東西4.15 m、南北2.04 m、深さ0.10 mを測り、底面周縁が約0.04m高くなる。

埋土は3層に分層でき、上層から地山ブロックを3%含む暗褐シルト、暗褐シルトブロックを30%含む褐シルト、地山ブロックを30%含む暗褐シルトである。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明。

(8) 包含層出土遺物 (図 20)

第26調査区の重機掘削と遺構検出において出土した遺物であり、図化できたのは須恵器杯(18)・壺(19)、土師器甕(20)である。

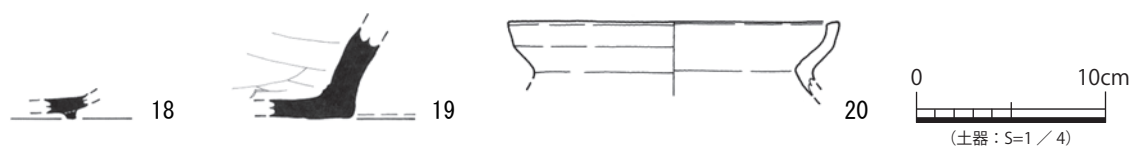


図 20 第26調査区包含層 出土遺物実測図

2 第1～9・14～16調査区

(1) 竪穴建物

2・3ー竪穴20 (図22)

調査区南東端で検出した竪穴建物であり、2・3ー掘立2に切られる。平面形は長方形を呈する。主軸方位はN－21°－Wを示し、検出面の標高は34.80m前後である。規模は東西方向の長辺約5.02m、南北方向の短辺3.72m、深さ約0.27mを測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴(2・3ーSP41・43～45)、ピット(2・3ーSP42・60)を確認した。

埋土は3層に分層でき、上層から地山ブロックを5%含む黒褐シルト混じり細砂、にぶい黄褐細砂、地山ブロックを5%含む黒褐シルトである。遺物は須恵器高杯(22)、土師器甕(23・24)が出土した。

貼床は暗褐シルト質微細砂であり、ほぼ平坦である。掘方までの深さは0.09～0.12mである。

カマドは竪穴建物北側中央に作り付けられるが、カマドの構築材は残存しない。カマド上面には焼土層が確認でき、埋土は焼土粒を含む暗褐シルト質極細砂、にぶい黄褐シルト質細砂である。カマド内より須恵器杯身(21)が出土した。

周壁溝は幅0.20～0.12m、深さ0.06～0.04mを測る。埋土は地山ブロックを多量に含む暗褐細砂混じりシルトである。カマド部分を除き全周する。

支柱穴は4基確認できた。SP41は隅丸方形を呈し、長軸0.43m、深さ0.23mを測る。断面形状はU字形、埋土は2層である。SP43は楕円形を呈し、直径0.54×0.38m、深さ0.16mを測る。断面形状は不整な逆台形、埋土は単一層である。SP44は円形を呈し、直径0.41m、深さ0.13mを測る。断面形状はU字形。埋土は単一層である。SP45は円形を呈し、直径0.47m、深さ0.17mを測る。断面形状は逆台形。埋土は2層である。

出土遺物の年代から、TK209形式併行期と判断できる。

2・3ー竪穴30 (図23～25)

調査区東端中央で検出した竪穴建物であり、2・3ー掘立1に切られる。平面形は長方形を呈する

が、建物の北東隅から南東隅付近が調査区外である。主軸方位はN－9°－Wを示し、検出面の標高は34.80m前後である。規模は東西方向の長辺6.58m、南北方向の短辺5.24m、深さ約0.29mを測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴(2・3ーSP62～65)を確認した。

埋土は4層に分層でき、上層から地山ブロックを7%含む黒褐微細砂混じりシルト、黒褐微細砂と黒褐シルト質微細砂、地山ブロックを10%含む黒褐シルト、黒褐シルト混じり粘土、地山ブロックを多量に含むシルト質極細砂である。遺物は須恵器杯蓋(25)・杯身(27～32)・壺(34～36)・高杯(37～39)・甕(40)、土師器甕(41～43)・高杯(44・45)・鍋(46・47)、円盤状土製品(48)、刀子(49)が出土した。

貼床はにぶい黄褐と灰黄褐シルト質極微細砂、地山ブロックを多量に含む明黄褐シルト質極細砂であり、平坦である。掘方までの深さは0.10mである。

カマドは竪穴建物北側中央やや西寄りに作り付けられる。カマド構築材は褐シルト混じり細砂で、西側の袖部のみ残存する。カマド内部には焼土塊や炭化材を含む堆積が確認できる。カマド内より須恵器杯蓋(26)が出土した。

周壁溝は幅0.16～0.08m、深さ0.03mを測る。埋土は黒褐シルト混じり粘土である。カマド部分と西壁の一部を除き検出された。

支柱穴は4基確認できた。SP62は円形を呈し、直径0.70m、深さ0.44mを測る。断面形状はU字形である。埋土は柱痕を確認し、柱痕は赤色粒を含む黒褐シルト混じり粘土である。須恵器甕(33)が出土した。SP63は不整円形を呈し、直径0.57m、深さ0.45mを測る。断面形状は不整なU字形である。埋土は柱痕を確認し、柱痕は黒褐シルト質微細砂である。SP64は円形を呈し、直径0.59m、深さ0.16mを測る。断面形状は浅い逆台形。埋土は2層である。SP65は不整円形を呈し、直径0.44以上×0.31m、深さ0.19mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は2層である。

出土遺物の年代から、TK43～TK209形式併行期と判断できる。

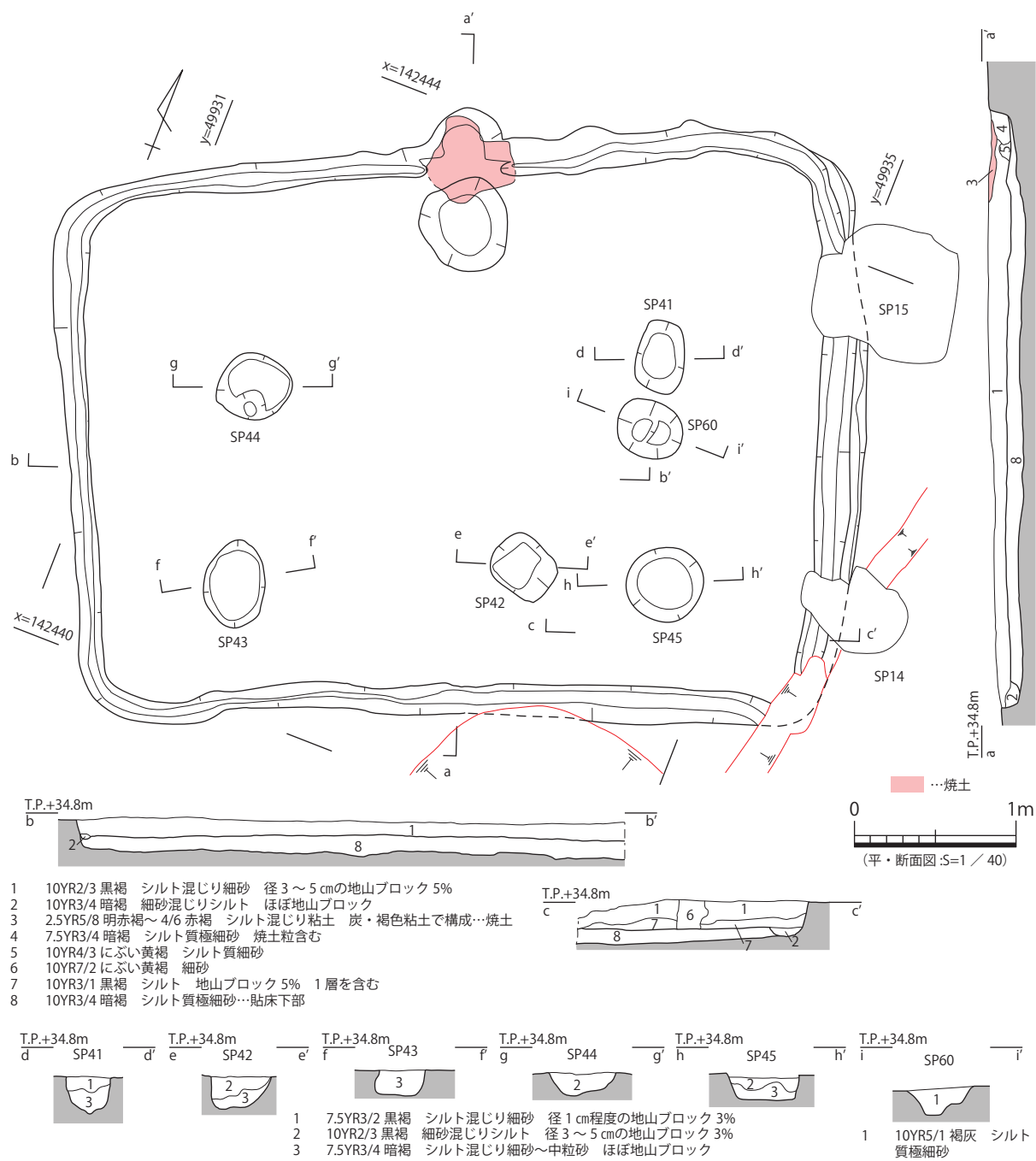


圖 22 2·3-豎穴 20 平·断面図、出土遺物実測図

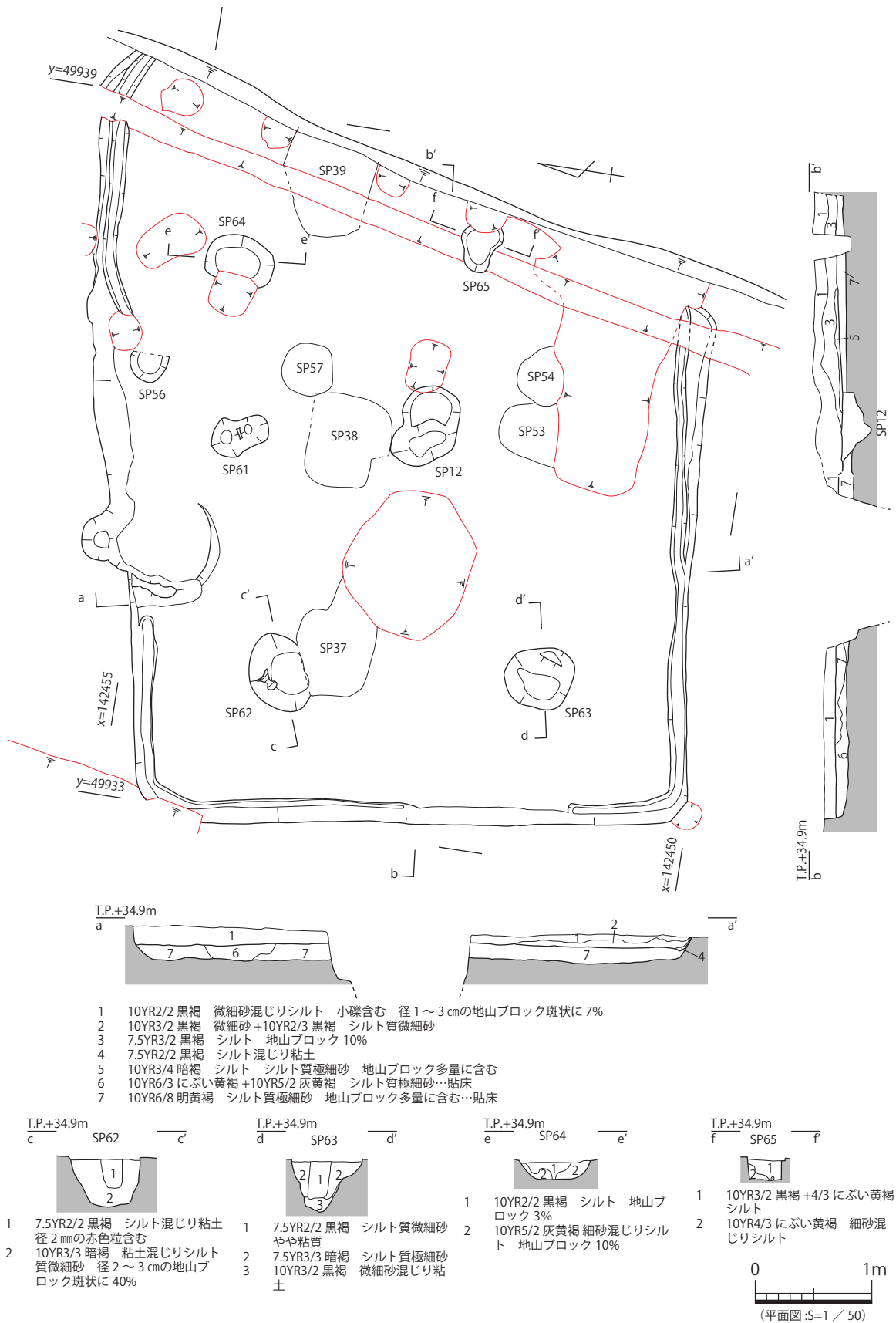


図 23 2・3- 竪穴 30 平・断面図

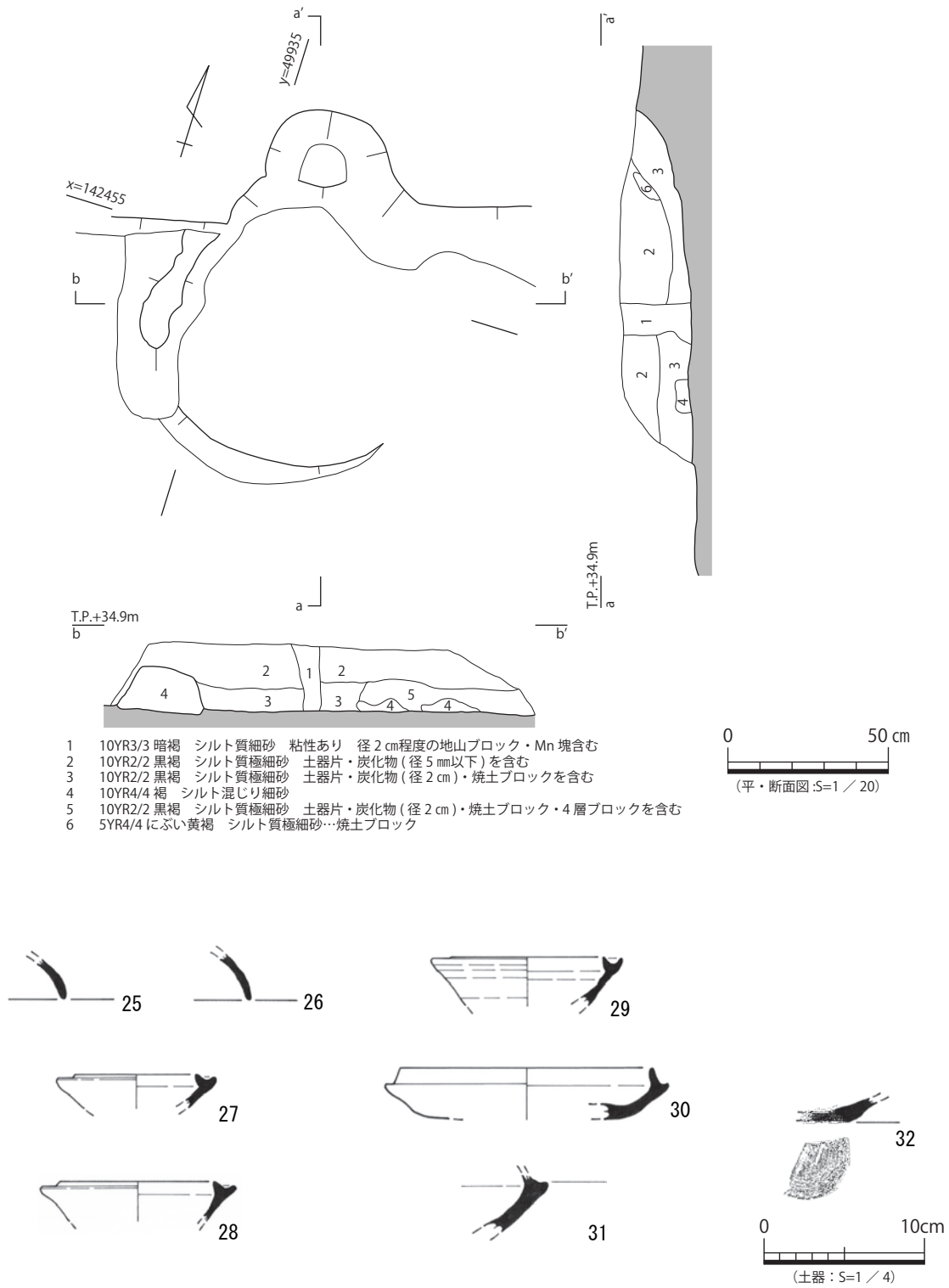


図 24 2・3- 竪穴 30 カマド 平・断面図、出土遺物実測図 (1)

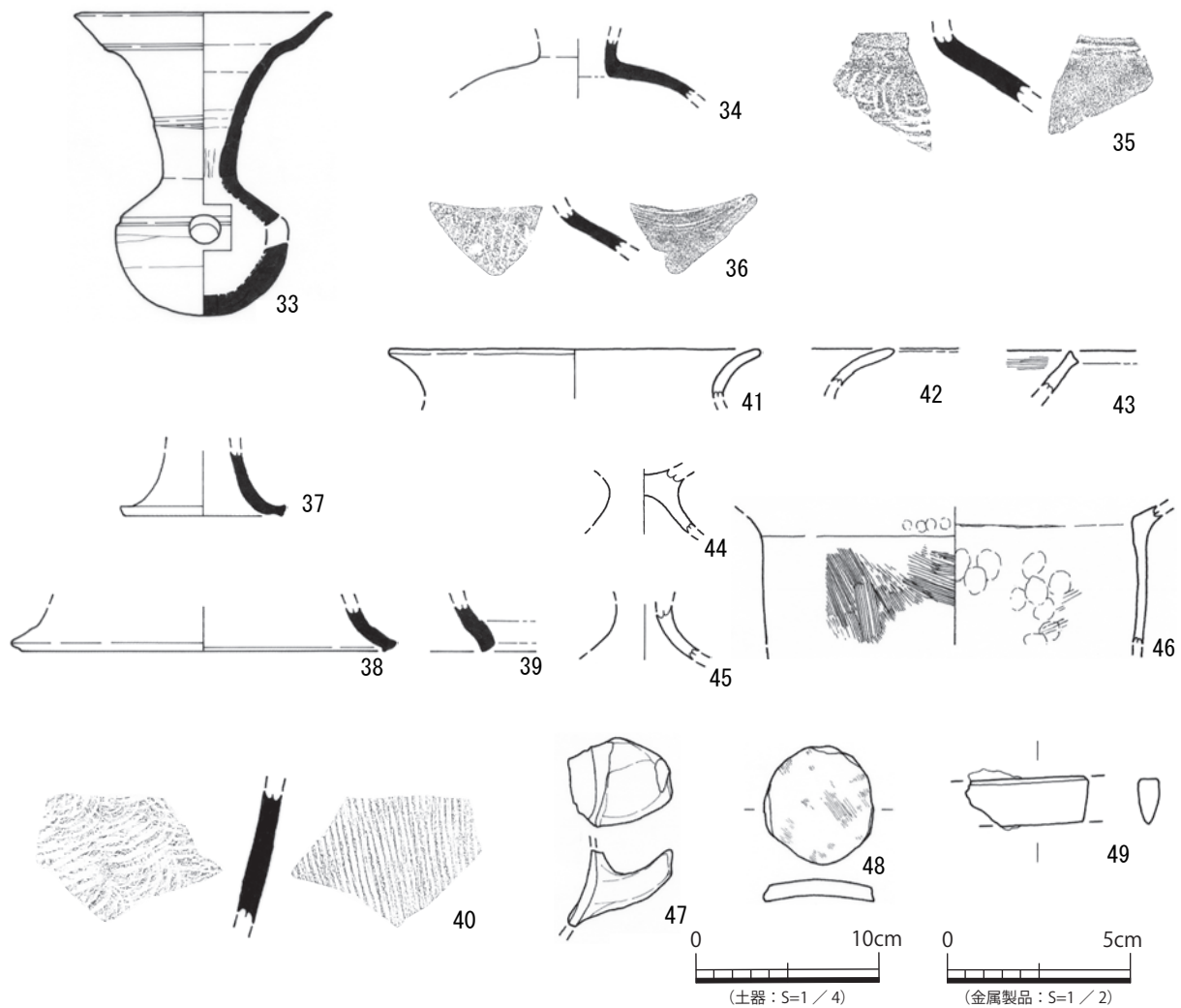


図 25 2・3- 竪穴 30 出土遺物実測図 (2)

2・4- 竪穴 58 (図 26・27)

調査区東部中央で検出した竪穴建物であり、2・4・5 - SD 1 を切る。第 2 調査区の調査では竪穴建物の認識がなく、2・4・5 - SD1 上面に存在する貼床を検出できなかった。平面形は長方形を呈する。主軸方位は N を示し、検出面の標高は 34.90m である。規模は東西方向の長辺約 5.34 m、南北方向の短辺 3.29 m、深さ約 0.36 m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝、ピット (2 - SP49・51) を確認した。

埋土は上層から黒褐シルト質細砂、にぶい黄褐細砂、地山ブロックを 5 % 含む黒褐シルト質細砂である。遺物は須恵器杯身 (50)・高杯 (51)、土師器杯 (52) が出土した。

貼床は暗褐シルト質細砂であり、ほぼ平坦である。

掘方までの深さは 0.10 m である。

カマドは竪穴建物北側中央に作り付けられ、煙道が建物外に長く延びる。カマド構築材は褐灰とにぶい黄褐シルト質細砂である。内部に焼土ブロックがあり、底面には焼土が確認できる。カマド内より土師器甕 (53) が出土した。

周壁溝は幅 0.15 m、深さ 0.05 m を測る。埋土は地山ブロックを 20 % 含む黒褐シルト質細砂である。

ピットは 2 基確認した。SP49 は丸形を呈し、直径 0.42 × 0.34 m、深さ 0.32m を測る。断面形状は不整な U 字形である。SP51 は円形を呈し、直径 0.42 m、深さ約 0.24m を測る。断面形状は U 字形である。

出土遺物の年代から、T K 43 ~ T K 209 形式併行期と判断できる。

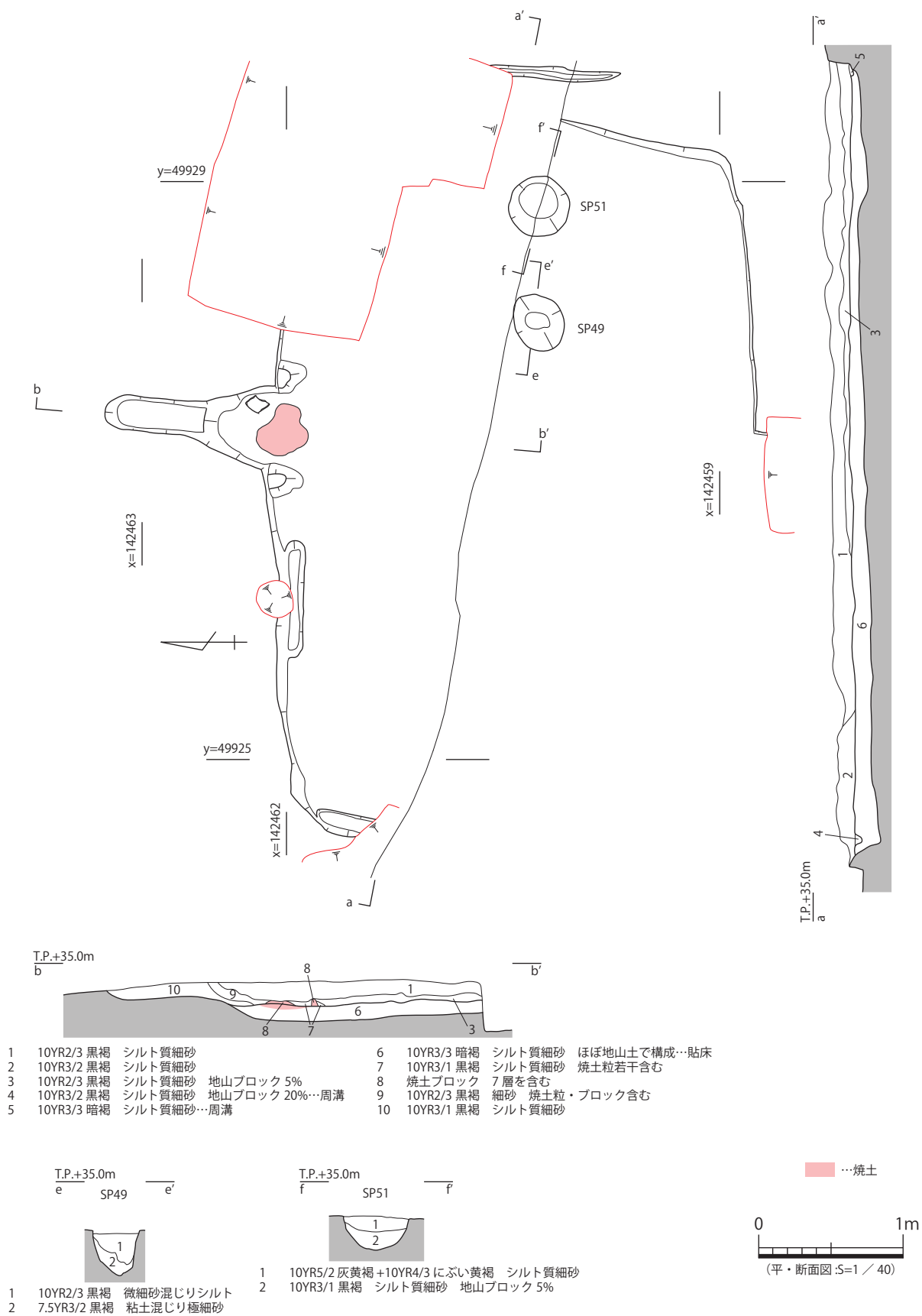


図 26 2・4- 竪穴 58 平・断面図

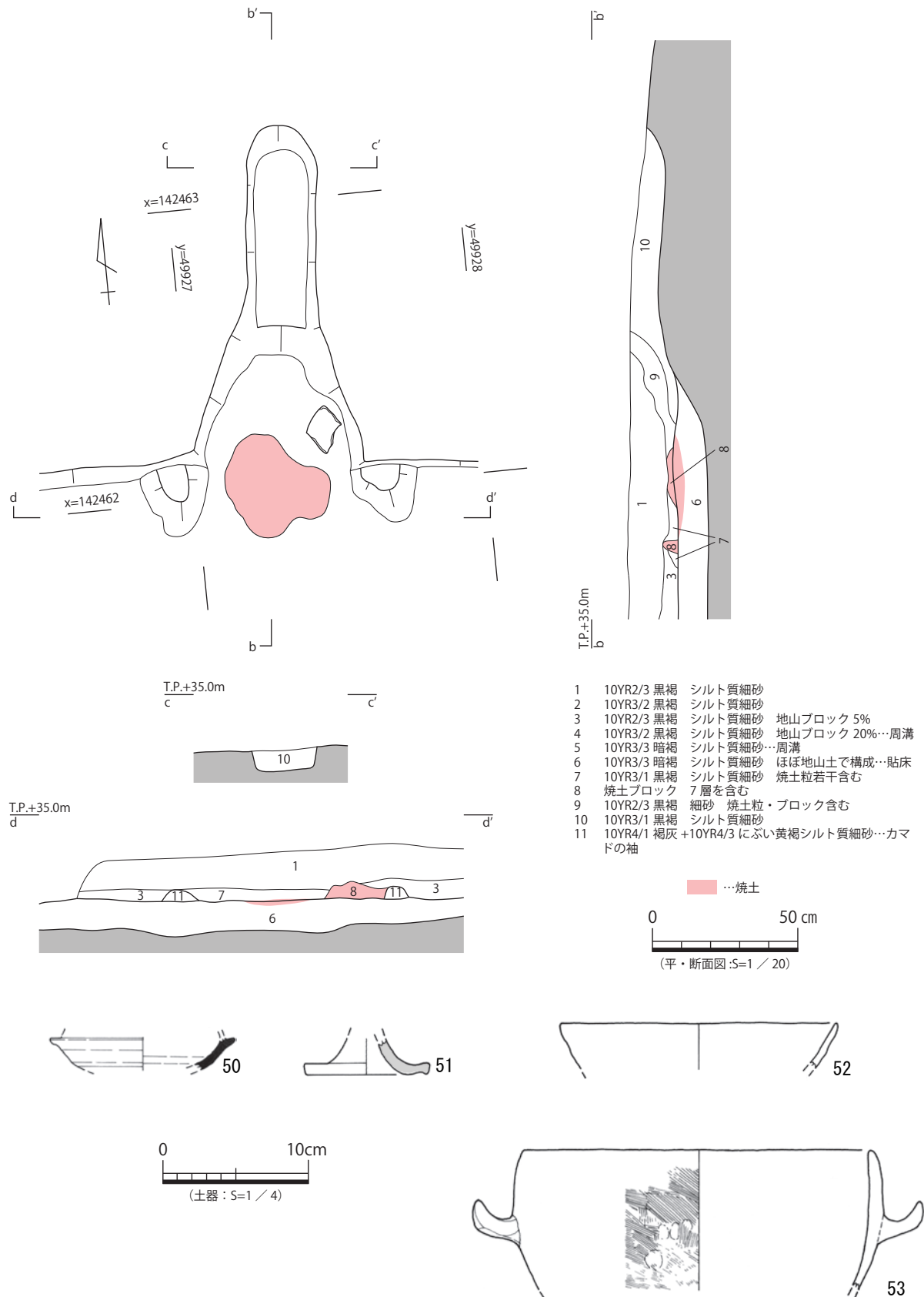


図 27 2・4- 竪穴 58 カマド 平・断面図、出土遺物実測図

3-1 堅穴 70 (図 28)

調査区南東隅で検出した堅穴建物であり、2・3 - 掘立 2 に切られ、3 - 堅穴 80・90 を切る。建物の西端のみの検出であるが、平面形は長方形であると考えられ、東側の調査区外に広がる。主軸方位は $N-6^{\circ}-W$ を示し、検出面の標高は 34.80m である。検出できた規模は東西約 3.14 m、南北 1.76 m、深さ約 0.26 m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、周壁溝を確認した。

埋土は灰黄褐とにぶい黄褐細砂混じりシルトである。遺物は須恵器杯蓋 (54)・壺 (55) が出土した。

貼床は地山ブロックを 7 % 含む黒褐シルトであり、ほぼ平坦である。掘方までの深さは 0.10 m である。遺物は土師器甗 (57) が出土した。

周壁溝は幅 0.18 m、深さ 0.07 m を測る。埋土は地山ブロックを 15 % 含むにぶい黄褐細砂混じりシルト。遺物は土師器小型丸底壺 (56) が出土した。

出土遺物の年代から、TK 209 形式併行期と判断できる。

3-2 堅穴 80 (図 28)

調査区南東隅で検出した堅穴建物であり、2・3 - 掘立 2、3- 堅穴 70 に切られる。建物の西端のみの検出であるが、平面形は方形であると考えられ、東側の調査区外に広がる。主軸方位は $N-10^{\circ}-W$ を示し、検出面の標高は 34.80m である。検出できた規模は東西約 3.72 m、南北 1.60 m、深さ約 0.14 m を測る。

埋土の掘削後、直床面直上で遺構の検出を行い、支柱穴 (3 - SP 8・11)、ピット (3 - SP 9) を確認した。

埋土は地山ブロックを 7 % 含む黒褐シルト混じり極細砂、地山ブロックを 3 % 含む黒褐シルトである。

床面は直床であり、ほぼ平坦である。

支柱穴は 2 基確認できた。SP8 は円形を呈し、直径 0.49 m、深さ 0.27m を測る。断面形状は段を持つ U 字形である。埋土は柱痕を確認し、柱痕は地山ブロックを 7 % 含むシルト混じり細砂、掘方は地山ブロックを 5 % 含む黒褐シルト、地山を多量に含む黒褐シルト質微細砂～細砂である。SP11 は円形を呈し、直径 0.37 m、深さ 0.14m を測る。断面形状は段を持つ U 字形である。埋土は柱痕を確認し、柱痕は地山ブロックを 2 % 含む黒褐シルト、黒褐シ

ルトである。

SP 9 は不整な円形を呈し、直径 0.39×0.34 m、深さ 0.15 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層から地山ブロックを 3 % 含む黒褐シルト、暗褐シルトである。

遺物は出土しないが、切り合い関係から、7 世紀初頭以前と判断できる。

3-3 堅穴 90 (図 29)

調査区南東隅で検出した堅穴建物であり、2・3 - 堅穴 30、2・3 - 掘立 1・2 に切られる。建物の南西隅のみの検出であるが、平面形は方形と考えられ、東側の調査区外に広がる。主軸方位は $N-8^{\circ}-W$ 、検出面の標高は 34.90m である。検出できた規模は東西約 2.22 m、南北 3.34 m、深さ約 0.19 m を測る。

埋土は上層から灰黄褐細砂混じりシルトと灰黄褐細砂、地山ブロックを 10 % 含む灰黄褐細砂混じりシルトと灰黄褐細砂である。

床面は直床であり、ほぼ平坦である。

遺物は出土していないが、切り合い関係から 7 世紀初頭以前と考えられる。

3-4 堅穴 100 (図 30)

調査区東端中央で検出した堅穴建物であり、2・3 - 堅穴 30 に切られる。カマド付近のみの検出であり、平面形は不明である。主軸方位は $N-7^{\circ}-W$ を示し、検出面の標高は 34.90m である。検出できた規模は東西 2.22 m、南北 1.36 m、深さ約 0.22 m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、カマドを確認した。

埋土はにぶい黄褐細砂混じりシルト、灰黄褐細砂混じりシルトである。遺物は須恵器杯蓋 (58)・甕 (59) が出土した。

貼床は黄褐とにぶい黄褐細砂混じりシルトであり、ほぼ平坦である。掘方までの深さは 0.10 m である。

カマドは堅穴建物北側に作り付けられる。カマド構築材は褐灰細砂混じりシルトである。内部に焼土と炭化材を多量に含む層があり、東側の袖内面に焼土が確認できる。

出土遺物の年代から、古墳時代後期初頭～中葉と判断できる。

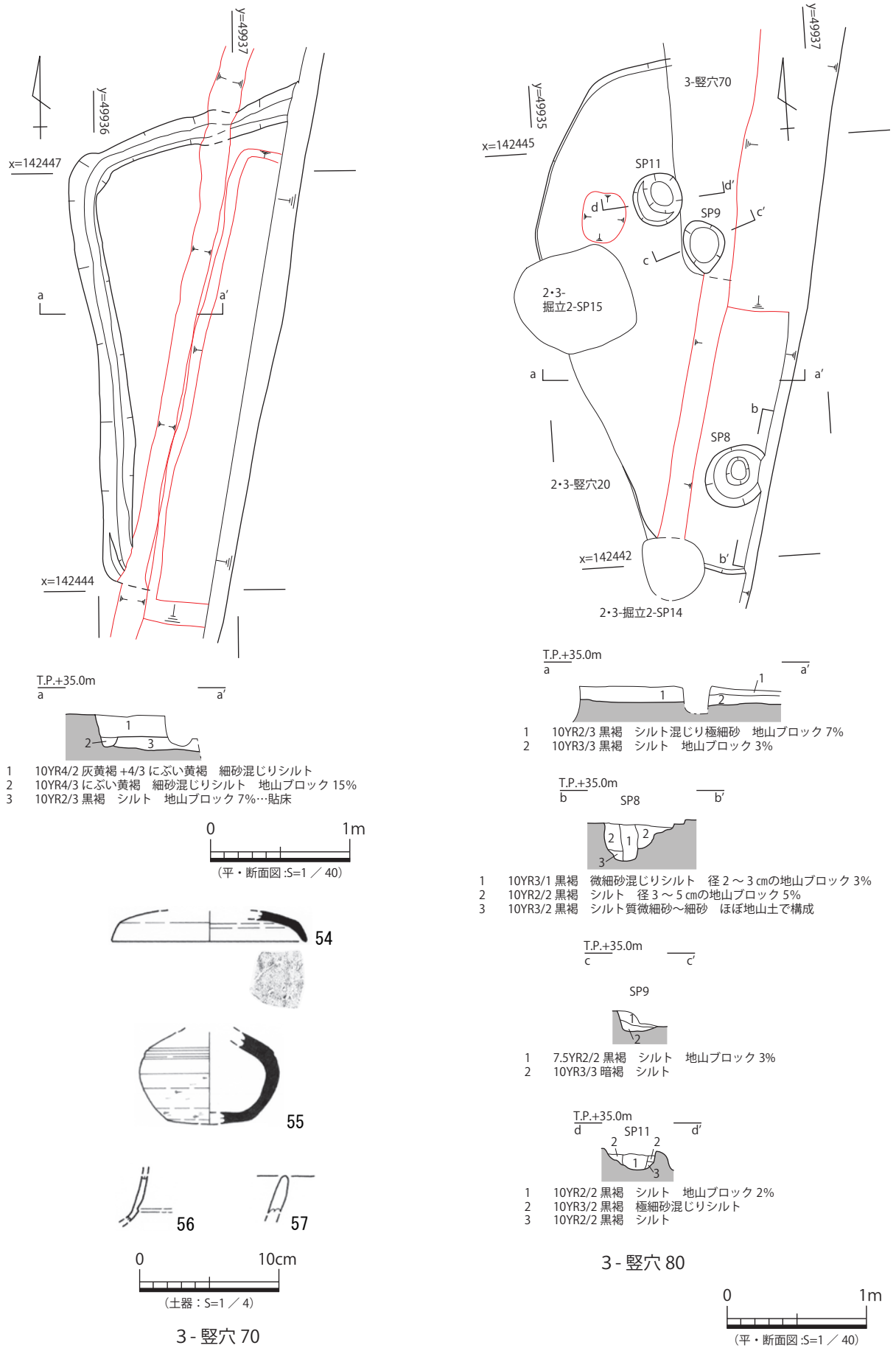


図 28 3- 竪穴 70・80 平・断面図、出土遺物実測図

4- 竪穴 110 (図 31 ~ 33)

調査区東部北端で検出した竪穴建物であり、4 - 竪穴 102 を切り、4 - 掘立 4 に切られる。平面形は方形を呈する。主軸方位は $N - 1^{\circ} - W$ を示し、検出面の標高は 34.90m である。規模は東西方向の長辺 4.14 m、南北方向の短辺 3.51 m、深さ 0.31 m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴 (4 - SP92 ~ 95) を確認した。

埋土は 5 層に分層でき、上層から地山ブロックを 3 % 含む灰黄褐細砂、暗褐細砂、地山ブロックを 5 % 含む黒褐細砂、地山ブロックを多量に含むにぶい黄褐細砂である。遺物は須恵器杯蓋 (61 ~ 65・67・68)・杯身 (69)・高杯 (70)・甕 (71)・甑 (73)、土師器甕 (74) が出土した。

貼床は地山ブロックを 15 % 含むにぶい黄褐細砂

であり、ほぼ平坦である。掘方までの深さは 0.05 ~ 0.13 m である。床面直上から須恵器提瓶 (72)、貼床内から須恵器杯蓋 (66) が出土した。

カマドは竪穴建物北側中央に作り付けられ、煙道部は建物外に長く延びる。カマドの構築材は袖のみ残存する。カマド埋土は焼土粒・焼土ブロックを多量に含む層がある。カマド内の遺物は管玉 (75) 以外に須恵器杯蓋、土師器片が出土した。

周壁溝は幅 0.26 ~ 0.13 m、深さ 0.10 m を測る。埋土は地山ブロックを 1 % 含む暗褐細砂である。北壁沿いを除いて全周する。

支柱穴は 4 基確認できた。SP92 は円形を呈し、直径 0.37 m、深さ 0.16m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層から暗褐シルト、地山ブロックを 1 % 含む細砂混じりシルトである。SP93 は不整円形を呈し、直径 0.42 m、深さ 0.14m を測る。断面形状は U 字形である。埋土は褐灰ブロックを 3 % 含む黒褐細砂である。SP94 は円形を呈し、直径 0.47 m、深さ 0.18m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は褐灰ブロックを 7 % 含む黒褐細砂、暗褐粗砂混じり細砂、褐灰ブロックを 7 % 含む黒褐細砂質シルト、地山ブロックを 3 % と褐灰ブロックを 5 % 含む黒褐細砂質シルトである。SP95 は円形を呈し、直径 0.37 m、深さ 0.20 m を測る。断面形状は U 字形である。柱痕は地山ブロックを 3 % と褐灰ブロックを 3 % 含む黒褐細砂混じりシルト、埋土は地山ブロックを 3 % 含む暗オリーブ褐シルトである。

出土遺物の年代から、TK 43 ~ TK 209 形式併行期と判断できる。

4- 竪穴 120 (図 34)

調査区東部北端で検出した竪穴建物であり、4 - 竪穴 110、4 - 掘立 4 に切られる。検出できたのは建物の北壁・西壁の一部と東壁の一部であるが、平面形は方形と考えられる。主軸方位は $N - 13^{\circ} - W$ を示し、検出面の標高は 34.90m である。規模は東西 4.47 m、南北 3.06 m 以上、深さ約 0.05 m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、周壁溝を確認した。

埋土は地山ブロックを 10 % 含む暗褐細砂である。遺物は須恵器高杯 (76) 以外に土師器片が出土した。

床面は直床であり、ほぼ平坦である。

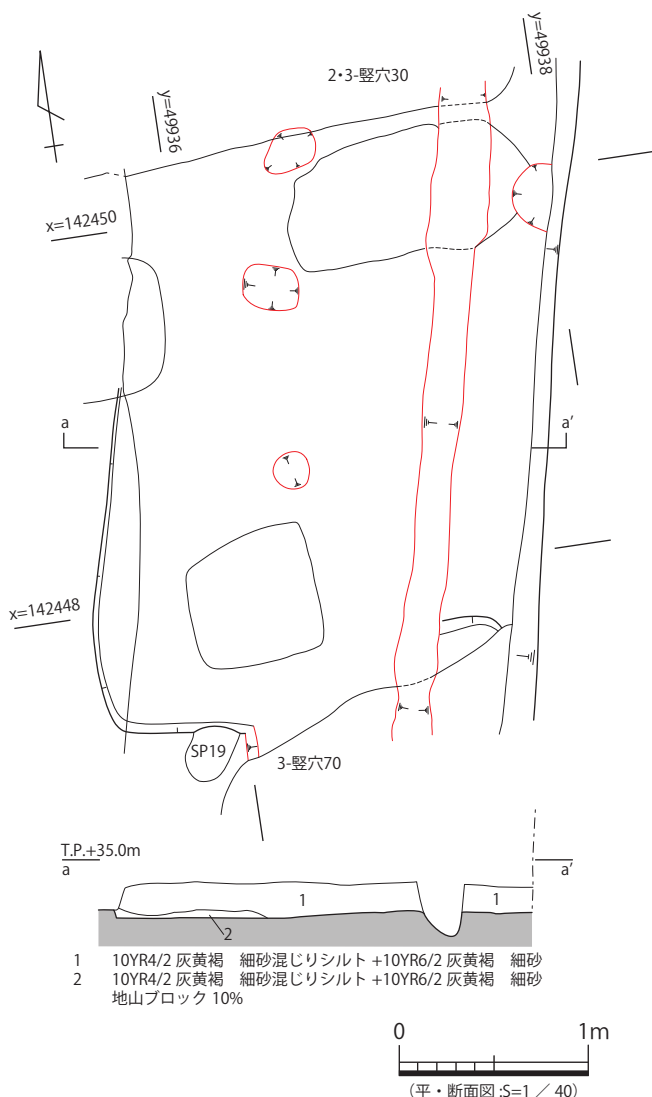


図 29 3- 竪穴 90 平・断面図

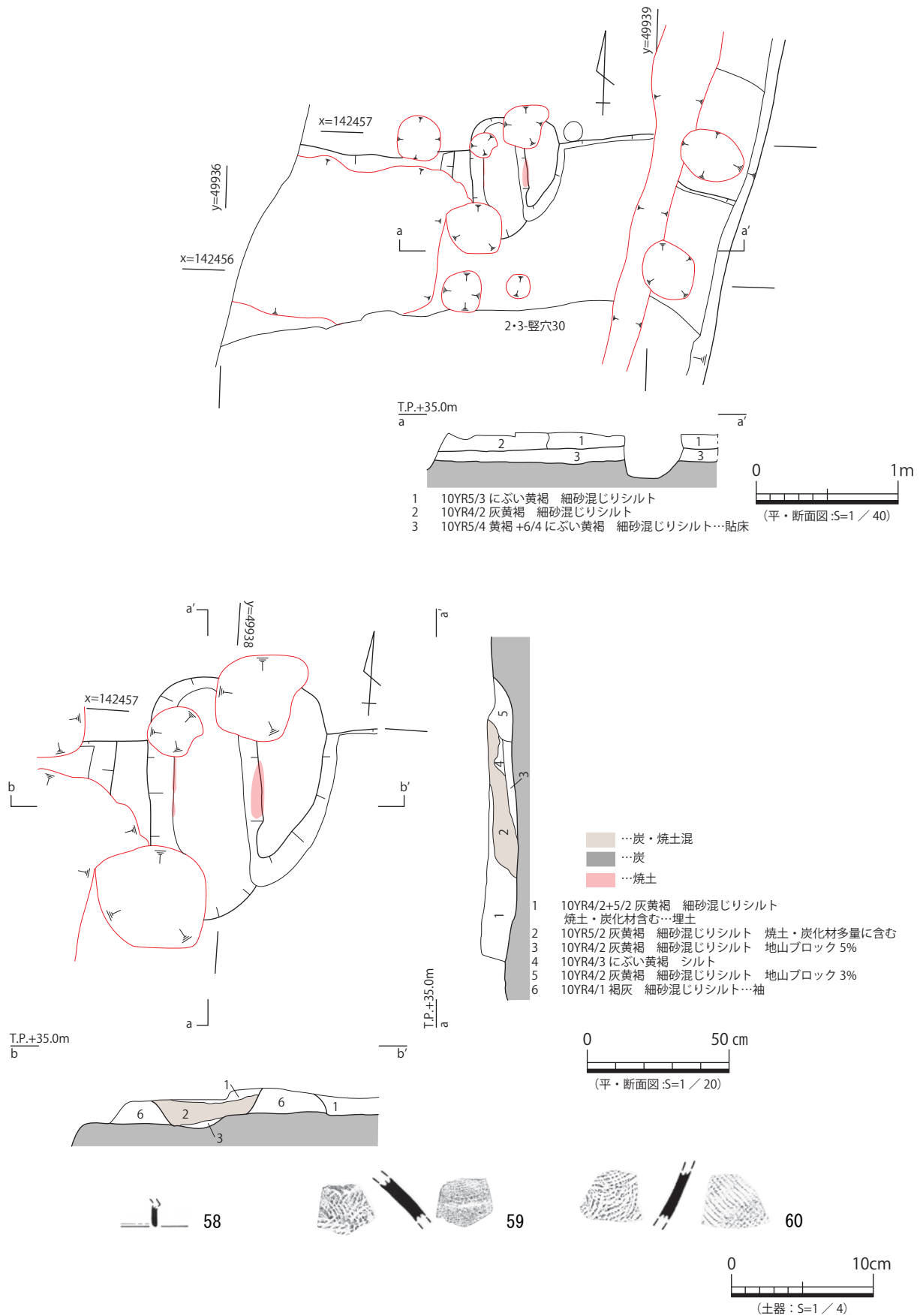


図 30 3- 竪穴 100 平・断面図、カマド 平・断面図、出土遺物実測図

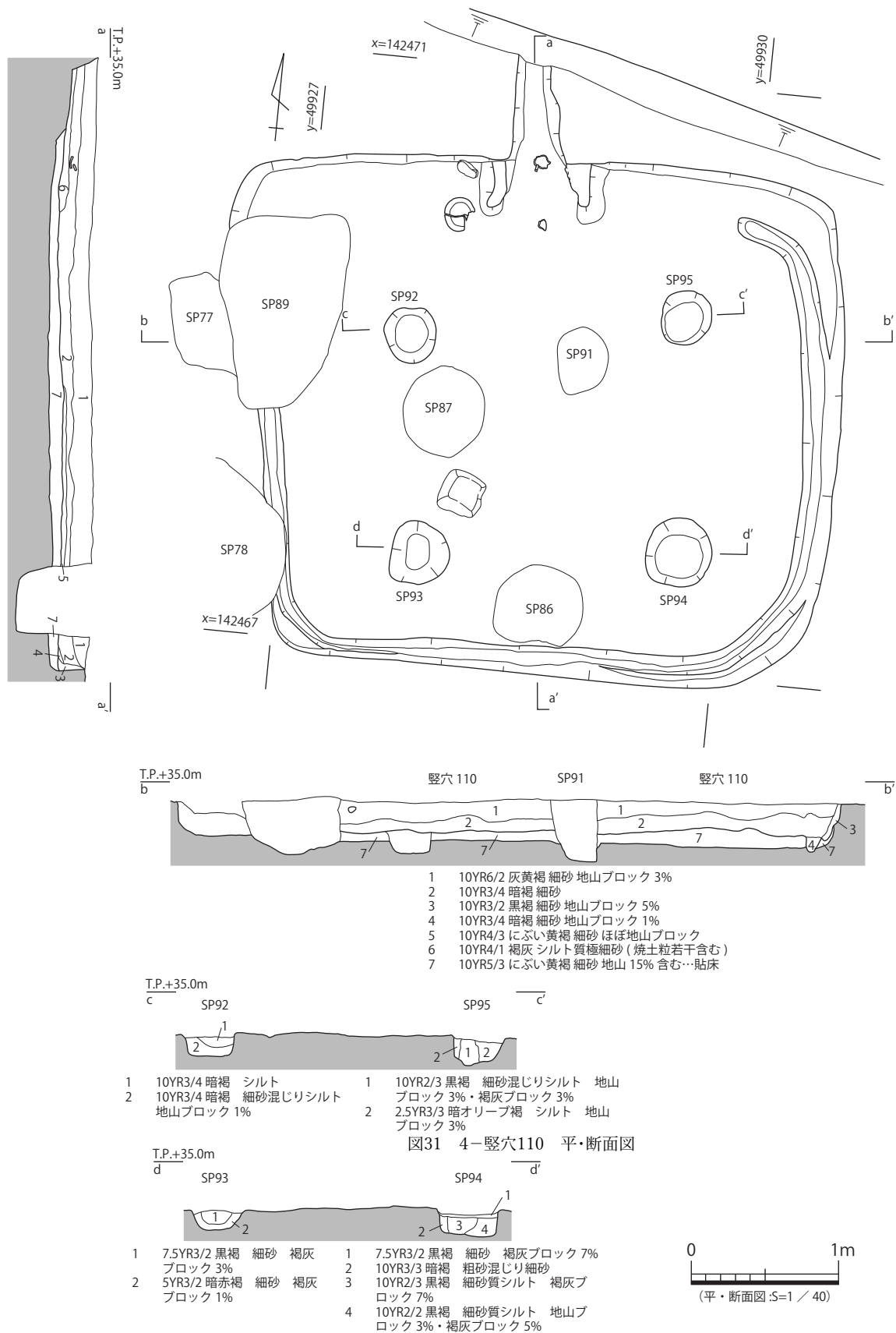


図 31 4- 竪穴110 平・断面図

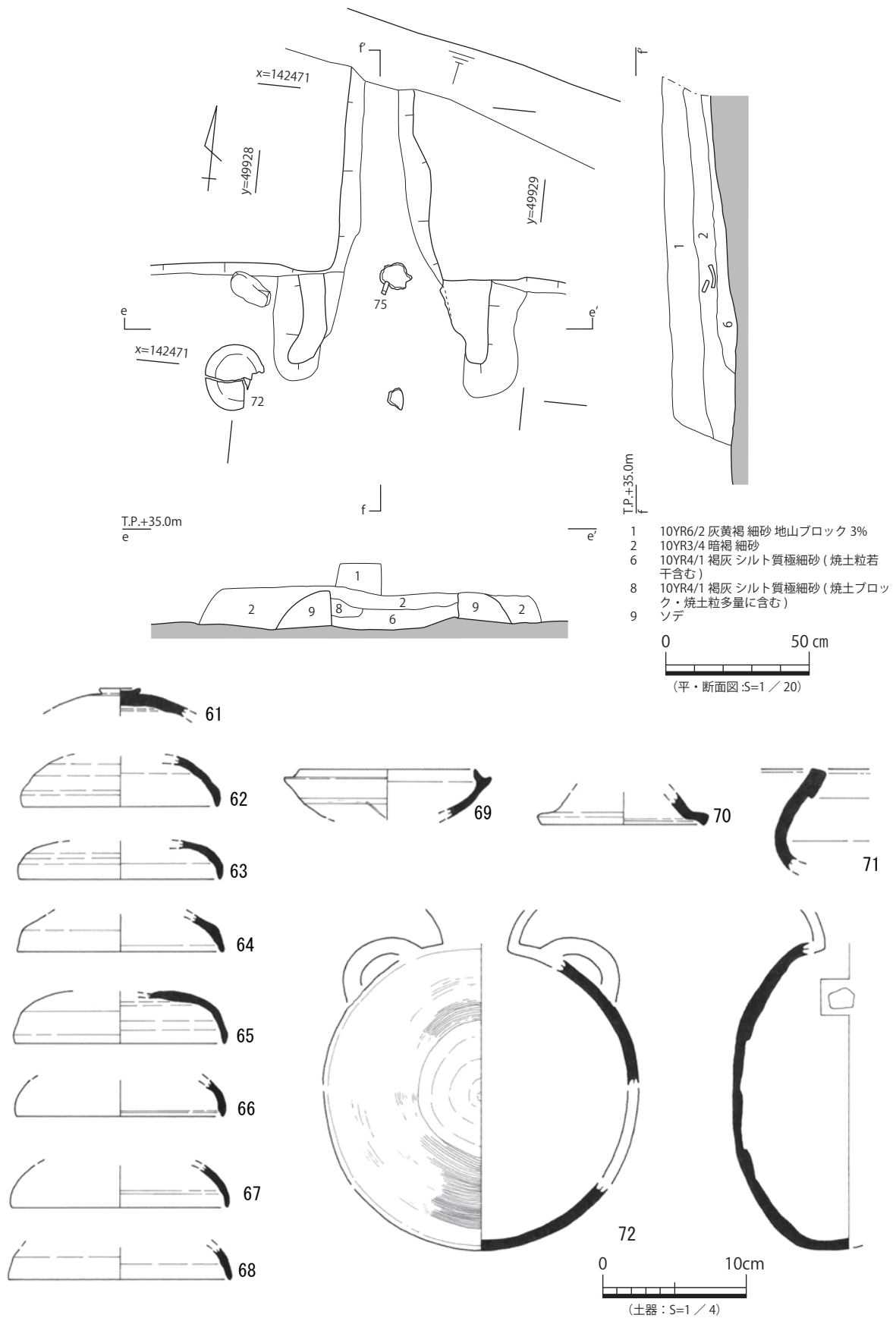


図 32 4- 竪穴 110 カマド 平・断面図、出土遺物実測図 (1)

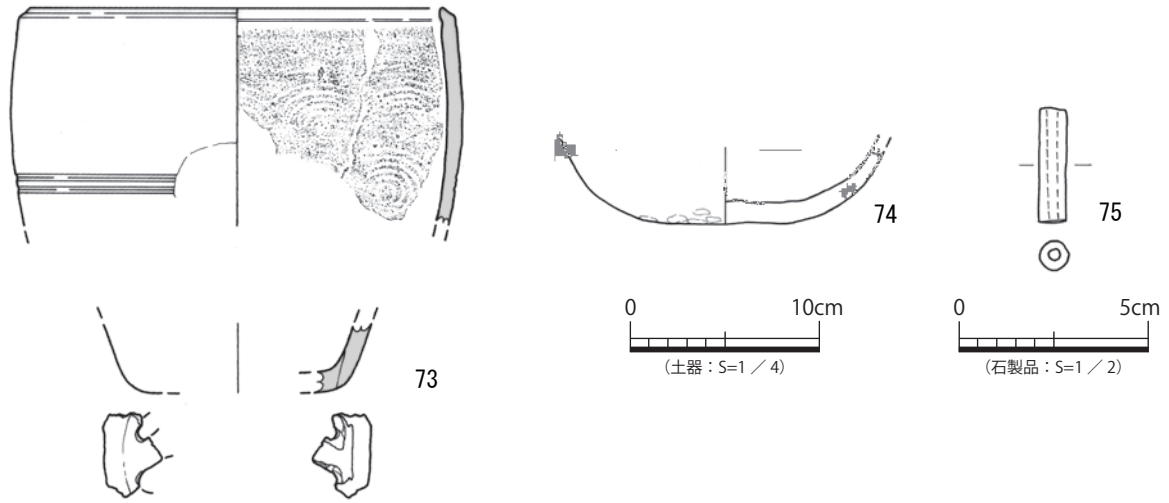


図 33 4- 竪穴 110 出土遺物実測図 (2)

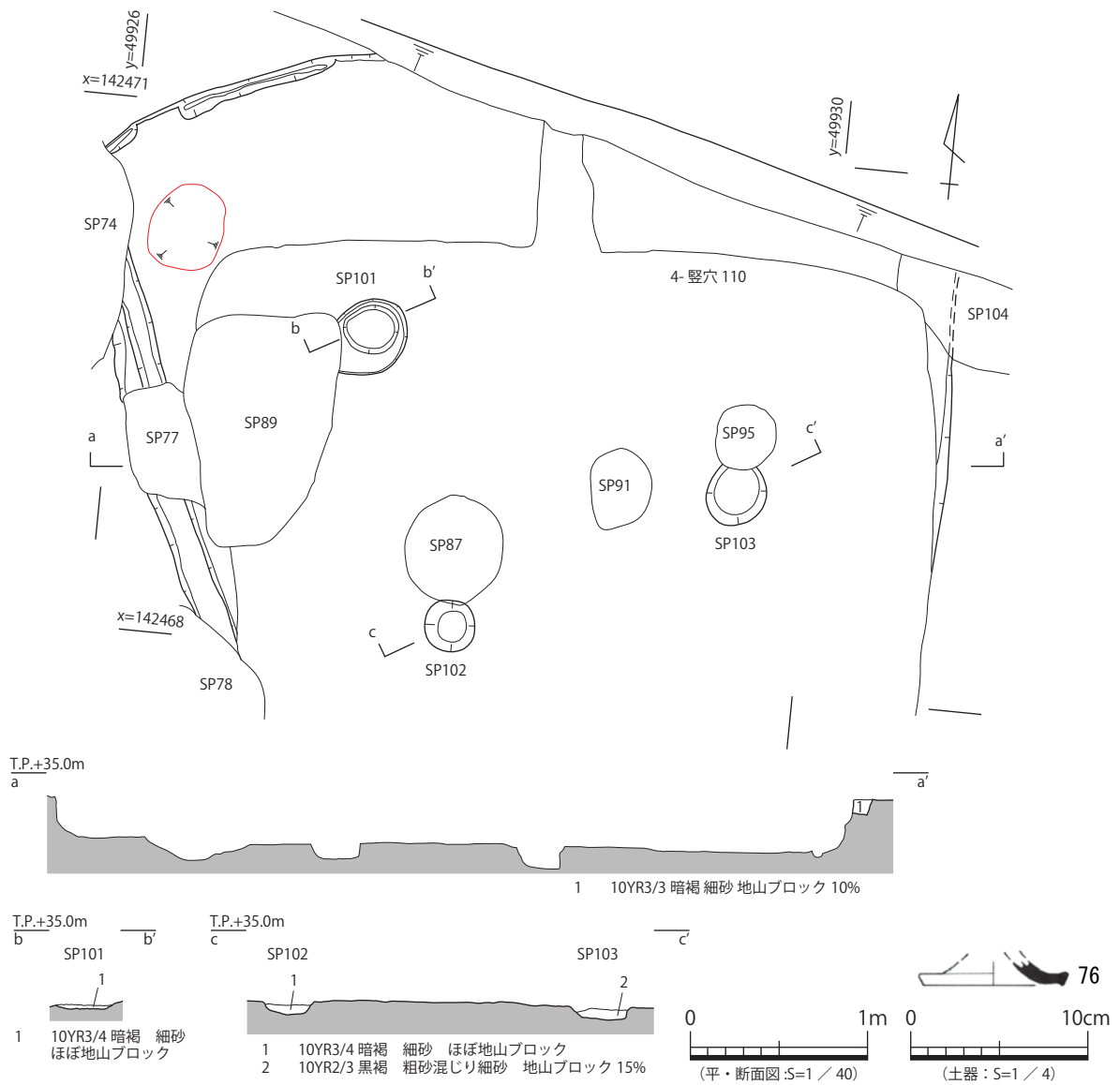


図 34 4- 竪穴 120 平・断面図、出土遺物実測図

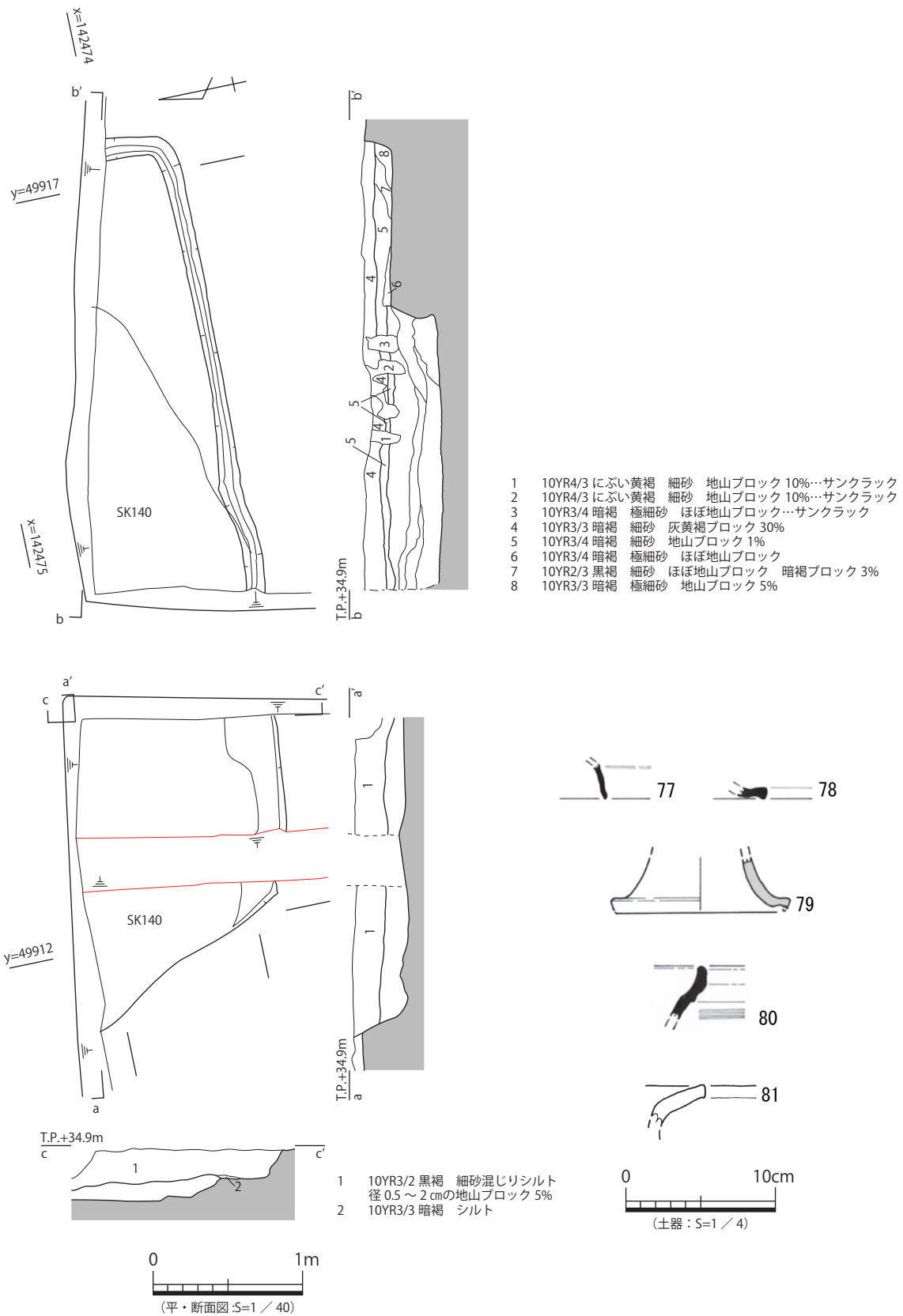


図 35 4・14- 竪穴 130 平・断面図、出土遺物実測図

周壁溝は幅 0.18 ～ 0.13 m、深さ 0.05 mを測る。北壁と西壁沿いで検出した。

出土遺物の年代から、7 世紀初頭と判断できる。

4・14－竪穴 130 (図 35)

調査区中央部北端で検出した竪穴建物であり、4・14－SX140 を切る。検出できたのは建物の南壁と東壁・西壁の一部であるが、平面形は方形と考えられる。主軸方位は N－3°－W を示し、検出面の標高は 34.90m である。規模は東西 5.11 m、南北 1.28 m 以上、深さ約 0.21 m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、周壁溝を確認した。

埋土は灰黄褐ブロックを 30% 含む暗褐細砂、地山ブロックを 5 % 含む黒褐細砂混じりシルトである。須恵器高杯 (78)・高杯 (79) が出土した。

貼床は地山ブロックを 1 % 含む暗褐細砂、暗褐極細砂、地山ブロックを多量に含む黒褐細砂、地山ブロックを 1 % 含む暗褐極細砂である。貼床内から須恵器杯蓋 (77)・壺 (80)、土師器甕 (81) が出土した。

周壁溝は幅 0.18 ～ 0.10 m、深さ 0.02 m を測る。東壁と南壁沿いで検出した。

出土遺物の年代から、T K 10 形式併行期と判断できる。

7－竪穴 1 (図 36)

調査区中央部北端で検出した竪穴建物であり、7・9－竪穴 2、7－竪穴 6、7－SD25 を切り、7－SK23 に切られる。平面形は方形を呈する。主軸方位は N－14°－W を示し、検出面の標高は 34.90m である。規模は東西 4.93 m、南北 5.25 m、深さ 0.20 m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、周壁溝、支柱穴 (7－竪穴 1 P 1～3) を確認した。

埋土は 2 層に分層でき、上層から黒褐シルト混じり極細砂、地山ブロックを 7 % 含むシルト混じり極細砂である。遺物は土師器甕 (83) が出土した。

貼床は地山ブロックを 20% 含む黒褐細砂混じりシルト、地山ブロックを 5 % 含む黒褐シルト混じり細砂であり、少し凹凸がある。掘方までの深さは 0.08 m である。床面直上から須恵器甕 (82)、土師器甕 (84・85) が出土した。

周壁溝は幅 0.15 m、深さ 0.05 m を測る。埋土

は暗褐シルト混じり細砂である。東壁中央を除いて全周する。

支柱穴は 3 基確認できた。P 1 は円形を呈し、直径 0.65 m、深さ 0.21m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は 4 層に分層でき、柱痕を確認した。P 2 は円形を呈し、直径 0.62 m、深さ 0.27m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は 3 層に分層できる。P 3 は不整な円形を呈し、直径 0.67 m、深さ 0.20m を測る。埋土は 3 層に分層できる。

出土遺物の年代から、古墳時代後期と判断できる。

7・9－竪穴 2 (図 37)

調査区中央部北端で検出した竪穴建物であり、7－竪穴 1、7・8－SD21、7－SK23 に切られる。平面形は方形を呈する。主軸方位は N－3°－E を示し、検出面の標高は 34.90m である。規模は東西 5.93 m 以上、南北 5.23 m、深さ 0.16 m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、周壁溝、支柱穴 (7－竪穴 1 P 1～3)、ピット (7－竪穴 1 P 4) を確認した。

埋土は 2 層に分層でき、灰黄褐粗砂混じりシルト～細砂、灰黄褐細砂ブロックを 5 % 含む暗褐中砂混じり細砂～シルトである。

貼床は暗褐粗砂混じりシルト～細砂、黒褐細砂～シルトであり、少し凹凸がある。掘方までの深さは 0.08 m である。貼床内から土師器小片が出土した。

周壁溝は幅 0.20 ～ 0.14 m、深さ 0.05 m を測る。埋土は黒褐中砂混じりシルト～細砂である。北壁沿いの周壁溝は部分的に途切れる。

支柱穴は 3 基確認できた。P 1 は円形を呈し、0.46 m、深さ 0.14m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は 2 層に分層できる。P 2 は隅丸方形を呈し、規模は 0.50 × 0.33 m、深さ 0.11m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は単一層である。P 3 は不整な円形を呈し、直径 0.53 m、深さ 0.17m を測る。埋土は 3 層に分層でき、柱痕を確認した。

P 4 は円形を呈し、直径 0.55 m、深さ 0.22 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は 3 層に分層でき、柱痕を確認した。

遺物は土師器小片であり、詳細な時期は不明であるが、切り合い関係から古墳時代後期以前と想定できる。

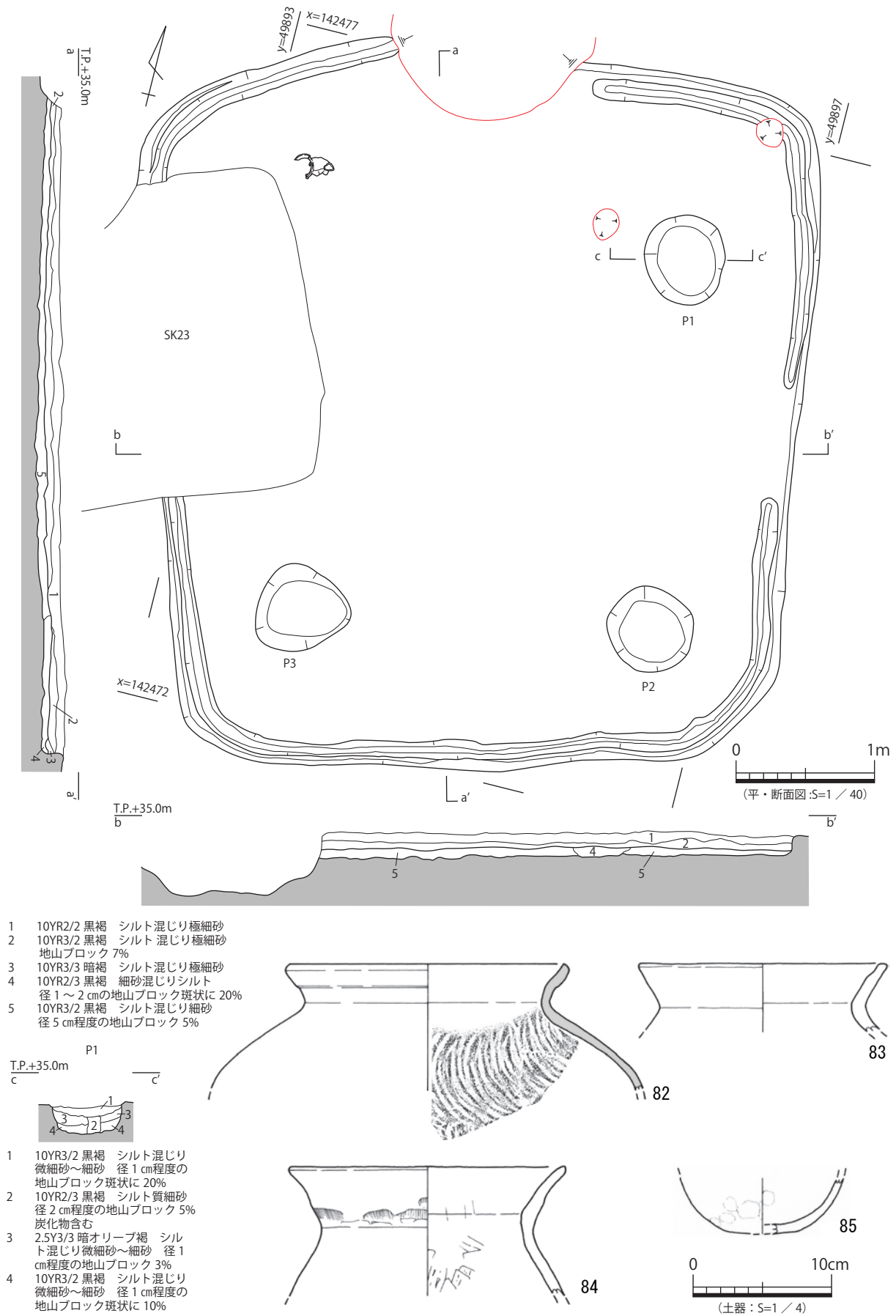


図 36 7- 竪穴 1 平・断面図、出土遺物実測図

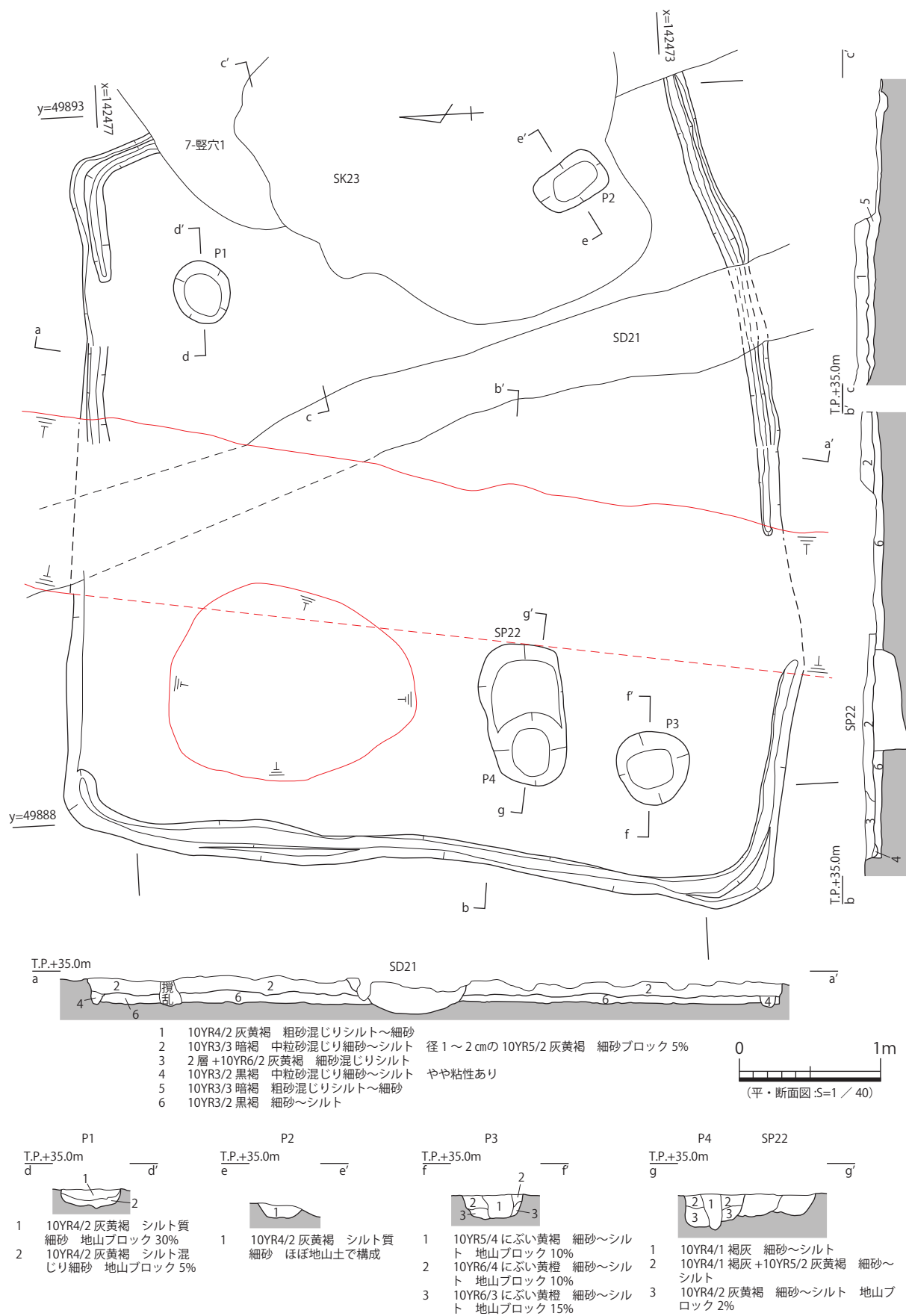


図 37 7・9- 竪穴 2 平・断面図

7・9-Ⅰ 竪穴3 (図 38・39)

調査区西部中央で検出した竪穴建物であり、9 - Ⅰ 竪穴1を切り、9 - Ⅰ 掘立1に切られる。平面形は不整な台形を呈する。主軸方位はN - 15° - Wを示し、検出面の標高は34.90mである。規模は北壁約6.34 m、南壁約5.64 m、東壁約4.10 m、西壁5.62 m、深さ約0.20 mを測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴(7・9 - Ⅰ 竪穴3 P 1・3～5)、ピット(7・9 - Ⅰ 竪穴3 P 2)を確認した。

埋土は地山ブロックを多量に含む暗褐シルト混じり細砂である。遺物は土師器小片が出土した。

貼床は地山ブロックを10%含む黒褐シルト質細砂、にぶい黄褐細砂混じりシルトであり、ほぼ平坦である。掘方までの深さは0.10 mである。

カマドは竪穴建物北西隅に作り付けられ、煙道部は建物外に長く延びる。カマドの構築材は炭化物を含む暗褐細砂質シルトである。カマド内面の埋土は上層から焼土と炭化物を多量に含む暗褐シルト混じり細砂、地山ブロックを3%と炭化物を含むシルト混じり細砂である。

周壁溝は幅0.25～0.10 m、深さ0.04 mを測る。埋土は地山ブロックを15%含む黒褐シルト質極細砂である。カマド部分と南西隅を除き全周し、北壁と南壁沿いでは攪乱により一部削平される。

支柱穴は4基確認できた。P 1は隅丸方形を呈し、一辺0.56×0.47 m、深さ0.22mを測る。断面形状はU字形、埋土は2層に分層できる。P 3は方形を呈し、一辺0.53 m、深さ0.10mを測る。断面形状は浅い逆台形、埋土は2層に分層でき、地山ブロックを15%含む暗褐シルト混じり極細砂の柱痕を確認した。P 4は不整な円形を呈し、直径0.65×0.53 m、深さ0.17mを測る。断面形状は浅い逆台形。埋土は2層に分層でき、地山ブロックを10%含むにぶい黄褐シルト混じり極細砂の柱痕を確認した。P 5は円形を呈し、直径0.53 m、深さ0.23mを測る。断面形状は逆台形。埋土は4層に分層でき、地山ブロックを15%含む褐シルト混じり極細砂の柱痕を確認した。

遺物は土師器小片のみであり、詳細な時期は不明であるが、切り合い関係から古墳時代後期と想定できる。

7-Ⅰ 竪穴5 (図 40・41)

調査区中央部北端で検出した竪穴建物であり、7 - Ⅰ 竪穴6・7を切り、7 - SD25に切られる。平面形は方形である。主軸方位はN - 10° - Wを示し、検出面の標高は34.80mである。規模は東西5.48 m、南北4.97 m、深さ約0.26 mを測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴(7 - Ⅰ 竪穴5 P 1～4)を確認した。

埋土は地山ブロックを20%含む黒褐細砂混じりシルト、灰黄褐細砂混じりシルトである。遺物は須恵器杯身(87・88・90)・高杯(91・92)・甕(93)、土師器甕(94)、が出土した。

貼床は3層に分層でき、黒褐中砂混じり細砂～シルトが大部分を占め、凹凸がある。掘方までの深さは0.14 mである。貼床内から須恵器杯蓋(86)、スクレイパー(95)、サヌカイト片(96)が出土した。

カマドは北壁に作り付けられ、2回の作り替えが確認できた。最新の西カマドの構築材は地山ブロックを50%含む黒褐細砂混じりシルトで、両袖が残存する。その前の東カマドの構築材は地山ブロック50%と焼土塊を多量に黒褐細砂混じりシルトであり、片袖が残存する。最古の中央カマドは埋土のみである。

周壁溝は幅0.20～0.12 m、深さ0.05 mを測る。埋土は暗褐中砂混じり細砂～シルトである。カマド部分を除き全周する。

支柱穴は4基確認できた。P 1は円形を呈し、直径0.57 m、深さ0.43mを測る。断面形状は底面に段を有するU字形である。埋土は3層に分層でき、地山ブロックを20%と炭化物を含む黒褐シルト混じり細砂の柱痕を確認した。P 2は円形を呈し、直径0.58 m、深さ0.59mを測る。断面形状は段を有するU字形、埋土は4層に分層できる。須恵器杯身(89)が出土した。P 3は円形を呈し、直径0.66×0.56 m、深さ0.25mを測る。断面形状は段を有するU字形、埋土は3層に分層できる。P 4は円形を呈し、直径0.58 m、深さ0.30mを測る。断面形状はU字形である。埋土は3層に分層でき、地山ブロックを20%含む黒褐細砂混じりシルトの柱痕を確認した。

出土遺物の年代から、TK 10形式併行期と判断できる。

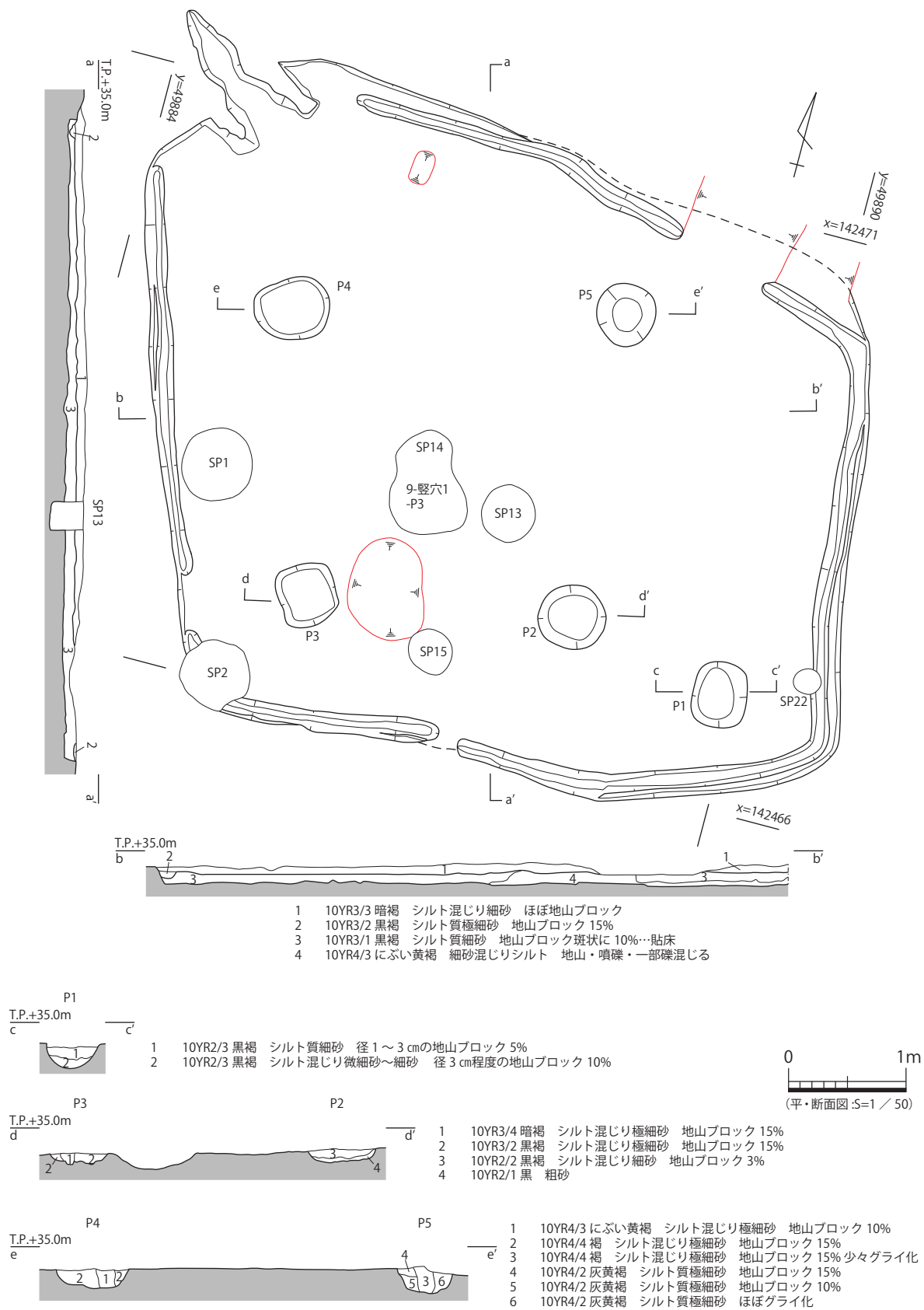


図 38 7・9- 竪穴3 平・断面図

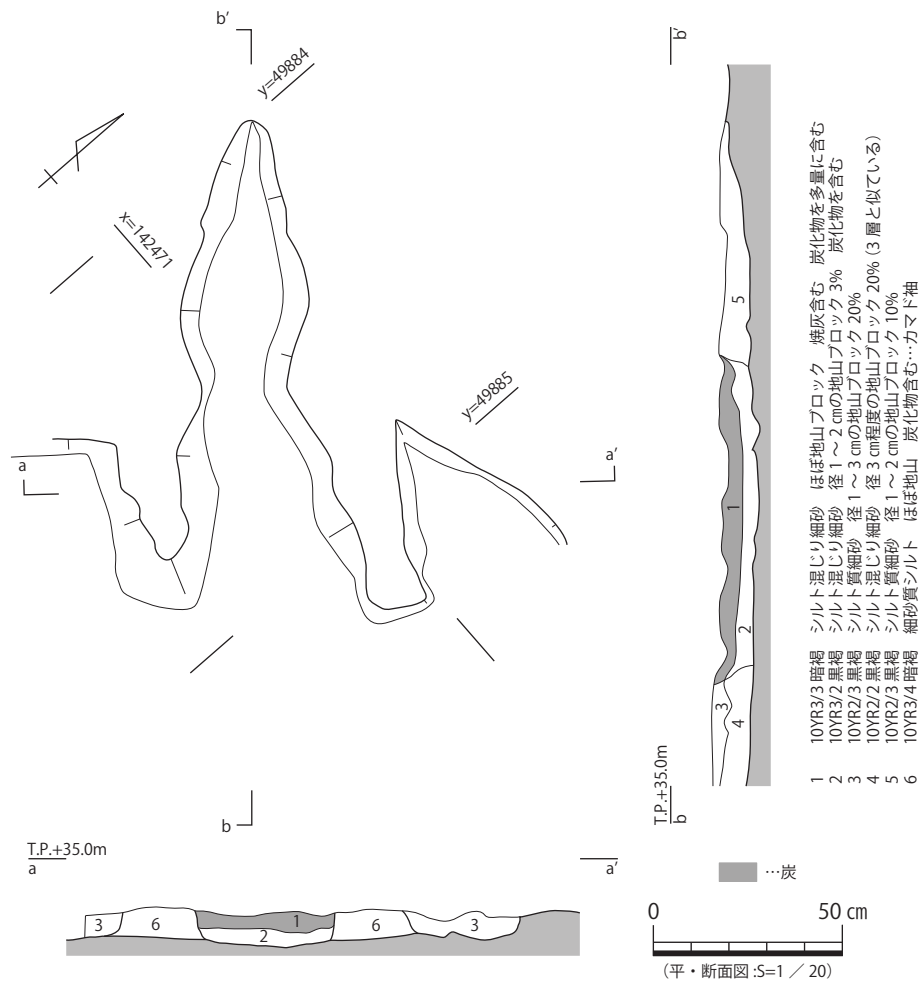


図 39 7・9- 竪穴3カマド 平・断面図

7 - 竪穴6 (図 42・43)

調査区中央部北寄りで検出した竪穴建物であり、7 - 竪穴1・5、7 - SD25 に切られる。平面形は方形を呈する。主軸方位はN - 19° - Wを示し、検出面の標高は34.80mである。規模は東西4.43m、南北4.17m、深さ約0.42mを測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴(7 - 竪穴6 P1~4)、ピット(7 - 竪穴6 P5~7)を確認した。

埋土は地山ブロックを3%含む黒褐細砂混じりシルト、カマド構築材を含む暗褐極細砂混じりシルトである。遺物は須恵器杯身(97)、スラグ(99)が出土した。

貼床は地山ブロックを30%含む黒褐細砂混じりシルト、地山ブロックを多量に含む暗褐微細砂~細砂であり、やや凹凸がある。掘方までの深さは0.10mである。貼床内から土師器甕(98)が出土した。

カマドは竪穴建物北壁中央に作り付けられるが、7 - 竪穴5に削平され、両袖の一部と底面が残存

する。カマド内面の上層に焼土層が確認される。底面は床面から約0.15m掘り込まれる。

周壁溝は幅0.16~0.10m、深さ0.08~0.01mを測る。西壁と南壁沿いの一部が途切れる。

支柱穴は4基確認できた。P1は不整形円形を呈し、直径0.67×0.58m、深さ0.45mを測る。断面形状は底面に段を有するU字形である。P2は円形を呈し、直径0.66m、深さ0.16mを測る。断面形状は浅い逆台形。黒褐極細砂混じりシルトの柱痕を確認した。P3は円形を呈し、直径0.55m、深さ0.16mを測る。断面形状は浅いU字形。黒褐極細砂混じりシルトの柱痕を確認した。P4は円形を呈し、直径0.53m、深さ0.15mを測る。断面形状は逆台形である。

P5~7はそれぞれP2~4の内側に位置し、建て替えに伴う旧支柱穴であると考えられる。平面形は円形で、支柱穴より規模が小さい。

出土遺物の年代と切り合い関係から、TK10形式併行期以前と判断できる。

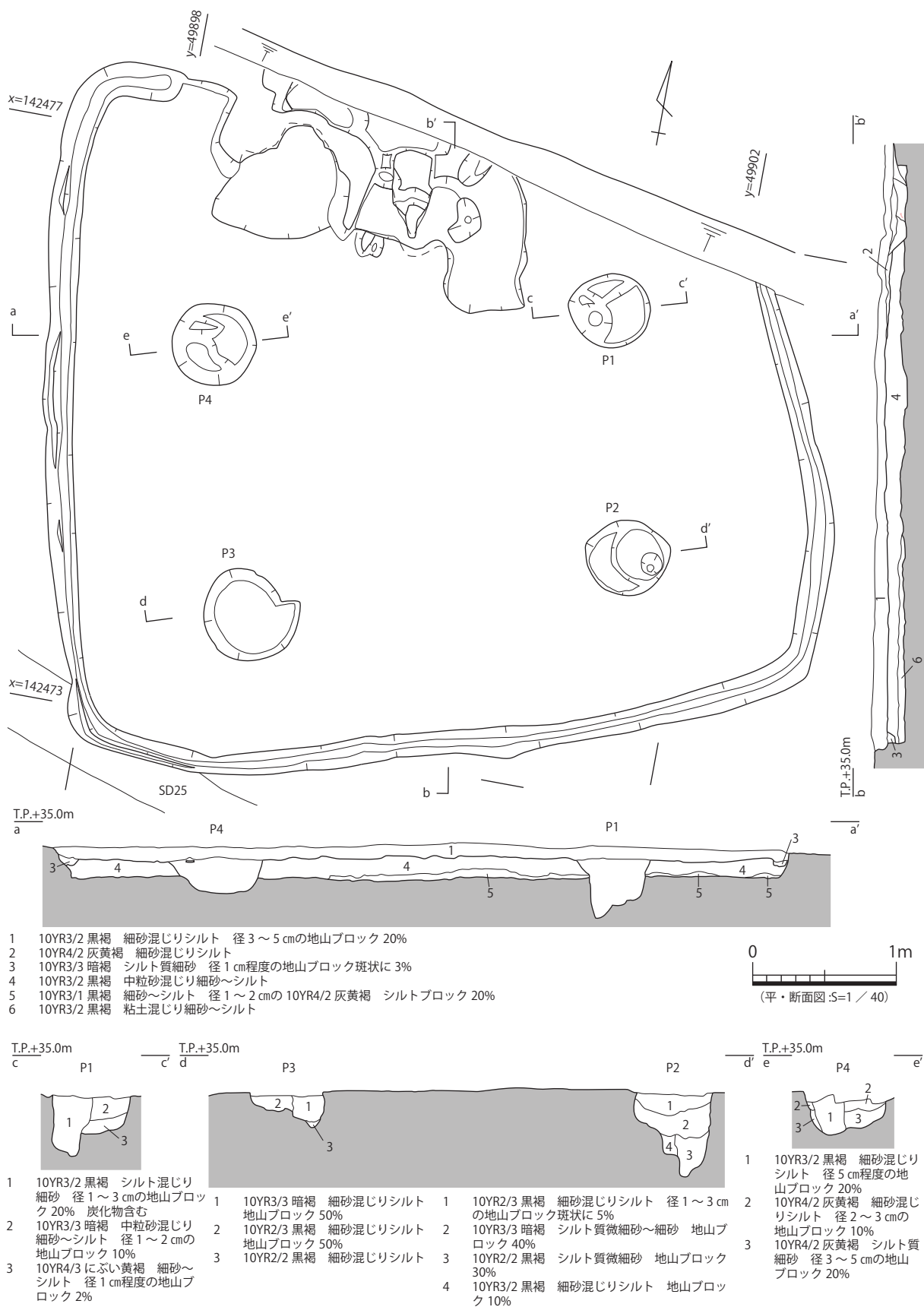


図 40 7- 竪穴 5 平・断面図

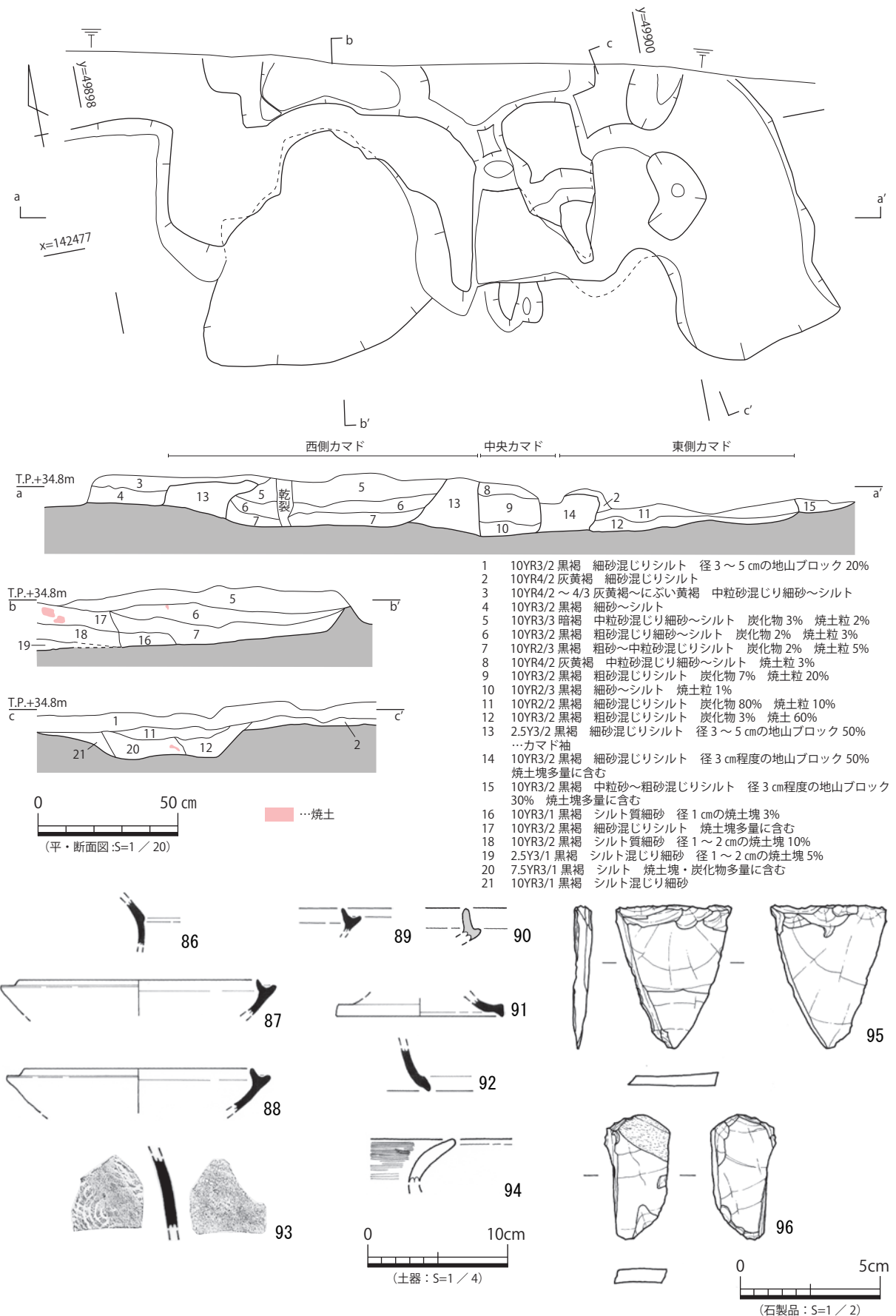


図 41 7- 竪穴5カマド 平・断面図、出土遺物実測図

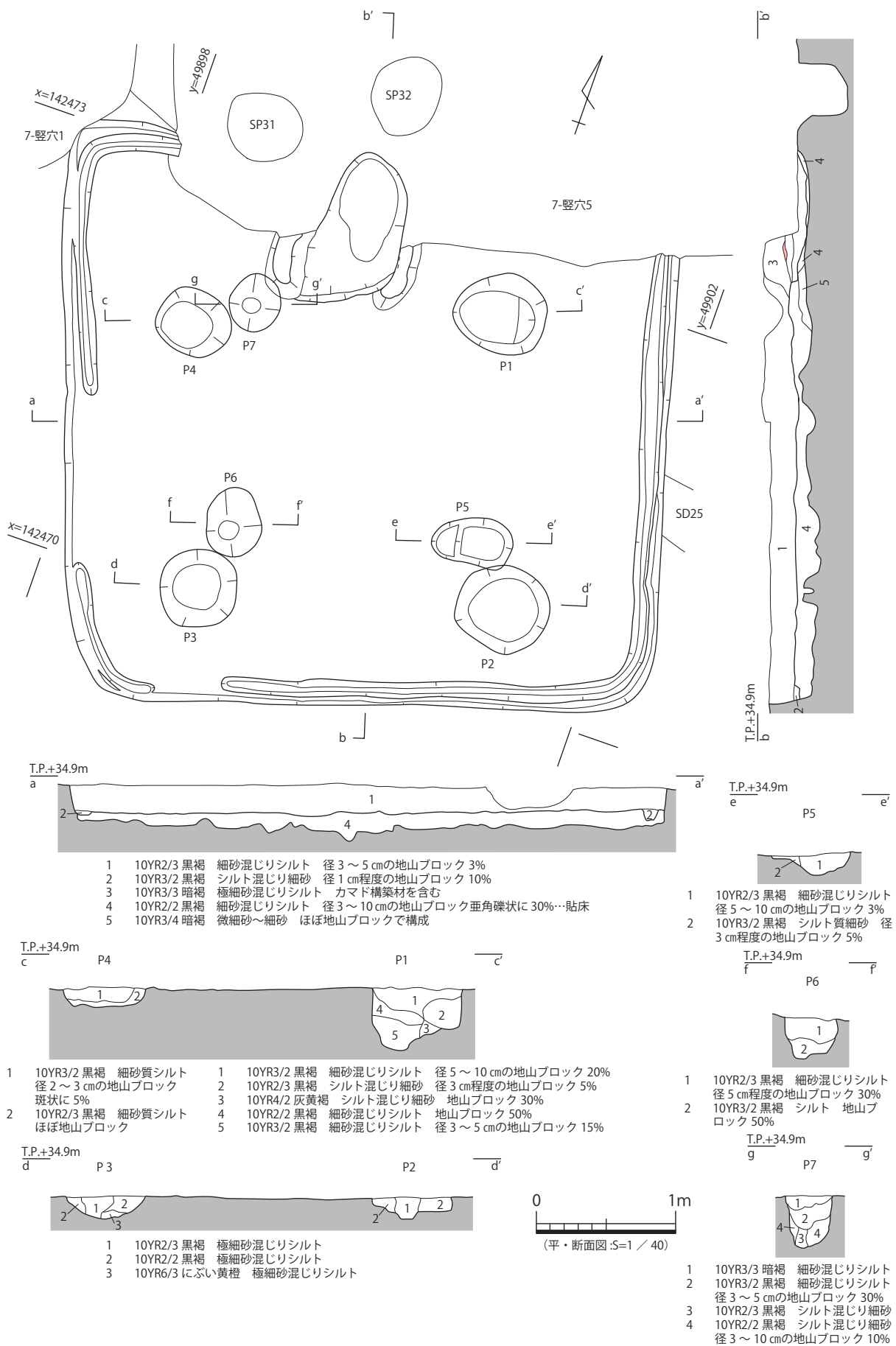


図 42 7-竪穴6 平・断面図

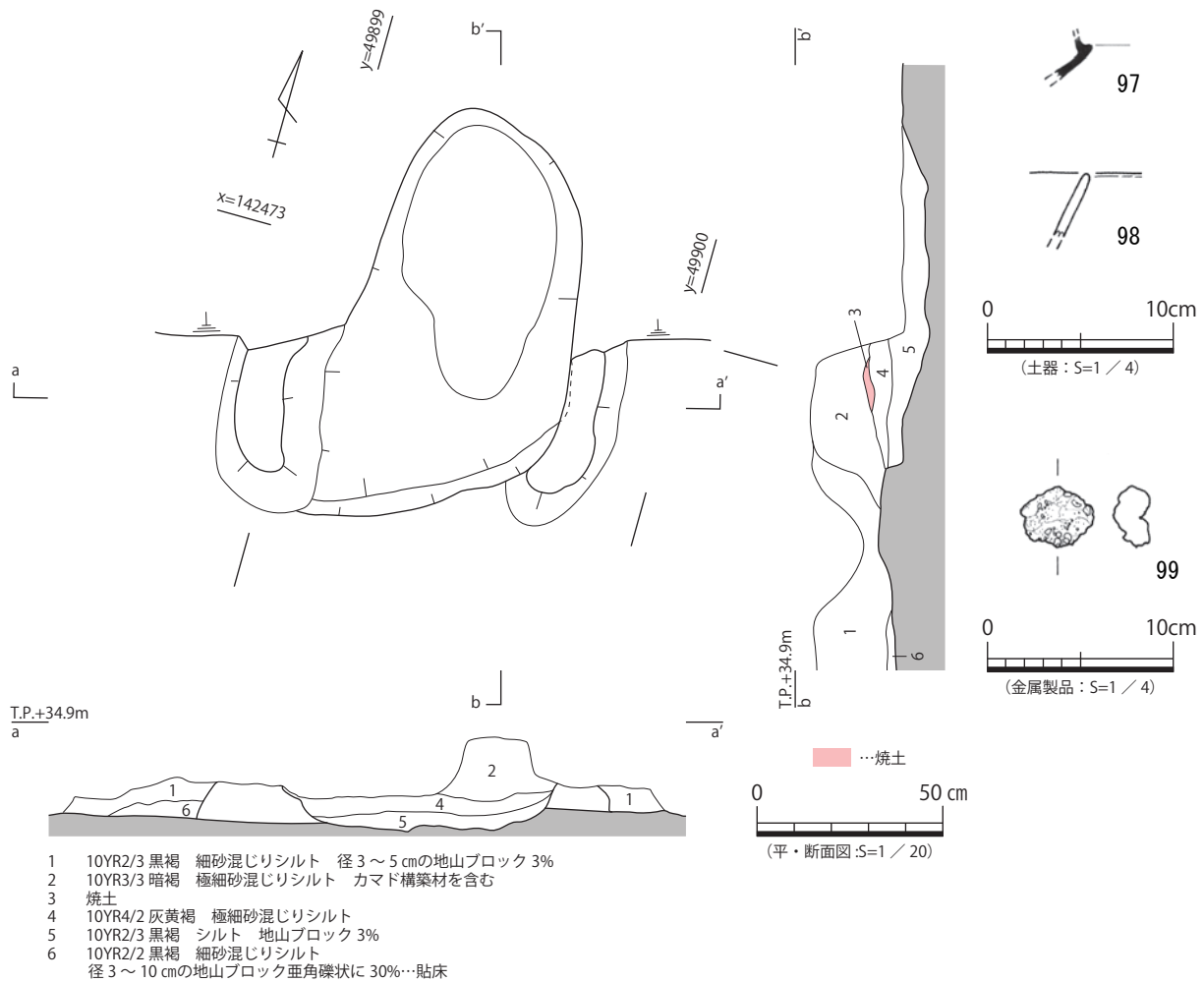


図 43 7- 竪穴6カマド 平・断面図、出土遺物実測図

7- 竪穴7 (図 44・45)

調査区中央部北端で検出した竪穴建物であり、7 - 竪穴5、7 - SK24 に切られる。検出できたのは北壁、東壁、西壁の一部であり、北東隅付近は調査区外に広がる。東壁は彎曲しているが、西壁は直線で、南西隅が直角に屈折することから平面形は方形を呈すると考えられる。主軸方位はN - 22° - Wを示し、検出面の標高は34.80mである。規模は東西4.98m、南北4.12m、深さ約0.30mを測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、周壁溝、支柱穴(7 - 竪穴7 P 1~4)を確認した。

埋土は黒褐中砂混じり細砂~シルトである。遺物は須恵器杯身(100・101)・壺(102)・甕(103)が出土した。

貼床は地山ブロックを10%含む黒褐極細砂混じりシルトであり、ほぼ平坦である。掘方までの深さは0.10mである。

周壁溝は幅0.15m、深さ0.06mを測る。埋土はにぶい黄褐シルトブロックを20%含む黒褐粘土混じり細砂~シルトである。

支柱穴は4基確認できた。P 1は円形を呈し、直径0.33m、深さ0.20mを測る。断面形状は底面に段を有するU字形である。埋土は4層に分層でき、黒褐極細砂の柱痕を確認した。P 2は円形を呈し、直径0.61×0.51m、深さ0.17mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は3層に分層でき、黒褐中砂混じり細砂~シルトの柱痕を確認した。P 3は円形を呈し、直径0.45m、深さ0.17mを測る。断面形状は浅いU字形である。埋土は4層に分層でき、黒褐中砂混じり細砂~シルトと黒褐細砂~シルトの柱痕を確認した。P 4は円形を呈し、直径0.44m、深さ0.15mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は2層に分層できる。

出土遺物の年代から、TK 10形式併行期と判断できる。

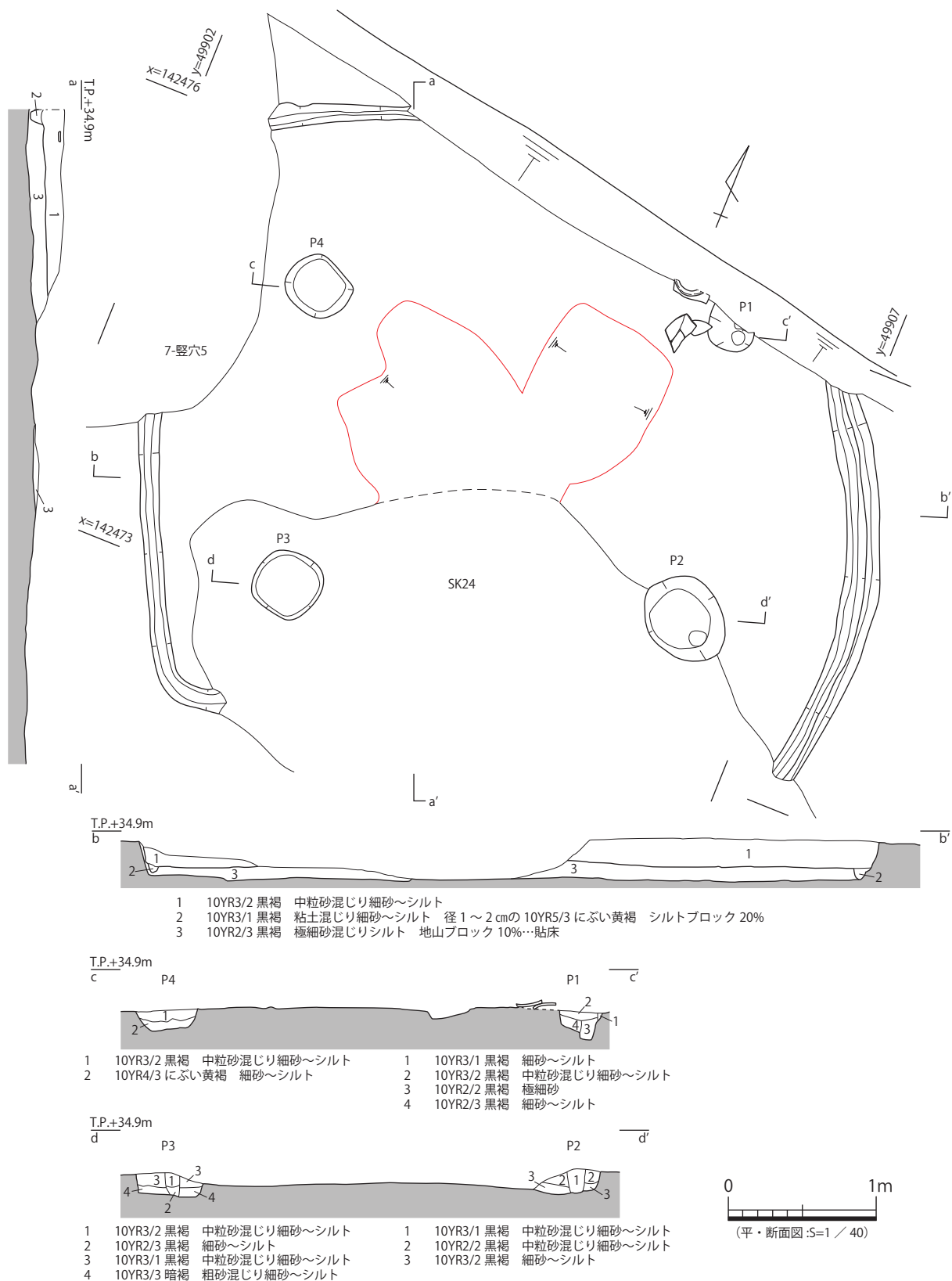


図 44 7-竖穴7 平・断面図

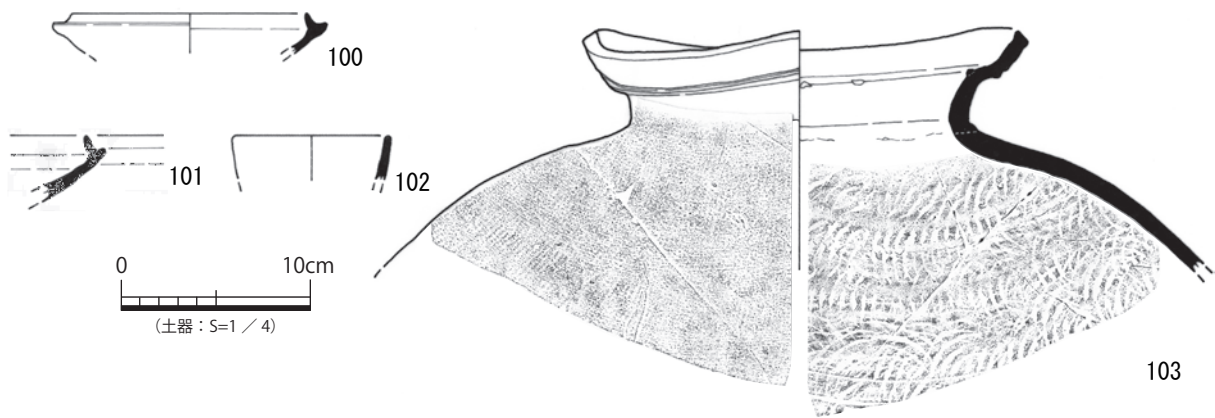


図 45 7- 竪穴 7 出土遺物実測図

7- 竪穴 10 (図 46・47)

調査区中央部で検出した大型竪穴建物であり、7- 竪穴 14 を切り、7- 竪穴 11 に切られる。平面形は方形である。主軸方位は $N-16^{\circ}-W$ を示し、検出面の標高は 34.90m 前後である。規模は北壁約 10.00 m、南壁約 8.90 m、東壁約 8.20 m、西壁約 7.80 m を測り、深さは 0.31 m である。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、周壁溝、支柱穴（7- 竪穴 10 P 1～8・10～12）を確認した。

埋土は黒褐中砂混じり細砂～シルトである。遺物は須恵器杯身（104・105）・甕（106）、土師器杯（107）・甕（108）、スクレイパー（109）が出土した。

貼床は黒褐細砂～シルトであり、底面に凹凸がある。掘方までの深さは 0.14 m である。

カマドは 7- 竪穴 11 により削平される。

周壁溝は幅 0.25～0.12 m、深さ 0.05 m を測る。埋土は黒褐細砂～シルト、暗褐中砂混じり細砂～シルト、地山ブロックを 5% 含む暗褐シルト質細砂である。北東隅と北西隅を除き全周する。

支柱穴は 11 基確認できた。P 1 は円形を呈し、直径 0.63×0.53 m、深さ 0.16m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は 2 層に分層できる。P 2 は円形を呈し、直径 0.58 m、深さ 0.15m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は 2 層に分層できる。P 3 は方形を呈し、一辺 0.62×0.48 m、深さ 0.25m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は 3 層に分層できる。P 4 は不整円形を呈し、直径 0.56×0.48 m、深さ 0.32m を測る。断面形状は U 字形である。埋土は 3 層に分層できる。P 5 は円形を呈し、直径 0.69×0.61 m、深さ 0.10m を測る。

断面形状は逆台形である。埋土は 2 層に分層できる。P 6 は円形を呈し、直径 0.57 m、深さ 0.25m を測る。断面形状は U 字形である。埋土は 3 層に分層できる。P 7 は隅丸方形を呈し、直径 0.51 m、深さ 0.26m を測る。断面形状は U 字形である。埋土は 3 層に分層できる。P 8 は不整円形を呈し、直径 0.52×0.42 m、深さ 0.17m を測る。断面形状は不整な U 字形である。埋土は 3 層に分層できる。P 10 は円形を呈し、直径 0.56 m、深さ 0.12m を測る。断面形状は不整な U 字形である。埋土は 2 層に分層できる。P 11 は円形を呈し、直径 0.58 m、深さ 0.20m を測る。断面形状は不整な U 字形である。埋土は 3 層に分層できる。P 12 は円形を呈し、直径 0.44 m、深さ 0.38 m を測る。断面形状は不整な U 字形である。P 1～8・10・11 は地山ブロックを 30% 含む暗褐シルト混じり細砂の柱痕を確認した。

出土遺物の年代から、TK 43 形式併行期と判断できる。

7- 竪穴 11 (図 48・49)

調査区中央部で検出した竪穴建物であり、7- 竪穴 10 を切る。平面形は方形である。主軸方位は $N-16^{\circ}-W$ を示し、検出面の標高は 34.90m である。規模は東西約 5.46 m、南北約 4.97 m、深さ約 0.38 m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴（7- 竪穴 11 P 1～4）を確認した。

埋土は灰黄褐シルトブロックを 3% 含む黒褐細砂～シルト、にぶい黄褐細砂～シルトである。遺物は

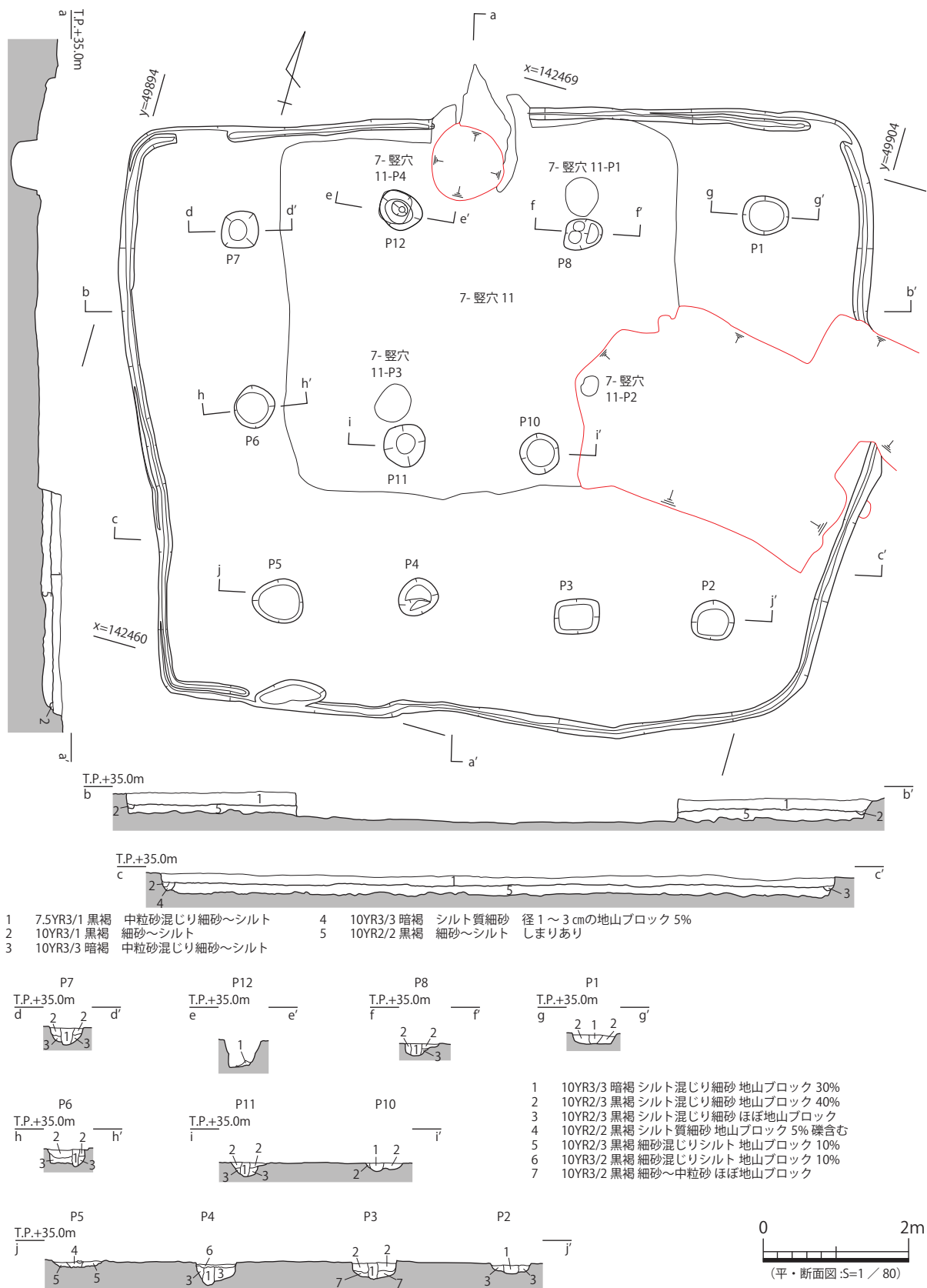


図 46 7- 竪穴 10 平・断面図

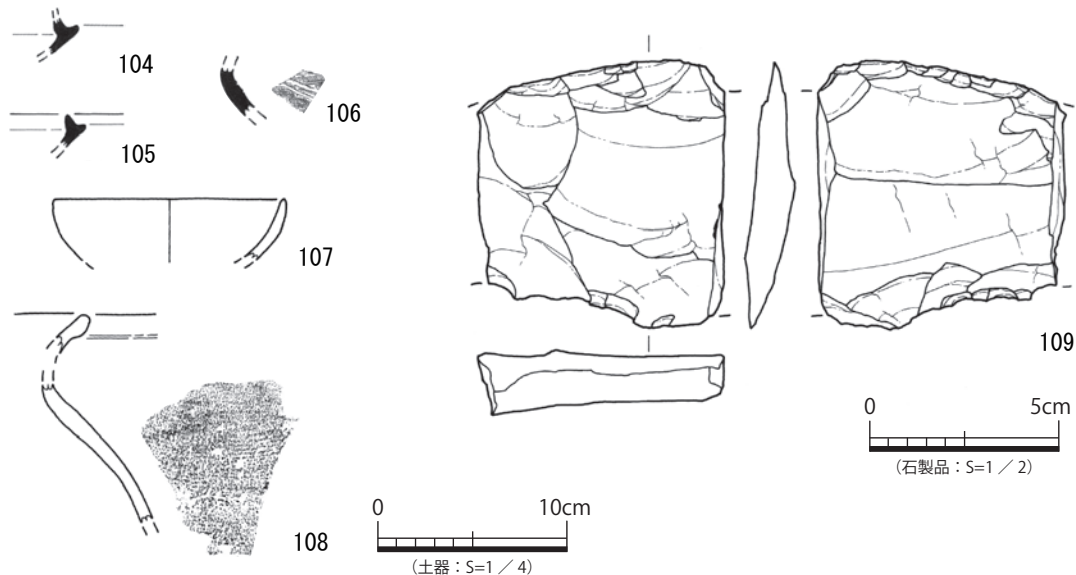


図 47 7- 竪穴 10 出土遺物実測図

須恵器杯蓋 (110)・杯身 (111・112)・甕 (113・114)・土師器甕 (115)・鍋 (116) が出土した。

貼床は灰黄褐シルトブロック 5 % 含む黒褐中砂混じり細砂～シルト、地山ブロックを 15 % 含む黒褐細砂混じりシルトである。掘方までの深さは 0.14 m である。

カマドは北壁中央に作り付けられるが、前面に攪乱を受ける。カマドの構築材は焼土を含む灰黄褐と黒褐シルト～細砂である。両袖の内面と煙道、カマドの底面が非常に焼けていることから、長期間使用されていたと考えられる。

周壁溝は幅 0.18 ～ 0.08 m、深さ 0.04 m を測る。埋土は黒褐細砂～シルトである。カマド部分を除き全周する。

支柱穴は 4 基確認できた。P 1 は円形を呈し、直径 0.54 m、深さ 0.40 m を測る。断面形状は U 字形である。埋土は 3 層に分層でき、黒褐細砂～シルトの柱痕を確認した。P 2 は円形を呈し、直径 0.29 m、深さ 0.28 m を測る。断面形状は U 字形、埋土は 2 層に分層でき、灰黄褐シルトブロックを 5 % 含む黒褐中砂混じり細砂～シルト柱痕を確認した。P 3 は不整形円形を呈し、直径 0.54 × 0.44 m、深さ 0.49 m を測る。断面形状は段を有する不整な U 字形である。埋土は 4 層に分層でき、黒褐細砂～シルトの柱痕を確認した。P 4 は隅丸方形を呈し、一辺 0.45 m、深さ 0.44 m を測る。断面形状は U 字形である。埋土は 5 層に分層でき、灰黄褐シルトブロックを 30 % 含む黒褐中砂混じり細砂～シルト

の柱痕を確認した。

出土遺物の年代から、T K 43 ～ T K 209 形式併行期と判断できる。

8- 竪穴 12 (図 50・51)

調査区中央部南端で検出した大型竪穴建物であり、南側は調査区外に広がり、東側は攪乱を受ける。平面形は方形である。主軸方位は N - 7° - E を示し、検出面の標高は 34.90 m である。検出した規模は東西約 7.32 m、南北約 3.00 m、深さ約 0.21 m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴 (8 - 竪穴 12 P 2・3、8 - 竪穴 P 1・8 - SP58)、ピット (8 - SP57) を確認した。

埋土は暗褐細砂混じりシルト、黒褐シルト質細砂である。遺物は須恵器杯蓋 (117) が出土した。

貼床は地山ブロックを 30 % 含む黒褐細砂で、平坦である。掘方までの深さは 0.08 m である。

カマドは北壁中央に作り付けられる。カマドの構築材は地山ブロックを 30 % 含む灰黄褐細砂混じりシルトである。内部から須恵器杯蓋 (118) が出土した。

周壁溝は幅 0.18 ～ 0.10 m、深さ 0.06 m を測る。埋土は地山ブロックを 10 % 含む暗褐シルト混じり細砂である。検出できた範囲ではカマド部分と北壁沿いの一部が途切れる。

支柱穴は 2 基確認できた。P 2 は円形を呈し、直

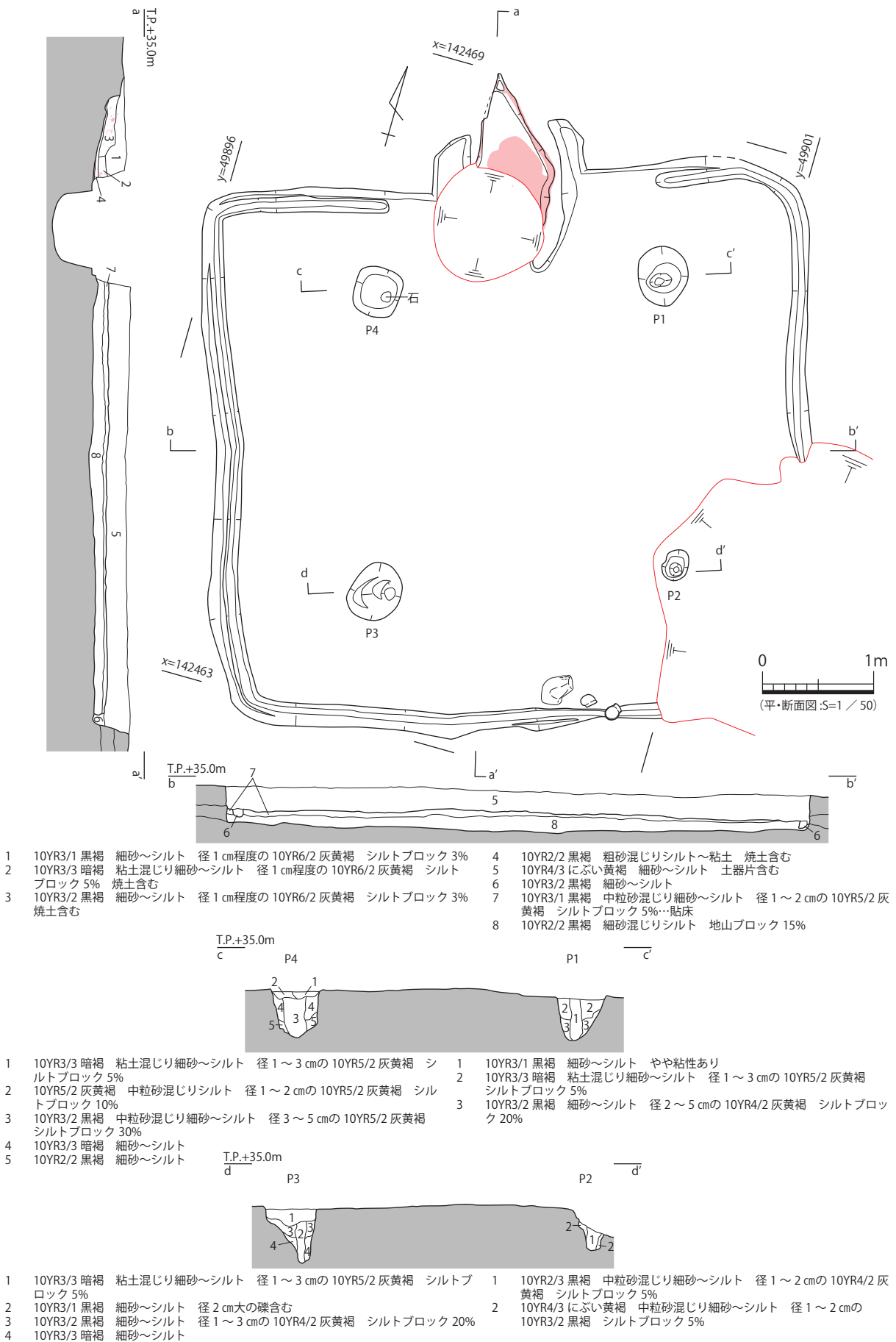


図 48 7- 竪穴 11 平・断面図

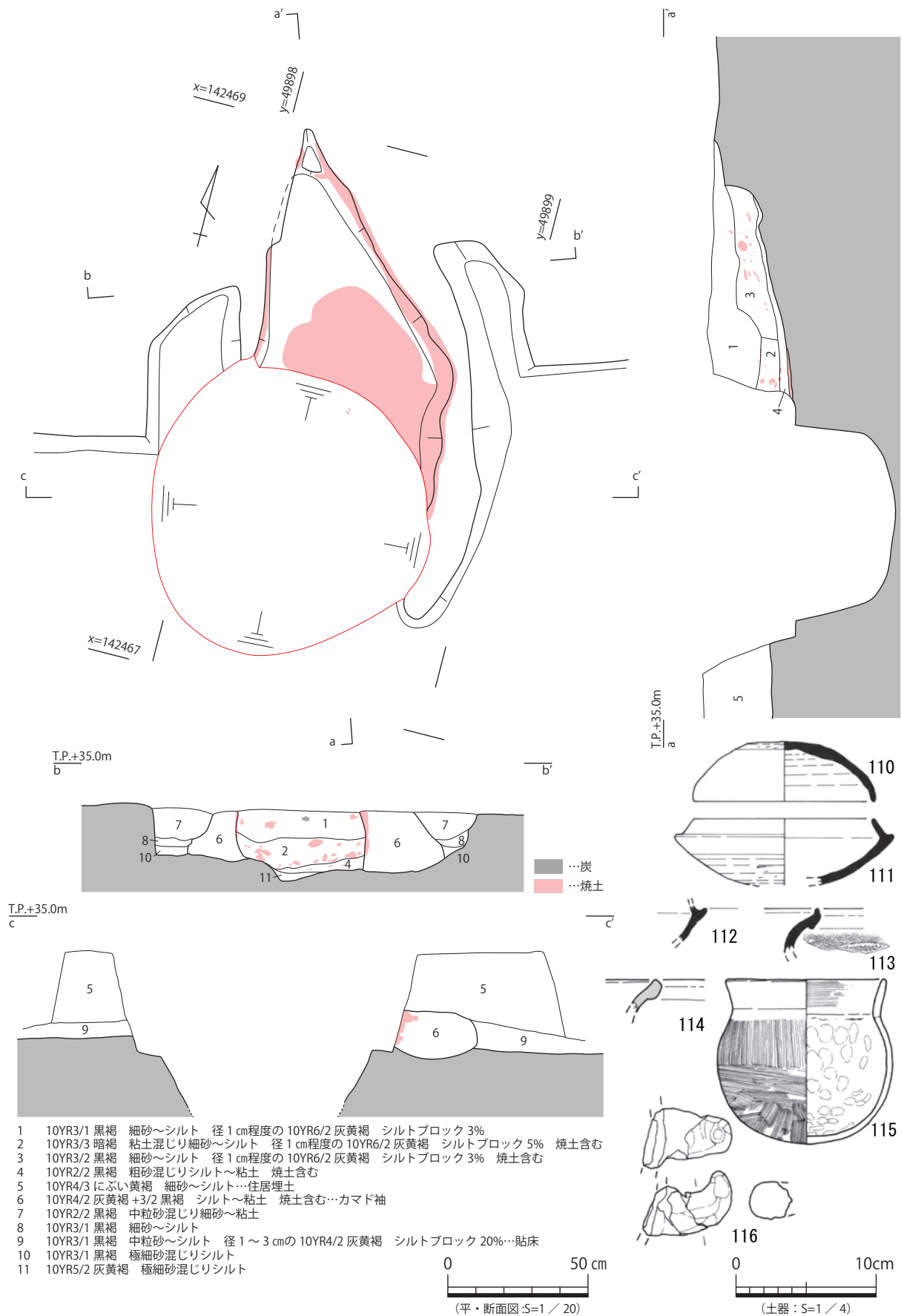


図 49 7- 竖穴 11 カマド 平・断面図、出土遺物実測図

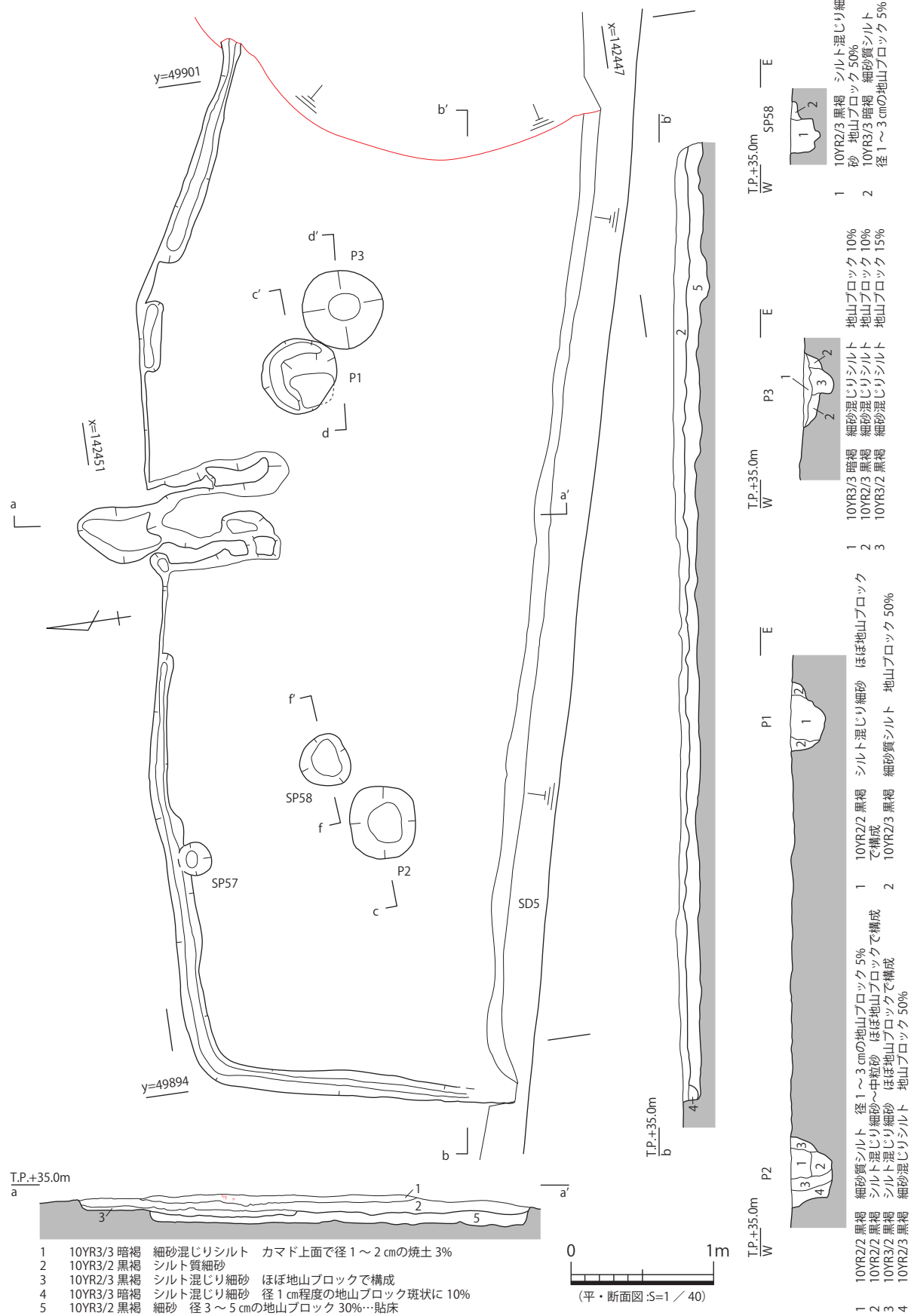


図 50 8- 竪穴 12 平・断面図

径 0.51 m、深さ 0.29m を測る。断面形状は U 字形である。埋土は 4 層に分層でき、地山ブロックを 5 % 含む黒褐細砂質シルトと地山ブロックを多量に含む黒褐シルト混じり細砂～中砂の柱痕を確認した。P 3 は円形を呈し、直径 0.56 m、深さ 0.21m を測る。断面形状は段を有する U 字形である。埋土は 3 層に分層でき、地山ブロックを 15 % 含む黒褐細砂混じりシルトの柱痕を確認した。

P 1 は円形を呈し、直径 0.54 m、深さ 0.25m を

測る。断面形状は段を有する U 字形である。埋土は 4 層に分層でき、地山ブロックを多量に含む黒褐シルト混じり細砂の柱痕を確認した。SP58 は不整円形を呈し、直径 0.36 m、深さ 0.21m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は 2 層に分層できる。P 1・58 は支柱穴の内側に位置し、規模が小さいことから建て替えに伴う旧支柱穴と考えられる。

出土遺物の年代から、T K 43～T K 209 形式併行期と判断できる。

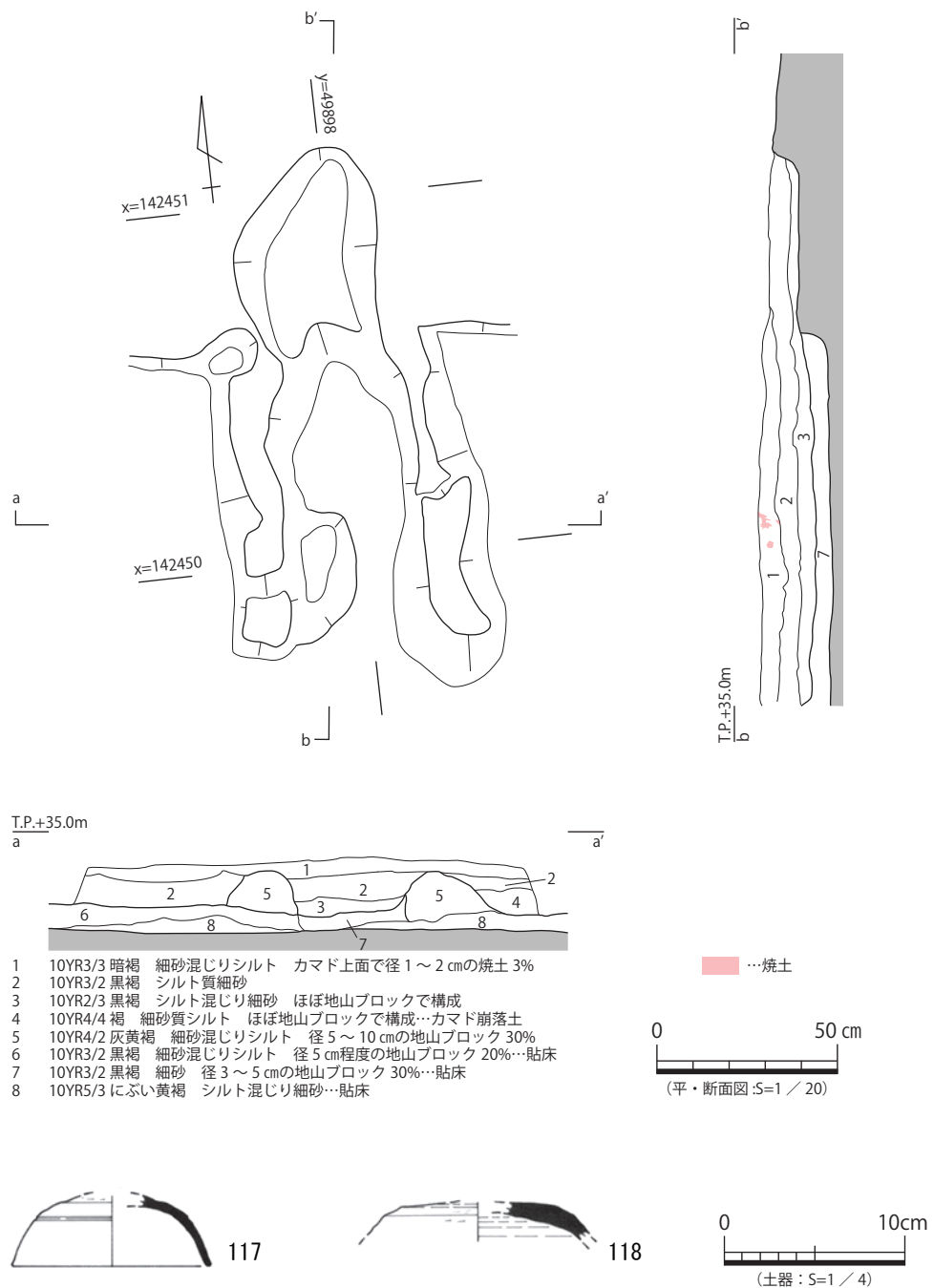


図 51 8- 竪穴 12 カマド 平・断面図、出土遺物実測図

7・8-竪穴14 (図52・53)

調査区中央部南端で検出した大型竪穴建物であり、7-竪穴10、8-竪穴12、7・8・9-SD21に切られる。平面形は方形である。主軸方位はN-9°-Eを示し、検出面の標高は34.90m前後である。検出した規模は北壁約10.70m、南壁約12.40m、東壁約10.40m以上、西壁約10.75m、深さ0.30mである。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴(8-竪穴14 P1~9)を確認した。

埋土は2層に分層でき、上層から地山ブロックを5%含むにぶい黄褐細砂混じりシルト、地山ブロックを3%含む暗褐シルト質細砂である。遺物は須恵器杯蓋(119)・杯身(120)・高杯(121)・甕(122・123)、土師器甕(124・125)、石製品(126)、鉄製品(127)が出土した。

貼床は地山ブロックを30%含む暗褐シルト混じり細砂~中砂であり、床面は平坦である。掘方までの深さは0.10mである。

カマドは北壁中央に作り付けられる。内部の埋土は4層に分層でき、焼土と炭化物を含まない。

周壁溝は幅0.30~0.20m、深さ0.06mを測る。埋土は地山ブロックを5%含む暗褐細砂混じりシルトである。南西隅付近が途切れる。

支柱穴は9基確認できた。P1は楕円形を呈し、直径0.79×0.64m、深さ0.24mを測る。断面形状はU字形である。埋土は4層に分層できる。P2は円形を呈し、直径0.58m、深さ0.24mを測る。断面形状はU字形である。埋土は4層に分層でき、柱痕を確認した。P3は楕円形を呈し、直径0.51×0.39m、深さ0.21mを測る。断面形状はU字形である。埋土は3層に分層でき、柱痕を確認した。P4は不整円形を呈し、直径0.75×0.63m、深さ0.24mを測る。断面形状はU字形である。埋土は3層に分層できる。P5は円形を呈し、直径0.72m、深さ0.30mを測る。断面形状はU字形である。埋土は4層に分層でき、柱痕を確認した。P6は円形を呈し、直径0.86×0.74m、深さ0.14mを測る。断面形状は段を有するU字形である。埋土は4層に分層でき、柱痕を確認した。P7は円形を呈し、直径0.82×0.73m、深さ0.22mを測る。断面形状はU字形である。埋土は4層に分層でき、柱痕

を確認した。P8は円形を呈し、直径0.64m、深さ0.20mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は3層に分層でき、柱痕を確認した。P9は楕円形を呈し、直径0.74×0.56m、深さ0.20mを測る。断面形状はU字形である。埋土は3層に分層でき、柱痕を確認した。

出土遺物の年代から、TK43形式併行期と判断できる。

9-竪穴1 (図54)

調査区西部中央で検出した竪穴建物であり、7・9-竪穴3、9-掘立1に切られる。西壁が僅かに曲がるが、北西隅と南西隅がほぼ直角に屈曲することから、平面形は方形を呈すると推測される。東側は現有水路のために調査ができなかった。主軸方位はN-11°-Wを示し、検出面の標高は34.90mである。規模は東西7.19m以上、南北7.77m、深さ約0.14mを測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、周壁溝、支柱穴(9-竪穴1 P1~4)を確認した。

埋土は地山ブロックを10%含む黒褐細砂混じりシルトの単一層である。

貼床は地山ブロックを15%と炭化物を含む黒褐シルト質細砂であり、床面はほぼ平坦である。掘方までの深さは0.06mであり、掘方は多少の凹凸がある。

周壁溝は幅0.20~0.14m、深さ0.07mを測る。埋土は地山ブロックを5~10%含むにぶい黄褐シルト混じり細砂である。

支柱穴は4基確認できた。P1は円形を呈し、直径0.71m、深さ0.19mを測る。断面形状はU字形である。埋土は3層に分層でき、柱痕を確認した。P2は円形を呈し、直径0.72×0.64m、深さ0.13mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は4層に分層でき、柱痕を確認した。P3は不整円形を呈し、直径0.63m、深さ0.31mを測る。断面形状は段を有するU字形である。埋土は3層に分層できる。P4は不整円形を呈し、直径0.40m、深さ0.14mを測る。断面形状はU字形である。埋土は3層に分層できる。

遺物は出土しないため、詳細な時期は不明であるが、切り合い関係や主軸方位から古墳時代後期以前と想定できる。

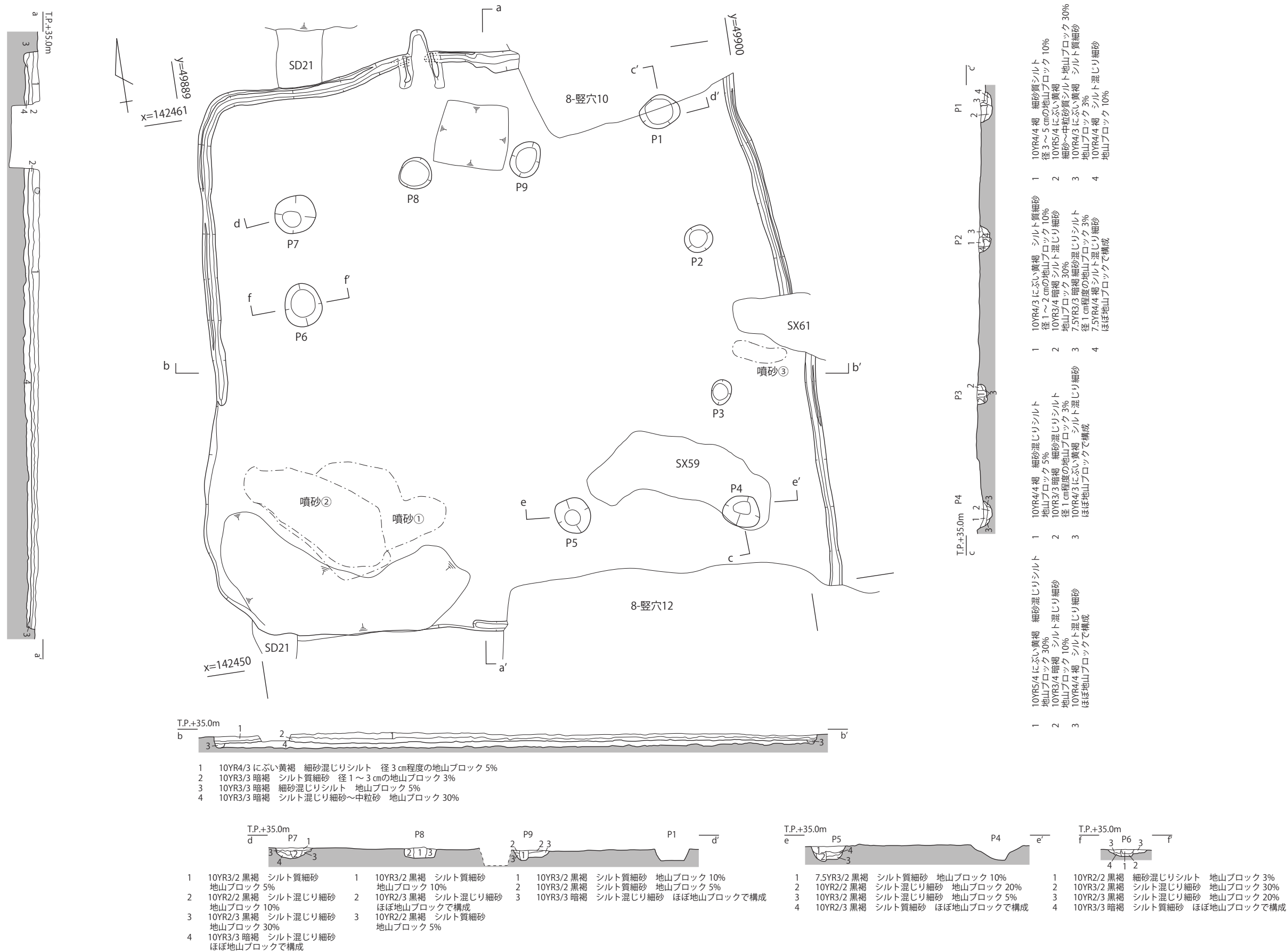


図 52 7・8- 竪穴 14 平・断面図

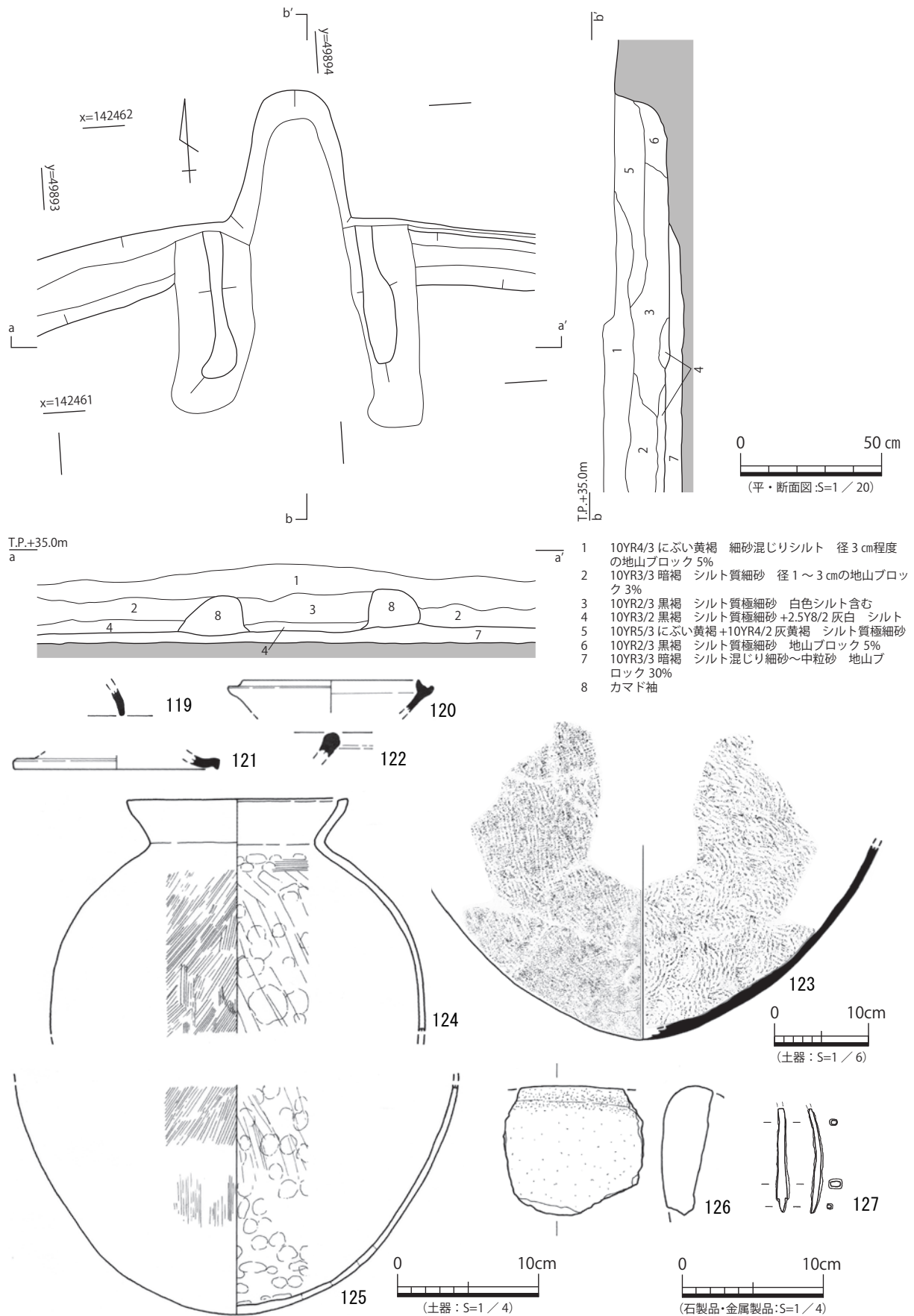


図 53 7・8- 竪穴 14 カマド 平・断面図、出土遺物実測図

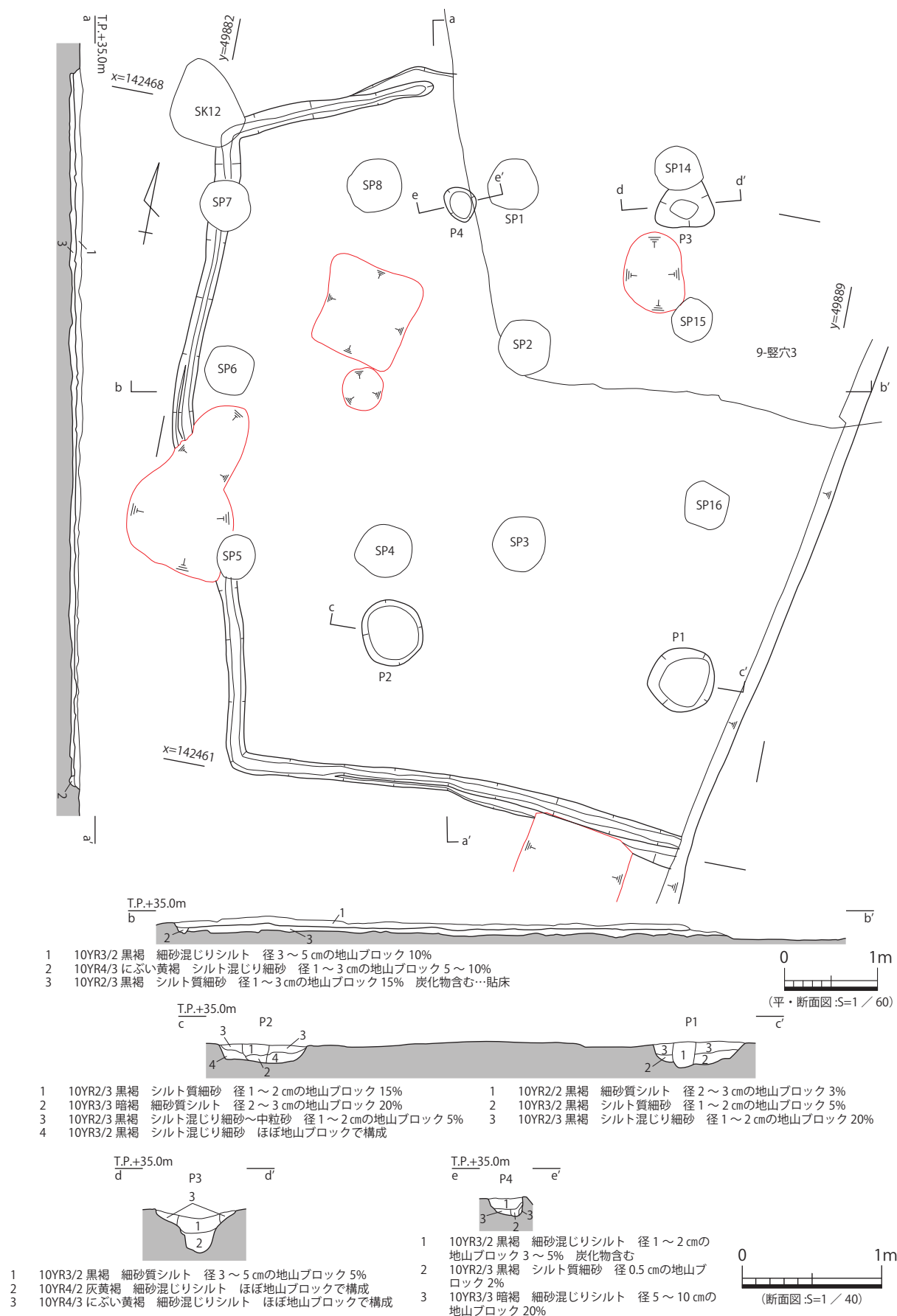


図 54 9- 竪穴 1 平・断面図

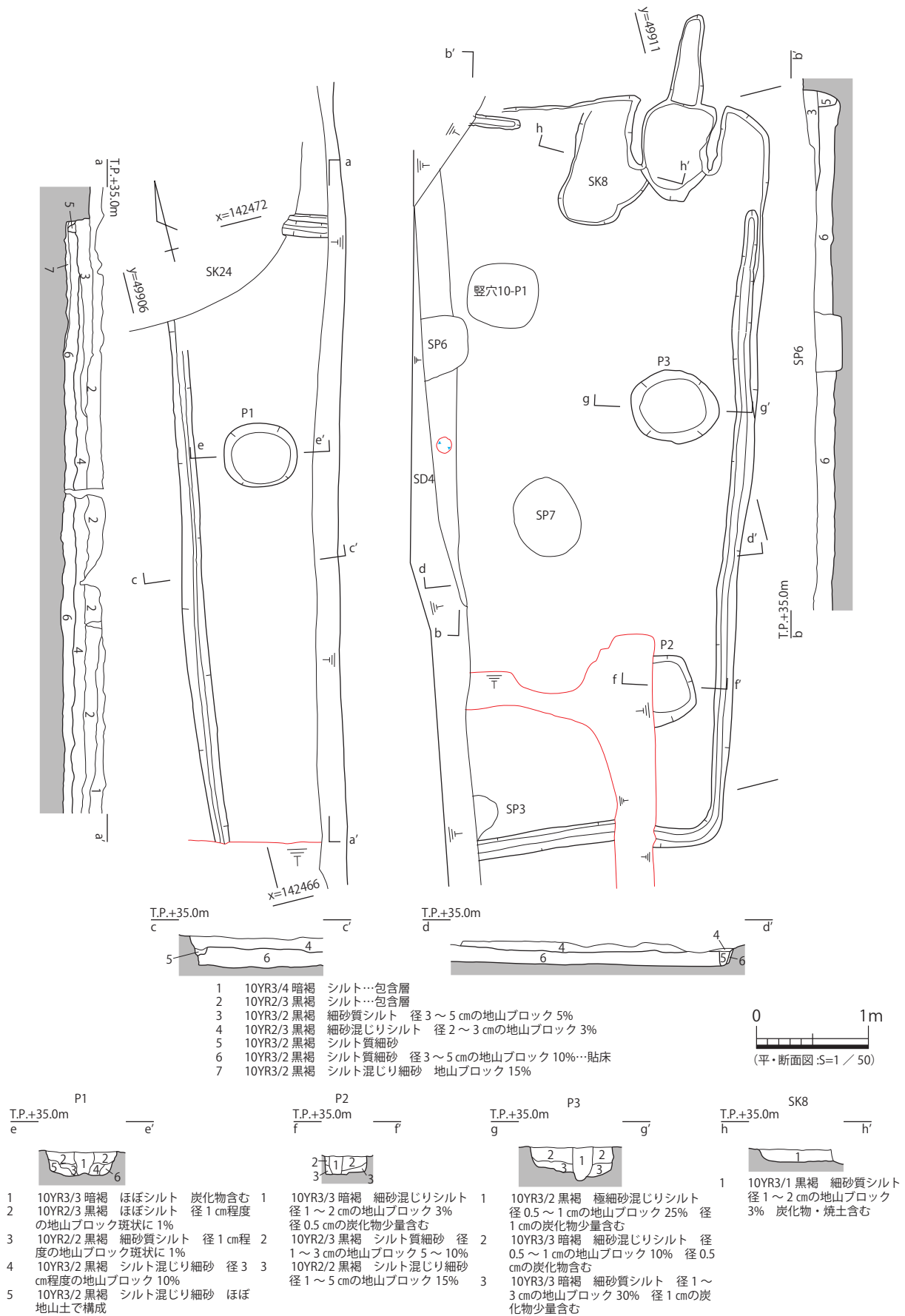


図 55 7・14- 竪穴 8 平・断面図

7・14－竪穴8（図55・56）

調査区中央部北寄りで検出した竪穴建物であり、14－竪穴10、7－SD21を切り、14－SD4・5に切られる。平面形は南北に長軸を有する長方形を呈する。主軸方位はN－14°－Eを示し、検出面の標高は34.90mである。規模は南北の長軸約6.71m、東西の短軸約5.28m、深さ約0.10mを測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴（7・14－竪穴8 P1～3）を確認した。

埋土は地山ブロックを5%含む黒褐細砂質シルト、地山ブロックを3%含む黒褐細砂混じりシルトである。遺物は須恵器と土師器小片が出土した。

貼床は地山ブロックを10%含む黒褐シルト質細砂であり、床面はほぼ平坦である。掘方までの深さは0.15mである。

カマドは竪穴建物北東隅に作り付けられ、煙道部は建物外に長く延びる。カマドの構築材は地山ブロックを40～50%含む灰黄褐細砂混じりシルトである。カマド内面の埋土は焼土、灰、炭化物を含む。遺物は須恵器と土師器小片が出土した。

周壁溝は幅0.20～0.12m、深さ0.12mを測る。埋土は黒褐シルト質細砂である。カマド付近を除き全周する。

支柱穴は3基確認できた。P1は円形を呈し、直径0.66×0.57m、深さ0.23mを測る。断面形状はU字形である。埋土は6層に分層でき、柱痕を確認した。P2は方形を呈し、一辺0.61m、深さ0.16mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は3層に分層でき、柱痕を確認した。P3は楕円形を呈し、直径0.79×0.65m、深さ0.30mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は3層に分層でき、柱痕を確認した。P1・2では土師器小片が出土し

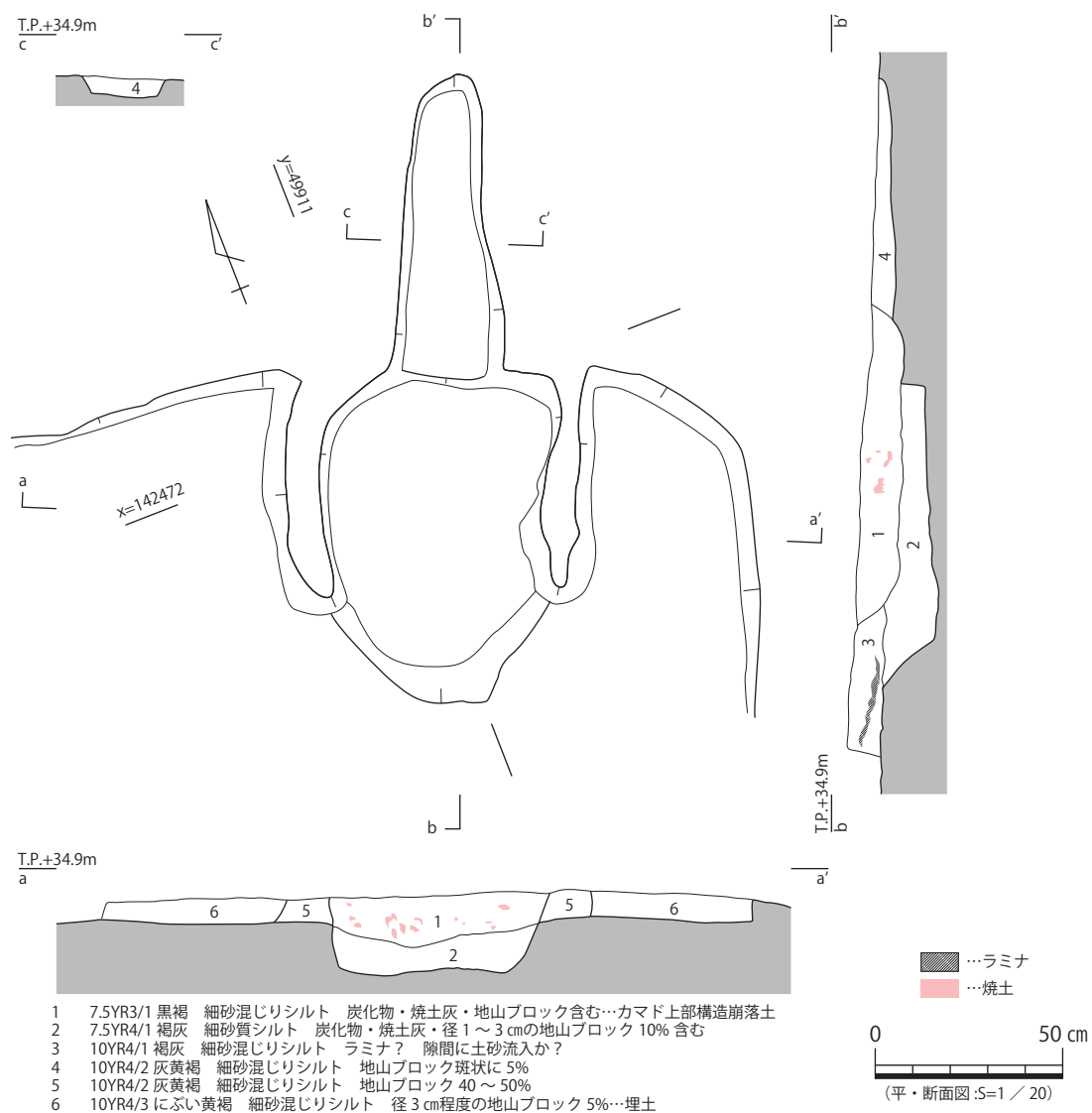


図56 7・14－竪穴8カマド 平・断面図

た。

出土遺物は土器小片であり、詳細な時期は不明であるが、切り合い関係から7世紀初頭以前と想定できる。

14- 竪穴 10 (図 57)

調査区中央部北端で検出した竪穴建物であり、7・14- 竪穴 8 に切れ、北側は調査区外に広がる。第7調査区では確認できなかった。検出できたのは南東隅付近であるが、平面形は方形を呈すると推定できる。主軸方位はN-46°-Wを示し、検出面の標高は34.80mである。規模は東西約4.40m以上、南北約4.04m以上、深さ約0.23mを測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、周壁溝、支柱穴(14- 竪穴 10 P1・2)を確認した。

埋土は地山ブロックを10%含む暗褐細砂混じり

シルトである。遺物は須恵器杯蓋(128)・杯身(129・130)、鉄製品(132)が出土した。

貼床は地山ブロックを30%含む黒褐細砂質シルトであり、床面はほぼ平坦である。掘方までの深さは0.08mであり、掘方は平坦である。床面直上から土師器甕(131)が出土した。

周壁溝は幅0.17m、深さ0.04mを測る。埋土は暗褐微細砂混じりシルトである。

支柱穴は2基確認できた。P1は隅丸方形を呈し、一辺0.63×0.58m、深さ0.18mを測る。断面形状は底面に段を有するU字形である。埋土は2層に分層でき、地山ブロックを5%含む黒褐細砂質シルトの柱痕を確認した。P2は不整円形を呈し、直径0.72m、深さ0.16mを測る。断面形状はU字形である。埋土は2層に分層できる。

出土遺物の年代から、TK209形式併行期と断できる。

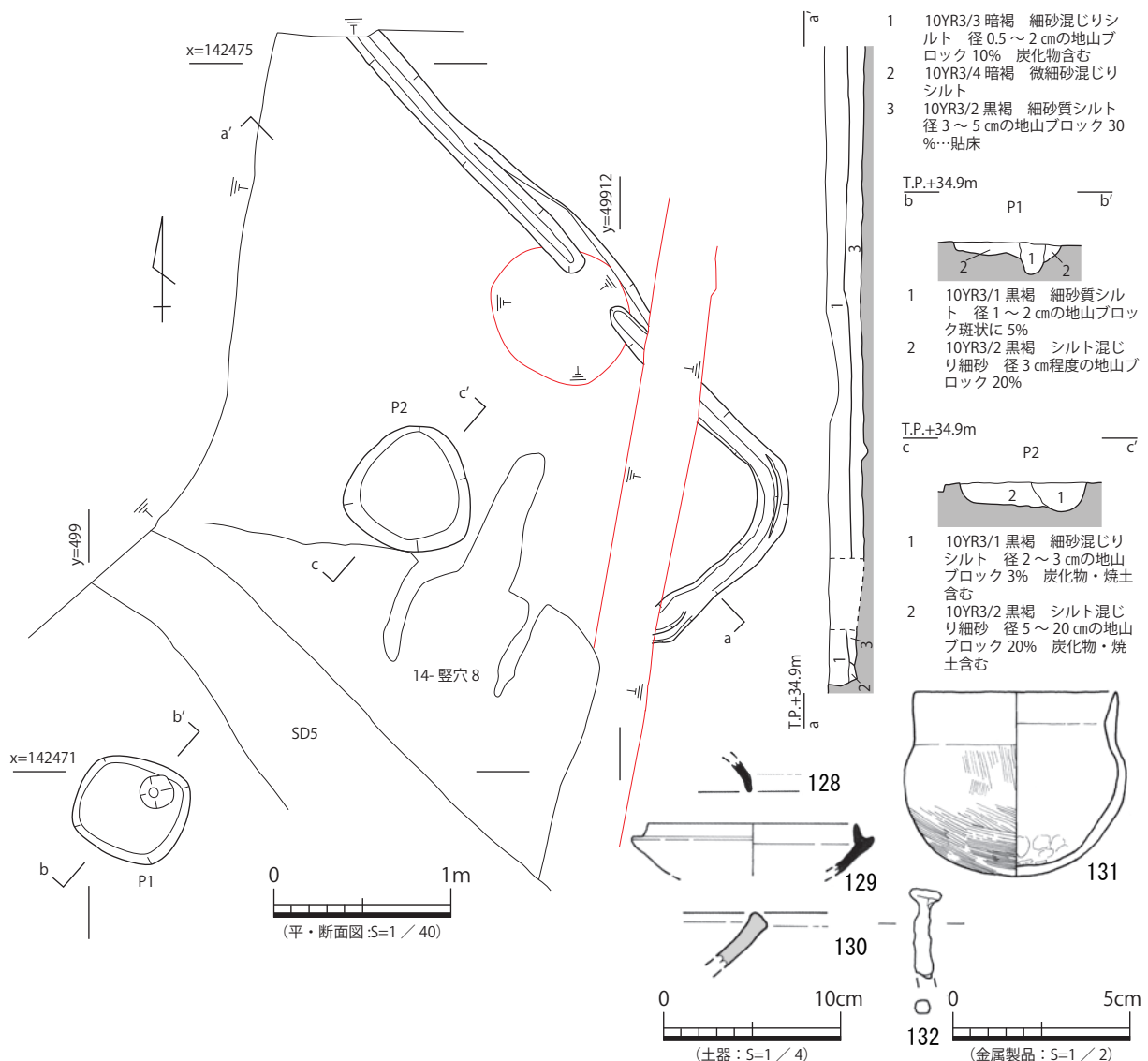


図 57 14- 竪穴 10 平・断面図、出土遺物実測図

15- 竪穴 12 (図 58)

調査区南西隅で検出した竪穴建物であり、北側・南側・東側は調査区外に広がる。検出できた西壁が直線的に延びることから、平面形は方形を呈すると推定できる。方位はNを示し、検出面の標高は35.10mである。規模は東西約2.64 m以上、南北約3.41 m以上、深さ0.36 mを測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、周壁溝、支柱穴(15- 竪穴 12 P1)を確認した。

埋土は4層に分層でき、上層から炭化物を若干含む褐灰とにぶい黄褐シルト質極細砂、褐灰シルト質極細砂、褐灰と黒褐シルト質極細砂、褐灰シルト質極細砂とにぶい黄橙細砂である。遺物は須恵器・土

師器の小片が出土した。

貼床は灰黄褐シルト質極細砂であり、床面はほぼ平坦である。掘方までの深さは0.10 mであり、掘方は僅かに凹凸がある。

周壁溝は幅0.25 m、深さ0.04 mを測る。埋土は灰黄褐シルト質極細砂である。途切れる部分がある。

支柱穴は1基確認できた。P1は円形を呈し、直径0.48×0.38 m、深さ0.36mを測る。断面形状はU字形である。埋土は4層に分層でき、灰黄褐と褐灰シルト質極細砂の柱痕を確認した。

出土遺物は土器細片であり、詳細な時期は不明であるが、検出面から7世紀初頭以前と考えられる。

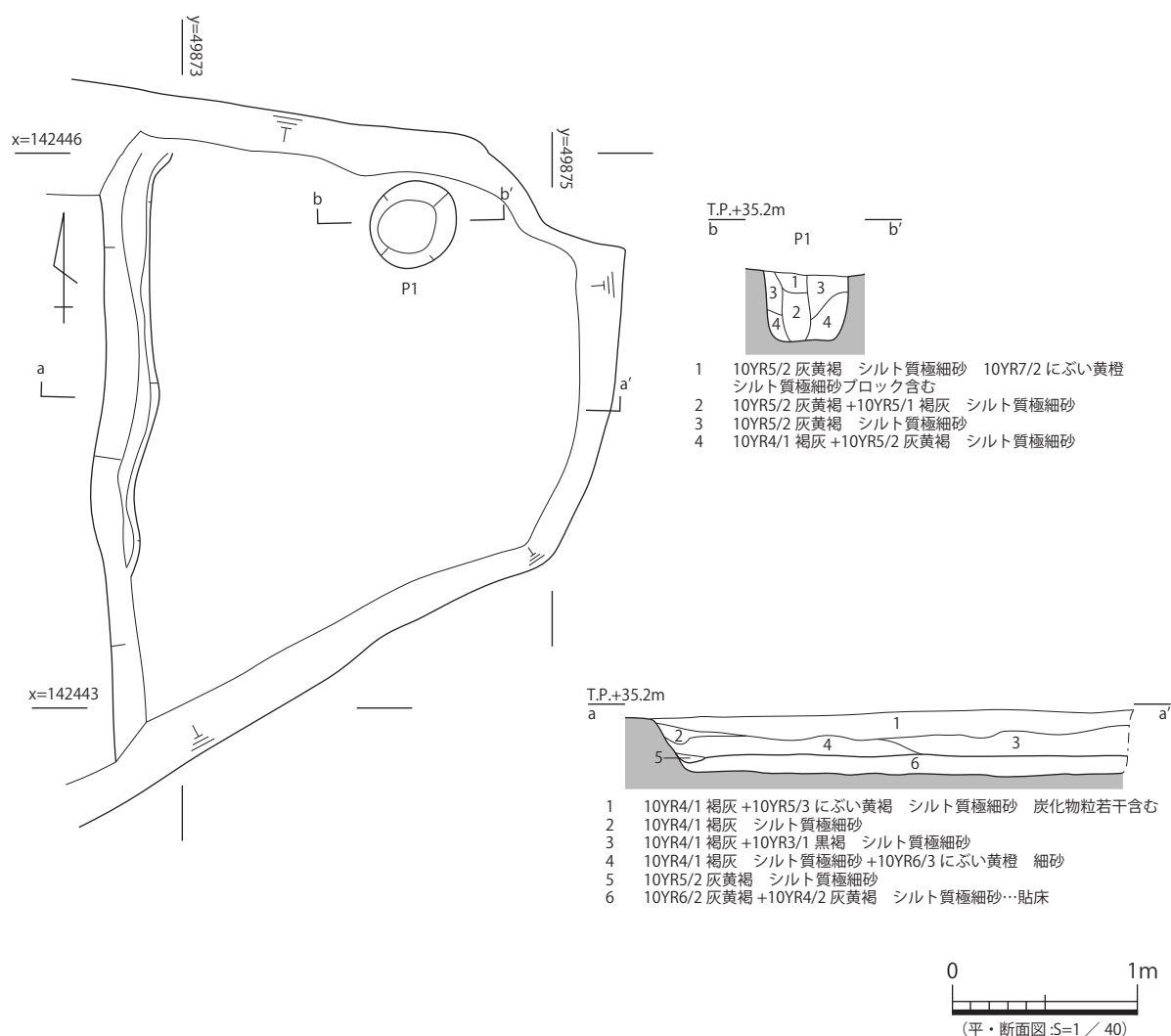


図 58 15- 竪穴 12 平・断面図

(2) 掘立柱建物

1－掘立1 (図 59)

調査区西部南側で検出した掘立柱建物である。1 - SP 2～5 の 4 基で構成し、建物の全様は不明である。検出できた規模は 2×1 間であり、その方位は $N - 51^{\circ} - E$ を示す。検出面の標高は 34.80 m である。検出した南北方向の全長は約 1.91 m、東西は約 2.90 m を測る。柱間寸法は、南北方向が約 1.90 m、東西方向が約 1.50 m である。

SP 2 は円形を呈し、直径 0.55 m、深さ 0.19 m を測る。断面形状は U 字形である。埋土は 2 層に分層できる。SP 3 は不整な楕円形を呈し、直径 0.42×0.30 m、深さ 0.20 m を測る。断面形状は底面に段を有する逆台形である。埋土は 2 層に分層できる。SP 4 は円形を呈し、直径 0.40 m、深さ 0.24 m を測る。断面形状は底面に段を有する逆台形である。埋土は 2 層に分層できる。SP 5 は円形を呈し、直径 0.30 m、深さ 0.22 m を測る。断面形状は U 字形である。埋土は 1 層である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

2・3－掘立1 (図 60)

調査区の東端中央で検出した掘立柱建物であり、2・3 - 竪穴 30、3 - 竪穴 90 を切り、2・3 - 掘立 7 と重複する。2 - SP31～38、3 - SP29・39 の 10 基で構成する。2×4 間以上の側柱建物で、東側の調査区外に広がるため全体の形状は不明である。主軸方位は $N - 80^{\circ} - E$ を示し、検出面の標高は 34.80 m 前後である。検出できた桁行長は 8.11 m、梁行総長は 3.53 m を測る。柱間寸法は、平側が約 2.00 m、妻側が約 1.80 m である。

SP29 は楕円形を呈し、直径 1.25×0.62 m、深さ 0.38 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は 7 層に分層でき、柱痕を確認した。遺物は須恵器壺 (136) が出土した。SP31 は隅丸方形を呈し、一辺 1.04×0.80 m、深さ 0.42 m を測る。断面形状は不整な U 字形である。埋土は 2 層に分層でき

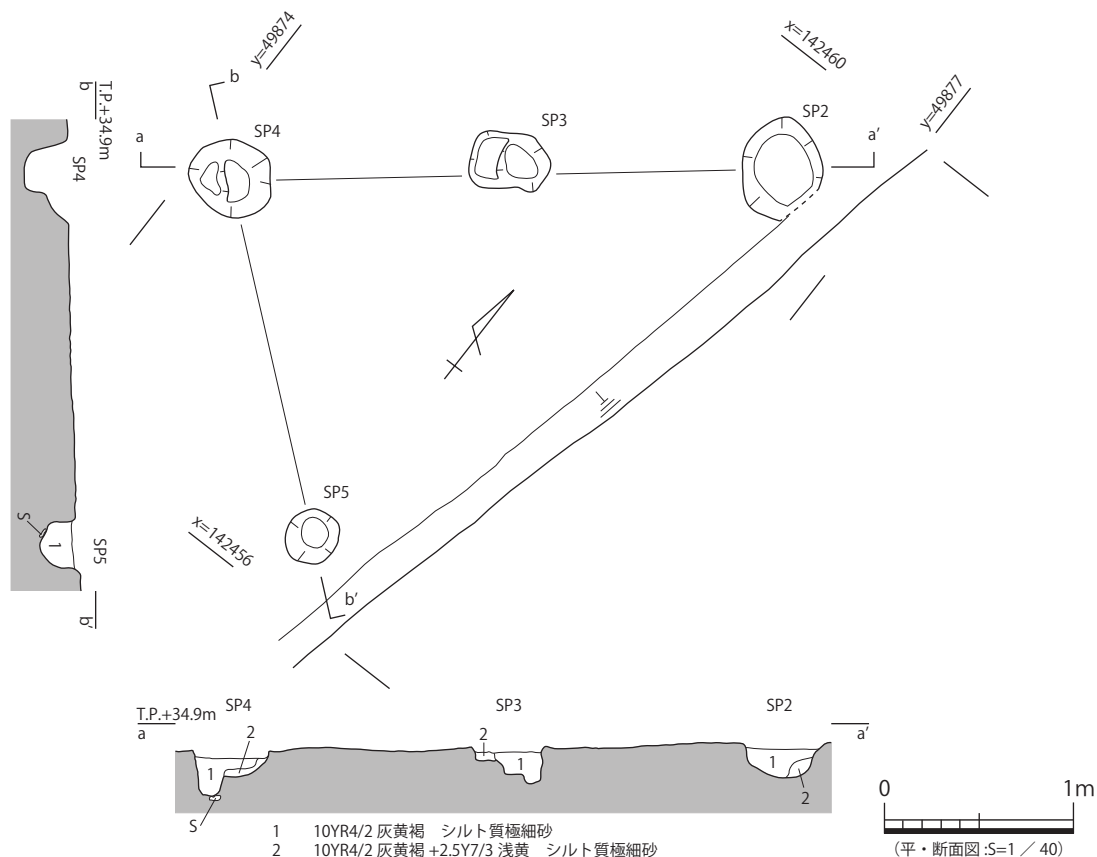


図 59 1－掘立1 平・断面図

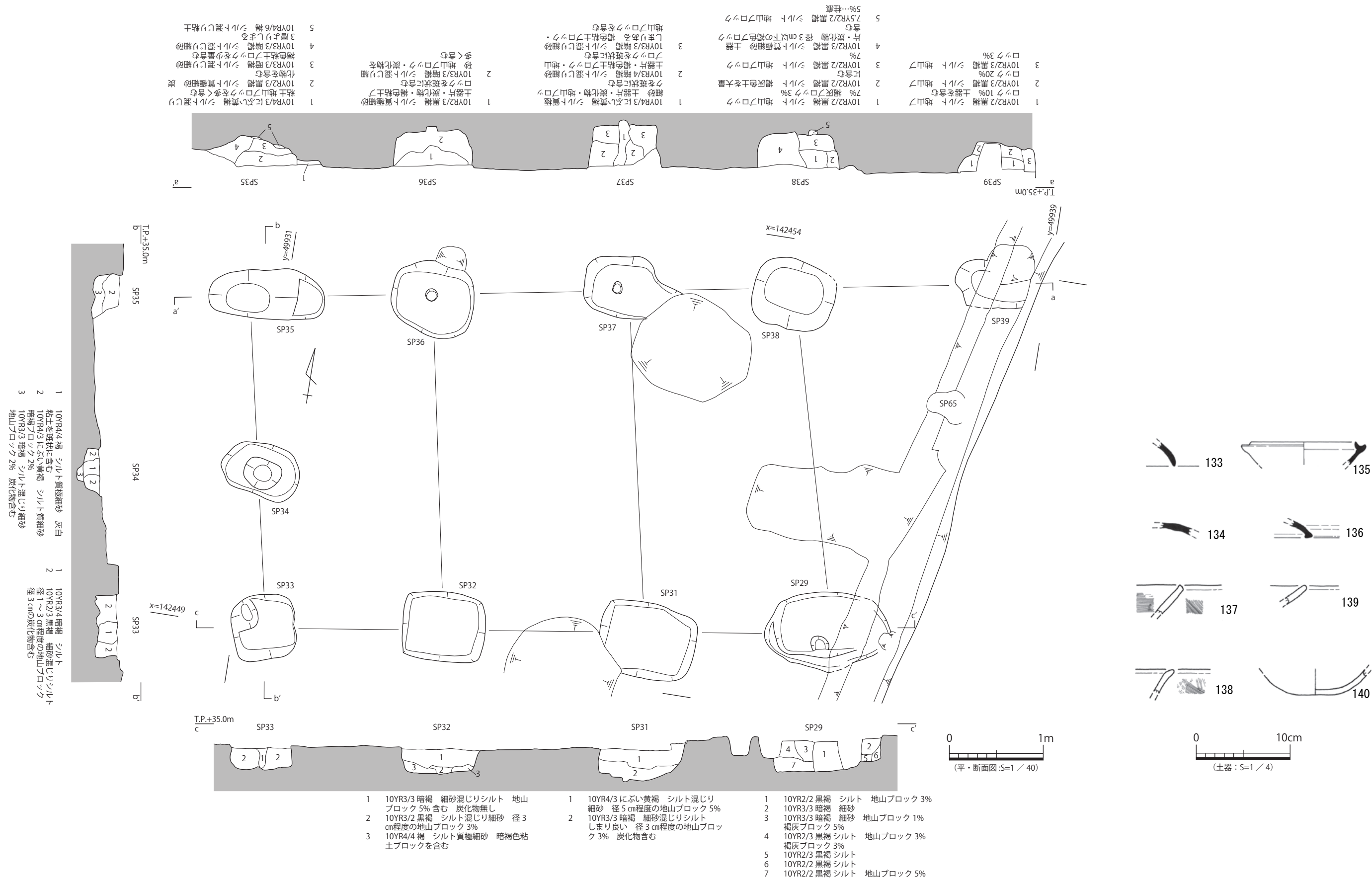


図 60 2・3-掘立1 平・断面図、出土遺物実測図

る。遺物は土師器甕（140）が出土した。SP32は隅丸方形を呈し、一辺 0.88×0.75 m、深さ 0.28 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は3層に分層できる。遺物は土師器甕（139）が出土した。SP33は隅丸方形を呈し、一辺 0.69 m、深さ 0.27 mを測る。断面形状は逆台形であり、底面の西側がやや凹む。埋土は2層に分層でき、柱痕を確認した。遺物は須恵器杯蓋（134）、土師器甕（138）が出土した。SP34は不整な隅丸方形を呈し、一辺 0.84×0.56 m、深さ 0.27 mを測る。断面形状は底面に段を有する逆台形である。埋土は3層に分層でき、柱痕を確認した。SP35は不整な楕円形を呈し、直径 1.23×0.52 m、深さ 0.33 mを測る。断面形状は底面に段を有するU字形である。埋土は5層に分層できる。SP36は不整な隅丸方形を呈し、一辺 0.89×0.80 m、深さ 0.40 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は2層に分層できる。遺物は須恵器杯身（135）が出土した。SP37は隅丸方形を呈し、一辺 0.74×0.65 m、深さ 0.52 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は3層に分層でき、柱痕を確認した。遺物は土師器甕（137）が出土した。SP38は隅丸方形を呈し、一辺 0.83×0.75 m、深さ 0.41 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は5層に分層できる。SP39は不整な隅丸方形を呈し、一辺 0.81 以上 $\times 0.80$ m、深さ 0.33 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は3層に分層できる。遺物は須恵器杯蓋（133）が出土した。

出土遺物の年代から、TK 10形式併行期と判断できる。

2・3－掘立2（図61）

調査区東端隅で検出した掘立柱建物であり、2・3－竪穴20、3－竪穴70・80・90を切る。2－SP16・17、3－SP14・15・18の5基で構成する。3間以上 $\times$ 1間以上の側柱建物で、東側の調査区外に広がるため全体の形状は不明である。主軸方位は $N-14^{\circ}-W$ を示し、検出面の標高は $34.70 \sim 34.80$ mである。検出できた桁行長は 5.88 m、梁行長は 1.97 mを測る。柱間寸法は、平側が $1.64 \sim 2.40$ m、妻側が約 2.00 mである。

SP14は楕円形を呈し、直径 0.69×0.48 m、深さ 0.26 mを測る。断面形状は底面に段を有する逆台形である。埋土は4層に分層できる。SP15は隅丸方形を呈し、一辺 0.87×0.80 m、深さ 0.39 m

を測る。断面形状は逆台形である。埋土は4層に分層でき、柱痕を確認した。遺物は須恵器杯蓋（141）、土師器甕（147）が出土した。SP16は隅丸方形を呈し、一辺 0.68×0.60 m、深さ 0.23 mである。断面形状は底面に段を有するU字形である。埋土は2層に分層できる。SP17は隅丸方形を呈し、一辺 0.71×0.62 m、深さ 0.31 mである。断面形状はU字形である。埋土は3層に分層できる。遺物は土師器高杯（146）が出土した。SP18は方形を呈し、一辺 0.69 m、深さ 0.41 mである。断面形状は逆台形である。埋土は6層に分層でき、柱痕を確認した。遺物は須恵器杯蓋（142）・短頸壺（143）・甕（144）、土師器高杯（145）が出土した。

出土遺物の年代と切り合い関係から、TK 209形式併行期と判断できる。

4－掘立3（図62）

調査区北東隅中央で検出した掘立柱建物である。2－SP24、4－SP16・17・21～23・27・28・32・33・59の11基で構成する。3間以上 $\times$ 2間の総柱建物で、東側の調査区外に広がるため全体の形状は不明である。主軸方位は $N-88^{\circ}-E$ を示し、検出面の標高は 34.80 m前後である。検出できた桁行長は 3.91 m、梁行総長は 3.62 mを測る。柱間寸法は、平側が $1.50 \sim 1.10$ m、妻側が約 1.80 mである。

SP24は隅丸方形を呈し、直径 0.63×0.52 m、深さ 0.25 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は2層に分層できる。SP16は隅丸方形を呈し、一辺 0.87×0.57 m、深さ 0.30 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は4層に分層できる。SP17は隅丸方形を呈し、一辺 0.62 以上 $\times 0.55$ m、深さ 0.30 mである。断面形状はU字形である。埋土は4層に分層でき、柱痕を確認した。SP21は隅丸方形を呈し、一辺 0.50 m、深さ 0.22 mを測る。断面形状はU字形である。埋土は3層に分層でき、柱痕を確認した。SP22は不整な隅丸方形を呈し、一辺 0.72 m、深さ 0.24 mを測る。断面形状はU字形である。埋土は3層に分層でき、柱痕を確認した。SP23は楕円形を呈し、直径 0.55 m、深さ 0.27 mを測る。断面形状はU字形である。埋土は3層に分層でき、柱痕を確認した。遺物は須恵器杯蓋（148）、土師器甕（149）が出土した。SP27は不整な円形を呈し、直径 0.55 m、深さ 0.23 mを測る。

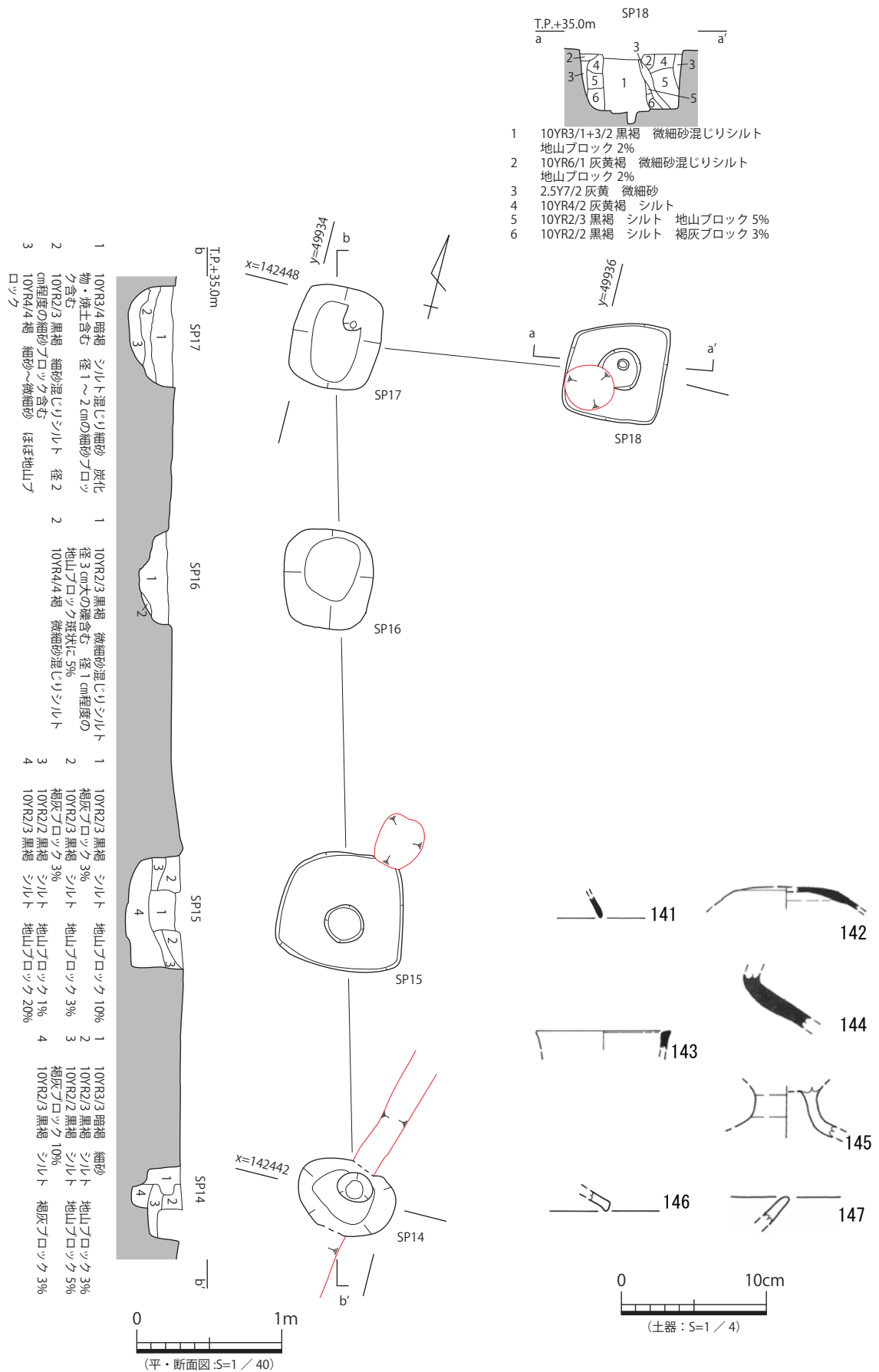


図 61 2・3-掘立2 平・断面図、出土遺物実測図

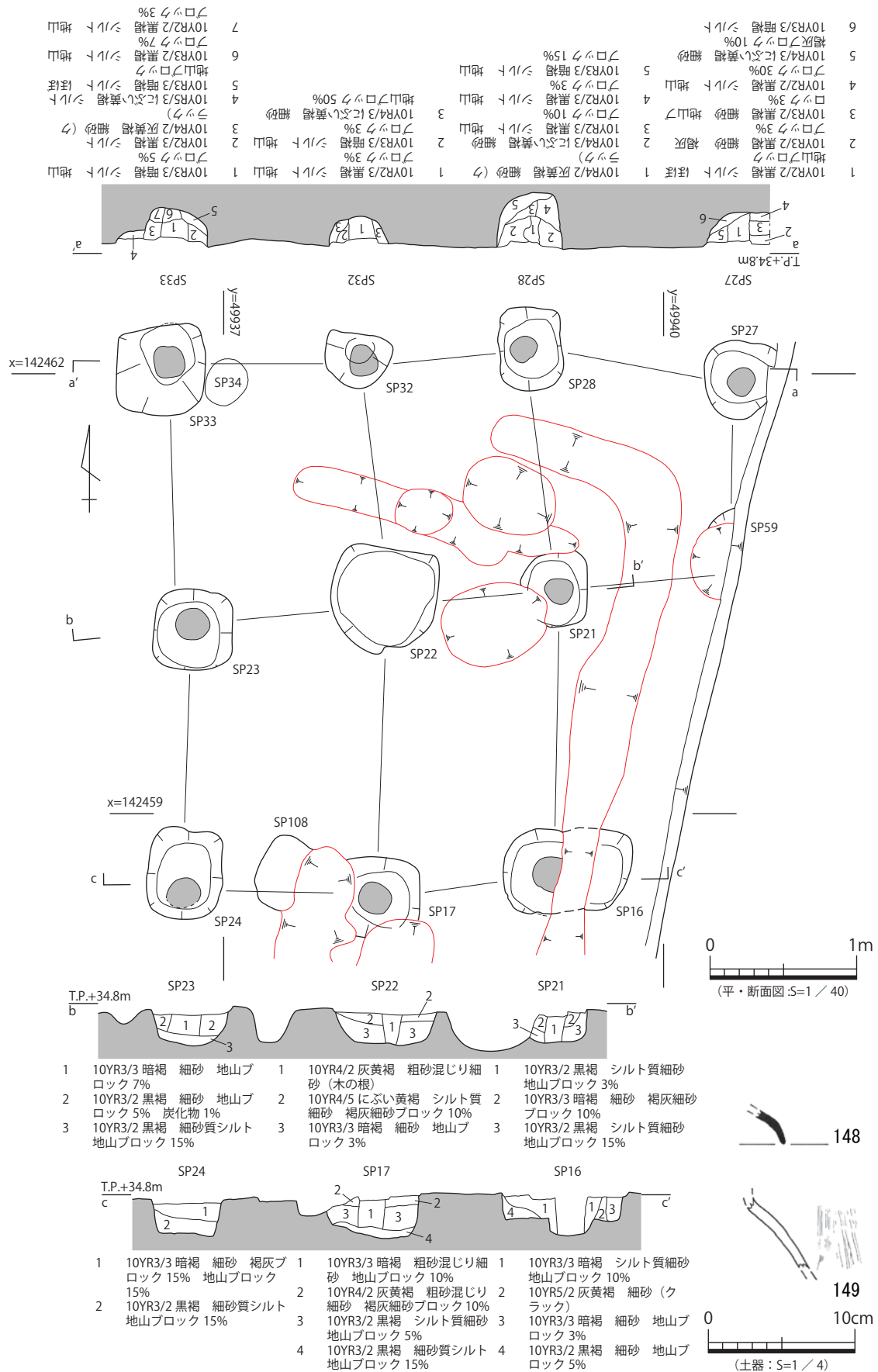


図 62 4-掘立3 平・断面図、出土遺物実測図

断面形状はU字形である。埋土は6層に分層できる。SP28は隅丸方形を呈し、一辺 0.57×0.42 m、深さ 0.39m を測る。断面形状はU字形である。埋土は5層に分層できる。SP32は不整な隅丸方形を呈し、一辺 0.45×0.40 m、深さ 0.20m を測る。断面形状はU字形である。埋土は3層に分層でき、柱痕を確認した。SP33は隅丸方形を呈し、一辺 0.62 m、深さ 0.27m を測る。断面形状は不整なU字形である。埋土は7層に分層でき、柱痕を確認した。SP59は攪乱を受けており、掘り込みの一部のみの検出のため平面形や規模は不明である。

出土遺物の年代から、T K 209 形式併行期と判断できる。

4－掘立4（図63・64）

調査区東部北端で検出した掘立柱建物であり、4 - 竪穴 110・120 を切る。4 - SP66～69・71～74・78・79・89 の11基で構成する。規模 3×2 間の総柱建物である。主軸方位は $N - 76^\circ - W$ を示し、検出面の標高は 34.90 m である。桁行総長は 4.51 m、梁行総長は 3.34 m を測る。柱間寸法は、平側が 1.50 m、妻側が 1.70 m である。

SP66は不整な楕円形を呈し、直径 1.60×1.00 m、深さ 0.42 m を測る。断面形状はU字形であり、底面の東側が深くなる。埋土は6層に分層できる。遺物は須恵器甕（163）、土師器甕（165）が出土した。SP67は隅丸方形を呈し、一辺 0.97×0.72 m、深さ 0.34m を測る。断面形状はU字形である。埋土は2層に分層できる。遺物は須恵器杯蓋（153）・杯身（157）、土師器甕（166）が出土した。SP68は不整な隅丸方形を呈し、一辺 0.95×0.80 m、深さ 0.41 m である。断面形状は段を有するU字形である。埋土は4層に分層できる。遺物は須恵器杯身（158）・高杯（161）、土師器甕（164）・甗（168）が出土した。SP69は不整な隅丸方形を呈し、一辺 1.08×0.75 m、深さ 0.55 m を測る。断面形状は段を有するU字形である。埋土4層に分層できる。遺物は須恵器高杯（162）が出土した。SP71は不整な円形を呈し、直径 1.33×1.17 m、深さ 0.38 m を測る。断面形状はU字形である。SP72は隅丸方形を呈し、一辺 1.13×0.98 m、深さ 0.38 m を測る。断面形状はU字形である。埋土は3層に分層できる。遺物は須恵器

杯蓋（151）・杯身（159）、が出土した。SP73は不整な楕円形を呈し、直径 1.15×0.76 m、深さ 0.47 m を測る。断面形状はU字形である。埋土は4層に分層できる。SP74は不整な楕円形を呈し、直径 1.84×1.15 m、深さ 0.48 m を測る。断面形状は底面に段を有するU字形である。北西側の掘り込みに広く平坦なテラスを有し、底面には2ヶ所の落ち込みがある。埋土は3層に分層できる。SP78は不整な円形を呈し、直径 1.12×0.92 m、深さ 0.42 m を測る。断面形状は段を有するU字形である。埋土は3層に分層できる。遺物は須恵器杯蓋（154・155）・杯身（156）、が出土した。SP79は不整な円形を呈し、直径 0.88×0.75 m、深さ 0.30 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は3層に分層できる。遺物は土師器甕（167）が出土した。SP89は不整な隅丸方形を呈し、一辺 1.31×0.83 m、深さ 0.30 m を測る。断面形状は南側に段を有するU字形である。埋土は3層に分層できる。遺物は須恵器杯蓋（150・152）・杯身（160）が出土した。

出土遺物の年代から、T K 209 形式併行期と判断できる。

4－掘立5（図65）

調査区東部北端で検出した掘立柱建物であり、2・4・5 - SD 1 に切られる。4 - SP82～84 の3基で構成する掘立柱建物の1側面のみの検出であり、全体の形状は不明である。規模は2間の建物である。方位は $N - 83^\circ - E$ を示し、検出面の標高は 34.80 m である。検出できた総長は 3.06 m を測る。柱間寸法は、1.54 m である。

SP82は隅丸方形を呈し、一辺 0.60×0.53 m、深さ 0.28m を測る。断面形状はU字形である。埋土は2層に分層できる。SP83は隅丸方形を呈し、一辺 0.55×0.53 m、深さ 0.22 m である。埋土は4層に分層でき、褐灰ブロックを20%含む暗褐シルト質細砂と褐灰ブロックを5%含む暗褐シルト質細砂の柱痕を確認した。SP84は南側に若干拡張する不整な円形を呈し、直径 0.78×0.60 m、深さ 0.25 m を測る。埋土は5層に分層でき、暗褐細砂の柱痕を確認した。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

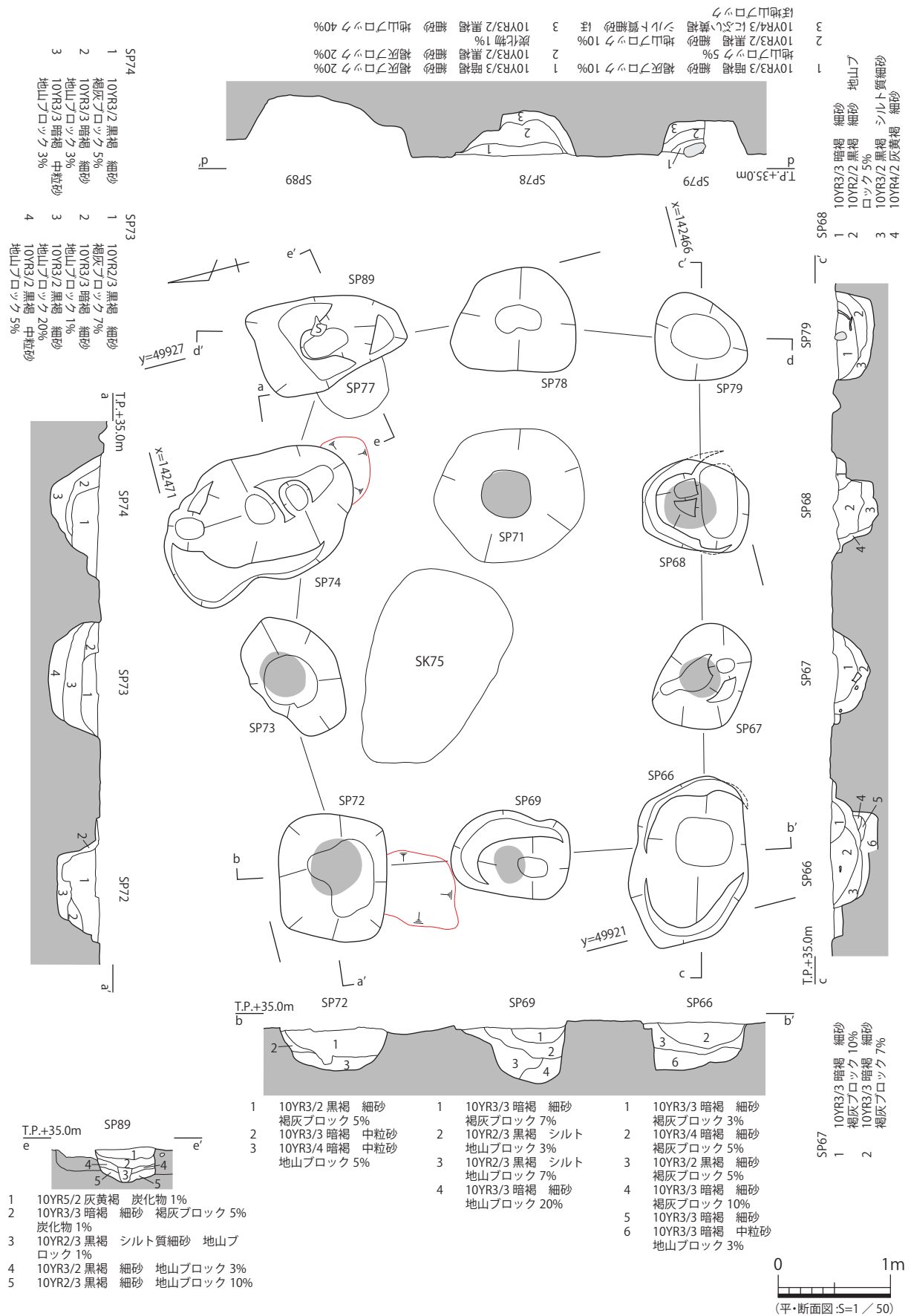


図 63 4-掘立 4 平・断面図

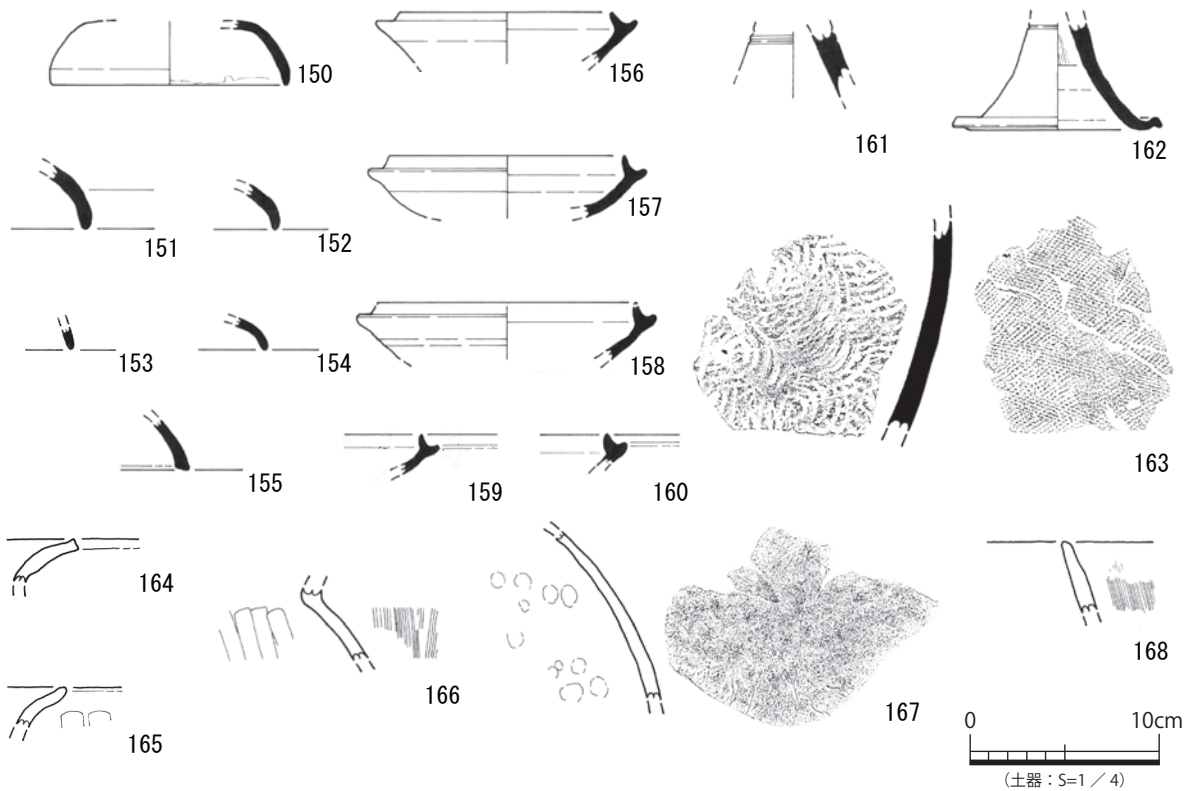


図 64 4-掘立 4 出土遺物実測図

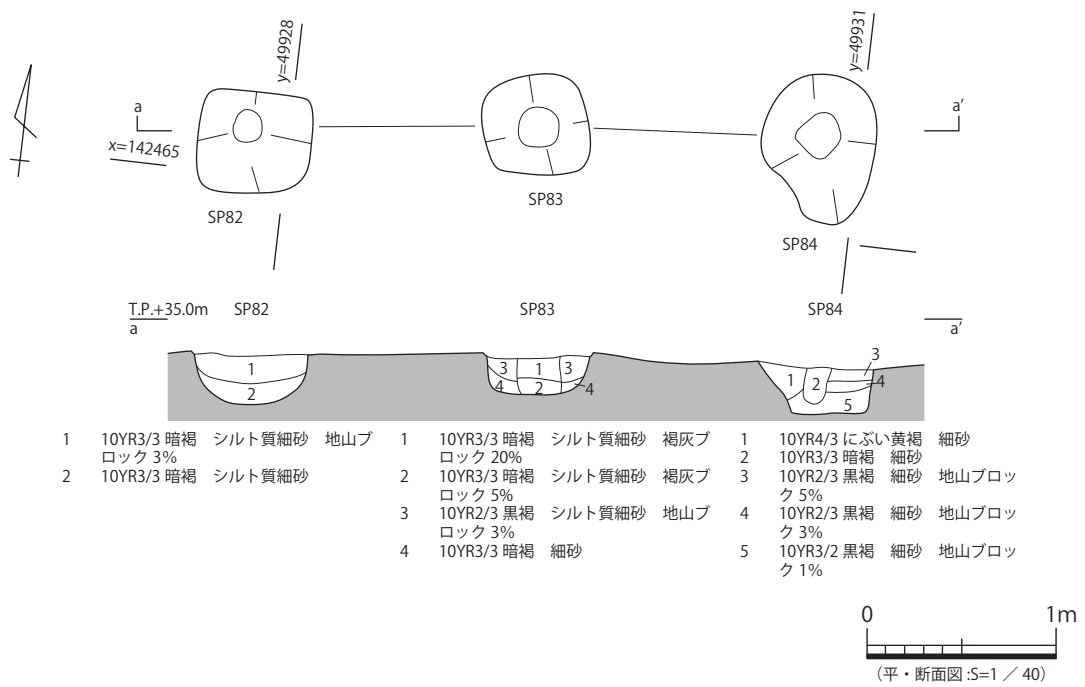


図 65 4-掘立 5 平・断面図

2・5－掘立6（図66）

調査区南東隅で検出した掘立柱建物であり、2・3・5・8 - SD 5に切られる。2 - SP11～15、5 - SP14～18・20～22の11基で構成する。規模3×1間以上の廂付き総柱建物であり、2 - SP11～13は廂である。建物は南側の調査区外に広がる。方位はN－86°－Eを示し、検出面の標高は34.70～34.90 mである。廂を含める東西方向の総長は6.13 m、検出した南北方向の長さは約3.01 mを測る。柱間寸法は、東西が1.70～1.60 m、南北が2.20～1.80 mである。廂の柱間寸法は1.50 mである。建物と廂の柱間寸法は1.25 mと0.80 mである。

SP14は円形を呈し、直径0.72m、深さ0.20mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層である。SP15は円形を呈し、直径0.70×0.60 m、深さ0.30 mである。断面形状は底面に段を有するU字形である。埋土は1層である。SP16は隅丸方形を呈し、一辺0.59×0.55 m、深さ0.21 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は2層に分層でき、柱痕を確認した。SP17は不整な隅丸方形を呈し、一辺0.65 m、深さ0.30 mを測る。断面形状はU字形である。埋土は4層に分層でき、柱痕を確認した。SP18は不整な隅丸方形を呈し、一辺1.06×0.70 m、深さ0.18 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は3層に分層できる。SP20は不整な円形を呈し、直径0.70×0.55 m、深さ0.21 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は3層に分層でき、柱痕を確認した。SP21は上面を2・3・5・8 - SD 5に切られるため不整な円形を呈し、直径0.39 m、深さ0.42 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は2層に分層できる。SP22は不整な隅丸方形を呈し、一辺0.75×0.67 m、深さ0.23 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は5層に分層できる。遺物は須恵器杯身（170・171）が出土した。

SP11は不整な楕円形を呈し、直径0.65×0.55m、深さ0.22 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は1層である。SP12は円形を呈し、直径0.71 m、深さ0.24 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は3層に分層できる。遺物は須恵器杯蓋（169）が出土した。SP13は、円形を呈し、直径0.78 m、深さ0.17 mを測る。断面形状はU

字形である。埋土は2層に分層できる。

出土遺物の年代から、TK 10形式併行期と判断できる。

2・3－掘立7（図67）

調査区東部中央で検出した掘立柱建物であり、2・3 - 竪穴30、2・3 - 掘立1に切られる。2 - SP21～23・28・29・45・46・56・57、3 - SP12の10基で構成する規模4×2間の側柱建物である。主軸方位はN－89°－Eを示し、検出面の標高は34.60～34.80 mである。桁行総長は7.89 m、梁行総長は4.77 mを測る。柱間寸法は、平側が2.05～1.85 m、妻側が2.50～2.25 mである。

SP21は不整な円形を呈し、直径0.79×0.68m、深さ0.17 mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層である。SP22は隅丸方形を呈し、一辺0.58×0.50 m、深さ0.22 mである。断面形状はU字形であり、北東側に段を有する。埋土は1層である。SP23は円形を呈し、直径0.57×0.50 m、深さ0.22 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は1層である。SP28は円形を呈し、直径0.36 m、深さ0.19 mを測る。断面形状はU字形である。埋土は2層に分層できる。SP29は南西側に攪乱を受けるため全様は不明であるが、円形を呈すると推測できる。直径0.55 m、深さ0.20 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は1層である。SP45は楕円形を呈し、直径0.63×0.39 m、深さ0.19 mを測る。断面形状はU字形である。埋土は1層である。SP46は隅丸方形を呈し、一辺0.60×0.50 m、深さ0.19 mを測る。断面形状は北側に浅い段を有する逆台形である。埋土は2層に分層できる。SP56は円形を呈し、直径0.32 m、深さ0.10 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は1層である。SP57は東側に攪乱を受け、平面形や規模は不明である。埋土は1層である。SP12は不整な楕円形を呈し、直径0.72×0.45 m、深さ0.43 mを測る。断面形状は東側に浅い段を有するU字形である。埋土は4層に分層できる。

出土遺物は須恵器と土師器の小片のみであるため、詳細な時期は不明であるが、建物の方位や切り合い関係から古墳時代後期であると考えられる。

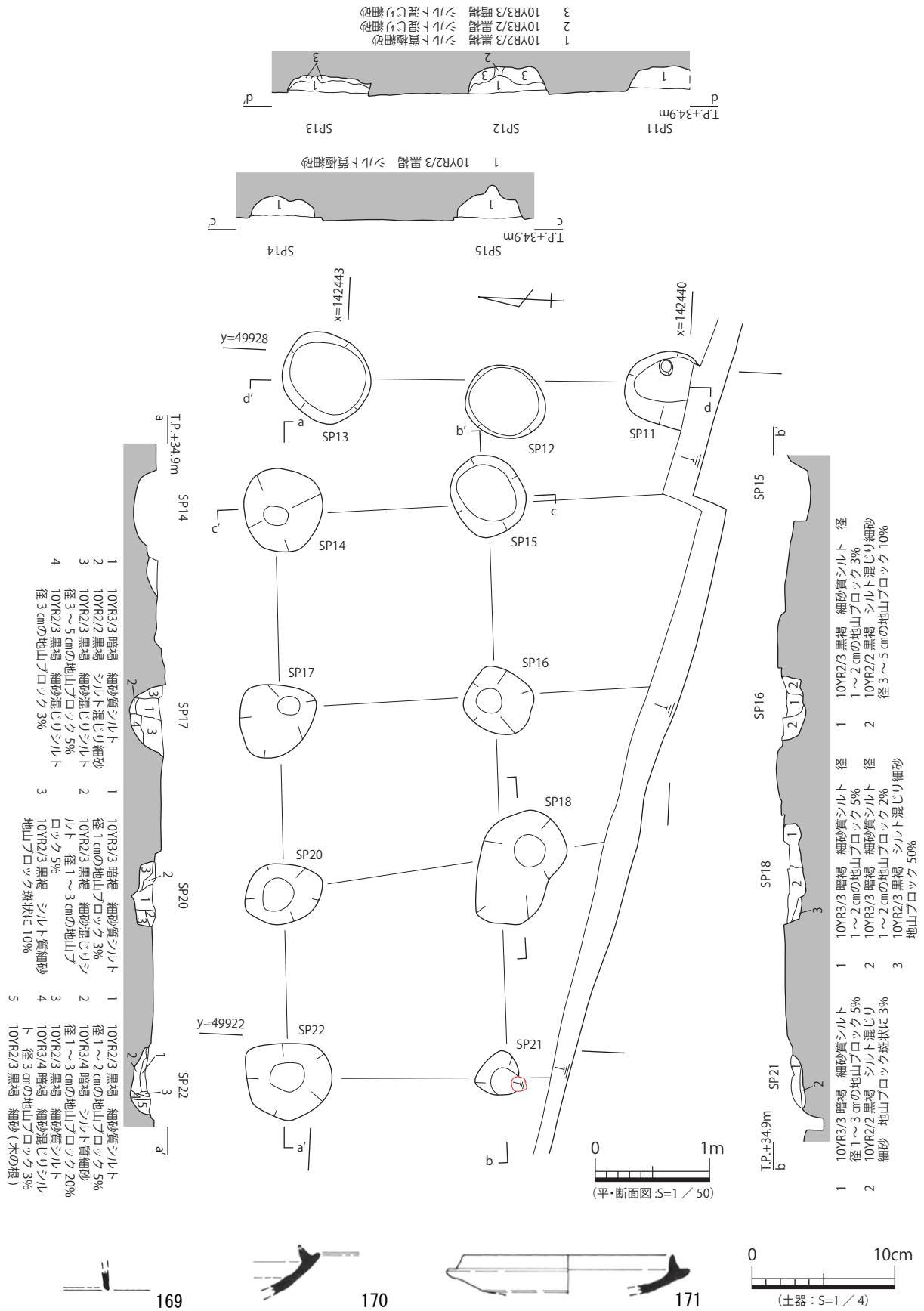


図 66 2・5-掘立6 平・断面図、出土遺物実測図

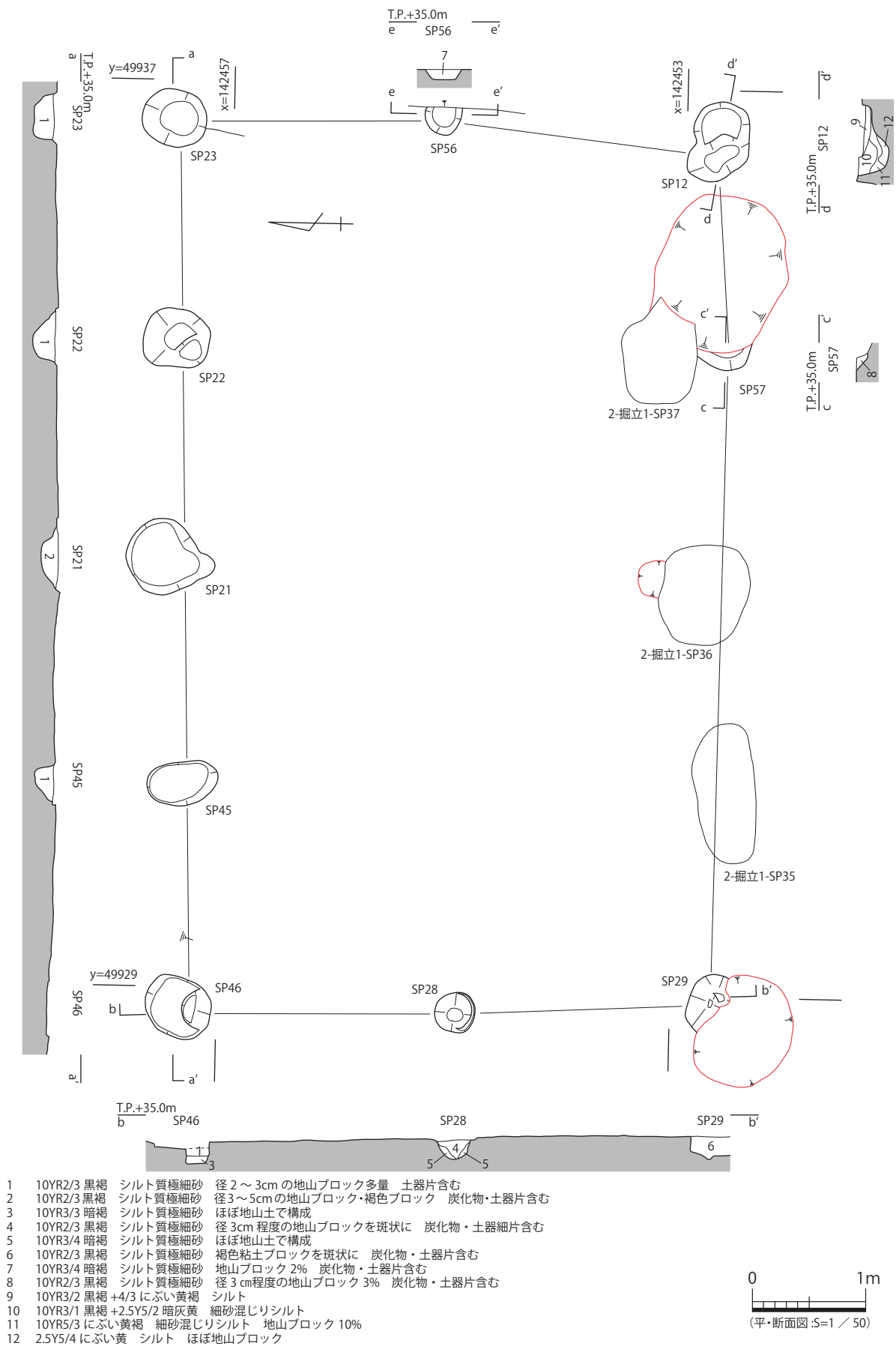


図 67 2・3-掘立7 平・断面図

9-掘立1 (図68)

調査区西部中央で検出した掘立柱建物であり、7・9 - 竪穴3、9 - 竪穴1を切る。9 - SP1～8・14～16の11基で構成する規模3×2間の総柱建物である。主軸方位はN-76°-Eを示し、検出面の標高は34.8 mである。桁行総長は北側4.85 mと南側5.10 m、梁行総長は東側3.65 m、西側3.85 mを測る。柱間寸法は、平側が2.00～1.50 m、妻側が2.10～1.60 mである。

SP1は円形を呈し、直径0.54m、深さ0.34mを測る。断面形状はU字形である。埋土は5層で、柱痕を確認した。SP2は円形を呈し、直径0.61 m、深さ0.31 mである。断面形状はU字形であ

る。埋土は2層である。遺物は須恵器杯蓋(172)が出土した。SP3は円形を呈し、直径0.60 m、深さ0.29 mを測る。断面形状はU字形である。埋土は4層で、柱痕を確認した。SP4は円形を呈し、直径0.58 m、深さ0.30 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は3層で、柱痕を確認した。SP5は円形を呈し、直径0.48 m、深さ0.28 mを測る。断面形状は段を有するU字形である。埋土は3層である。SP6は円形を呈し、直径0.51 m、深さ0.33 mを測る。断面形状は底面に段を有する逆台形である。埋土は3層で、柱痕を確認した。SP7は円形を呈し、直径0.56 m、深さ0.19 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は3層で、柱

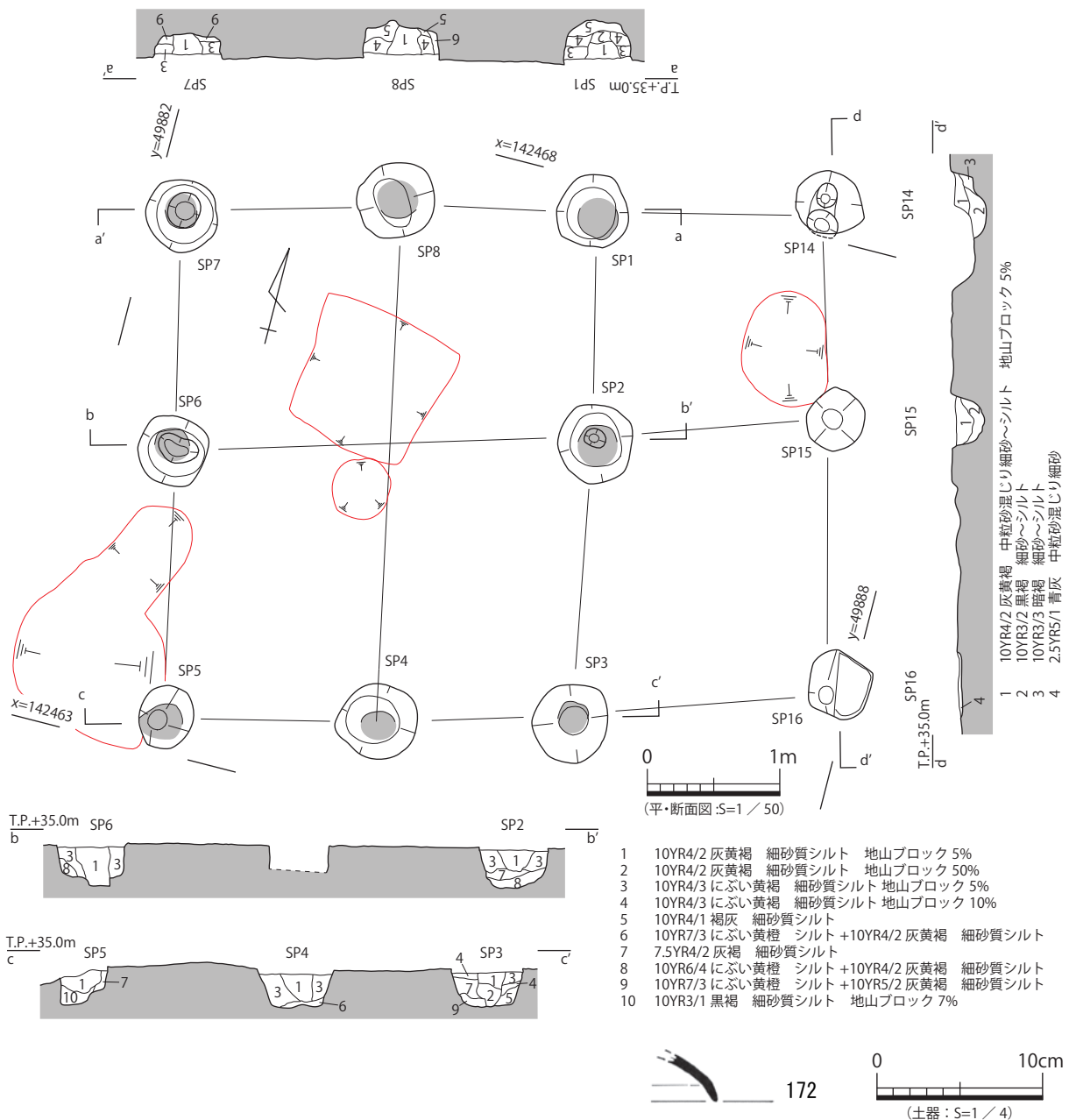
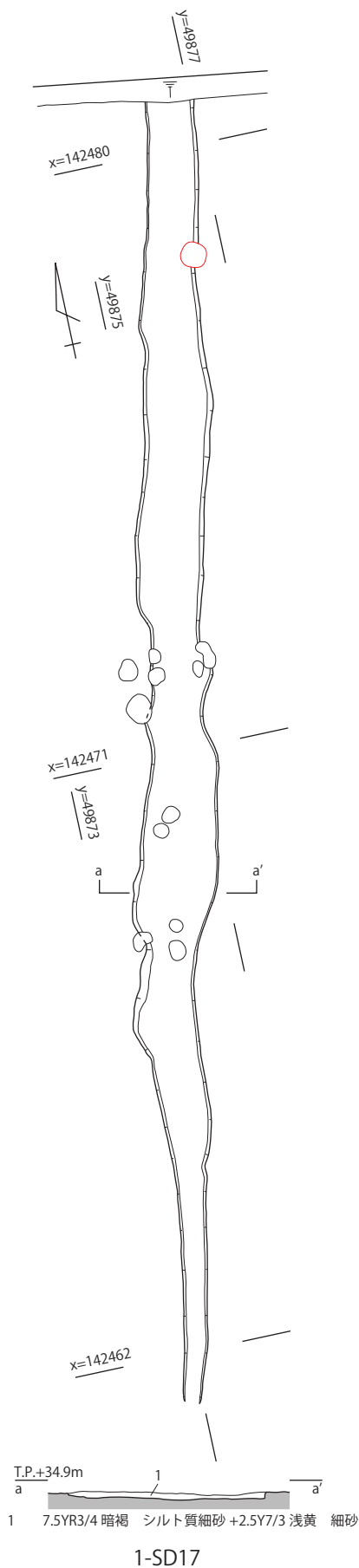


図68 9-掘立1 平・断面図、出土遺物実測図



痕を確認した。SP 8は円形を呈し、直径 0.58 m、深さ 0.30 mを測る。断面形状は底面に段を有する逆台形である。埋土は 3 層で、柱痕を確認した。SP14 は円形を呈し、直径 0.48m、深さ 0.26 mを測る。断面形状は段を有する U 字形である。埋土は 3 層である。SP15 は円形を呈し、直径 0.45 m、深さ 0.25 mを測る。断面形状は U 字形である。埋土は 2 層である。SP16 は、隅丸方形を呈し、一辺 0.50 m、深さ 0.14 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は単層である。

出土遺物の年代から、T K 209 形式併行期と判断できる。

(3) 溝

1 - SD17・18 (図 69)

調査区西端で検出した南北方向に延びる溝であり、SD17 南端と SD18 北端の間が切れているため別々に調査したが、位置関係から同一の溝であると考えられ、同一遺構として報告する。1・16 - SD20 の東側に位置する。延伸方位は N-11°-E で、検出面の標高は 34.80 m である。溝は直線的に延び、北側と南側は調査区外に延びる。1・16 - SD20 との芯芯間距離は約 2.25 ~ 1.50 m である。

検出長は 20.70 m、幅は 1.30 × 0.27 m、深さは 0.08 ~ 0.04 m を測る。幅はほぼ均一であるが、SD17 の南側が次第に細くなる。底面は南から北に向かって緩やかに下がる。断面形状は逆台形である。

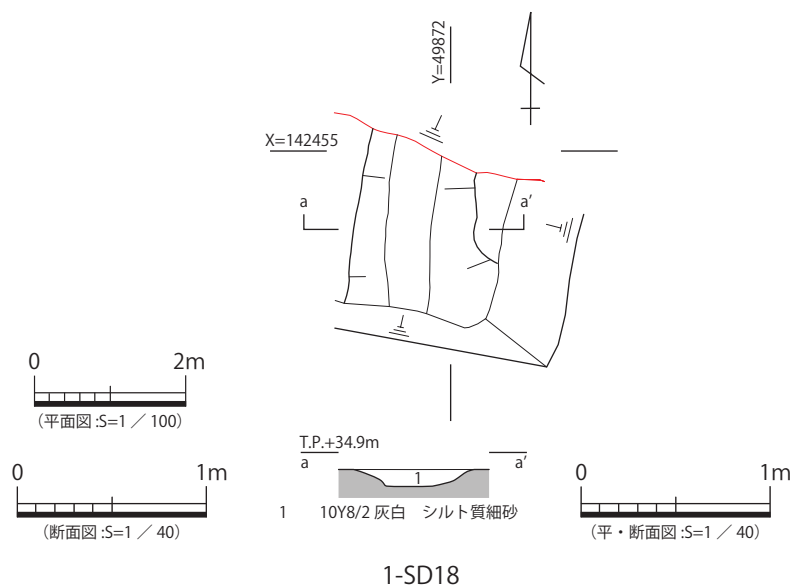


図 69 1-SD17・18 平・断面図

埋土は、SD17 が暗褐シルト質細砂＋浅黄細砂、SD18 が灰白シルト質細砂である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

1・16－SD20（図 70）

調査区西端で検出した南北方向に延びる溝であり、1－SD17 と 16－SD50 の中間に位置する。延伸方位は $N-10^{\circ}-E$ で、検出面の標高は 34.80 m である。溝は直線的に延び、北側と南側は調査区外に延びる。1－SD17 との芯芯間距離は約 2.25 ～ 1.50 m であり、16－SD50 との距離は約 2.10 ～ 1.50 m である。

検出長は 24.50 m、幅は 0.70 ～ 0.40 m、深さは 0.17 ～ 0.14 m を測る。底面は南から北に向かって緩やかに下がる。断面形状は U 字形である。

埋土は、3 層に分層でき、上層から黒褐シルト質極細砂、極暗赤褐シルト質極細砂、極暗褐シルト質極細砂である。

遺物は埋土から須恵器杯蓋（173・174）・杯身（175）・高杯（176・177）・壺（178）が出土し、須恵器片と土師器片がある。

出土遺物の年代から、TK 48 形式併行期と判断できる。

16－SD50（図 71）

調査区西端で検出した南北方向に延びる溝であり、16－SD20 の西側に位置する。延伸方位は $N-9^{\circ}-E$ で、検出面の標高は 34.90 m である。溝は非常にわずかに弯曲するがほぼ直線的に延び、北側と南側は調査区外に延びる。1・16－SD20 との芯芯間距離は約 2.10 ～ 1.50 m である。

検出長は 23.06 m、幅は 1.10×0.60 m、深さは 0.37 m を測る。底面は南から北に向かって緩やかに下がる。断面形状は U 字形であり、北端付近の東側の掘り込みは非常に緩やかである。

埋土は、3 層に分層でき、地山ブロックを多量に含む暗褐シルト混じり細砂、黒褐微細砂～細砂、暗灰黄シルト混じり細砂～細礫である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

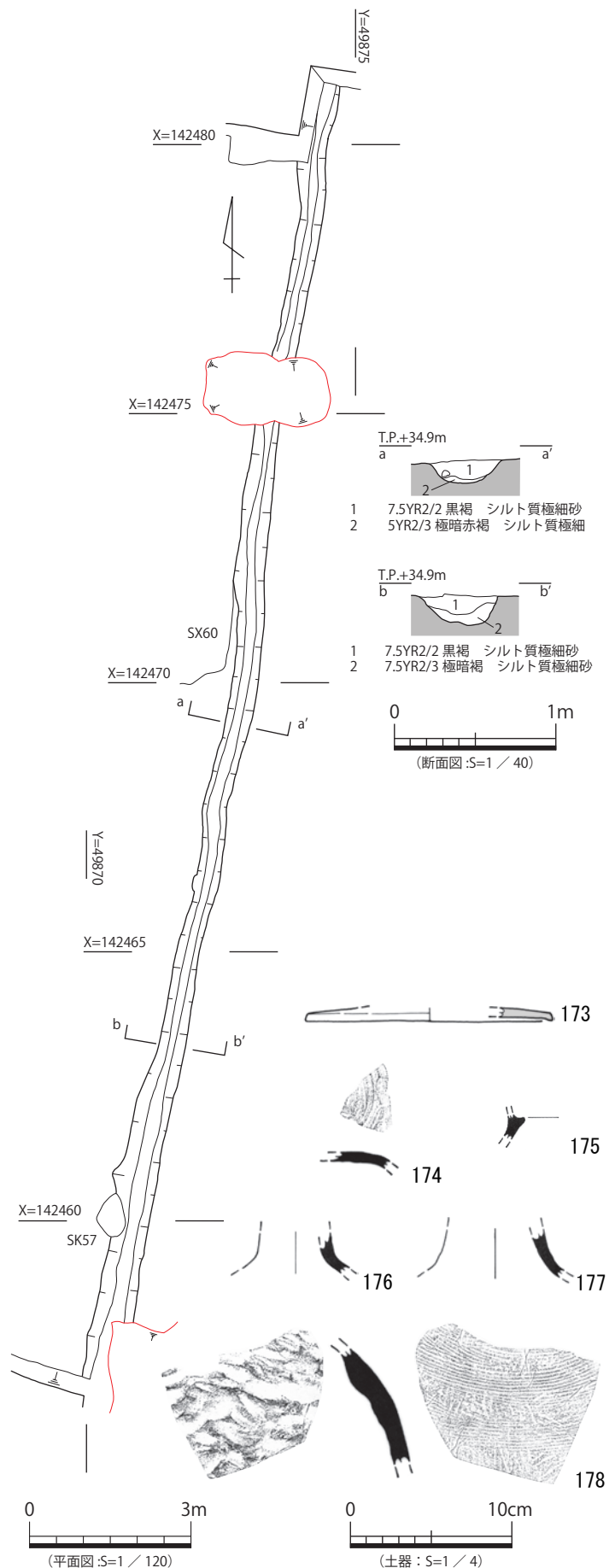


図 70 1・16-SD20 平・断面図、出土遺物実測図

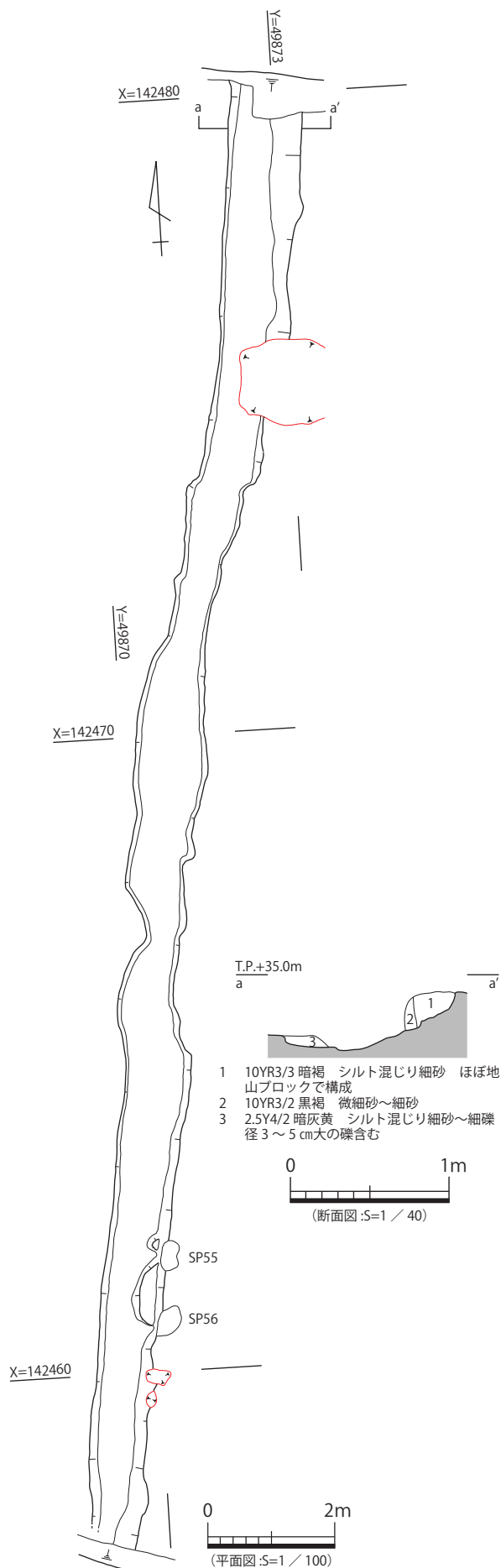


図 71 16-SD50 平・断面図

2・4・5—SD 1 (図 72)

調査区東部で検出した南北方向に延びる溝である。2・4 - 縦穴 58 に切られ、4 - 掘立 5、2 - SD 3 を切る。延伸方位は $N-42^{\circ}-E$ で、検出面の標高は 34.80 ～ 90 m である。溝は南端から中央まではほぼ直線的に延び、北側では若干東に方向を変える。北端と南端は調査区外に延びる。

検出長は約 34.90 m、幅は 3.70 ～ 1.40 m、深さは 0.50 ～ 0.15 m を測る。断面形状は U 字形であるが、中央付近では東側に幅の広い段を有する。中央から南側にかけは溝の幅が広く、掘り込みが深い、北になるにしたがい細く浅くなる。底面は北から南に向かって緩やかに下がる。

a 断面の埋土は、4 ～ 7 層、1 ～ 3 層の順に堆積したと考えられる。上層の埋土は褐灰ブロックを 20% 含む暗褐シルト、地山ブロックを 50% 含む黒褐シルト、地山ブロックを多量に含む暗褐細砂混じりシルトである。下層は暗褐ブロックを 20% 含む黒シルト、地山ブロックを 20% 含む黒褐シルト、地山ブロックを 15% 含む黒褐シルト、地山ブロックを 1% 含む黒褐シルトである。

b 断面の埋土は 7 層に分層でき、黒褐シルト質極細砂、にぶい黄褐シルト質細砂 + にぶい黄橙シルト、灰黄シルト質細砂、灰黄細砂、小石を多量に含む灰黄褐細砂、にぶい黄細砂～中粒砂、浅黄細砂である。

c 断面の埋土は 6 層に分層でき、黒褐シルト質極細砂、暗褐シルト質細砂～極細砂、暗褐笹～極細砂、暗褐砂礫、にぶい黄褐細砂～中粒砂である。

遺物は埋土から須恵器杯蓋 (179・180)、須恵器杯身 (181・182) が出土した。出土遺物の年代から、TK 209 形式併行期と判断できる。

2 - SD 2 (図 72)

調査区東部南寄りで検出した溝である。延伸方位は $N-10^{\circ}-E$ で、検出面の標高は 34.80 m である。

検出長は約 2.11 m、幅は 0.90 m、深さは 0.10 m を測る。断面形状は U 字形である。

埋土は暗褐シルト質極細砂の単一層である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

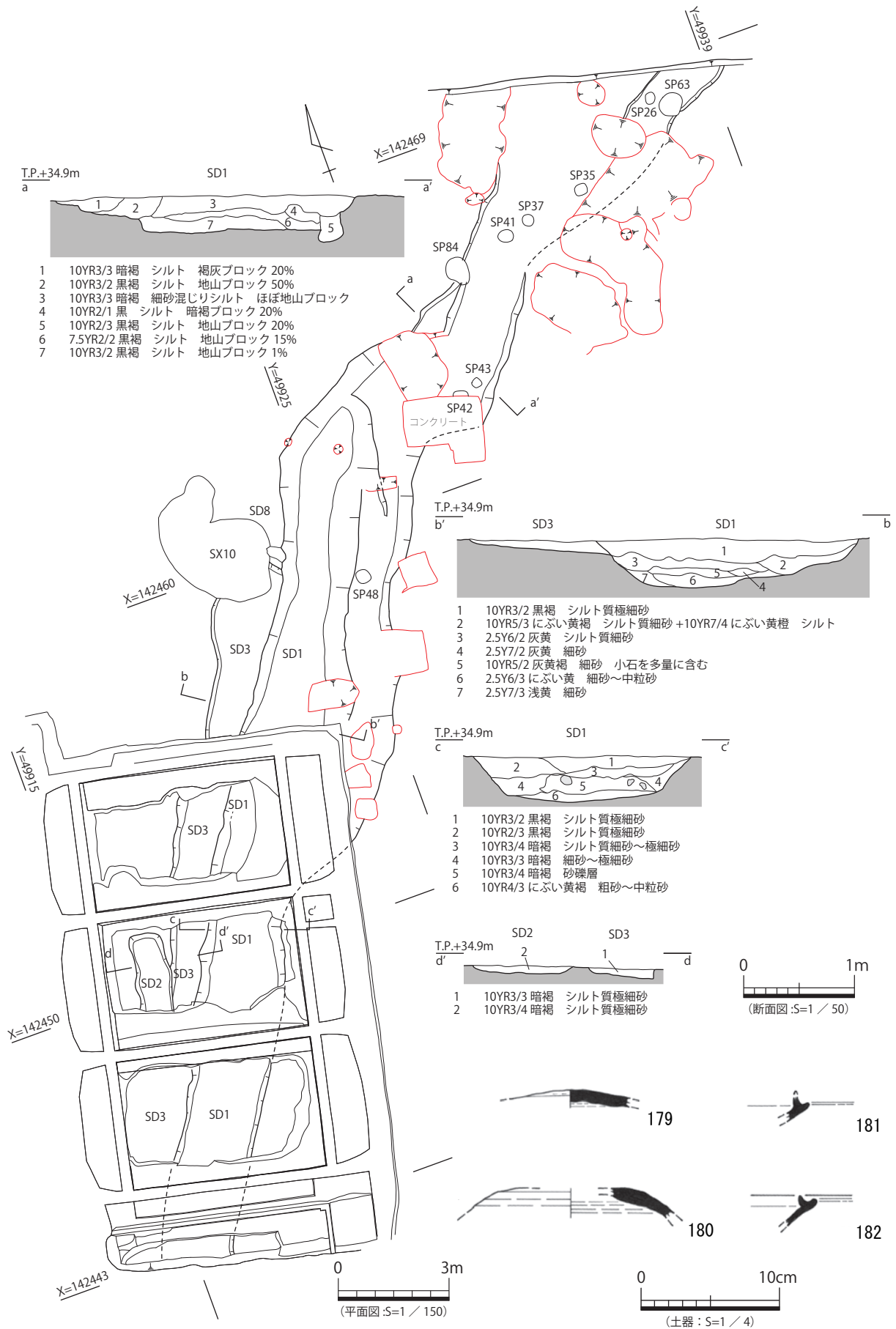


図 72 2・4・5-SD 1、2-SD 2・3 平・断面図、出土遺物実測図

2 - SD 3 (図 72)

調査区東部南寄りで検出した溝であり、2・4・5 - SD1 に切られる。延伸方位は N—30°—E で、検出面の標高は 34.80 m である。

検出長は約 19.25 m、幅は 1.70 ～ 0.60 m、深さは 0.10 m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は暗褐シルト質極細砂の単一層である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

2・4 - SD 4 (図 73)

調査区中央部で検出した南北方向に延びる溝である。延伸方位は N—6°—E で、検出面の標高は 34.60 m と 34.90 m である。溝は非常にわずかに弯曲するがほぼ直線的に延びる。

検出長は 4.56 m を測り、幅は 0.60 m、深さは 0.22 m を測る。調査区で検出面の標高が異なるため、平面形が不整合である。断面形状は U 字形である。

埋土は、にぶい黄褐シルト質細砂を含むにぶい黄橙シルト質細砂の単一層である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明。

2 - SD 8 (図 73)

調査区中央部で検出した溝であるが、土坑の可能性も考えられる。2・4・5 - SD 1、2・4 - SX10 に切られる。延伸方位は N—55°—W で、検出面の標高は 34.70 m である。

検出長は 0.50 m、幅は 0.34 m、深さは 0.10 m を測る。断面形状は U 字形である。

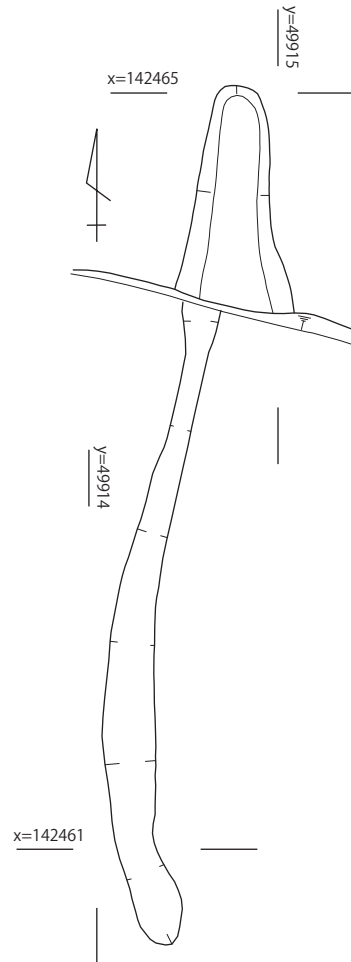
埋土は、にぶい黄橙シルト質細砂の単一層。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明。

2・3・5・8 - SD 5 (図 74)

調査区南東隅から中央南端にかけて検出した東西方向に延びる溝であり、第 2・14 調査区では上面検出したがコンクリート基礎や攪乱により調査ができなかった。8 - 竪穴 12、2・5 - 掘立 6 を切る。溝の大部分は調査区外であり、検出できたのは北側の掘り込みのみである。延伸方位は N—76°—W で、検出面の標高は 35.10 m である。溝は直線的に延び、東端と西端は調査区外に延びる。

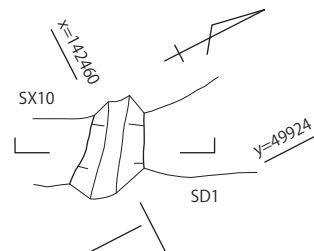
検出長は約 41.15 m、幅は 0.80 m、深さは 0.55 m を測る。断面形状は U 字形である。



1 10YR7/4 にぶい黄橙 シルト質細砂 10YR5/3 にぶい黄褐 シルト質細砂を含む

0 1m
(平面図 :S=1 / 40)

2・4-SD4



T.P.+34.9m
5

1 10YR7/4 にぶい黄橙 シルト質細砂

0 1m
(平・断面図 :S=1 / 40)

2-SD8

図 73 2・4-SD 4、2-SD 8 平・断面図

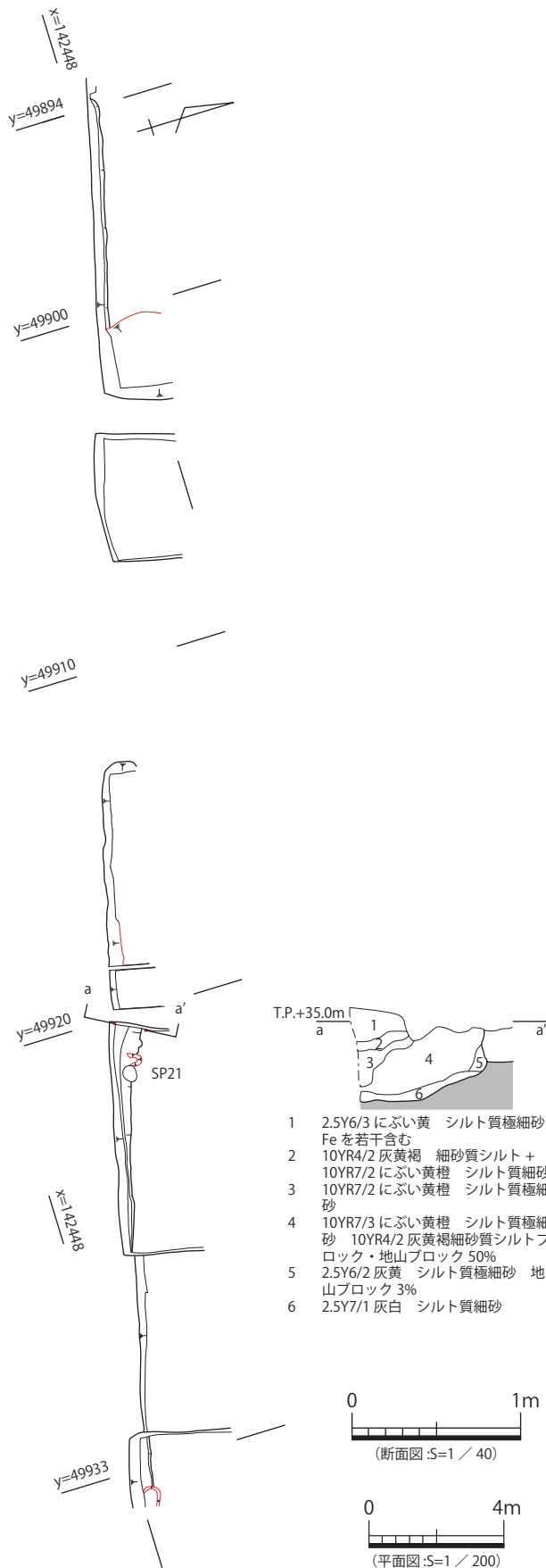


図 74 2・3・5・8-SD 5 平・断面図

埋土は、6 層に分層でき、4～6 層の下層と 1～3 層の上層の順に堆積し、上層は下層が埋没した後、溝の掘り直し後に堆積したと考えられる。上層は褐鉄鉱を若干含むにぶい黄シルト質極細砂、灰黄褐細砂質シルト+にぶい黄橙シルト質細砂、にぶい黄橙シルト質極細砂である。下層は灰黄褐細砂質シルトブロック・地山ブロックを 50%含むにぶい黄褐シルト質極細砂、地山ブロックを 3%含む灰黄シルト質極細砂、灰白シルト質細砂である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、埋土や切り合い関係から近世の条里型水田に伴う用水路であると考えられる。

5-SD 2 (図 75)

調査区東部で検出した東西方向に延びる溝である。2・5-SX40、2・4・5-SD 1 に切られる。延伸方位は N-68°-E で、検出面の標高は 34.80 m である。溝はほぼ直線的に延びる。

検出長は 1.80 m、幅は 0.79 m、深さは 0.13 m を測る。断面形状は U 字形である。

埋土は、地山ブロックを 5%含む黒褐シルト質極細砂～細砂の単一層である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

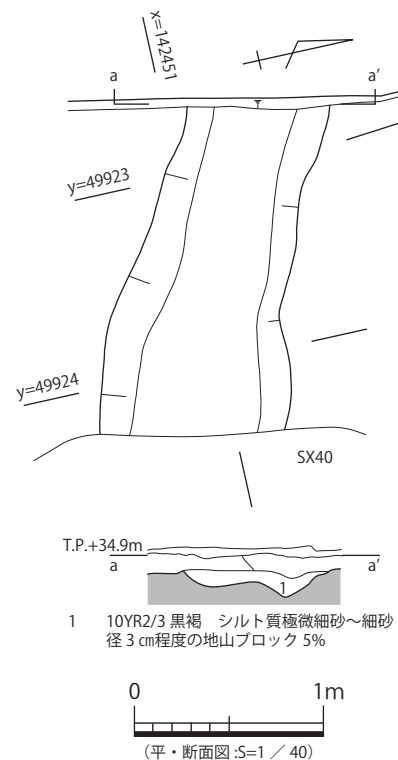


図 75 5-SD 2 平・断面図

7・8・9－SD21（図 76）

調査区中央部西側で検出した南北方向に延びる溝である。7・9－縦穴 2、7・8－縦穴 14 を切る。延伸方位は N で、検出面の標高は 34.90 m である。溝は南端から中央まではほぼ直線的に延び、b 断面の南側で西方向に少し弯曲する。北端と南端は調査区外に延びる。

検出長は約 29.60 m、幅は 0.90 ～ 0.50 m、深さは 0.20 m を測る。底面は南から北に向かって緩やかに下がる。断面形状は U 字形である。

a 断面の埋土は、にぶい黄橙細砂を含む灰黄褐シルト質極細砂の単一層である。b 断面は 2 層に分層でき、地山ブロックを 10% 含む黒褐細砂混じりシルト、地山ブロックを 15% 含む黒褐シルト混じり微細砂～細砂である。c 断面は地山ブロックを 10% 含む黒褐細砂混じりシルトの単一層である。d 断面は 2 層に分層でき、黒褐＋灰黄褐シルト質極細砂、地山ブロックを 3% 含む灰黄褐シルト質極細砂である。

遺物は土師器杯身（183）、数点の土師器片が出土した。出土遺物の年代から、飛鳥時代と考えられる。

7－SD25（図 77）

調査区中央部北側で検出した東西方向に延びる溝である。7－縦穴 5・6 を切り、7－縦穴 1 と 7・14－縦穴 8 に切られる。延伸方位は N—14°—E で、検出面の標高は 34.80 m である。溝はほぼ直線的に延びる。

検出長は 9.13 m、幅は 0.53 ～ 0.33 m、深さは 0.14 m を測る。底面は東から西に向かって緩やかに下がる。断面形状は U 字形である。

a 断面の埋土は 3 層に分層でき、上層から地山ブロックを 5% 含む暗褐細砂混じりシルト、地山ブロックを 5% 含む黒褐細砂混じりシルト、地山ブロックを 3% 含む黒褐細砂混じりシルトである。b 断面は 2 層に分層でき、上層から地山ブロックを 5% 含む暗褐細砂混じりシルト、地山ブロックを 3% 含む黒褐細砂混じりシルトである。

遺物は図示できなかったが、須恵器片、土師器片が出土した。これらの土器は細片のため、詳細な時期は不明であるが、切り合い関係から古墳時代後期と判断できる。

7－SD39（図 78）

調査区中央部で検出した南北方向に延びる溝である。7－縦穴 11 を切る。延伸方位は N—20°—W で、検出面の標高は 34.90 m である。溝はほぼ直線的に延びる。

検出長は 5.29 m、幅は 0.65 ～ 0.32 m、深さは 0.10 m を測る。底面は南から北に向かって緩やかに下がる。断面形状は U 字形である。

埋土は黒褐シルト質極細砂の単一層である。

遺物は図示できなかったが、土師器片が出土した。細片のため、詳細な時期は不明であるが、切り合い関係から、7 世紀初頭以後と考えられる。

7・8－SD60（図 79）

調査区中央部で検出した南北方向に延びる溝である。7・14－SX 9 に切られ、南端は攪乱を受ける。溝の東側は調査区外であり、検出できたのは西側の掘り込みのみである。延伸方位は N—13°—E で、検出面の標高は 34.90 m である。溝はほぼ直線的に延び、延長方向に 14－SD 4 が確認されており、同一の溝である可能性も考えられる。

検出長は 11.39 m、幅は 0.46 m、深さは 0.23 m を測る。底面は南から北に向かって緩やかに下がる。断面形状は逆台形である。

埋土は 3 層に分層でき、上層から黒褐細砂質シルト、地山ブロックを 15% 含む暗褐細砂質シルト、地山ブロックを 15% 含む黒褐細砂混じりシルトである。

遺物は図示できなかったが、土師器片が出土した。細片のため、詳細な時期は不明である。

14－SD 4（図 79）

調査区中央部北側で検出した南北方向に延びる溝である。7・14－縦穴 8 を切る。延伸方位は N—11°—E で、検出面の標高は 34.80 m である。溝はほぼ直線的に延びる。7・8－SD60 と同一の溝である可能性も考えられる。

検出長は 3.92 m、幅は 0.28 m、深さは 0.06 m を測る。断面形状は U 字形である。

埋土は単一層で、3 種のブロックが同割合で混合している

遺物は、須恵器杯身（184）、土師器片が出土した。出土遺物の年代から、7 世紀初頭以後と判断できる。

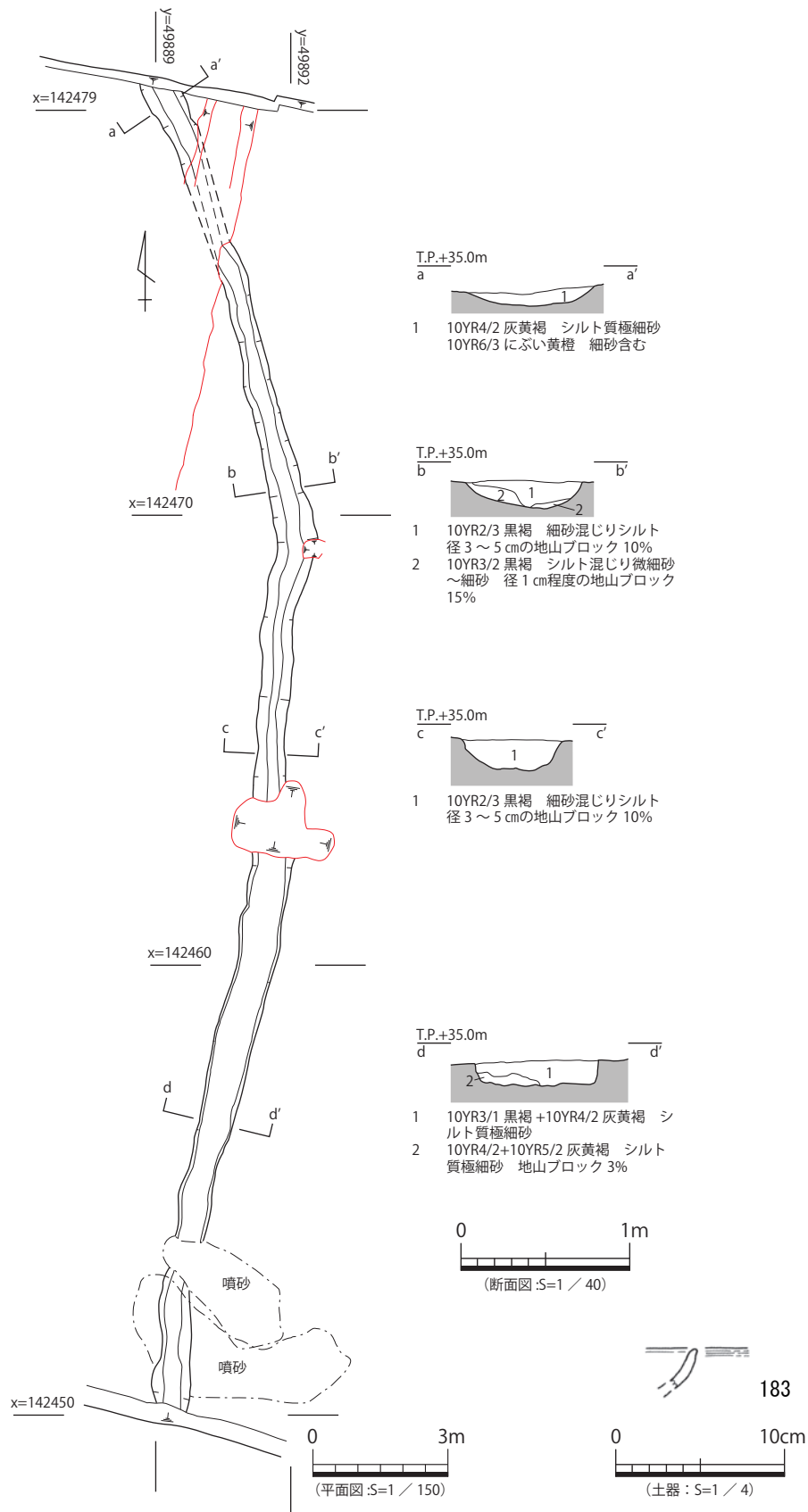


図 76 7・8・9-SD21 平・断面図、出土遺物実測図

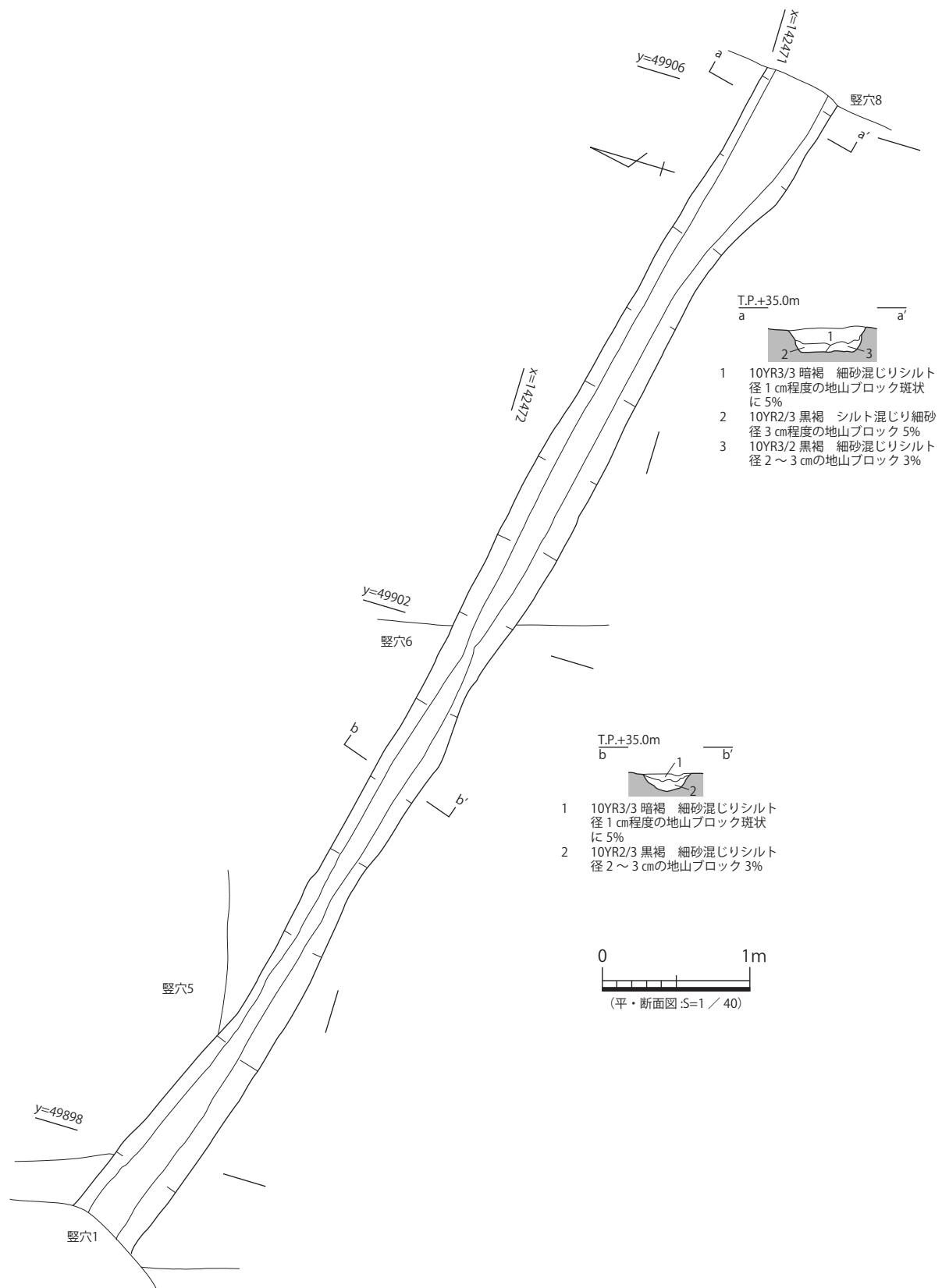


図 77 7-SD25 平・断面図

14 - SD 5 (図 80)

調査区中央部北側で検出した南東—北西方向に延びる溝である。7・14 - 竖穴 8 を切る。延伸方位は $N-48^{\circ}-E$ で、検出面の標高は 34.80 m である。溝はほぼ直線的に延びる。

検出長は 3.23 m、幅は 0.45 m、深さは 0.11 m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は黒褐細粒砂混じりシルトの単一層である。

遺物は、須恵器片の細片が出土した。切り合い関係から 7 世紀初頭以後と考えられる。

15 - SD 1 (図 80)

調査区南東隅の第 15 調査区第 1 遺構面で検出した東西方向に延びる溝である。西端は攪乱を受け、溝の大部分は調査区外であり、検出できたのは南側の掘り込みのみである。延伸方位は $N-87^{\circ}-W$ で、検出面の標高は 35.20 m である。溝は南側に緩やかに弯曲し、東端は調査区外に延びる。

検出長は 6.06 m、幅は 1.20 m、深さは 0.36 m を測る。底面はほぼ水平で、断面形状は U 字形である。

埋土は 6 層に分層でき、1 層は灰黄褐シルト質極細砂、2～4 層は灰黄シルト質極細砂、5 層は灰黄＋褐灰シルト質極細砂、6 層は灰黄シルト質極細砂である。

遺物は備前焼小型壺蓋 (185)・小型壺 (186)、須恵器杯 (187) が出土した。出土遺物の年代から、近世と判断できる。

15 - SD11 (図 81)

調査区南東隅の第 15 調査区第 2 遺構面で検出した南北方向に延びる溝である。延伸方位は $N-8^{\circ}-E$ で、検出面の標高は 35.15 m である。溝は直線的に延びる。

検出長は 4.97 m、幅は 0.86 m、深さは 0.19 m を測る。底面は南から北に向かって緩やかに下がる。断面形状は U 字形である。

埋土は 6 層に分層でき、1 層は灰黄褐＋褐灰シルト質極細砂、2 層は灰黄褐シルト質極細砂、3 層は黄灰細砂、4 層は灰黄褐シルト質極細砂、5 層は灰黄褐シルト質極細砂＋黄灰細砂、6 層は灰黄褐＋にぶい黄橙シルト質極細砂である。

遺物は須恵器杯身 (188) が出土した。出土遺物の年代から、T K 209 形式併行期と判断できる。

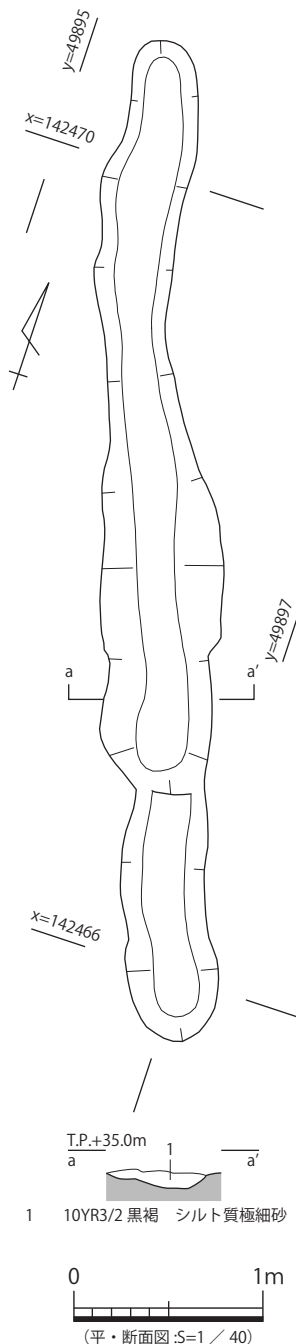


図 78 7-SD39 平・断面図

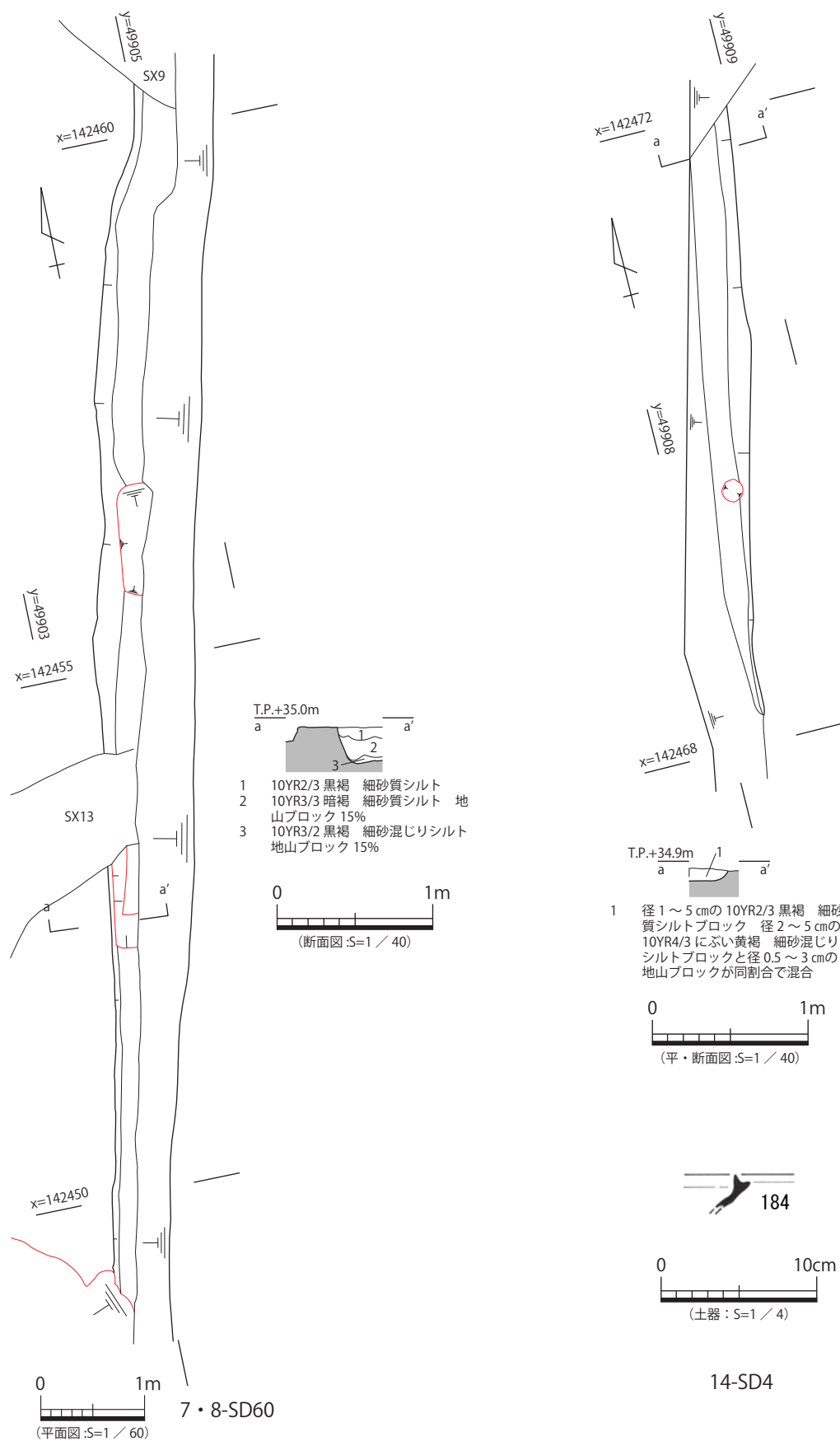


図 79 7・8-SD60、14-SD 4 平・断面図、出土遺物実測図

15 - SD13 (図 81)

調査区南東隅の第 15 調査区第 3 遺構面で検出した南北方向に延びる溝であり、検出した位置は 15 - SD11 とほとんど同一である。延伸方位は N-9°-E で、検出面の標高は 34.90 m である。溝は直線的に延びる。

検出長は 5.87 m、幅は 0.68 m、深さは 0.34 m を測る。底面は南から北に向かって緩やかに下がる。断面形状は U 字形である。

埋土は 12 層に分層でき、1 層を除く 2～12 層は薄い堆積である。灰白細砂+褐灰シルト質極細砂の 7 層と灰白細砂～極細砂の 11 層がラミナ状堆積であることから数回の掘り直しが行われたと考えられる。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、検出した遺構面から 7 世紀初頭以前と考えられる。

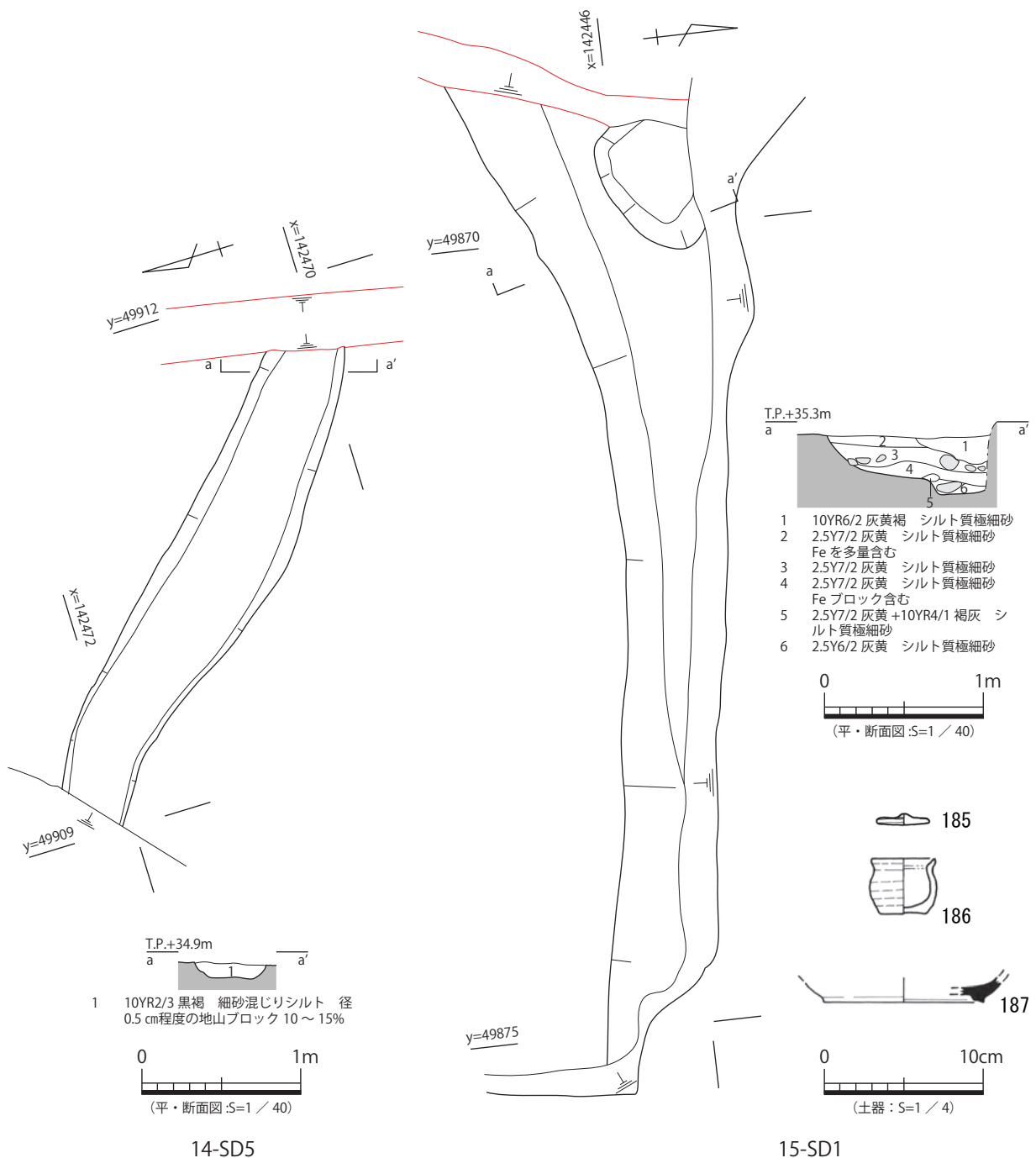


図 80 14-SD 5、15-SD 1 平・断面図、出土遺物実測図

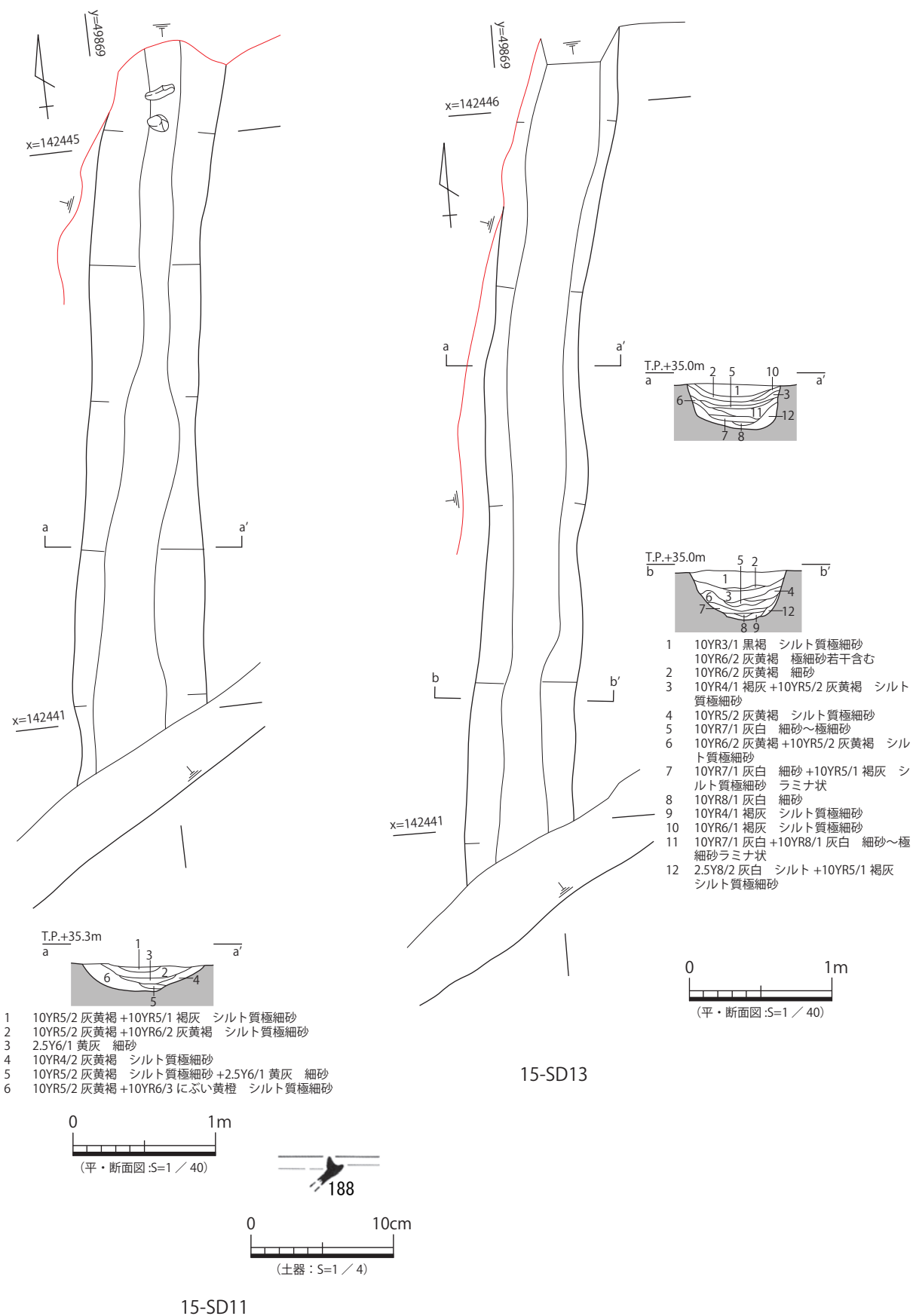


図 81 15-SD11・13 平・断面図、出土遺物実測図

(4) 土坑

1 - SK13 (図 82)

調査区の西部北寄りで検出した土坑であり、1 - SX10 に切られる。検出面の標高は 34.80 m である。

平面形は不整な円形である。直径は 0.79m、深さ 0.06 m を測る。主軸方向は N - 86° - E である。断面形状は逆台形である。

埋土はにぶい黄橙シルト質細砂の単一層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

1 - SK19 (図 82)

調査区の西部南側で検出した土坑であり、北側は攪乱を受け、南側・西側は調査区外である。検出面の標高は 34.80 m である。

平面形は不明である。検出できた直径は 0.47m、深さ 0.23 m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は灰白シルト質細砂の単一層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

1 - SK21 (図 82)

調査区の西部北寄りで検出した土坑である。検出面の標高は 34.80 m である。

平面形は楕円形である。長軸は 1.03m、短軸は 0.66 m、深さ 0.04 m を測る。主軸方向は N - 30° - W である。断面形状は逆台形である。

土師器片が数点出土したが、詳細な時期は不明である。

1 - SK22 (図 82)

調査区の西部中央で検出した土坑である。検出面の標高は 34.80 m である。

平面形は南側が尖った不整な楕円形である。長軸は 0.80m、短軸は 0.53 m、深さ 0.06 m を測る。主軸方向は N - 27° - W である。断面形状は逆台形であり、底面の東側に段を有する。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

2 - SK 5 (図 82)

調査区の東部中央で検出した土坑である。検出面の標高は 34.80 m である。

平面形は円形に近い隅丸方形である。一辺は 1.34m、深さ 0.31 m を測る。主軸方向は N - 22°

- E である。断面形状は U 字形であり、底面が北側に片寄っており、南東隅の掘り込みは緩やかな傾斜である。

埋土は 2 層に分層でき、上層から地山ブロックを 15% 含む暗褐シルト質細砂、にぶい黄褐シルト質細砂であり、上層が大部分を占める。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

2・4 - SK 6 (図 82)

調査区の中央部中央で検出した土坑である。検出面の標高は、第 2 調査区が 34.80 m、第 4 調査区で 34.60 m である。

平面形は不整な楕円形であり、検出面の標高が異なるため不整合な平面形である。長軸は 2.08m 以上、短軸は 1.52 m、深さは 0.18 m を測る。主軸方向は N - 60° - E である。断面形状は逆台形であり、北側の掘り込みは緩やかな傾斜である。

埋土はにぶい黄橙シルト質細砂の単一層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

2 - SK47 (図 82)

調査区の東部中央で検出した土坑である。検出面の標高は 34.80 m である。

平面形は三角形に近い不整な円形である。直径は 1.32 × 1.16m、深さ 0.29 m を測る。主軸方向は N - 34° - W である。断面形状は U 字形で、底面は西側に三日月型の段を有し、東側に細長い最深部がある。

埋土は 3 層に分層でき、上層からにぶい黄褐シルト、暗褐シルト質極細砂、にぶい黄褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

4 - SK44 (図 83)

調査区の中央部北側で検出した土坑である。検出面の標高は 34.70 m である。

平面形は不整な長方形である。長辺は 3.67m、短辺は 1.33 m、深さ 0.13 m を測る。主軸方向は N - 30° - W である。断面形状は逆台形であり、底面は中央に最深部がある。

埋土は 2 層に分層でき、上層が大部分を占める。

遺物は須恵器杯身 (189) が出土した。出土遺物の年代から古墳時代後期初頭～中葉と判断できる。

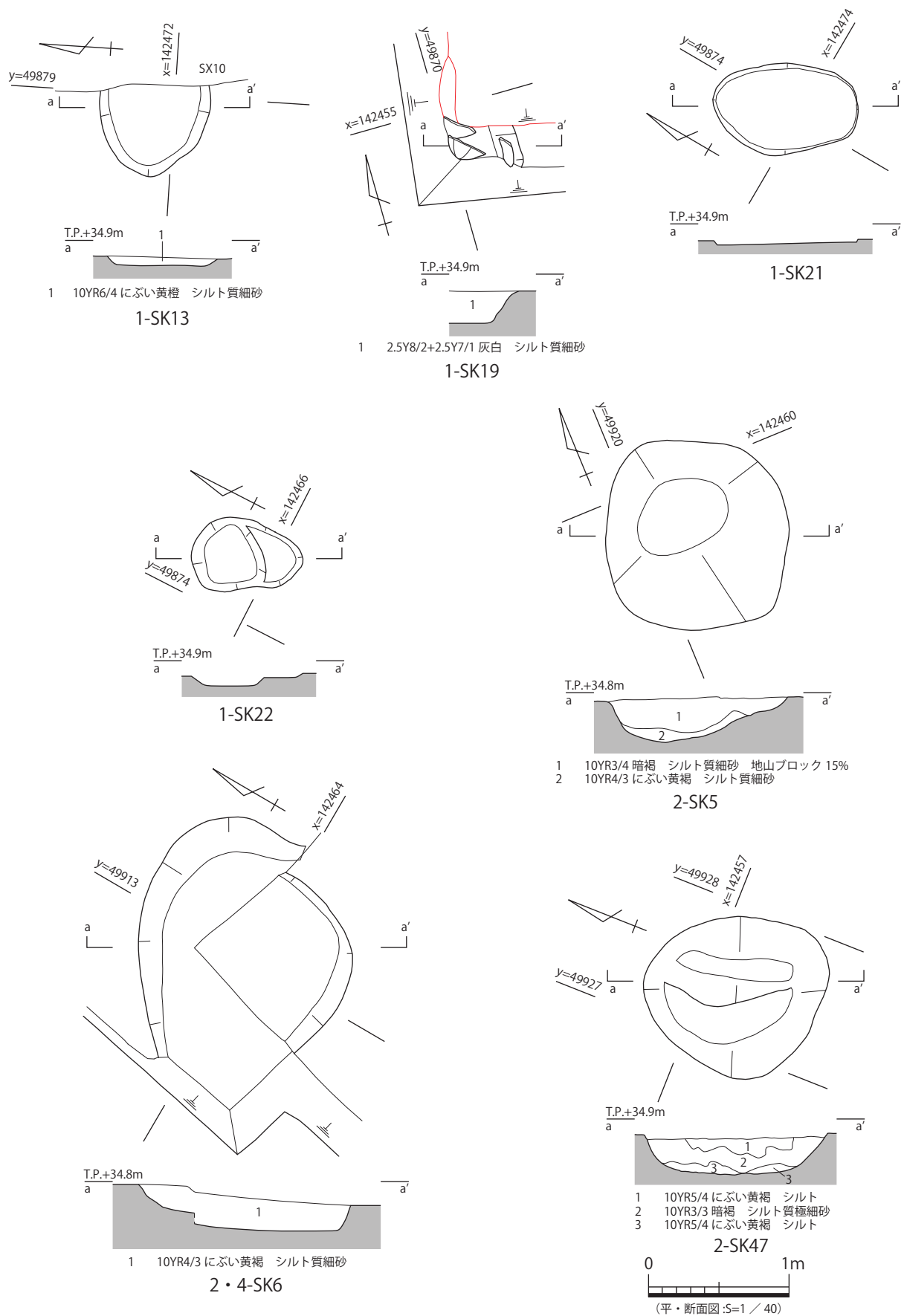


図 82 1-SK13・19・21・22、2-SK 5・47、2・4-SK 6 平・断面図

4－SK46（図 83）

調査区の中央部北側で検出した土坑である。検出面の標高は 34.80 m である。

平面形は不整な楕円形である。直径は 1.70 × 1.08m、深さ 0.07 m を測る。主軸方向は N－84°－W である。断面形状は逆台形である。

埋土は地山ブロックを 5 % 含む黒褐極細砂混じりシルトの単一層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

4－SK47（図 83）

調査区の中央部北側で検出した土坑である。検出面の標高は 34.80 m である。北東側は調査区外である。

平面形は隅丸長方形である。長辺は 2.41 m、短辺は 1.22m、深さ 0.18 m を測る。主軸方向は N－12°－W である。断面形状は逆台形であり、底面は凹凸が著しい。

埋土は 2 層に分層でき、上層から地山ブロックを 2 % 含む黒褐微細砂混じりシルト、地山ブロックを 5 % 含むにぶい黄褐微細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

4－SK48（図 83）

調査区の中央部北側で検出した土坑である。検出面の標高は 34.80 m である。

平面形は台形である。長辺は 2.41 m、短辺は 1.35m、深さ 0.08 m を測る。主軸方向は N－76°－W である。断面形状は逆台形であり、底面は凹凸が著しい。

埋土は地山ブロックを 3 % 含む黒褐微細砂質シルトの単一層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

4－SK75（図 83）

調査区の東部北側で検出した土坑であり、4－掘立 4 と重複する。検出面の標高は 34.80 m である。

平面形は隅丸長方形である。長辺は 1.85 m、短辺は 1.16m、深さ 0.39 m を測る。主軸方向は N－49°－W である。断面形状は U 字形であり、底面は南側に若干片寄る。

埋土は 5 層に分層でき、上層から細砂を含むにぶ

い黄褐シルト質細砂、灰黄褐シルト質極細砂、にぶい黄褐シルト質細砂＋灰白細砂、地山ブロックを 3 % 含むにぶい黄褐シルト質極細砂、地山ブロックを含むにぶい黄褐シルト質極細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

4－SK76（図 84）

調査区の東部北側で検出した土坑である。検出面の標高は 34.80 m である。

平面形は北側に張り出した不整な円形である。直径は 1.69 m、深さ 0.37 m を測る。主軸方向は N－46°－W である。断面形状は北側と東側に段を持つ U 字形である。

埋土は 5 層に分層でき、上層から地山ブロックを 3 % と褐灰ブロックを 10 % 含む黒褐細砂、地山ブロックを 10 % 含む暗褐細砂、にぶい黄褐シルト、地山ブロックを 7 % 含む暗褐細砂、地山ブロックを 30 % 含む暗褐細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

4－SK81（図 84）

調査区の東部北側で検出した土坑である。検出面の標高は 34.80 m である。

平面形は楕円形である。直径は 1.07 × 0.41m、深さ 0.06 m を測る。主軸方向は N－71°－E である。断面形状は U 字形である。

埋土はにぶい黄褐細砂の単一層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

4－SK85（図 84）

調査区の東部北側で検出した土坑であり、4－掘立 5 に切られる。検出面の標高は 34.90 m である。

平面形は楕円形である。長軸は 2.42 m、短軸は 0.66m、深さ 0.10 m を測る。主軸方向は N－85°－E である。断面形状は U 字形である。

埋土は地山ブロックを 3 % 含む黒褐細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

4・14－SK97（図 84）

調査区の中央部北側で検出した土坑であり、中央に現有水路があり、西側は攪乱を受ける。検出面の標高は 34.90 m である。

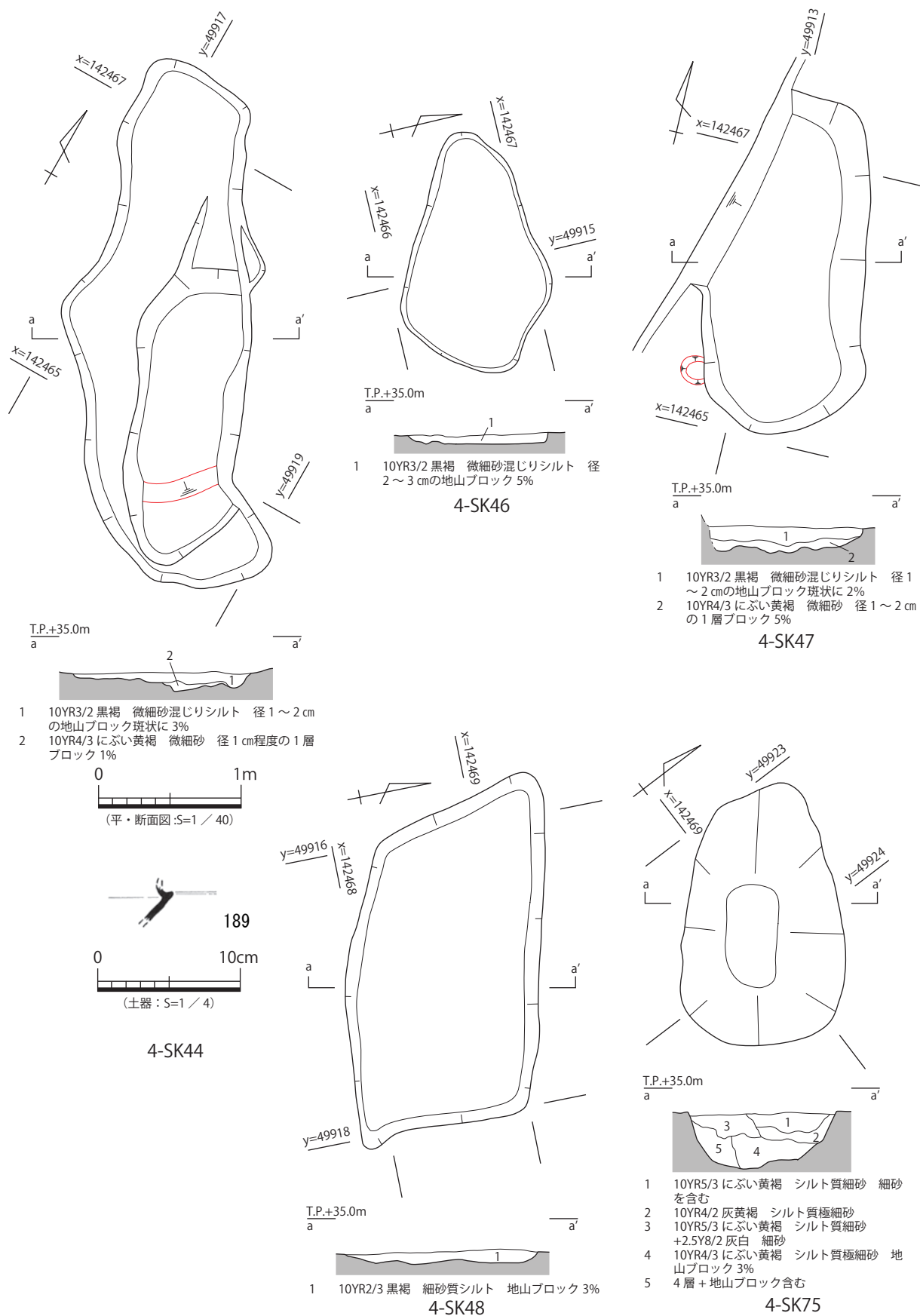


図 83 4-SK44・46～48・75 平・断面図、出土遺物実測図

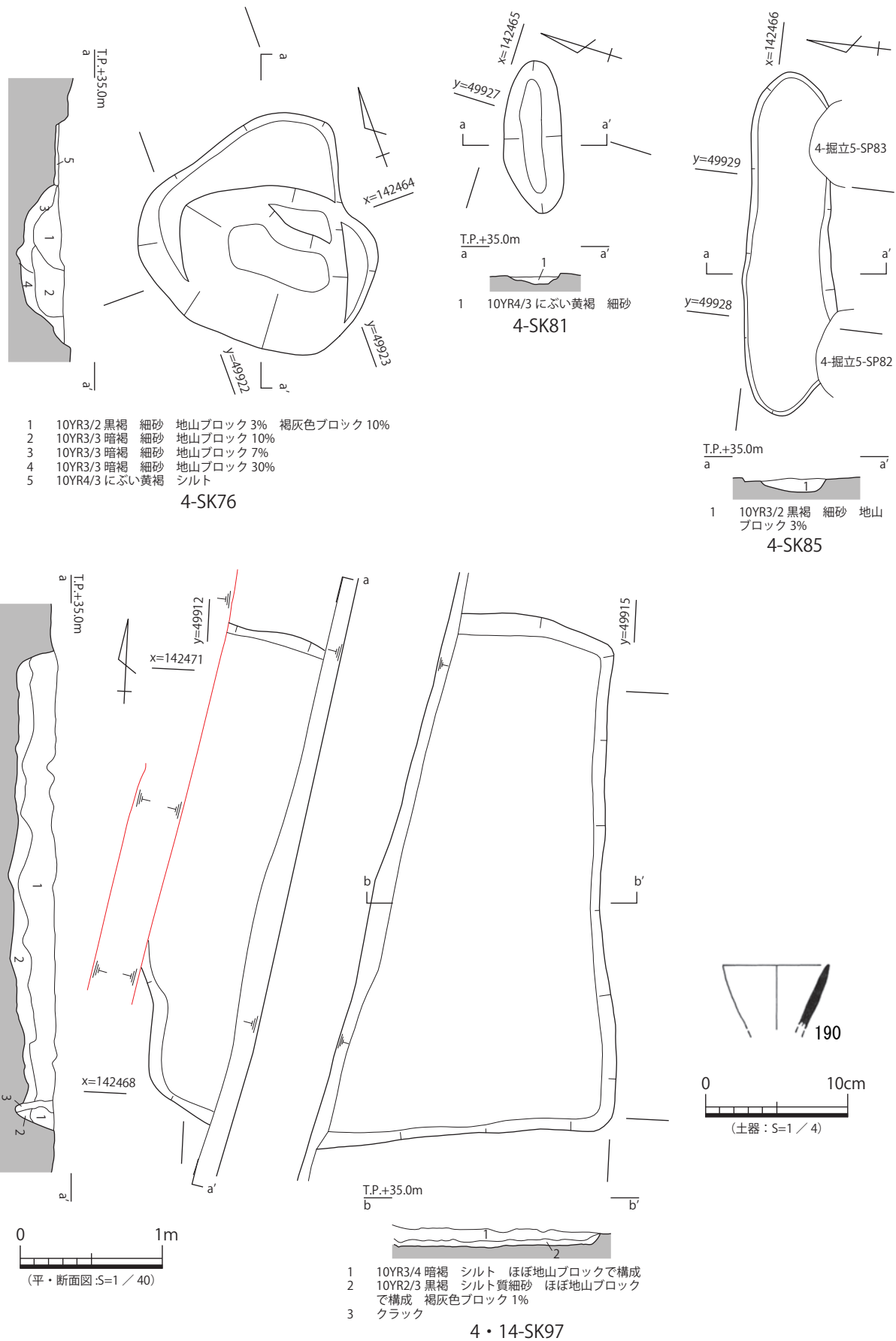


図 84 4-SK76・81・85、4・14-SK97 平・断面図、出土遺物実測図

平面形は方形であり、長辺は 3.66 m、短辺は 3.26m、深さ 0.33 mを測る。主軸方向は N－85°－E である。断面形状は逆台形である。

埋土は地山ブロックを多量に含む暗褐シルト、褐灰ブロックを 1 %と地山ブロックを多量に含む黒褐シルト質細砂である。

遺物は須恵器甕（190）が出土した。出土遺物の年代から飛鳥・奈良時代と判断できる。

4－SK98（図 85）

調査区の東部北側で検出した土坑である。検出面の標高は 34.70 mである。

平面形は不整な楕円形である。長軸は 3.60 m、短軸は 1.70m、深さ 0.11 mを測る。主軸方向は N－32°－E である。断面形状は逆台形であり、北東側に最深部がある。

埋土は地山ブロックを 10%含む暗褐シルト質細砂、地山ブロックを 15%含む灰黄シルト質細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

4・14－SK140（図 85）

調査区の中央部北端で検出した土坑であり、4・14－竪穴 130 に切られる。中央に現有水路があり、北側は調査区外である。検出面の標高は 34. 60 mである。

平面形は不明であり、検出できた長さは 4.85 m、深さ 0.37 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は 6 層に分層でき、レンズ状堆積を呈しており自然堆積と推測できる。

遺物は須恵器甕（191）、土師器（192）が出土した。出土遺物・切り合い関係から T K 10 形式併行期以前と判断できる。

6－SK30（図 86）

調査区の中央部南側で検出した土坑である。検出面の標高は 34.80 mである。

平面形は不整な三角形である。長さは 1.13 m、深さ 0.10 mを測る。断面形状は浅い U 字形である。

埋土は地山ブロックを 10%含む灰黄褐シルト質細砂～中砂の単一層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

6－SK32（図 86）

調査区の中央部南側で検出した土坑である。検出面の標高は 34.90 mである。

平面形は南側と西側をコンクリート基礎に削平されるため不明である。検出した長さは約 1.55 m、深さ 0.16 mを測る。断面形状は浅い逆台形であり、底面は凹凸が著しい。

埋土は地山ブロックを 40～50%含む暗褐細砂混じりシルトの単一層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

6－SK33（図 86）

調査区の中央部南側で検出した土坑であり、6－SK35 に切られる。検出面の標高は 34.80 mである。

平面形は西側をコンクリート基礎に削平されるが不整な円形である。検出した直径は 1.66 m、深さ 0.21 mを測る。断面形状は U 字形である。

埋土は 2 層に分層でき、地山ブロックを 5 %含む黒褐シルト混じり細砂、地山ブロックを 30 %含む暗褐シルト混じり細砂である。

土師器甕の小片が出土したが、時期は不明である。

6－SK34（図 86）

調査区の中央部南側で検出した土坑である。東側をコンクリート基礎に削平される。検出面の標高は 34.90 mである。

平面形は円形である。検出した直径は 1.05 m、深さ 0.16 mを測る。断面形状は U 字形である。

埋土は地山ブロックを 30～40%含む黒褐細砂混じりシルトの単一層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

6－SK35（図 86）

調査区の中央部南側で検出した土坑であり、6－SK33 を切る。西側をコンクリート基礎に削平される。検出面の標高は 34.80 mである。

平面形は楕円形である。検出した長軸は 1.93 m、短軸 0.76 m、深さ 0.51 mを測る。断面形状は U 字形である。

埋土は 4 層に分層でき、第 1 層が厚く堆積する。

土師器甕の小片が出土したが、時期は不明である。

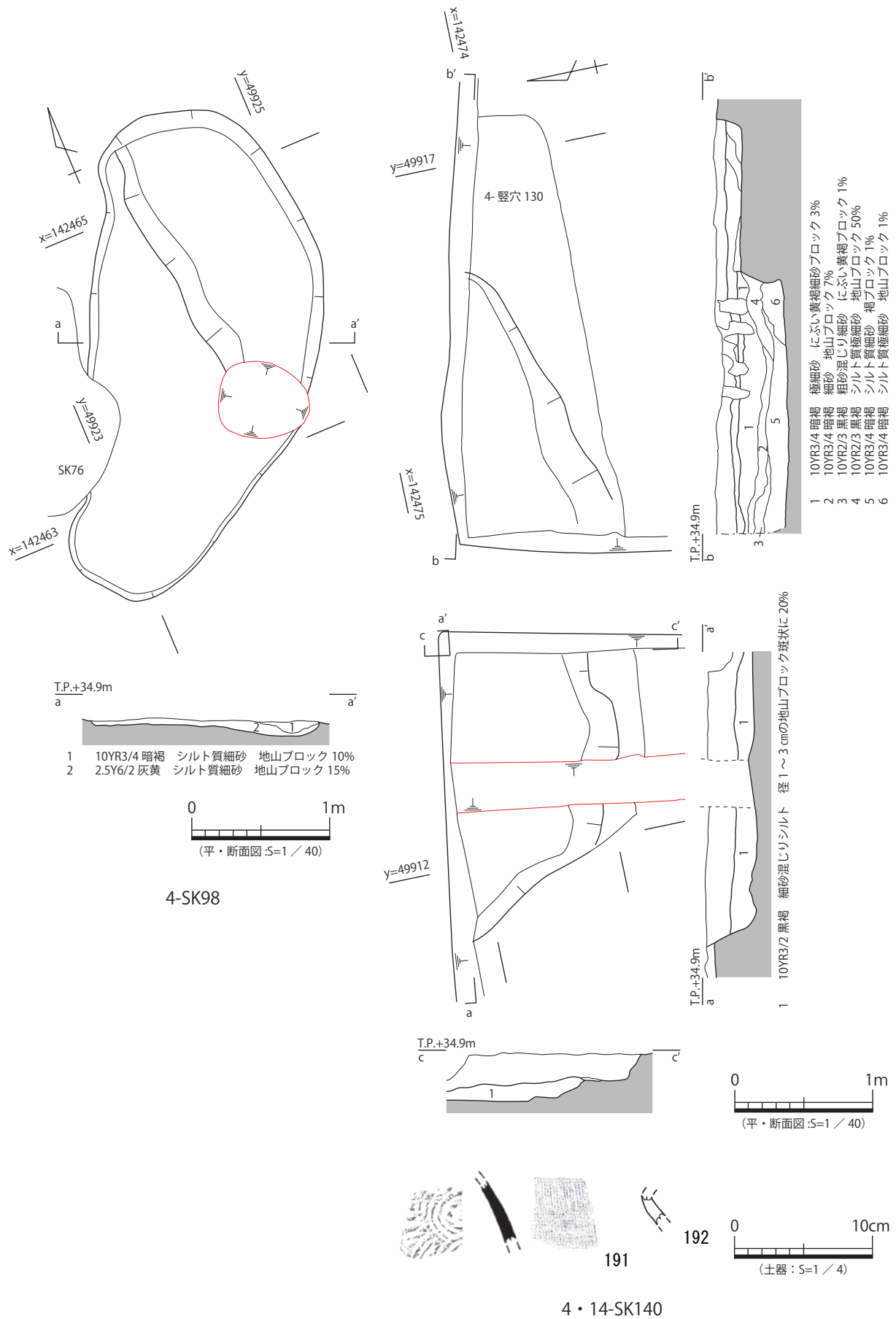


図 85 4-SK98、4・14-SK140 平・断面図、出土遺物実測図

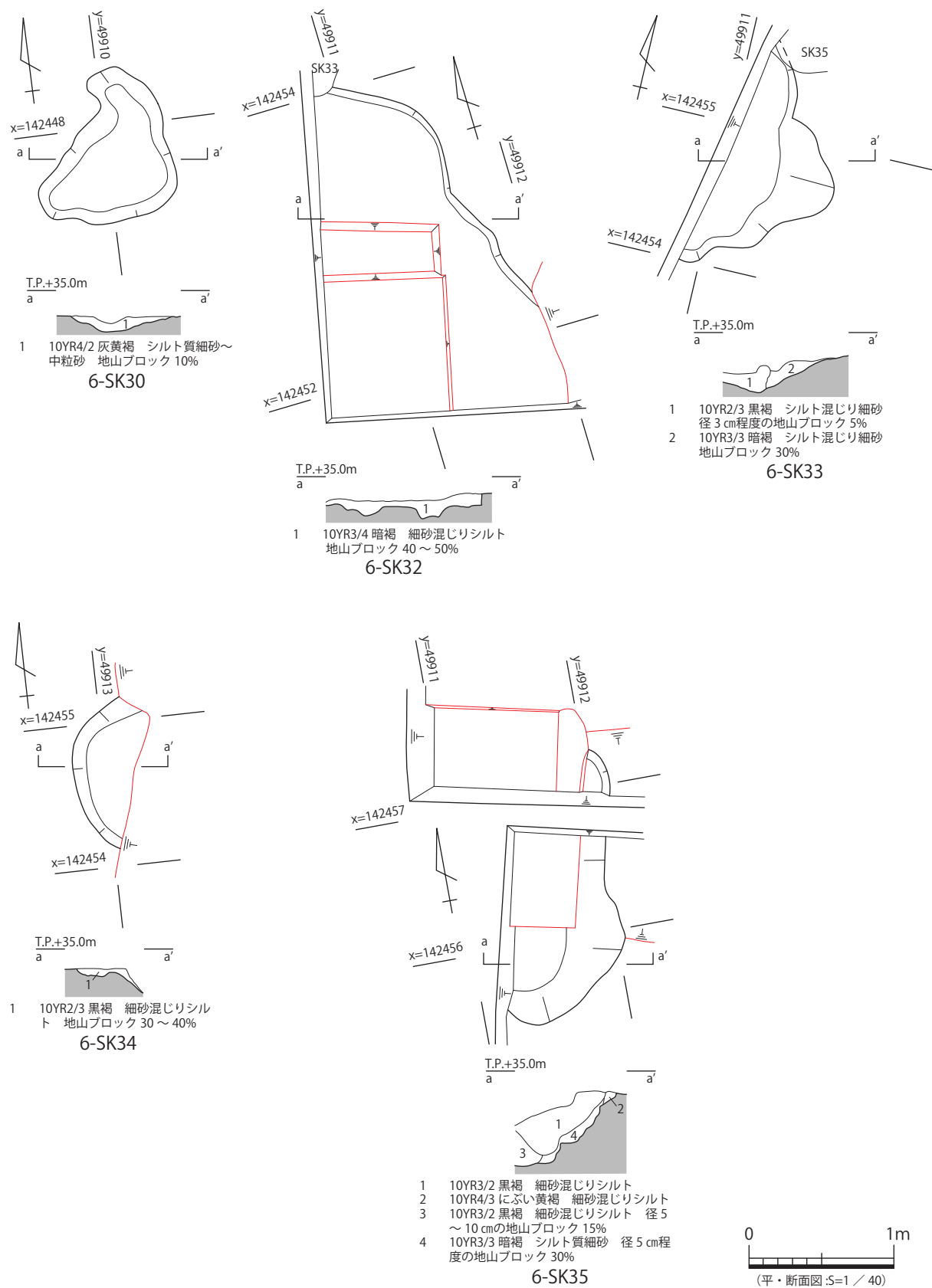


図 86 6-SK30・32～35 平・断面図

7-SK23 (図 87)

調査区の中央部北端で検出した土坑であり、7 - 竪穴 1・2 を切る。検出面の標高は 34.90 m である。

平面形は不整な方形である。長辺は 2.43 m、短辺 2.32 m、深さ 0.43 m を測る。主軸方向は N - 22° - W である。断面形状は逆台形であり、底面は凹凸がある。

埋土は 7 層に分層でき、不規則な堆積を呈しており、人為的な埋め戻しと推測できる。

遺物は須恵器杯蓋 (193)・高杯 (194・195)、土師器甕 (196)・甑 (197)、叩き石 (198)、砥石 (199)

が出土した。出土遺物の年代から古墳時代後期後葉～7 世紀初頭と判断できる。

7-SK24 (図 88)

調査区の中央部北側で検出した土坑であり、7 - 竪穴 7、7・14 - 竪穴 8 を切る。検出面の標高は 34.80 m である。

平面形は不整な楕円形である。長軸は 5.21 m、短軸は 2.75 m、深さ 0.34 m を測る。主軸方向は N - 75° - W である。断面形状は逆台形である。

埋土は 4 層に分層でき、レンズ状堆積である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

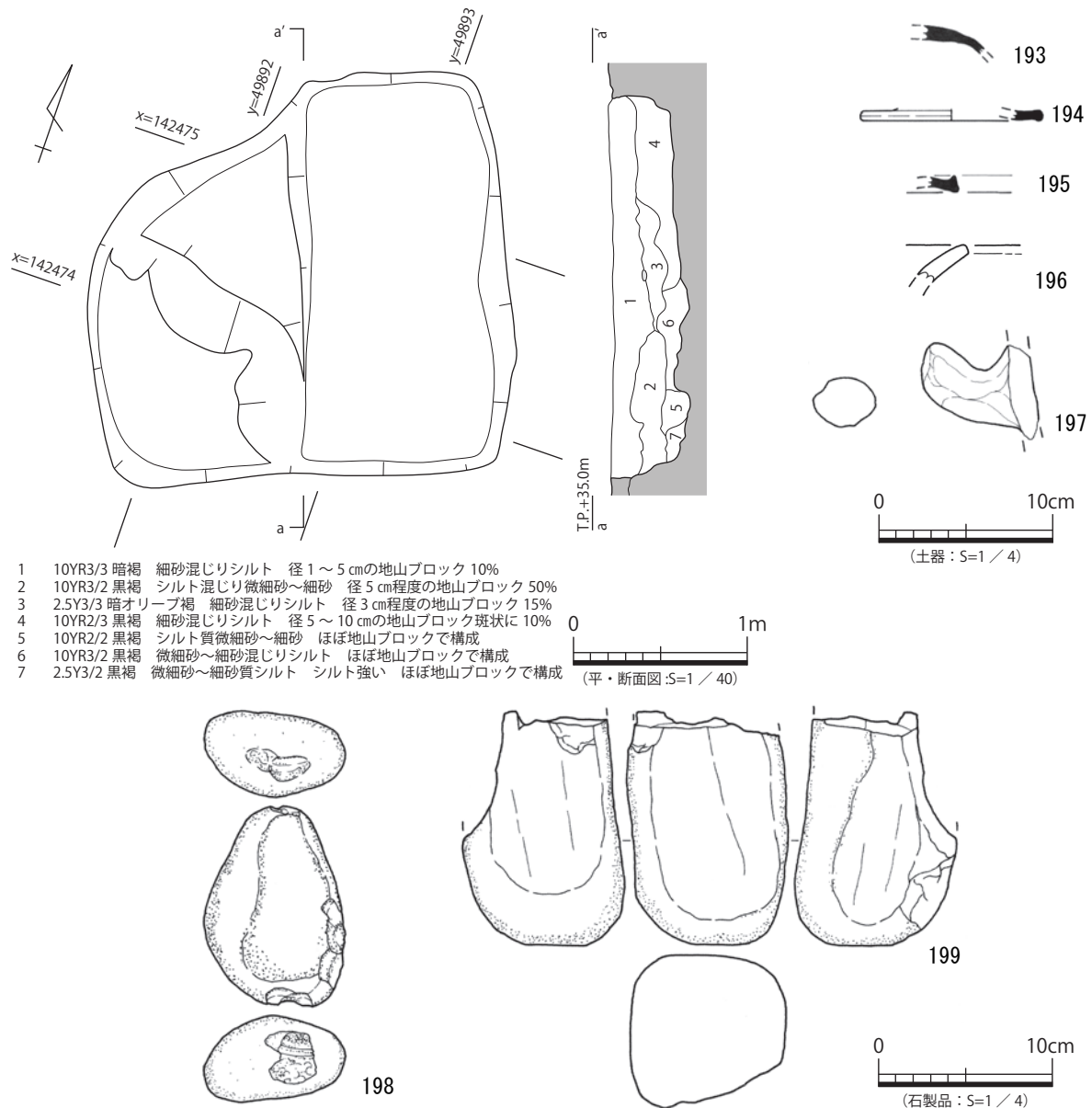


図 87 7-SK23 平・断面図、出土遺物実測図

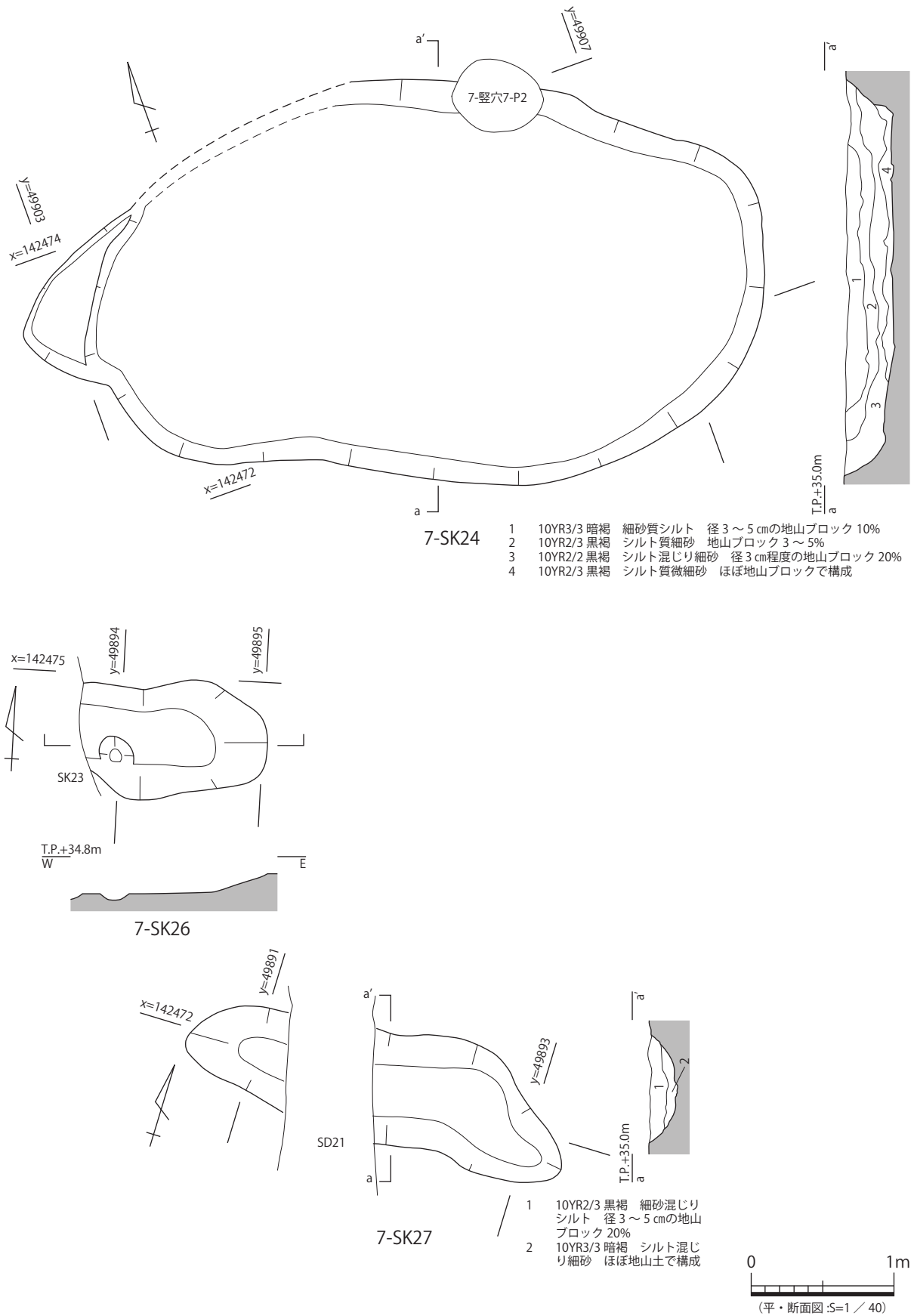


図 88 7-SK24・26・27 平・断面図

7－SK26（図88）

調査区の中央部北側で検出した土坑であり、7－
- 竪穴1、7－SK23に切られる。検出面の標高は34.70 mである。

平面形は不整な楕円形である。検出した長軸は1.31 m、短軸は0.78m、深さ0.12 mを測る。主軸方向はN－90°－Wである。断面形状は逆台形である。

埋土は2層に分層でき、第2層が厚く堆積する。

遺物が出土してないため時期は不明であるが、切り合い関係から古墳時代後期以前と判断できる。

7－SK27（図88）

調査区の中央部北側で検出した土坑であり、7・
8・9－SD21に切られる。検出面の標高は34.90 mである。

平面形は不整な楕円形である。長軸は2.77 m、短軸は0.85m、深さ0.20 mを測る。主軸方向はN－88°－Wである。断面形状はU字形である。

埋土は2層に分層できる。

遺物は土師器甕の小片が出土し、詳細な時期は不明であるが、切り合い関係から飛鳥時代以前と判断できる。

7－SK30（図89）

調査区の中央部北側で検出した土坑であり、7－
- 竪穴10に切られる。検出面の標高は34.90 mである。

平面形は不整な楕円形である。長軸は3.34 m、短軸は1.39m、深さ0.30 mを測る。主軸方向はN－74°－Wである。断面形状はU字形である。

埋土は3層に分層でき、第1・2層が厚く堆積する。

遺物は須恵器壺と土師器甕の小片が出土し、遺物の年代と切り合い関係からMT 85形式併行期以前と判断できる。

7－SK40（図89）

調査区の中央部中央で検出した土坑であり、7－
- 竪穴10・11を切る。検出面の標高は34.60 mである。

平面形は円形である。直径は0.78 m、深さ0.22 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は2層に分層できる。

遺物が出土してないが、切り合い関係からTK 43～TK 209形式併行期以後と判断できる。

7－SK43（図89）

調査区の中央部中央で検出した土坑であり、7－
- 竪穴10と重複する。検出面の標高は34.60 mである。

平面形は不整な楕円形である。長軸は2.29 m、短軸は1.03m、深さ0.13 mを測る。主軸方向はN－49°－Wである。断面形状はU字形である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

7－SK47（図89）

調査区の中央部中央で検出した土坑であり、7－
- 竪穴6、7－SD25に切られる。検出面の標高は34.60 mである。

平面形は楕円形である。長軸は1.54 m、短軸は0.97m、深さ0.21 mを測る。主軸方向はN－20°－Wである。断面形状はU字形である。

埋土は3層に分層でき、第1層が厚く堆積する。

遺物が出土してないが、切り合い関係からTK 10形式併行期以前と判断できる。

8－SK51（図89）

調査区の中央部南端で検出した土坑である。検出面の標高は34.80 mである。

平面形は隅丸方形である。検出した長さは0.78 m、深さ0.16 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単一層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

9－SK10（図90）

調査区の西部中央で検出した土坑である。検出面の標高は34.80 mである。

平面形は不整な楕円形である。長軸は1.29 m、短軸は0.80m、深さ0.21 mを測る。主軸方向はN－77°－Wである。断面形状はU字形である。

埋土は2層に分層でき、第1層が厚く堆積する。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

9－SK11（図90）

調査区の西部中央で検出した土坑である。検出面の標高は34.80 mである。

平面形は不整な楕円形である。長軸は2.04 m、

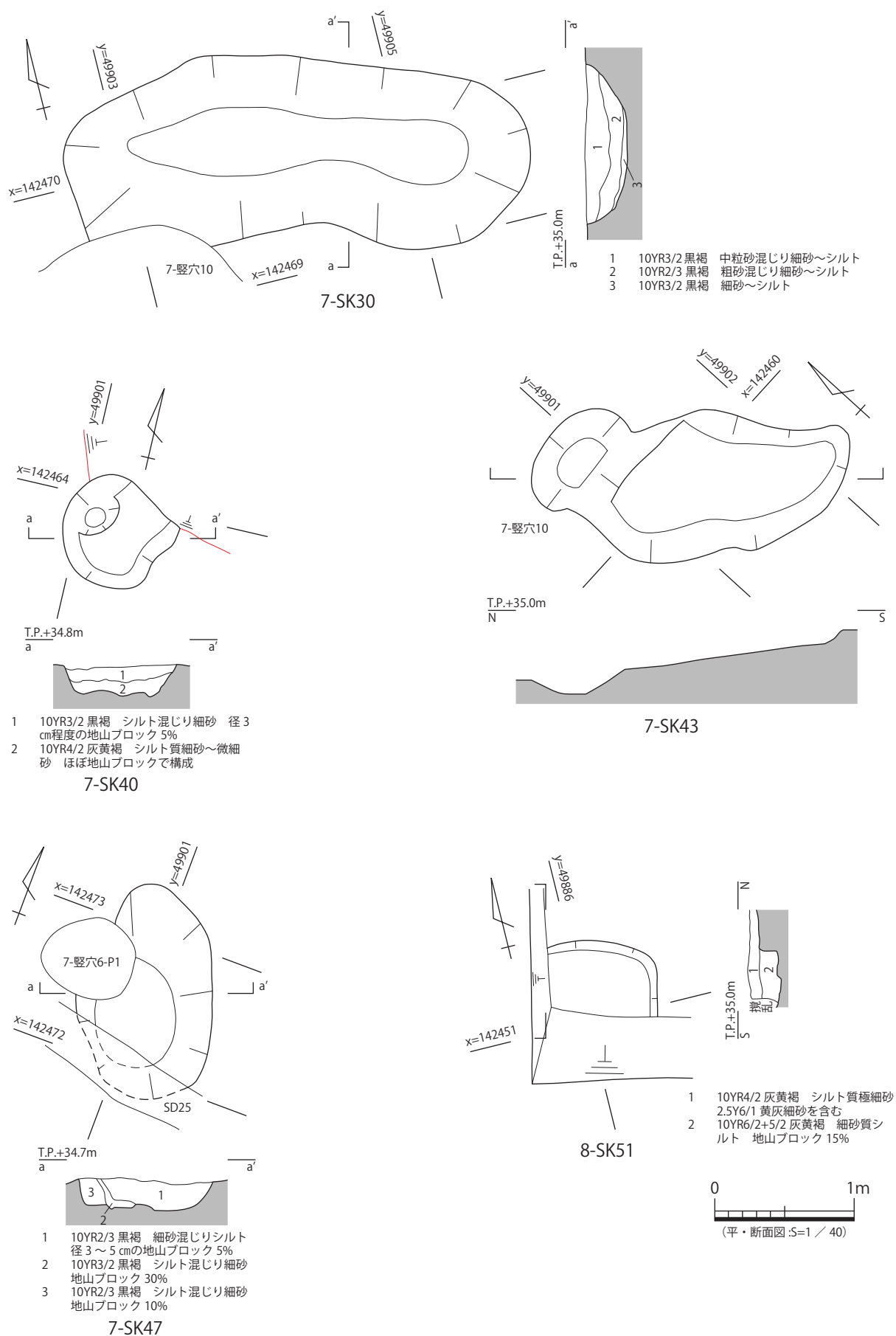


図 89 7-SK30・40・43・47、8-SK51 平・断面図

短軸は 1.32m、深さ 0.08 mを測る。主軸方向は N
 - 48°-W である。断面形状は浅い U 字形である。
 埋土は単一層である。
 遺物が出土していないため、時期は不明である。

9-SK12 (図 90)

調査区の西部中央で検出した土坑であり、9 -
 竪穴 1 と重複する。検出面の標高は 34.80 m である。
 平面形は不整な楕円形である。長軸は 0.97 m、
 短軸は 0.74m、深さ 0.15 mを測る。主軸方向は N
 - 27°-W である。断面形状は浅い U 字形である。

埋土は 2 層に分層でき、第 1 層が厚く堆積する。
 遺物が出土していないため、時期は不明である。

9-SK19 (図 90)

調査区の西部北端で検出した土坑であり、北側
 は調査区外である。検出面の標高は 34.90 m である。
 平面形は不整な楕円形である。検出した長さは
 3.08 m、深さ 0.24 mを測る。断面形状は U 字形
 である。
 埋土は 2 層に分層できる。
 遺物が出土していないため、時期は不明である。

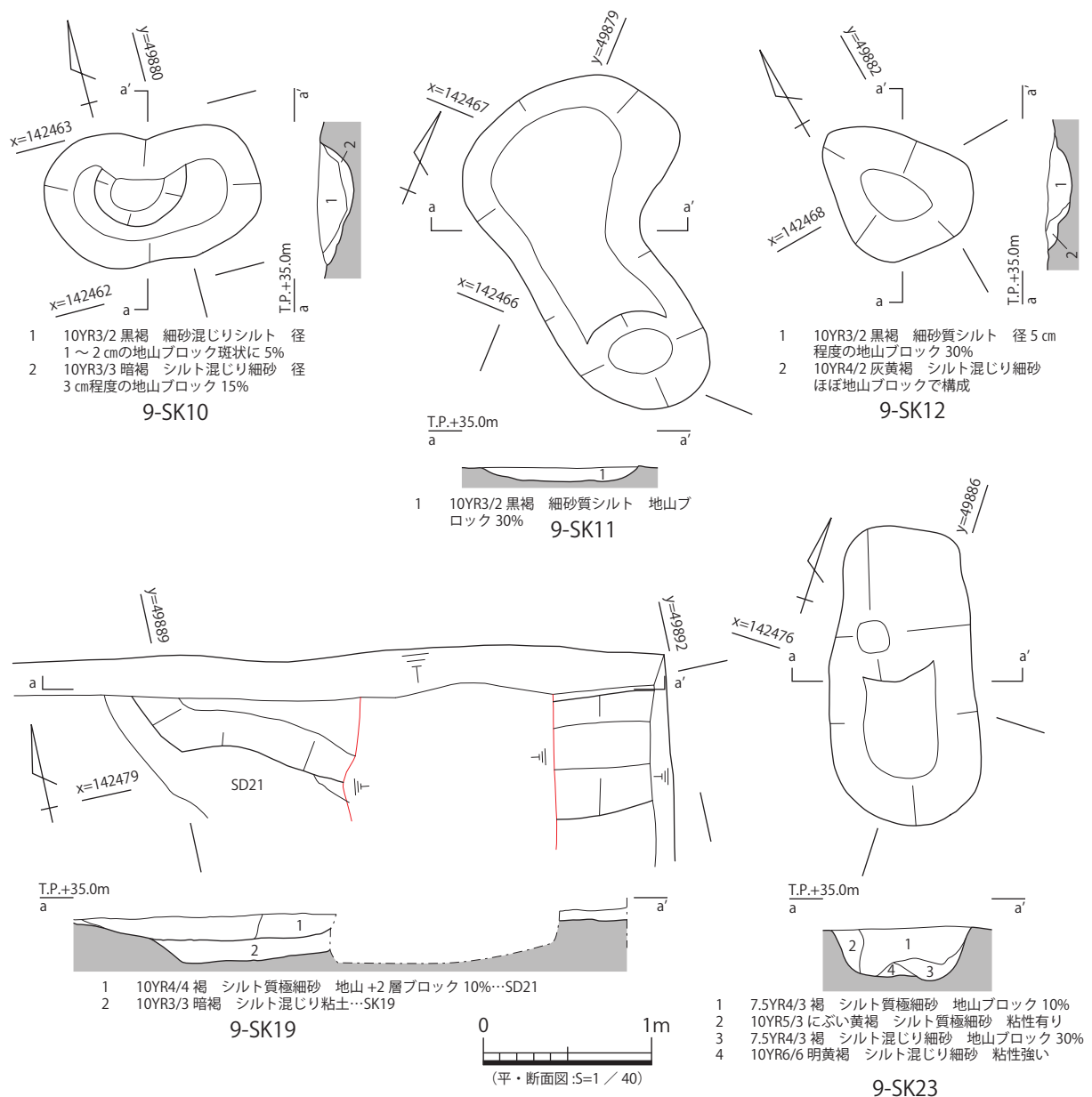


図 90 9-SK10 ~ 12・19・23 平・断面図

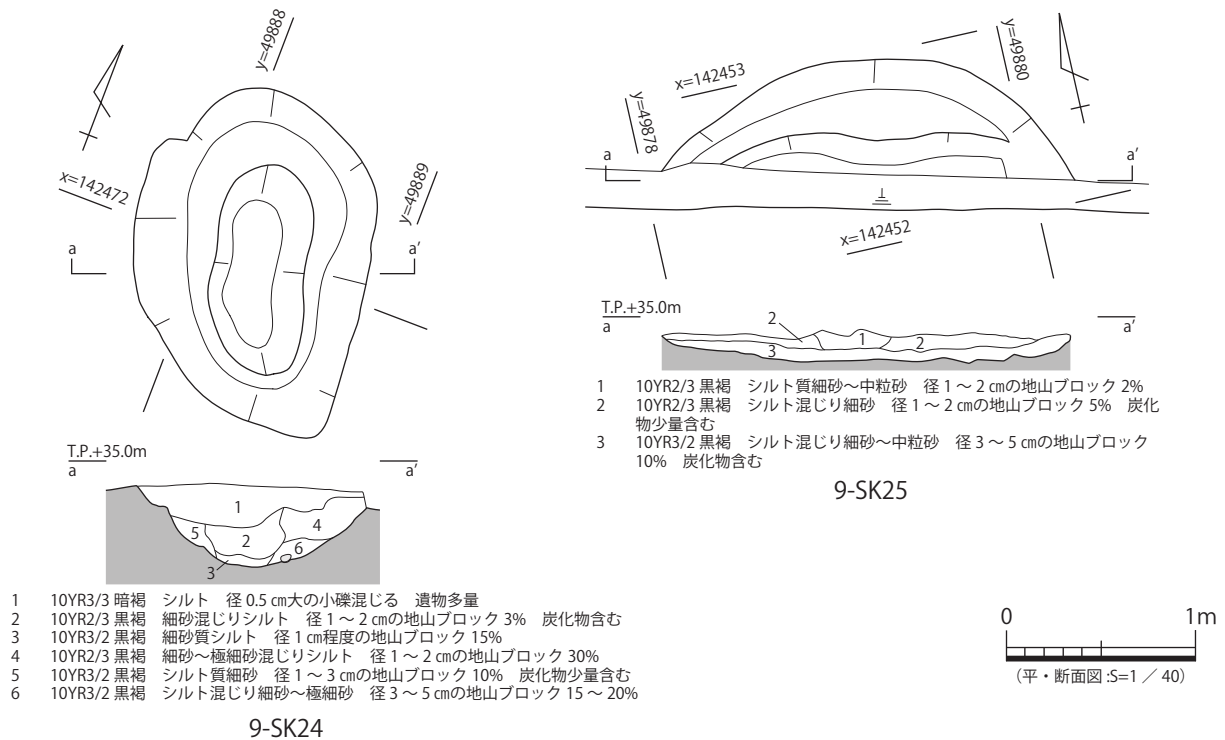


図 91 9-SK24・25 平・断面図

9-SK23 (図 90)

調査区の西部北側で検出した土坑である。検出面の標高は 34.80 m である。

平面形は楕円形である。長軸は 1.77 m、短軸は 0.88m、深さ 0.32 m を測る。主軸方向は N - 20° - W である。断面形状は U 字形である。

埋土は 4 層に分層でき、第 1 層が厚く堆積する。

遺物は土師器・弥生土器の小片が出土したが、時期は不明である。

9-SK24 (図 91)

調査区の西部北側で検出した土坑であり、7・9 - 竪穴 2 に切られる。検出面の標高は 34.90 m である。

平面形は楕円形である。長軸は 1.87 m、短軸は 1.31m、深さ 0.43 m を測る。主軸方向は N - 30° - W である。断面形状は U 字形である。

埋土は 6 層に分層できる。

遺物は土師器・弥生土器の小片が出土し、切り合い関係から古墳時代後期以前と判断できる。

9-SK25 (図 91)

調査区の西部南側で検出した土坑であり、南側

は調査区外である。検出面の標高は 34.90 m である。

平面形は円形である。検出した径は 2.19 m、深さ 0.16 m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は 3 層に分層できる。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

15-SK10 (図 92)

第 15 調査区の第 1 遺構面で検出した土坑であり、西側は攪乱を受ける。検出面の標高は 35.20 m である。

平面形は隅丸方形である。一辺は 1.04 m、深さ 0.19 m を測る。断面形状は逆台形であり、多量の石や礫が出土した。

遺物は須恵器・土師器・陶器の小片と鉄片が出土したが、詳細な時期は不明である。

15-SK14 (図 92)

第 15 調査区の第 3 遺構面で検出した土坑であり、南側は調査区外である。検出面の標高は 35.00 m である。

平面形は方形である。検出した長さは 0.80 m、深さ 0.15 m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単一層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

15 - SK15 (図 92)

第 15 調査区の第 3 遺構面で検出した土坑であり、東側は調査区外である。検出面の標高は 34.80 m である。

平面形は不整な円形である。検出した径は 1.63 m、深さ 0.18 m を測る。断面形状は逆台形である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

16 - SK57 (図 92)

調査区の西部南側で検出した土坑であり、1・16 - SD20 に切られる。検出面の標高は 34.90 m である。

平面形は楕円形である。長軸は 0.80 m、短軸 0.54 m、深さ 0.18 m を測る。断面形状は U 字形である。

埋土は 3 層に分層でき、第 1 層が厚く堆積する。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

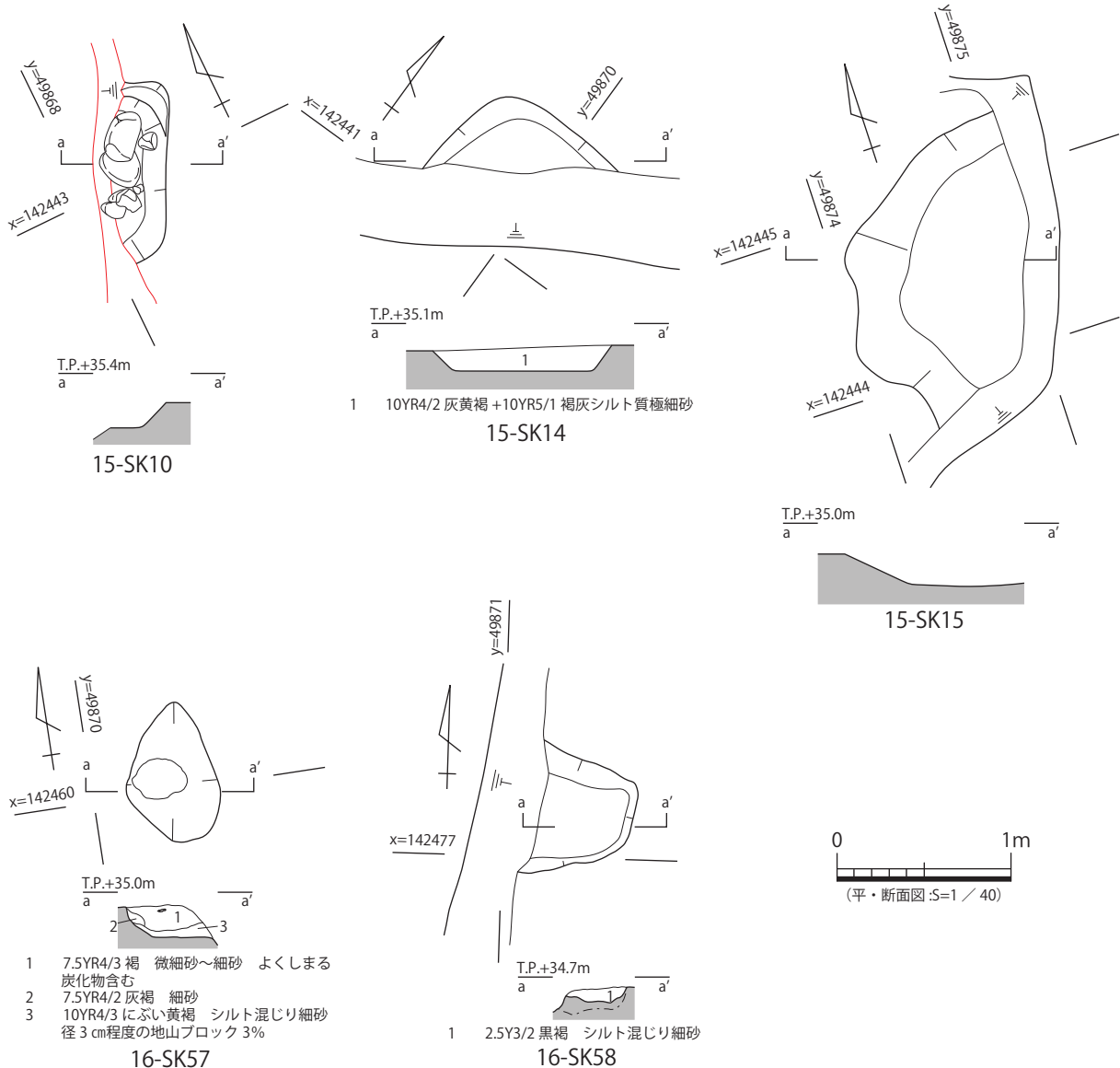


図 92 15-SK10・14・15、16-SK57・58 平・断面図

16 - SK58 (図 92)

調査区の西部北側で検出した土坑であり、西側は調査区である。検出面の標高は 34.60 m である。

平面形は不整な方形である。一辺は 0.77 m、深さ 0.09 m を測る。断面形状は U 字形である。

埋土は単一層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

(5) ピット

1 - SP25 (図 93)

調査区の西部中央で検出したピットである。検出面の標高は 34.80 m である。

平面形は不整な円形である。直径は 0.45 × 0.39

m、深さ 0.16 m を測る。断面形状は U 字形である。

遺物は土師器杯 (200) が出土したが、詳細な時期は不明である。

4 - SP41 (図 93)

調査区の東部北側で検出したピットである。検出面の標高は 34.60 m である。

平面形は円形である。直径は 0.42 × 0.34 m、深さ 0.13 m を測る。断面形状は段を有する U 字形である。

埋土は 2 層に分層できる。

遺物は須恵器甕 (201) が出土したが、詳細な時期は不明である。

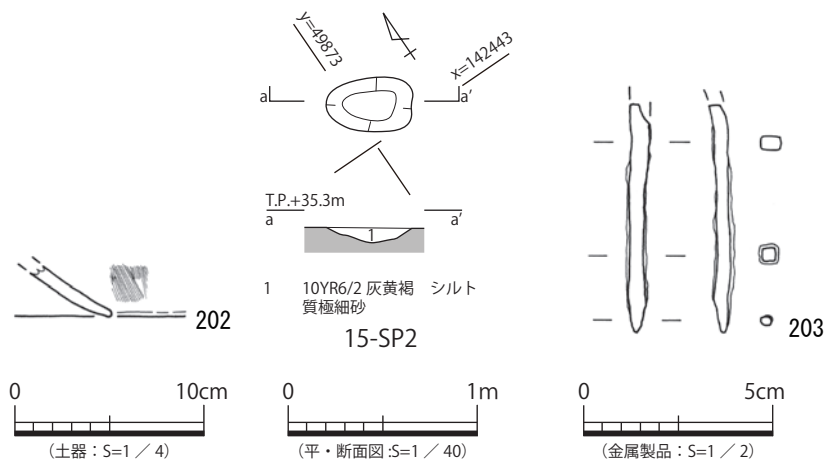
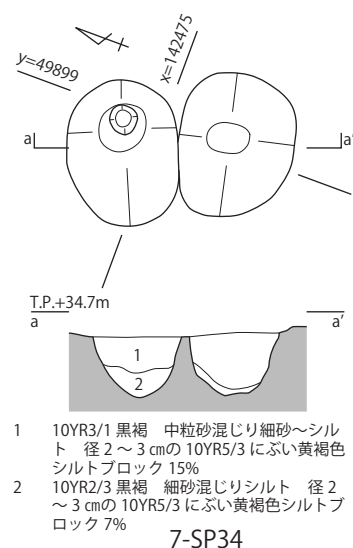
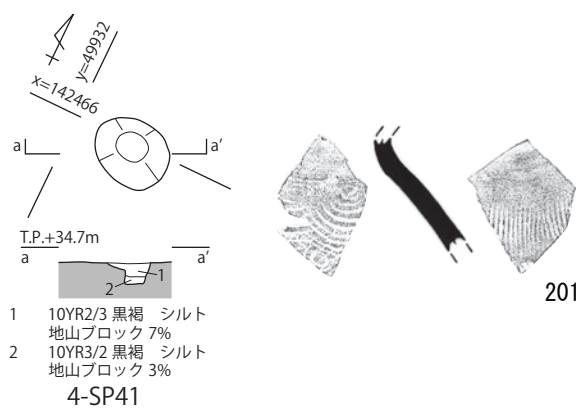
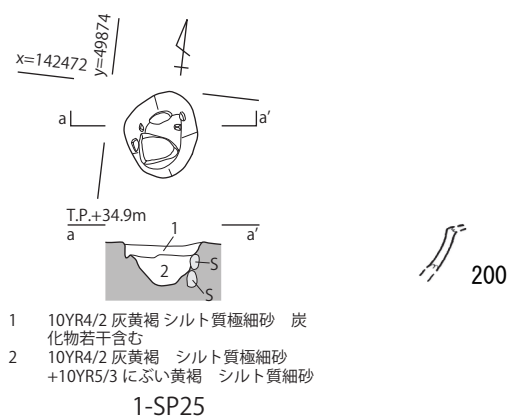


図 93 1-SP25、4-SP41、7-SP34、15-SP 2 平・断面図、出土遺物実測図

7-SP34 (図 93)

調査区の中央部北側で検出したピットである。
検出面の標高は 34.60 m である。

平面形は円形である。直径は 0.78×0.59 m、
深さ 0.32 m を測る。断面形状は U 字形である。

埋土は 2 層に分層できる。

遺物は土師器高杯 (202) が出土した。古墳時代
後期と判断できる。

15-SP 2 (図 93)

第 15 調査区の第 1 遺構面で検出したピットである。
検出面の標高は 35.20 m である。

平面形は楕円形である。直径は 0.45×0.29 m、
深さ 0.08 m を測る。断面形状は U 字形である。

埋土は灰黄褐シルト質極細砂の単一層である。

遺物は鉄製品 (203) が出土したが、詳細な時期
は不明である。

(6) 性格不明遺構

1・9-SX10 (図 94)

調査区の西部北側で検出した性格不明遺構である。
検出面の標高は 34.80 m である。

平面形は不整な方形である。一边は 2.61×2.24 m、
深さ 0.11 m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は黒褐シルト質極細砂の単一層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

1-SX15 (図 94)

調査区の西部南端で検出した性格不明遺構であり、
西側は攪乱を受け、南側は調査区外である。検
出面の標高は 34.80 m である。

平面形は円形である。検出した径は 2.14 m、深
さ 0.05 m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単一層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

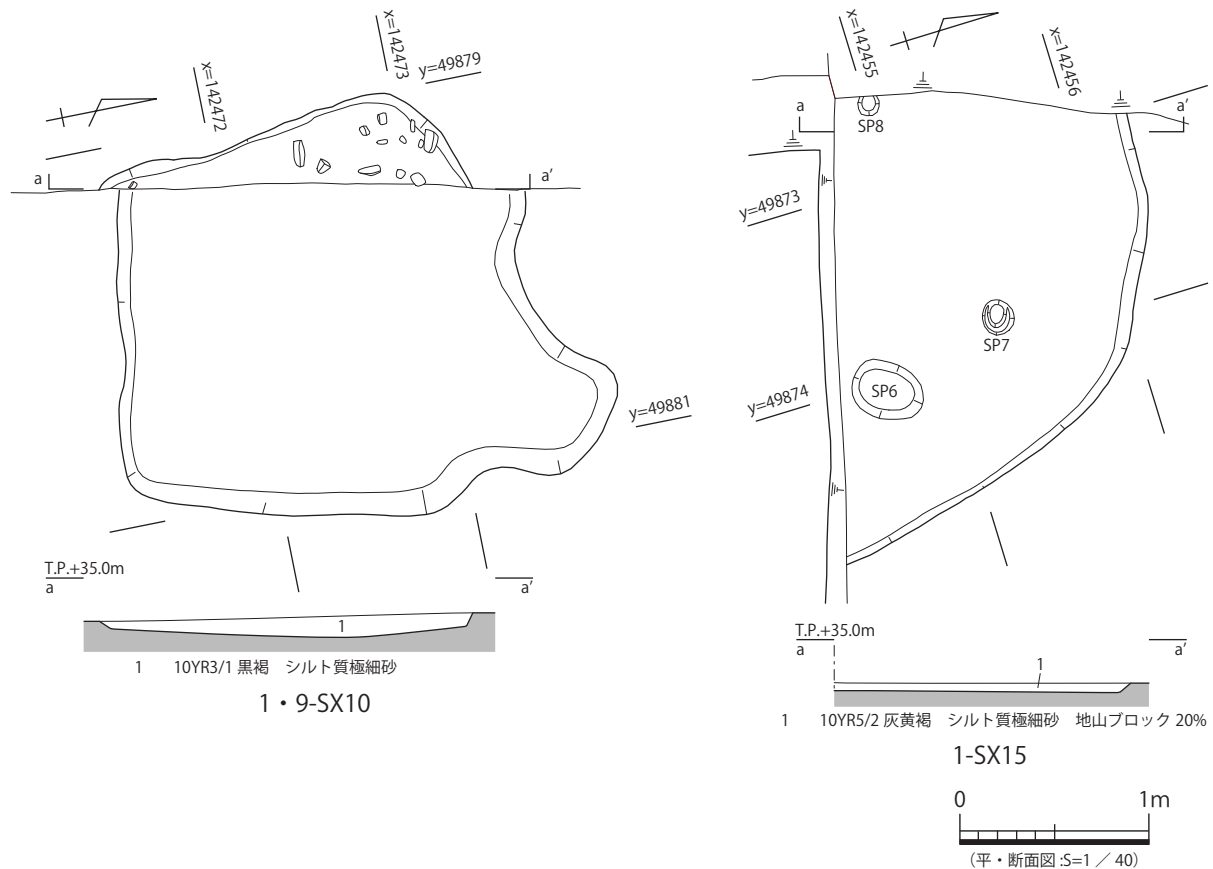


図 94 1・9-SX10、1-SX15 平・断面図

2・6－SX 7（図 95）

調査区の中央部中央で検出した性格不明遺構であり、南側は攪乱を受け、西側は調査区外である。検出面の標高は 34.60 m である。

平面形は円形である。検出した径は 3.77×3.27 m、深さ 0.15 m を測る。断面形状は逆台形であり、底面は凹凸がある。

埋土はにぶい黄褐シルト質細砂の単一層である。

遺物は土師器甗(204)、土師器小片が出土したが、詳細な時期は不明である。

2・4－SX10（図 95）

調査区の東部中央で検出した性格不明遺構であり、2 - SD 3・8 を切る。検出面の標高は 34.80 m である。

平面形は北東側に張り出しを有する不整な楕円形である。長軸は 3.64 m、短軸 2.40 m、深さ 0.75 m を測る。断面形状は段を有する U 字形である。底面は南側に最深部があり、北方向に向かって段々と高くなる。

埋土は 6 層に分層できる。第 1 層が厚く堆積し、全体として不規則な堆積を呈する。

遺物は鉄製品釘（205）、陶器・土師器の小片が出土した。出土遺物の年代から近世と判断できる。

2・5－SX24（図 96・97）

調査区の東部南側で検出した性格不明遺構であり、2・5 - SX50 に切られる。検出面の標高は 34.90 m である。

平面形は不整な円形である。直径は 3.20×2.80 m、深さ 0.34 m を測る。断面形状は逆台形であり、底面は段を有する。

埋土は 9 層に分層でき、不規則な堆積状態である。

遺物は土師器杯（206）、須恵器小片が出土した。出土遺物の年代・切り合い関係から 7 世紀初頭と判断できる。

2・5－SX40（図 96～99）

調査区の東部中央で検出した性格不明遺構であり、2・5 - SX50、5 - SD 2 を切る。検出面の標高は 34.90 m である。

第 2 調査区では竪穴建物として調査した。平面形は北側が不整な楕円形、南東側が方形を呈する。

南北方向の長軸は 6.00 m、東西方向の短軸は 4.80 m、深さ 0.22 m を測る。断面形状は逆台形である。

底面は平坦である。底面直上において 2 - SP39・52～55、5 - SP26・27 の 7 基のピットを確認した。2 - SP39 は楕円形で、直径 1.17×0.60 m、深さ 0.34 m である。2 - SP52 は楕円形で、直径 0.44×0.27 m、深さ 0.02 m である。2 - SP53～55 は円形で、直径 0.68～0.89 m、深さ 0.11～0.04 m である。5 - SP26・27 は円形で、直径 0.20 m、深さ 0.07～0.04 m である。底面直上の出土遺物は、須恵器甕（216・217）・高杯（221～225・227・228・232）・甕（230）、土師器甕（238・239・240）・製塩土器（242）である。

埋土は 7 層に分層でき、ほぼ水平な堆積である。埋土の出土遺物は、須恵器杯蓋（207・208）・杯身（209～215）・壺（218・219）・高杯（220・226・229）・甕（231）、土師器甕（233・235～237）・製塩土器（234・242）・甗（241）、羽口（243）、砥石（244）、台石（245）である。

出土遺物の年代と切り合い関係から T K 209 形式併行期と判断できる。

2・5－SX50（図 96・97・99）

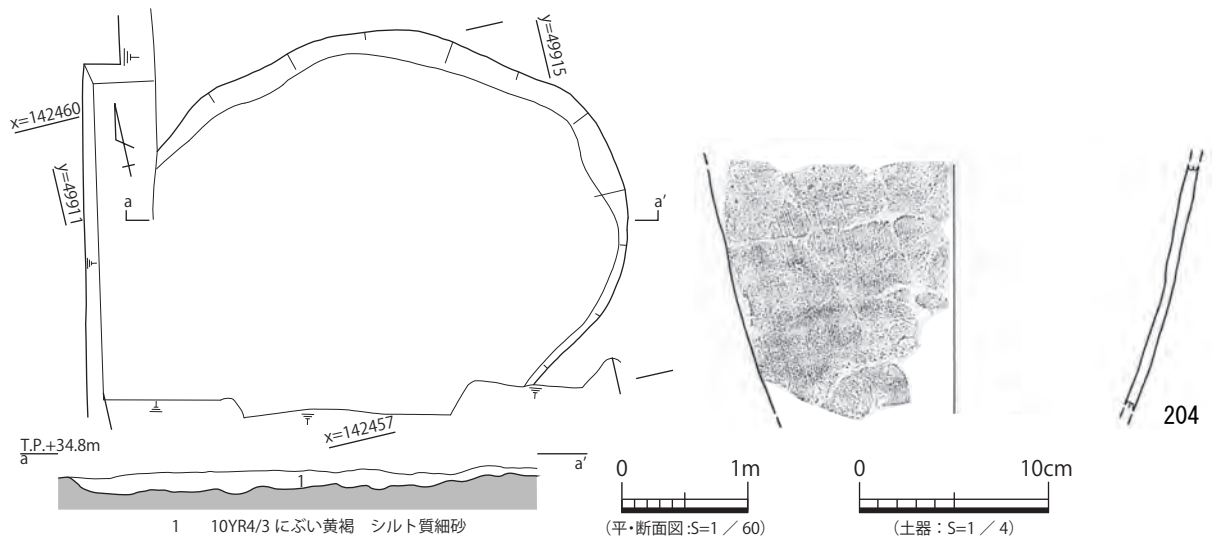
調査区の東部中央で検出した性格不明遺構であり、2・5 - SX40 に切られ、2・5 - SX24 を切る。検出面の標高は 34.90 m である。

第 2 調査区では竪穴建物として調査した。平面形は不整な五角形を呈する。北壁の長さは約 3.55 m、南壁・東壁は約 3.00 m、西壁は約 2.80 m を測り、深さは 0.20 m である。断面形状は逆台形である。

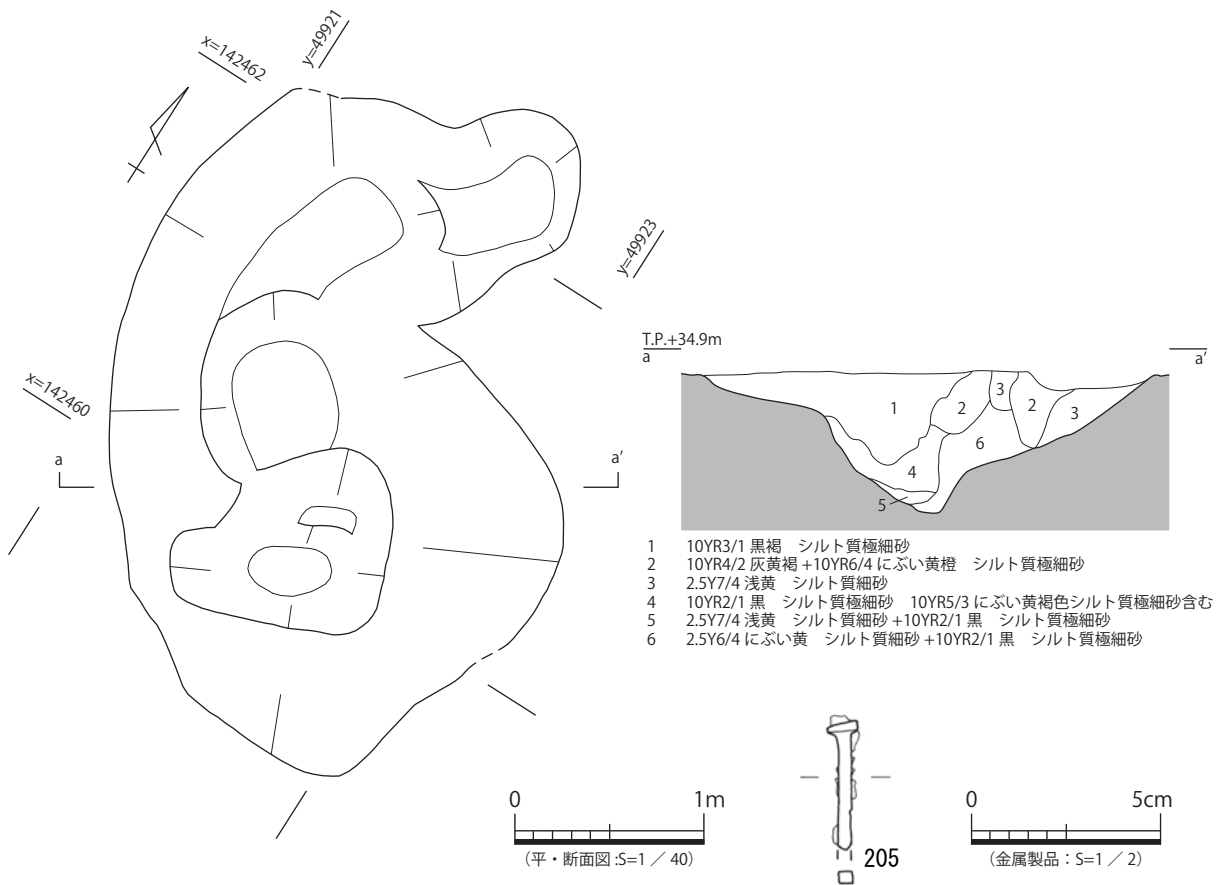
底面は平坦である。底面直上において 2 - SP59、5 - SP25 の 2 基のピットを確認した。2 - SP59 は円形で、直径 0.23 m、深さ 0.18 m を測る。5 - SP25 は円形で、直径 0.49 m、深さ 0.16 m を測る。底面直上の出土遺物は、須恵器杯蓋（252）・杯身（248・253・254）である。

埋土は 2 層に分層でき、ほぼ水平な堆積である。埋土の出土遺物は、須恵器杯蓋（246）・杯身（247）・杯（251）・高杯（249・250）、土師器甕（256～258）・製塩土器（259）・移動式カマド（260）、粘土塊（261・262）である。

出土遺物の年代と切り合い関係から T K 209 形式併行期と判断できる。



2・6-SX7



2・4-SX10

図 95 2・6-SX7、2・4-SX10 平・断面図、出土遺物実測図

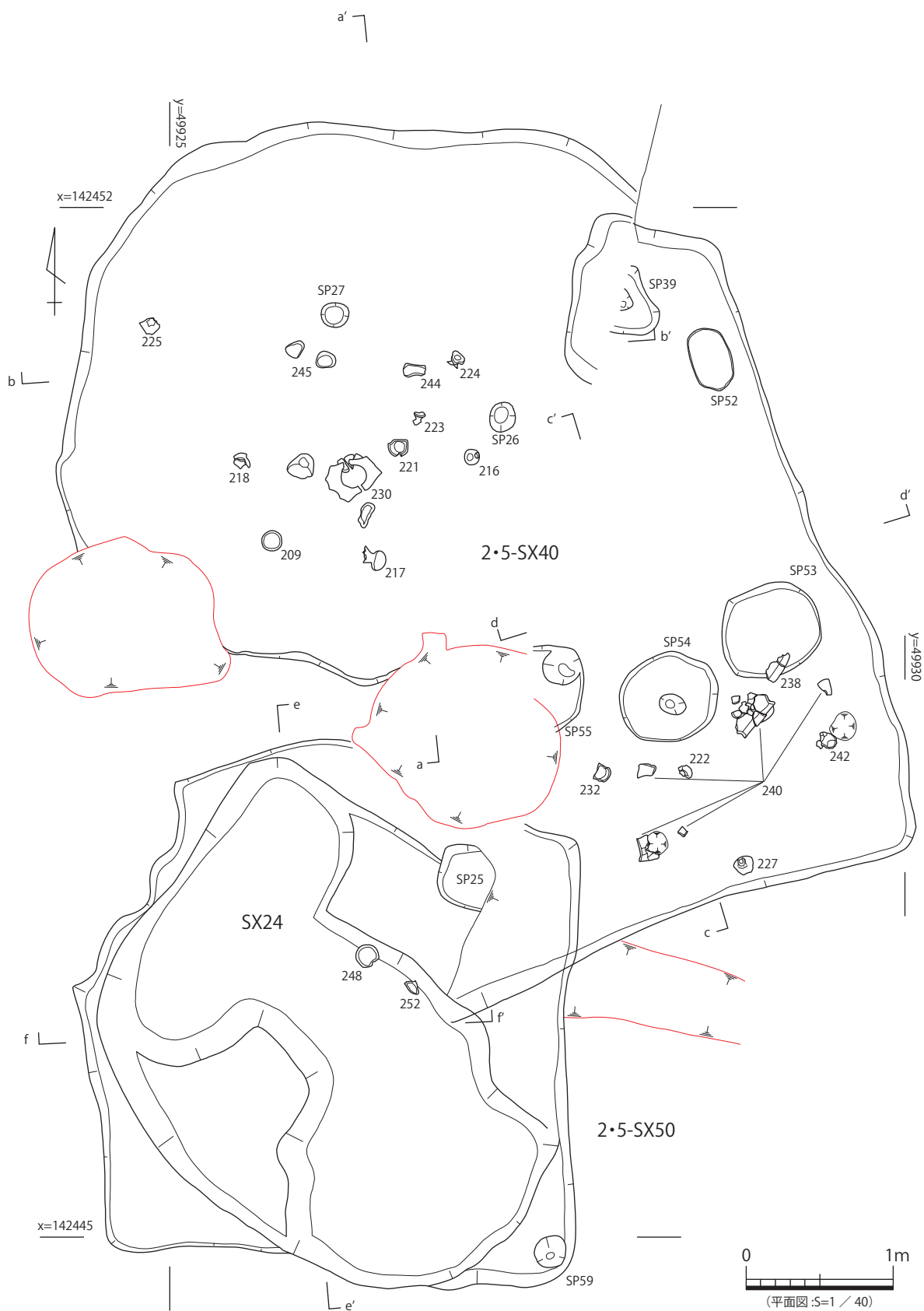


図 96 2・5-SX24・40・50 平・断面図

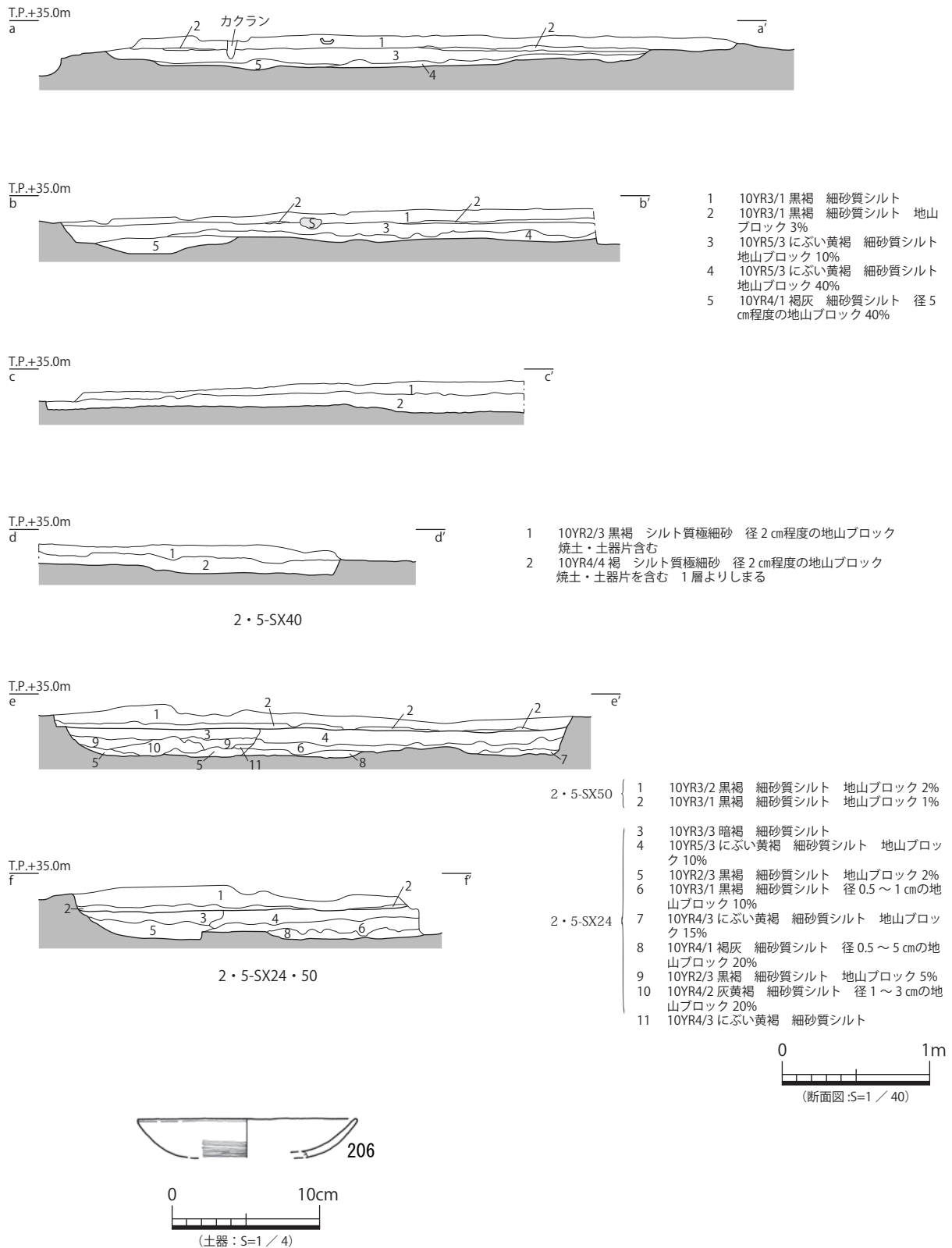


図 97 2・5-SX24・40・50 断面図、2・5-SX24 出土遺物実測図

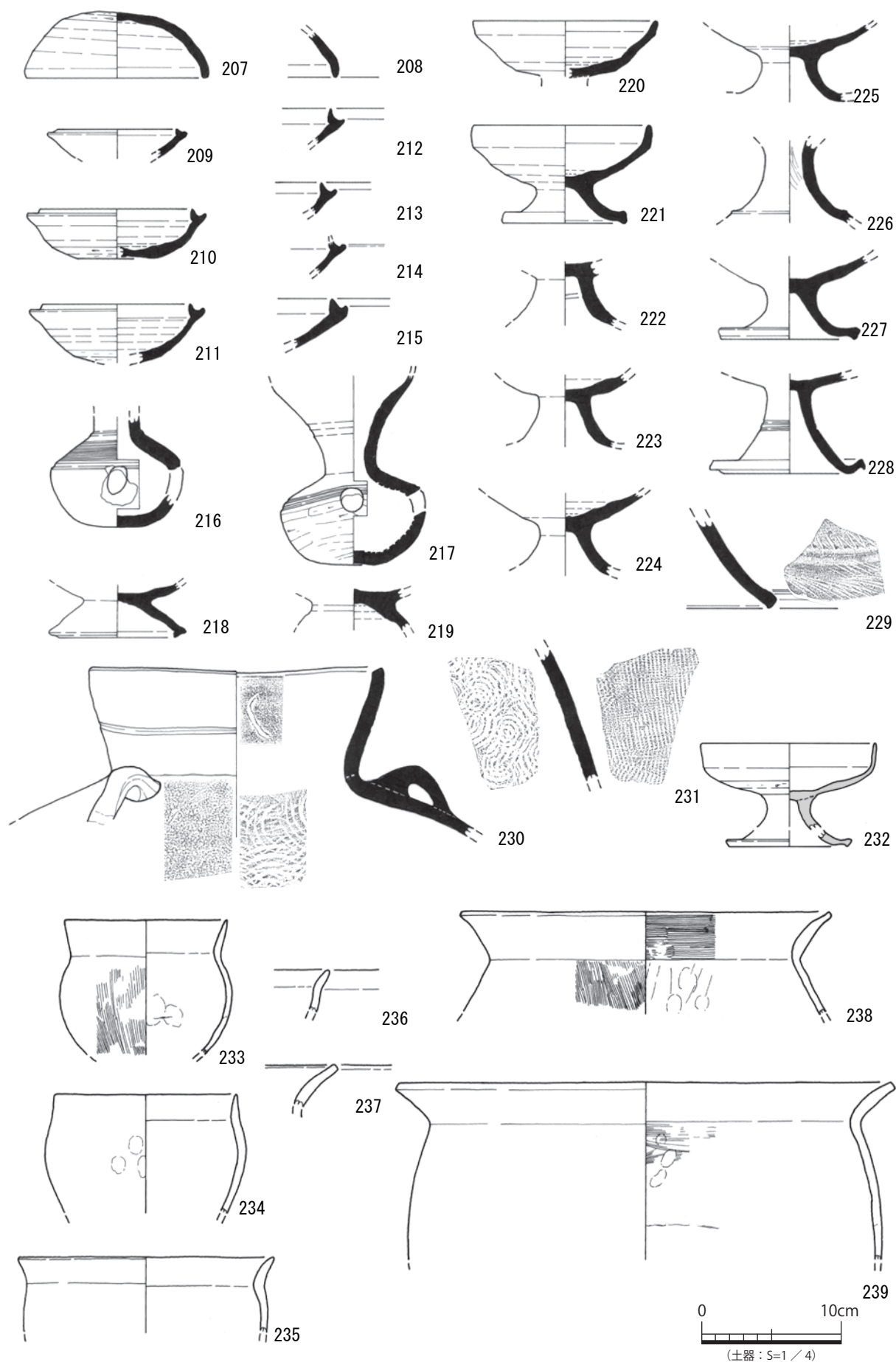


図 98 2・5-SX40 出土遺物実測図

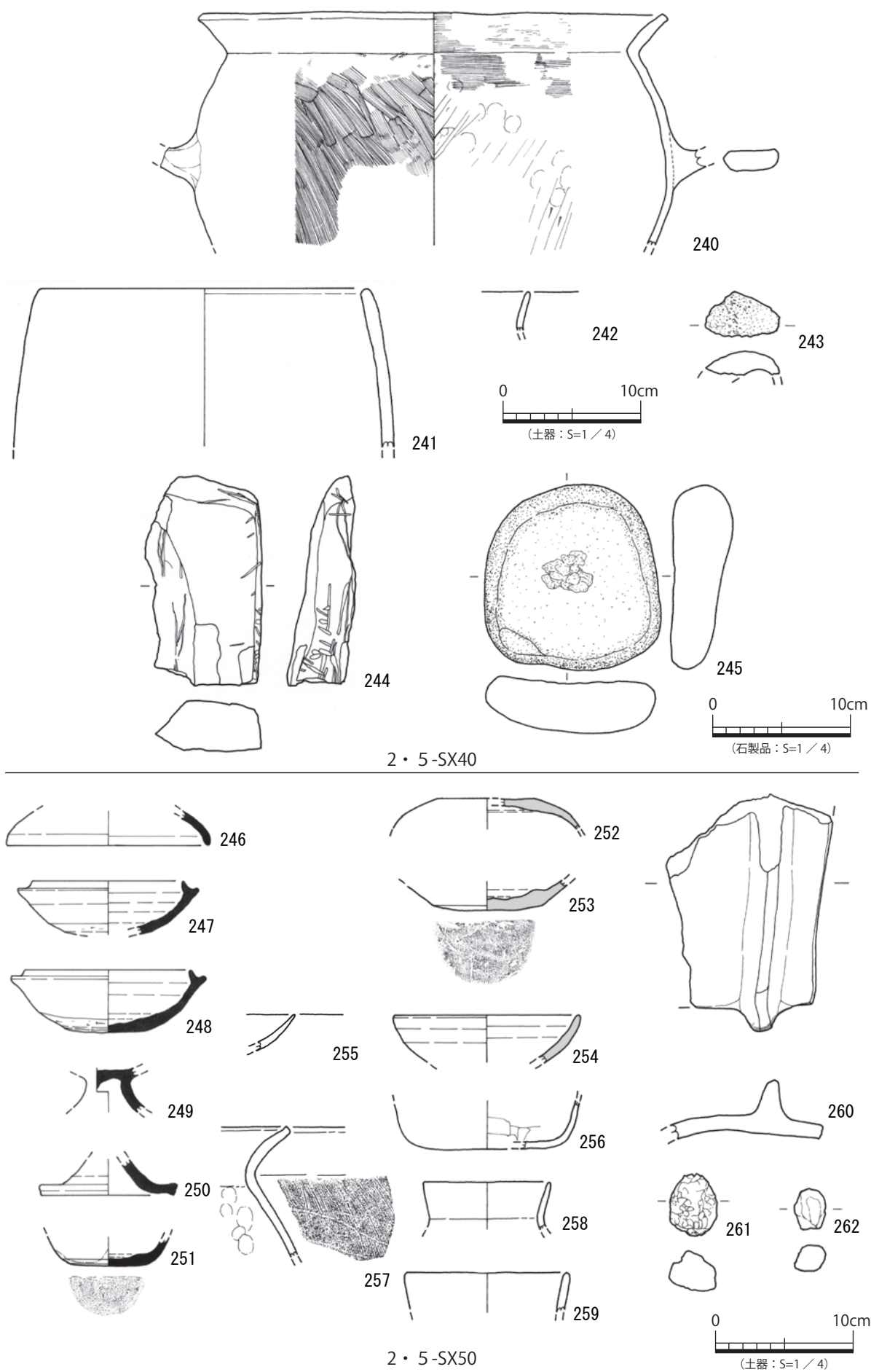


図 99 2・5-SX40・50 出土遺物実測図

7 - SX 4 (図 100)

調査区の中央部中央で検出した性格不明遺構であり、南側は7 - 竪穴 10 に切られる。検出面の標高は 34.90 m である。

平面形は台形である。南北方向の長辺は 4.53 m、深さ 0.24 m を測る。断面形状は逆台形であり、底面は凹凸がある。

埋土は 2 層に分層できるが、地山ブロックを 10 % 含む黒褐細砂混じりシルトが大部分を占める。

遺物は須恵器杯身 (263)、土師器甕 (264)、土師器小片が出土した。出土遺物の年代から古墳時代中期末と判断できる。

7・14 - SX 9 (図 101)

調査区の中央部中央で検出した性格不明遺構である。西側は7 - 竪穴 10 に切られ、中央部は調査区外である。検出面の標高は 34.90 m である。

平面形は不整な円形である。直径は約 5.56 m、深さ 0.25 m を測る。断面形状は逆台形であり、底面は凹凸がある。

埋土は 3 層に分層でき、地山ブロック 3 % 含む黒褐細砂質シルト、地山ブロック 5 % 含む黒褐シルト混じり細砂、黒褐シルト混じり細砂～中粒砂である。

遺物は鉄製品釘 (265)、土師器小片が出土したが、詳細な時期は不明である。

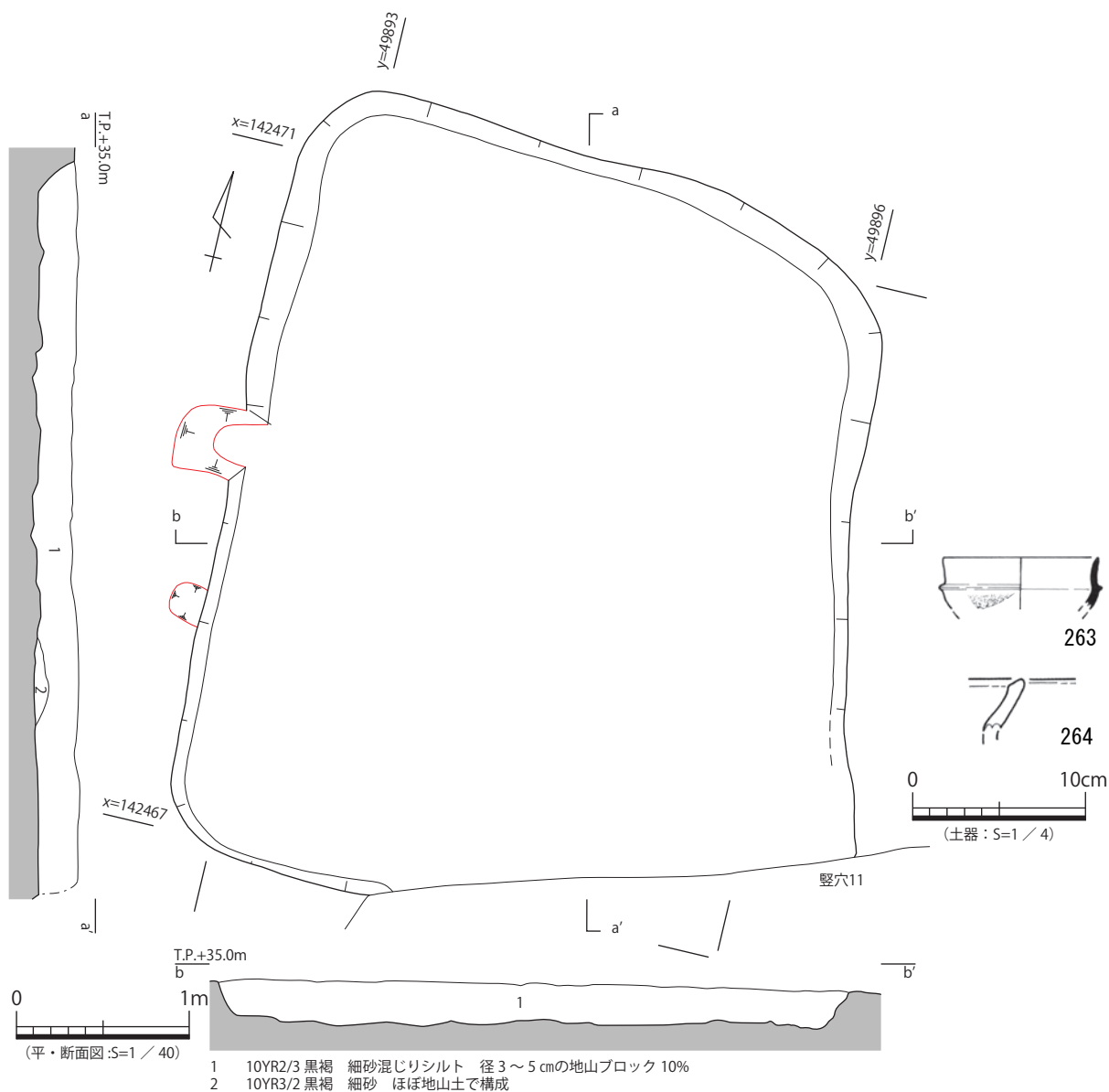


図 100 7-SX 4 平・断面図、出土遺物実測図

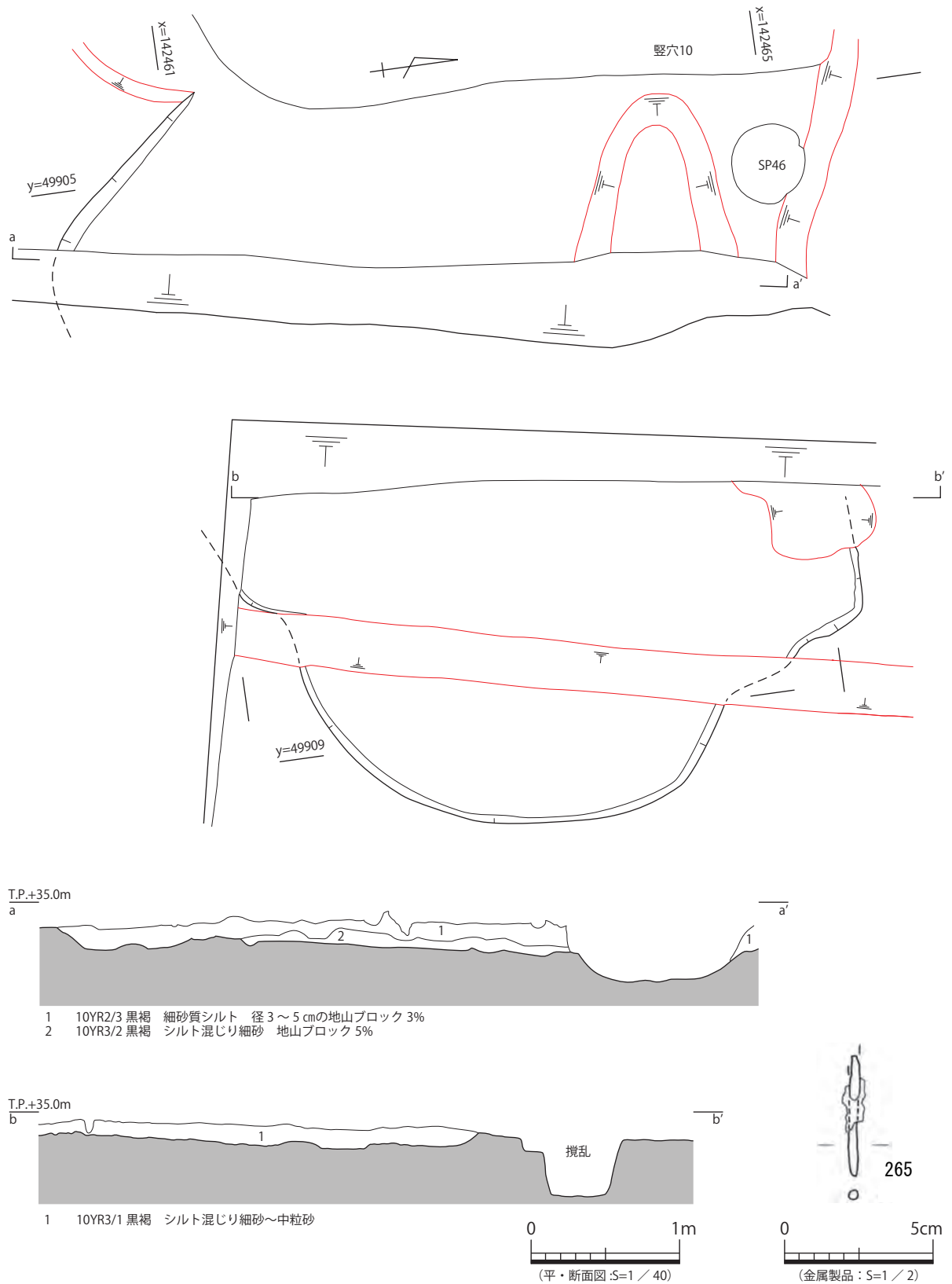


図 101 7・14-SX 9 平・断面図、出土遺物実測図

8－SX13（図 102）

調査区の中央部南側で検出した性格不明遺構であり、7・8 - SD60 を切る。東側は調査区外である。検出面の標高は 34.90 m である。

平面形は不整な楕円形である。検出した長軸は 3.30 m、短軸は 1.54 m、深さ 0.34 m を測る。主軸方向は N－59°－E である。断面形状は U 字形であり、底面は西端に段がある。

埋土は 4 層に分層でき、ほぼ水平な堆積である。上層から地山ブロックを 5 % 含む暗褐細砂混じりシルト、地山ブロックを 10 % 含む暗褐細砂混じりシルト、地山ブロックを 20 % 含む黒褐細砂混じりシルト、地山ブロックを 5 % 含む黒褐細砂質シルトである。

遺物は須恵器杯蓋（266～268）・杯身（269・270）、土師器高杯（271）・甕（272～274）、石製品（275）、須恵器小片、土師器小片が出土した。

出土遺物の年代から T K 10 形式併行期と判断できる。

8－SX59（図 102）

調査区の中央部南側で検出した性格不明遺構であり、7・8 - 竪穴 14 を切る。検出面の標高は 34.90 m である。

平面形は不整な楕円形である。長軸は 3.66 m、短軸は 1.21 m、深さ 0.12 m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は暗褐細砂混じりシルトの単一層である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、切り合い関係から 7 世紀初頭以降と判断できる。

8－SX61（図 103）

調査区の中央部南側で検出した性格不明遺構であり、7・8 - 竪穴 14 を切る。検出面の標高は 34.90 m である。

平面形は不整な楕円形である。長軸は 3.52 m、短軸は 1.31 m、最深部の深さ 0.35 m を測る。断面形状は U 字形である。底面は段を有し、西側寄りに最深部があり、東側に 2 段の平坦部があり、西側に 1 段の平坦部がある。

埋土は 3 層に分層できる。上層から地山ブロックを 5 % 含む黒褐細砂混じりシルト、地山ブロックを

30 % 含む灰黄褐細砂、地山を多量に含む灰黄褐シルト混じり細砂である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、切り合い関係から T K 43 形式併行期以降と判断できる。

9－SX20（図 103）

調査区の西部北端で検出した性格不明遺構である。直角に屈曲する平面形から溝の可能性も考えられるが、不整な形と北端に急激に深い落ち込みがあることから性格不明遺構として報告する。北側は調査区外である。検出面の標高は 34.90 m である。

平面形は直角に屈曲する溝状であり、東西方向の長さは 5.96 m、幅 3.10～1.74 m、南北方向の長さは 5.50 m、幅 1.27～0.87 m を測る。北端の最深部の深さは 0.58 m であるが、それ以外の部分の深さは 0.04 m である。断面形状は逆台形であり、底面は凹凸がある。北端に深さ 0.55 m を測る落ち込みがある。

北端の落ち込みの埋土は 8 層に分層できる

遺物は土師器小片が出土したが、詳細な時期は不明である。

9－SX29（図 104）

調査区の西部南側で検出した性格不明遺構であり、9 - 竪穴 1 に切られる。検出面の標高は 34.90 m である。

平面形は長方形である。検出した長辺は 3.76 m、短辺は 3.09 m、深さ 0.08 m を測る。断面形状は逆台形であり、底面は凹凸が著しい。

埋土は地山ブロックを 10 % 含む黒褐細砂質シルトの単一層である。

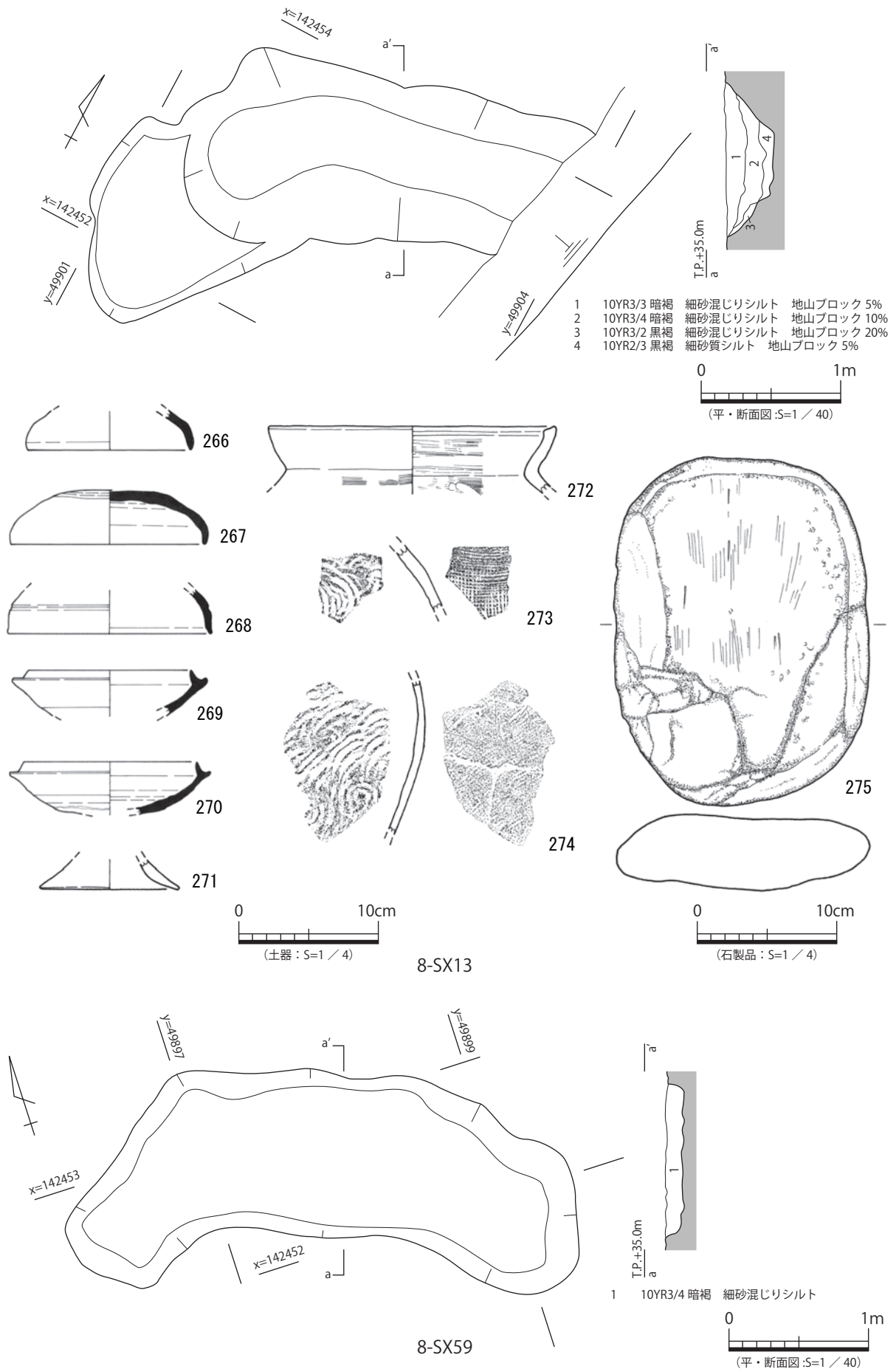
遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、切り合い関係から古墳時代後期以前と判断できる。

（7）包含層出土遺物（図 105）

重機掘削において出土した遺物は、須恵器甕（276）・甕（277）である。

遺構検出において出土した遺物は、土師器甕（278）である。

攪乱から出土した遺物は、釣針（279）である。



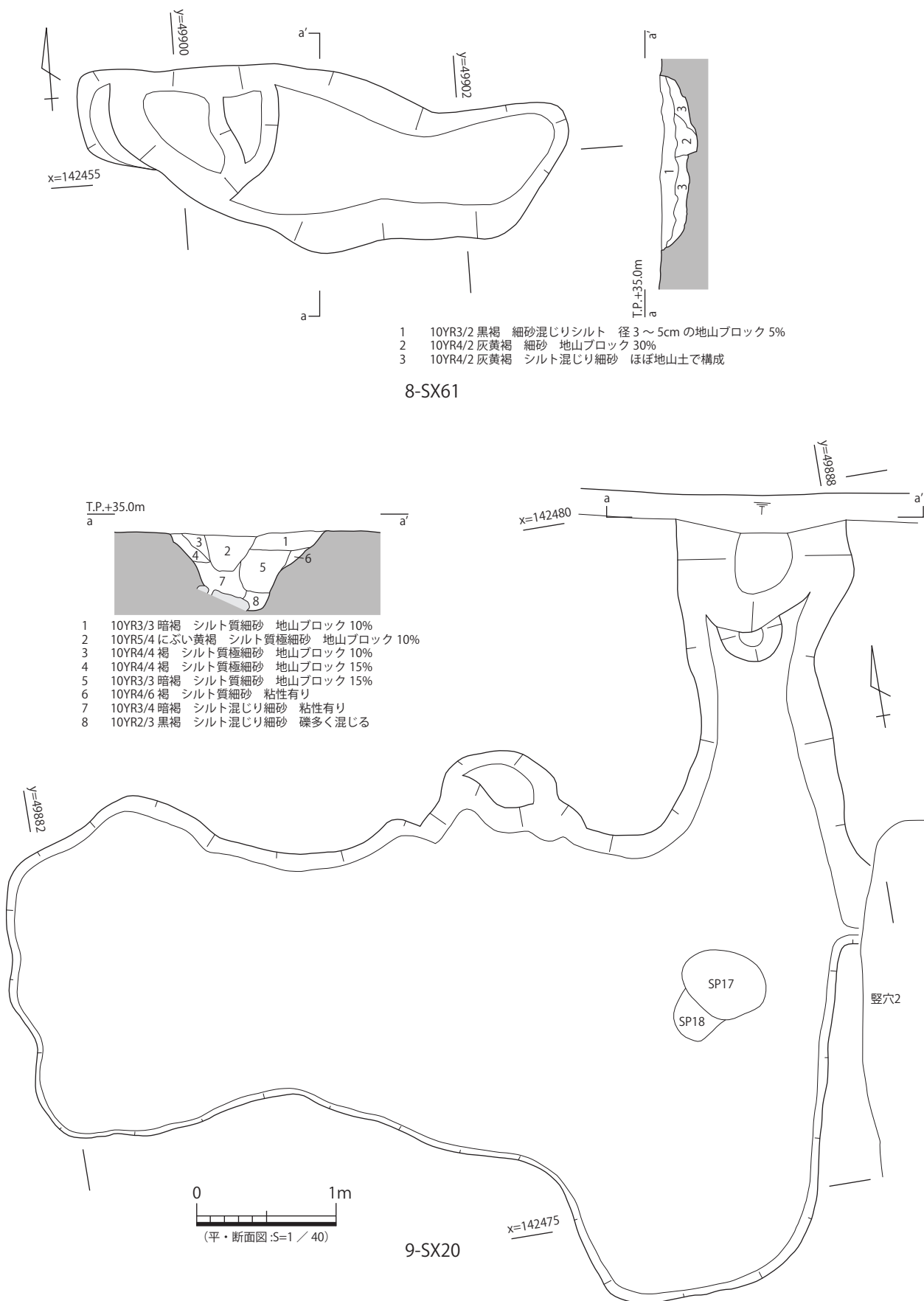
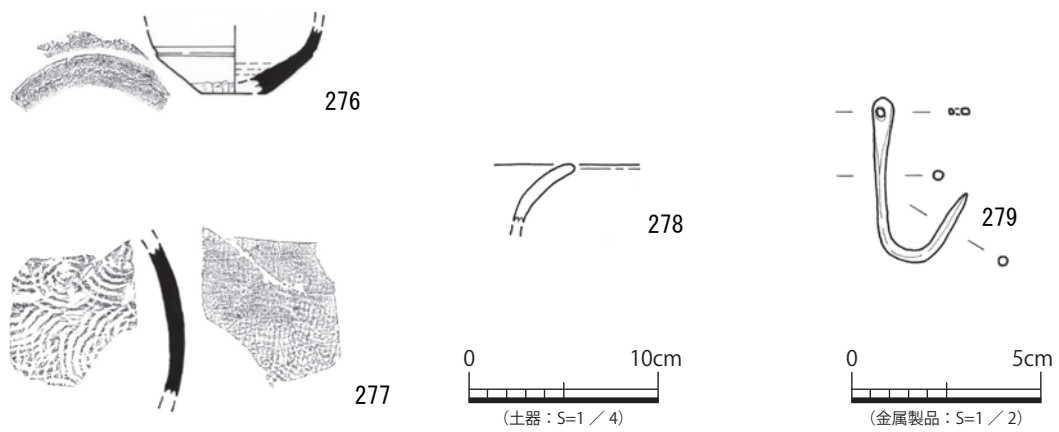
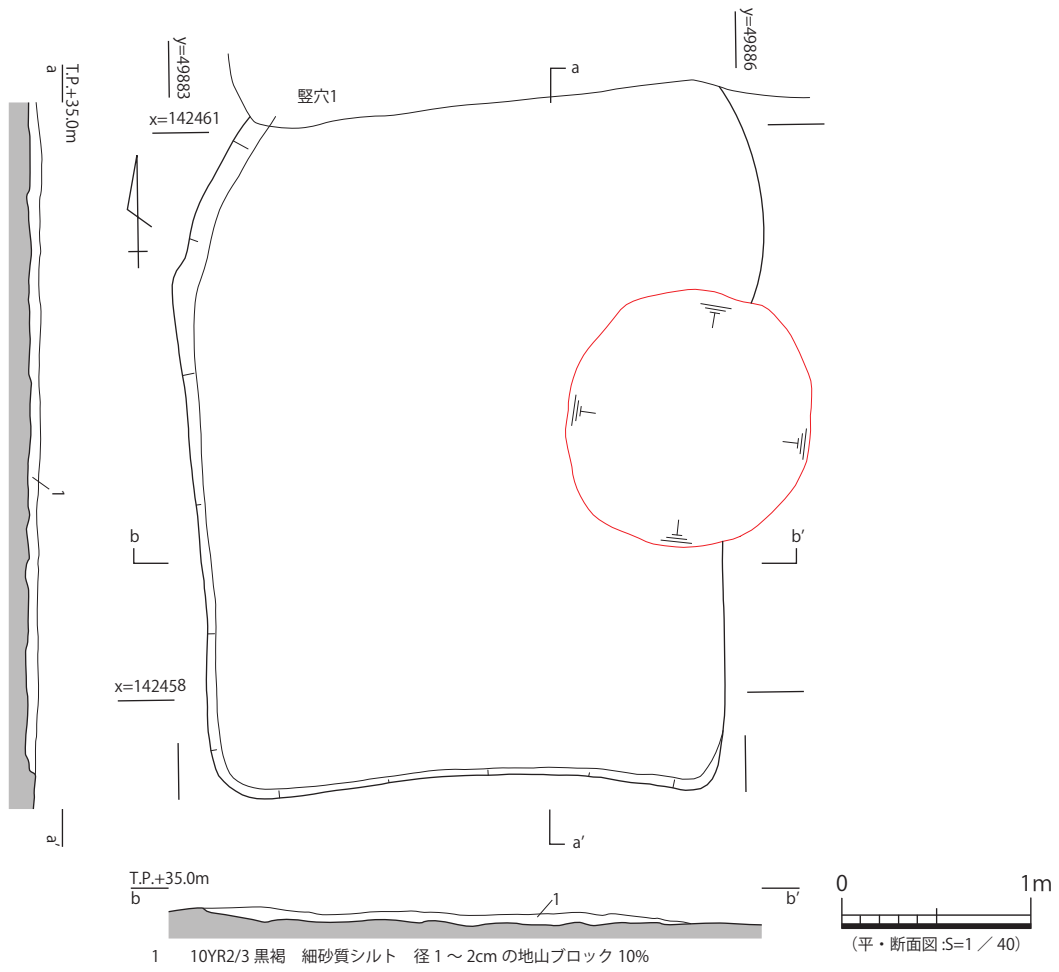


図 103 8-SX61、9-SX20 平・断面図



3 10～13 調査区

(1) 竪穴建物

10－竪穴1 (図 107)

第 10 調査区西端で検出した竪穴建物であり、北側と南側、西側は調査区外である。平面形は方形を呈する。主軸方位は N－16°－W を示す。検出面の標高は 36.00m である。規模は東西方向の長さ約 4.20 m、南北方向 3.36 m、深さ 0.33 m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、周壁溝と支柱穴 (P 1～4)、ピット (P 5) を確認した。

埋土はにぶい黄褐小礫混じり細砂～シルトの単一層である。遺物は須恵器杯蓋 (281)・高杯 (282)・壺 (283)、土師器鉢 (284)・鍋 (285)、須恵器小片、土師器小片が出土した。

貼床は 2 層に分層でき、上層から褐小礫混じり細砂～シルト＋褐シルト、褐小礫混じりシルトであり、上層が大部分を占める。掘方までの深さは 0.12 m である。遺物は須恵器杯蓋 (280)、須恵器小片、土師器小片が出土した。

周壁溝は幅 0.23～0.12 m、深さ 0.14 m を測る。埋土は褐小礫混じりシルトである。検出した建物の範囲では全周する。

支柱穴は 4 基確認できた。P 1 は三角形を呈し、規模は 0.60 × 0.47 m、深さ 0.18m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層から炭化物を含む黄灰シルト混じり細砂、オリブ褐細砂混じりシルトである。P 2 は円形を呈し、直径 0.58 × 0.53 m、深さ 0.30m を測る。断面形状は不整な U 字形である。埋土は上層から地山ブロックを 3 % 含む暗灰黄シルト混じり細砂、にぶい黄褐粗砂混じりシルト、にぶい黄褐シルト混じり粗砂である。P 3 は円形を呈し、直径 0.68 m、深さ 0.24m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層から地山ブロックを 3 % 含む黄灰シルト混じり細砂、地山ブロックを 5 % 含む黄灰シルト混じり細砂、褐シルト～粘土、にぶい黄褐細砂～極細砂である。打製石斧 (286) が出土した。P 4 は楕円形を呈し、直径 0.44 × 0.29 m、深さ 0.16m を測る。断面形状は逆台形。埋土は黄灰黄灰微細砂～細砂、地山ブロックを 3 % 含む暗灰黄シルト混じり細砂である。

P 5 は P 2 に切られ、円形を呈する。直径は

0.33 m、深さ 0.26 m を測る。埋土は上層から暗褐シルト混じり粗砂、やや粘性のある褐粗砂混じりシルトである。

出土遺物の年代から、T K 43～T K 209 形式併行期と判断できる。

(2) 溝

10－SD 5 (図 108)

第 10 調査区中央部で検出した南北方向に延びる溝であり、噴礫に切られる。延伸方位は N－15°－E で、検出面の標高は 35.90 m である。溝はほぼ直線的に延び、南側は調査区外に延びる。

検出長は 6.14 m、幅は 0.50～0.37 m、深さは 0.16 m を測る。底面は北から南に向かって緩やかに下がる。断面形状は逆台形である。

埋土は 2 層に分層でき、下層は炭化物を含む。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

10－SD10 (図 108)

第 10 調査区中央部で検出した南北方向に延びる溝である。延伸方位は N－10°－E で、検出面の標高は 35.85 m である。溝はほぼ直線的に延び、南側と北側は調査区外に延びる。

検出長は 10.89 m、幅は 0.90～0.51 m、深さは 0.33 m を測る。底面は南から北に向かって緩やかに下がる。断面形状は U 字形である。

埋土は 5 層に分層できる。

遺物は須恵器杯身 (287)・壺 (288)・高杯 (289)・平瓶 (290)、土師器小片が出土し、出土遺物の年代から T K 217 形式併行期と判断できる。

10－SD15 (図 109)

第 10 調査区東端で検出した南北方向に延びる溝であり、南端で噴礫に切られる。延伸方位は N－8°－E で、検出面の標高は 35.85 m である。溝はほぼ直線的に延び、南側と北側は調査区外に延びる。

検出長は 10.24 m、幅は 0.77～0.55 m、深さは 0.24 m を測る。底面は北から南に向かって緩やかに下がる。断面形状は逆台形である。

埋土は 2 層に分層できる。

遺物は須恵器高杯 (291)・甕 (292)、石鉢 (293) 土師器小片が出土し、出土遺物の年代から T K 43～T K 209 形式併行期と判断できる。

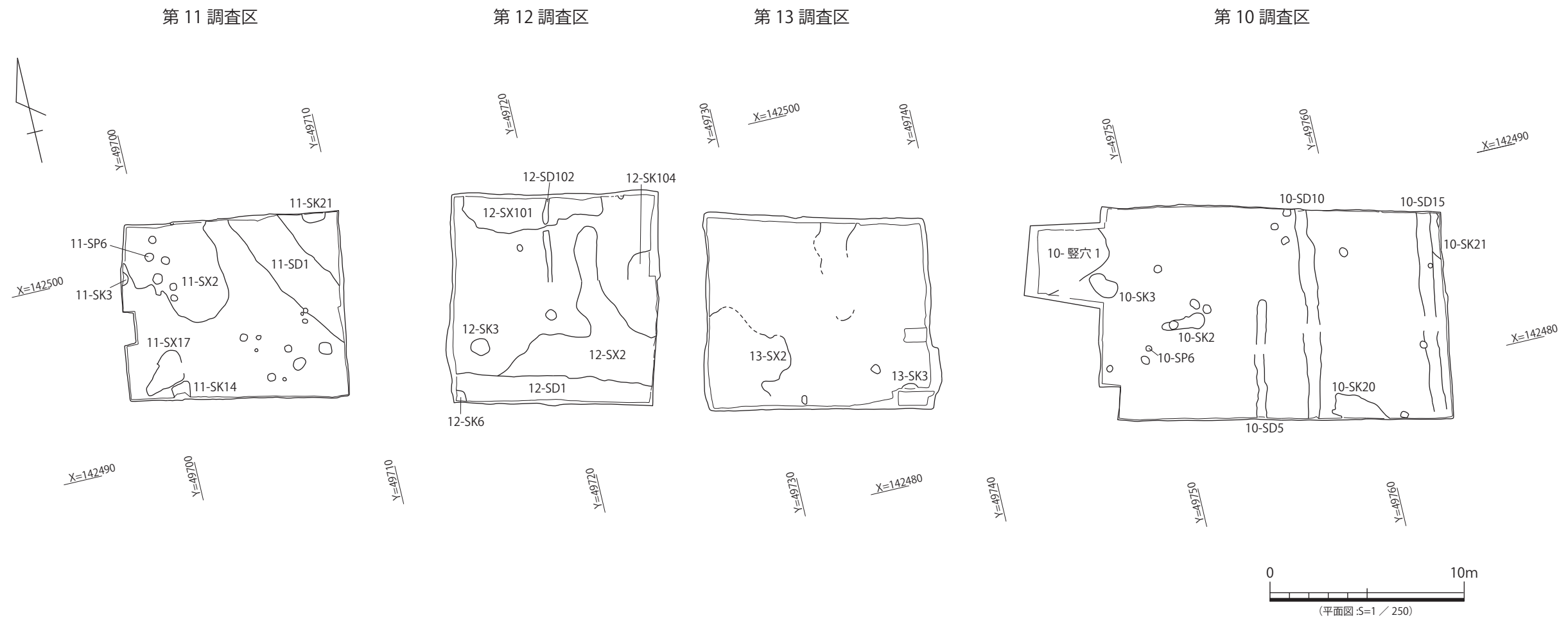


図106 第10～13調査区 遺構平面図

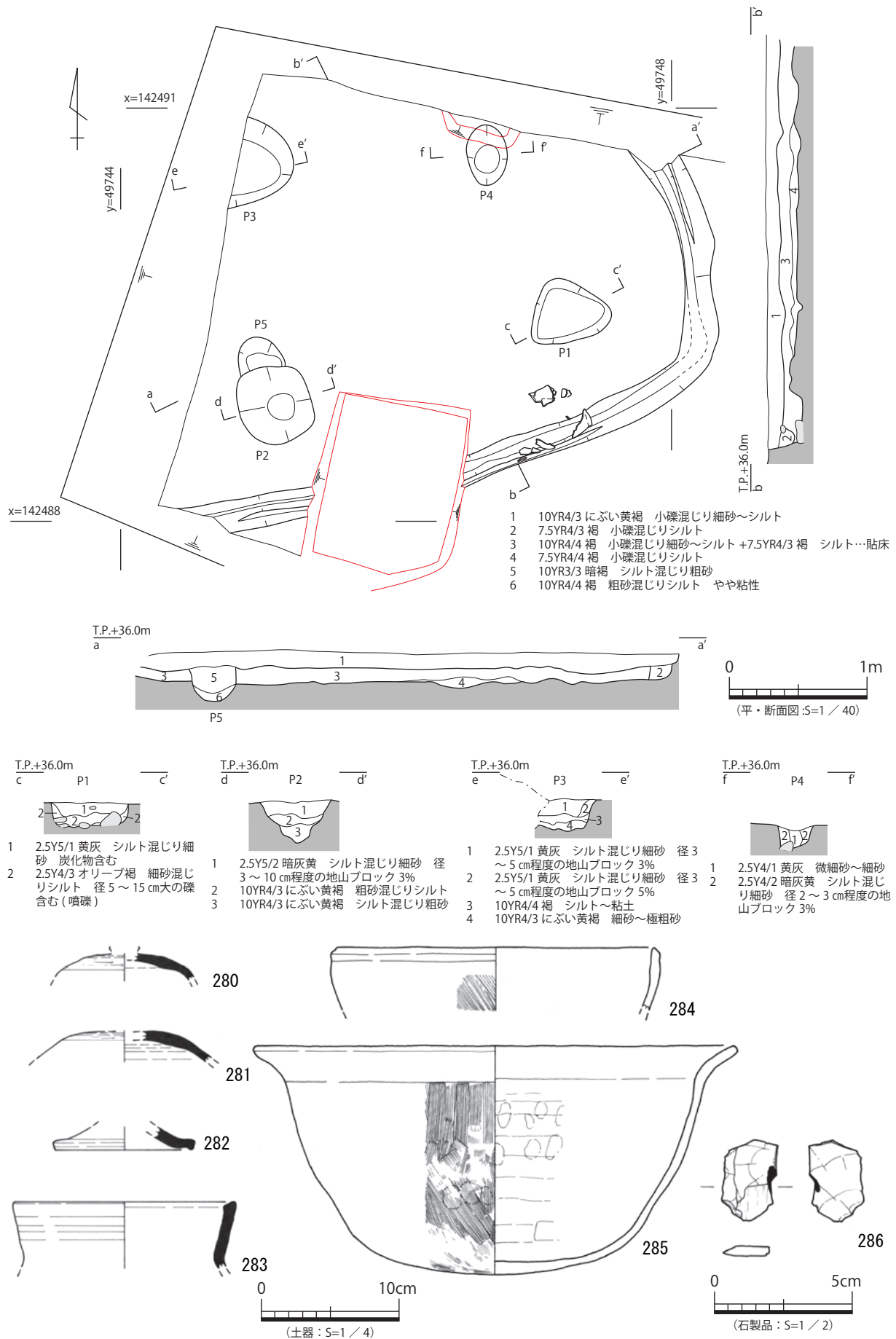


図 107 10- 竪穴 1 平・断面図、出土遺物実測図

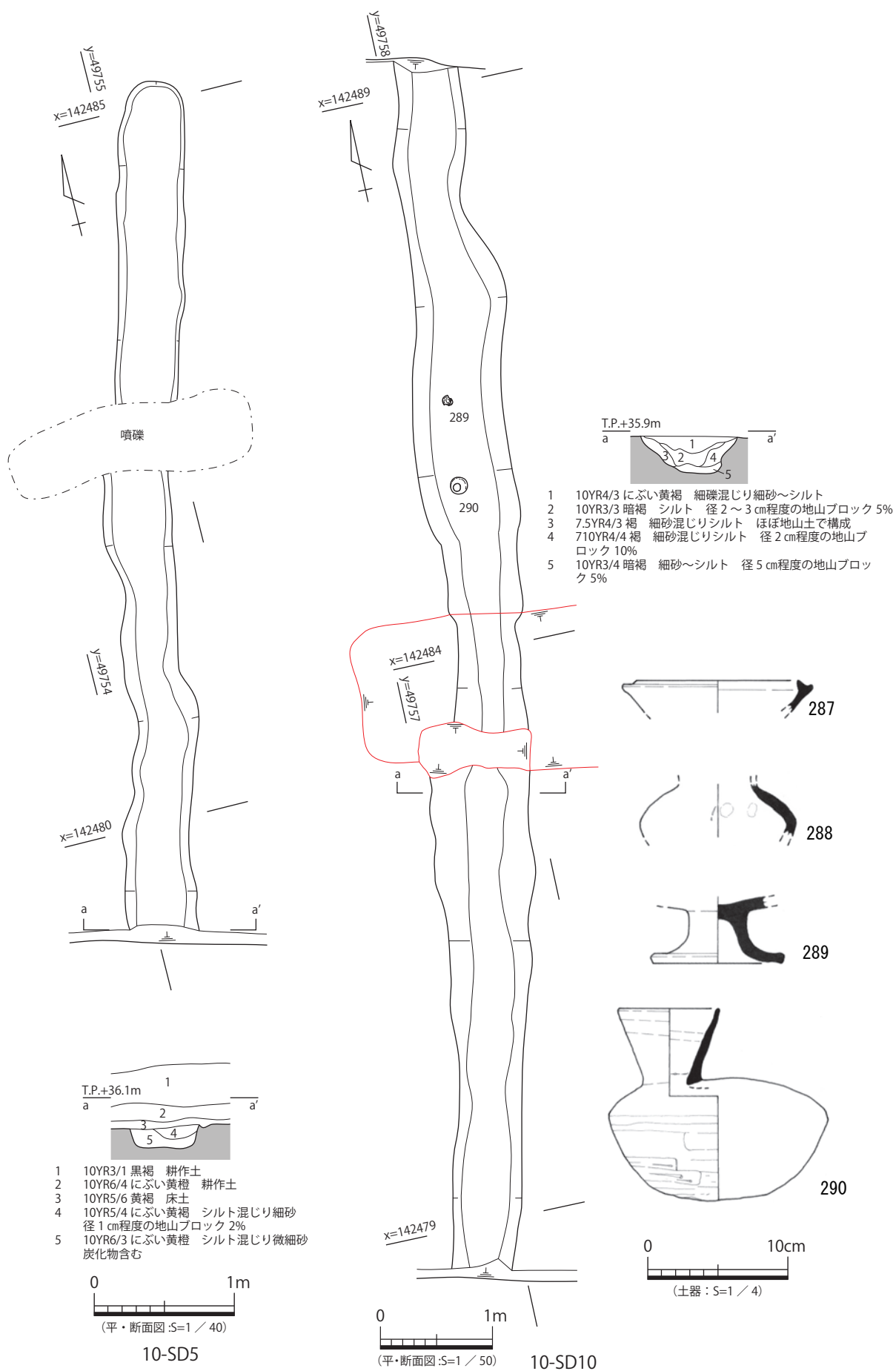


図 108 10-SD 5・10 平・断面図、出土遺物実測図

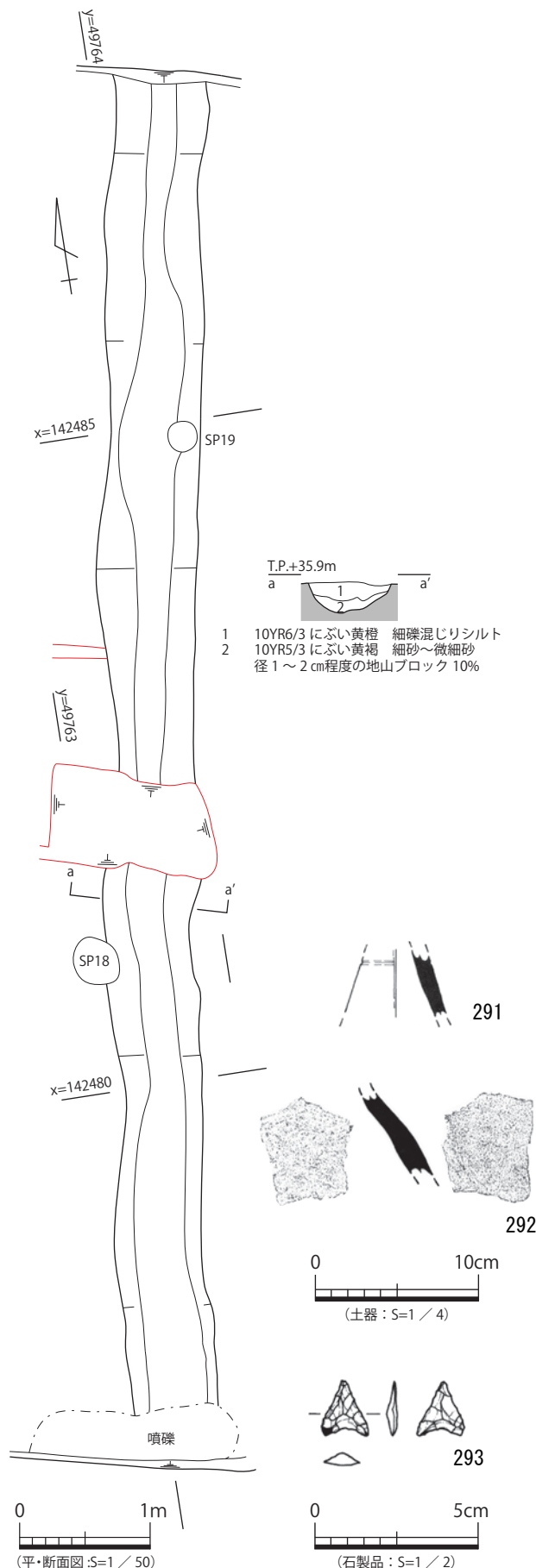


図 109 10-SD15 平・断面図、出土遺物実測図

11 - SD 1 (図 110)

第 11 調査区北東部で検出した南北方向に延びる大規模な溝である。延伸方位は $N-30^{\circ}-W$ で、検出面の標高は 36.20 m である。溝はほぼ直線的に延び、南側と北側は調査区外に延びる。

検出長は 8.72 m、幅は 2.35 ～ 2.15 m、深さは 0.74 m を測る。底面は南から北に向かって緩やかに下がる。断面形状は東側の掘り込みに段を有する U 字形である。

埋土は 13 層に分層できる。第 3 層と第 5 層は黄灰極細砂～極粗砂であり、上層は極細砂、中層は極粗砂、下層は細砂～中粒砂に細分される。この土層は溝底面に堆積したと考えられ、2 回の掘り直しが行われたと想定できる。

遺物は須恵器杯蓋 (294)・杯 (295)・甕 (296・297)、須恵器小片、土師器小片、鉄滓が出土する。出土遺物の年代から T K 217 形式併行期と判断できる。

12 - SD 1 (図 111)

第 12 調査区南端で検出した東西方向に延びる溝であり、南側の掘方は調査区外にある。延伸方位は $N-73^{\circ}-W$ である。検出面の標高は 36.30 m である。溝は直線的に延び、東側と西側は調査区外に延びる。

検出長は 10.00 m、検出した幅は 1.48 ～ 0.85 m、深さは 0.17 m を測る。底面は東から西南に向かって緩やかに下がる。断面形状は U 字形である。

埋土は黄褐細砂の単一層である。

遺物は須恵器杯身 (298・299)・壺 (300)、土師器高杯 (301)、須恵器小片、土師器小片が出土し、遺物の年代から 7 世紀初頭と判断できる。

12 - SD102 (図 111)

第 12 調査区中央部北側で検出した南北方向に延びる溝である。延伸方位は $N-11^{\circ}-E$ で、検出面の標高は 36.10 m である。溝は直線的に延びる。

検出長は 4.35 m、幅は 0.21 m、深さは 0.10 m を測る。底面は南から北に向かって緩やかに下がる。断面形状は U 字形である。

埋土はにぶい黄橙シルト混じり細砂である。

遺物は須恵器杯蓋 (302)、須恵器小片が出土したが、詳細な時期は不明である。

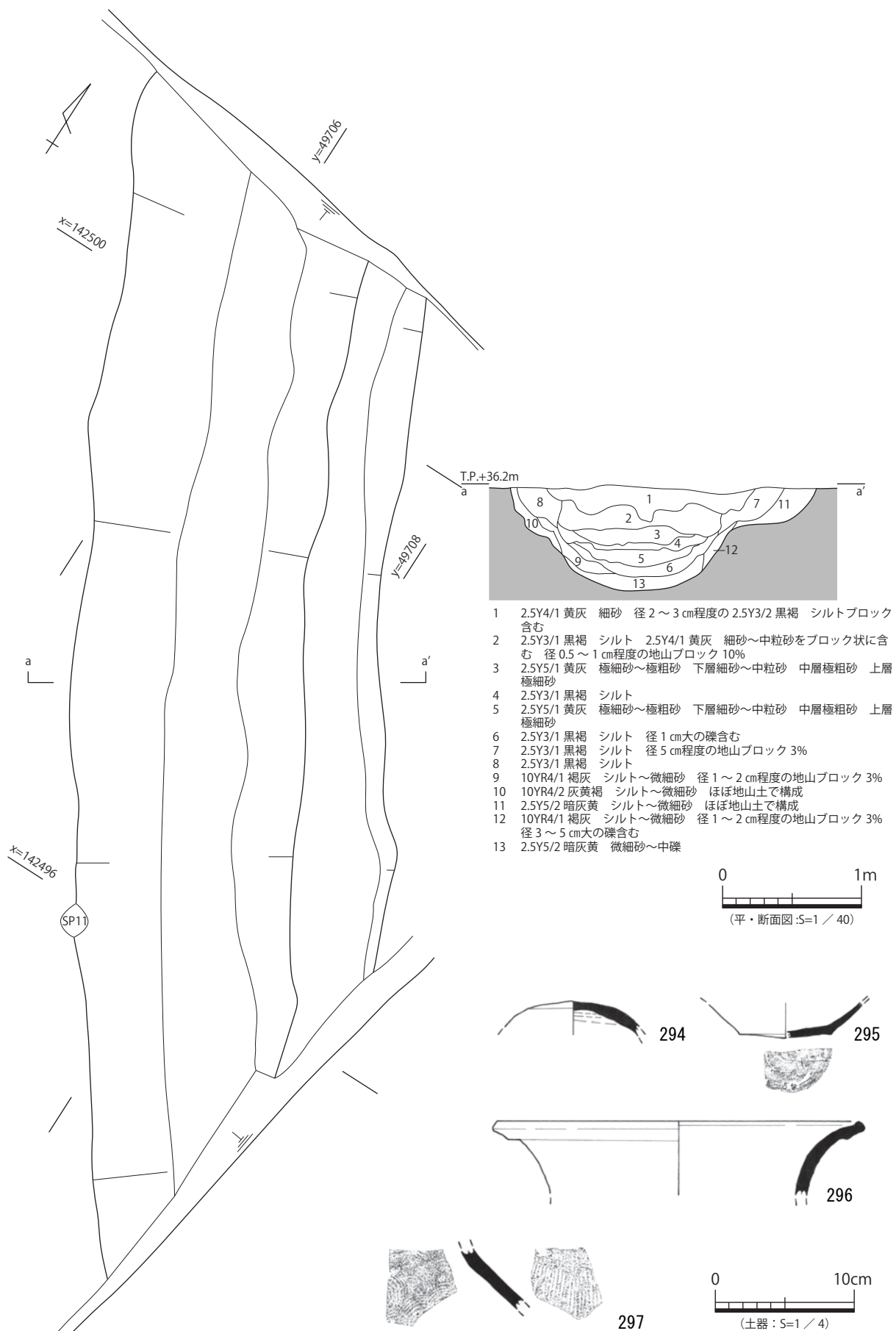


図 110 11-SD 1 平・断面図、出土遺物実測図

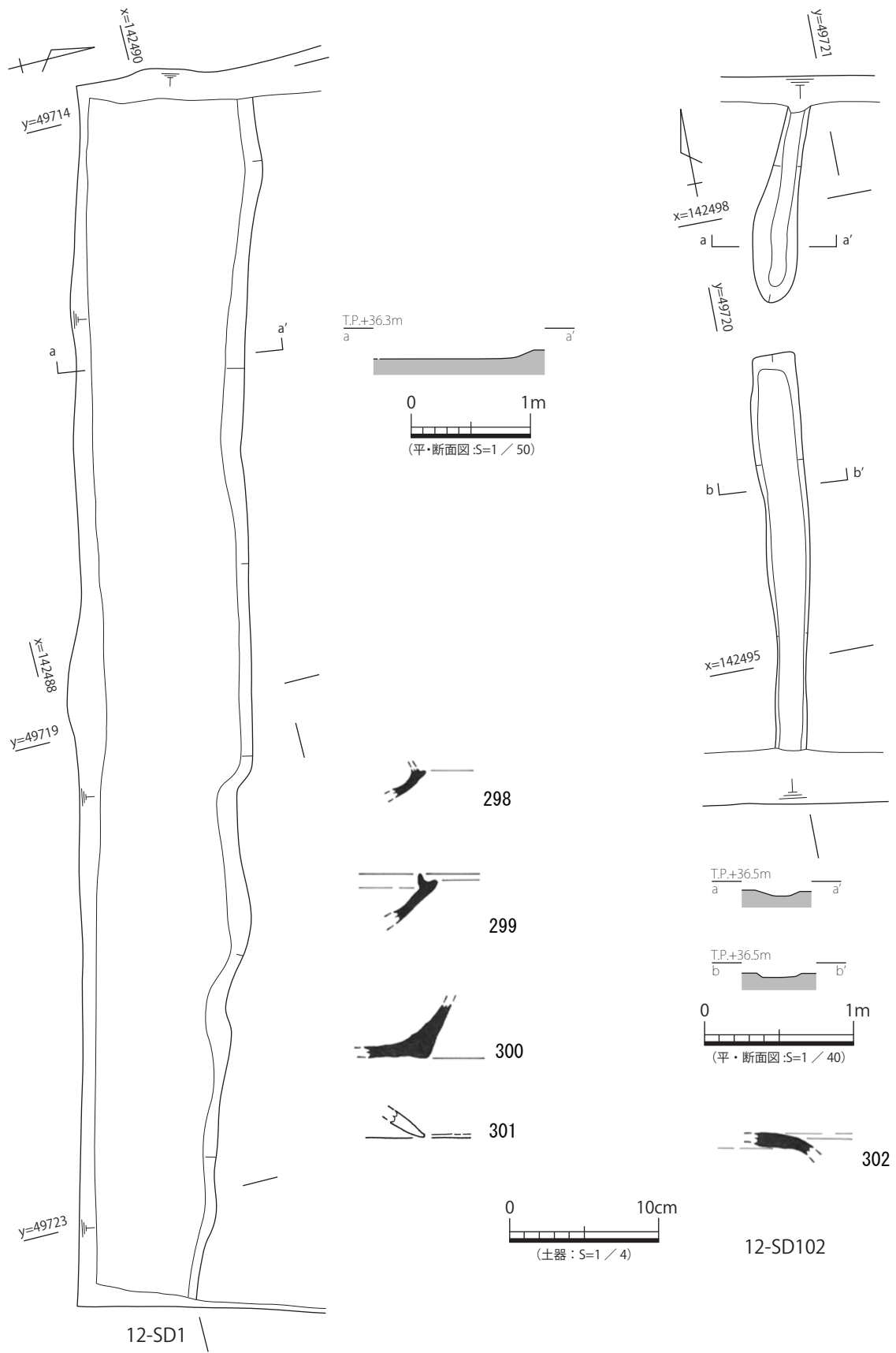


図 111 12-SD 1・102 平・断面図、出土遺物実測図

(3) 土坑

10－SK 2 (図 112)

第 10 調査区の西部中央で検出した土坑である。検出面の標高は 35.80 m である。

平面形は不整な楕円形である。長軸は 2.23 m、短軸は 0.81m、深さ 0.12 m を測る。主軸方向は N－87°－W である。断面形状は U 字形である。

埋土は褐微細砂～細砂の単一層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

10－SK 3 (図 112)

第 10 調査区の西端部中央で検出した土坑である。検出面の標高は 35.90 m である。

平面形は不整な楕円形である。長軸は 1.55 m、短軸は 0.97m、深さ 0.28 m を測る。主軸方向は N－36°－W である。断面形状は U 字形である。

埋土は 3 層に分層でき、上層からにぶい黄褐シルトブロックを 20% 含むオリーブ褐細砂～シルト、褐細礫混じり細砂、にぶい黄褐細礫混じり細砂～微細砂である。

遺物は土師器小片が出土したが、時期は不明である。

10－SK20 (図 112)

第 10 調査区の東部南端で検出した土坑であり、南側は調査区外である。検出面の標高は 35.80 m である。

平面形は、全体が検出されていないので不明である。東西方向の長さは 2.50 m、検出した南北方向の長さは 1.28m、深さ 0.30 m を測る。断面形状は逆台形である。底面は平坦である。

埋土は 3 層に分層でき、上層から地山ブロックを 5% 含むにぶい黄褐細砂混じりシルト、地山ブロックを 8% 含む灰黄褐シルト混じり細砂～中粒砂、地山を多量に含む褐シルト混じり微細砂～細砂である。

遺物は須恵器高杯 (303)・提瓶 (304)・甕 (305)、土師器甕 (306・307)、須恵器小片、土師器小片が出土し、遺物の年代から T K 43～T K 209 形式併行期と判断できる。

10－SK21 (図 112)

第 10 調査区の北東隅で検出した土坑であり、10

- SD15 に切られる。北側と東側は調査区外である。検出面の標高は 35.90 m である。

平面形は溝状である。検出した長さは 2.45 m、幅は 0.73m、深さ 0.21 m を測る。断面形状は U 字形。

埋土は 2 層に分層でき、上層から礫を含む褐微細砂、褐細砂混じりシルトであり、上層が厚い。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

11－SK 3 (図 113)

第 11 調査区の北西隅付近で検出した土坑で、西側は調査区外である。検出面の標高は 36.20 m である。

平面形は円形である。直径は 0.70 m、深さ 0.32 m を測る。断面形状は U 字形である。

埋土は 4 層に分層でき、上層から灰黄褐細砂混じりシルト、灰白褐細砂混じりシルト＋浅黄シルト、にぶい黄橙細砂混じりシルト、にぶい黄橙細砂混じりシルト＋浅黄シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

11－SK14 (図 113)

第 11 調査区の北東隅で検出した土坑で、南側は調査区外である。検出面の標高は 36.10 m である。

平面形は隅丸方形である。一辺は 0.94 m、深さ 0.48 m を測る。断面形状は不整な U 字形である。

埋土は 5 層に分層でき、上層から地山ブロック 5% と炭化物を含むにぶい黄＋灰黄細砂混じりシルト、炭化物を若干含む浅黄細砂混じりシルト、地山ブロックを 8% 含む浅黄細砂混じりシルト、褐細砂～中粒砂混じりシルト、にぶい黄褐粗砂混じりシルトである。

遺物は土師器鍋 (308) が出土し、遺物の年代から古墳時代後期と判断できる。

11－SK21 (図 113)

第 11 調査区の北東隅で検出した土坑で、北側は調査区外である。検出面の標高は 36.20 m である。

平面形は円形である。直径は 1.20 m、深さ 0.30 m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は 2 層に分層でき、上層から地山ブロックを 5% 含む暗灰黄シルト、地山ブロックを 3% 含むオリーブ灰シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

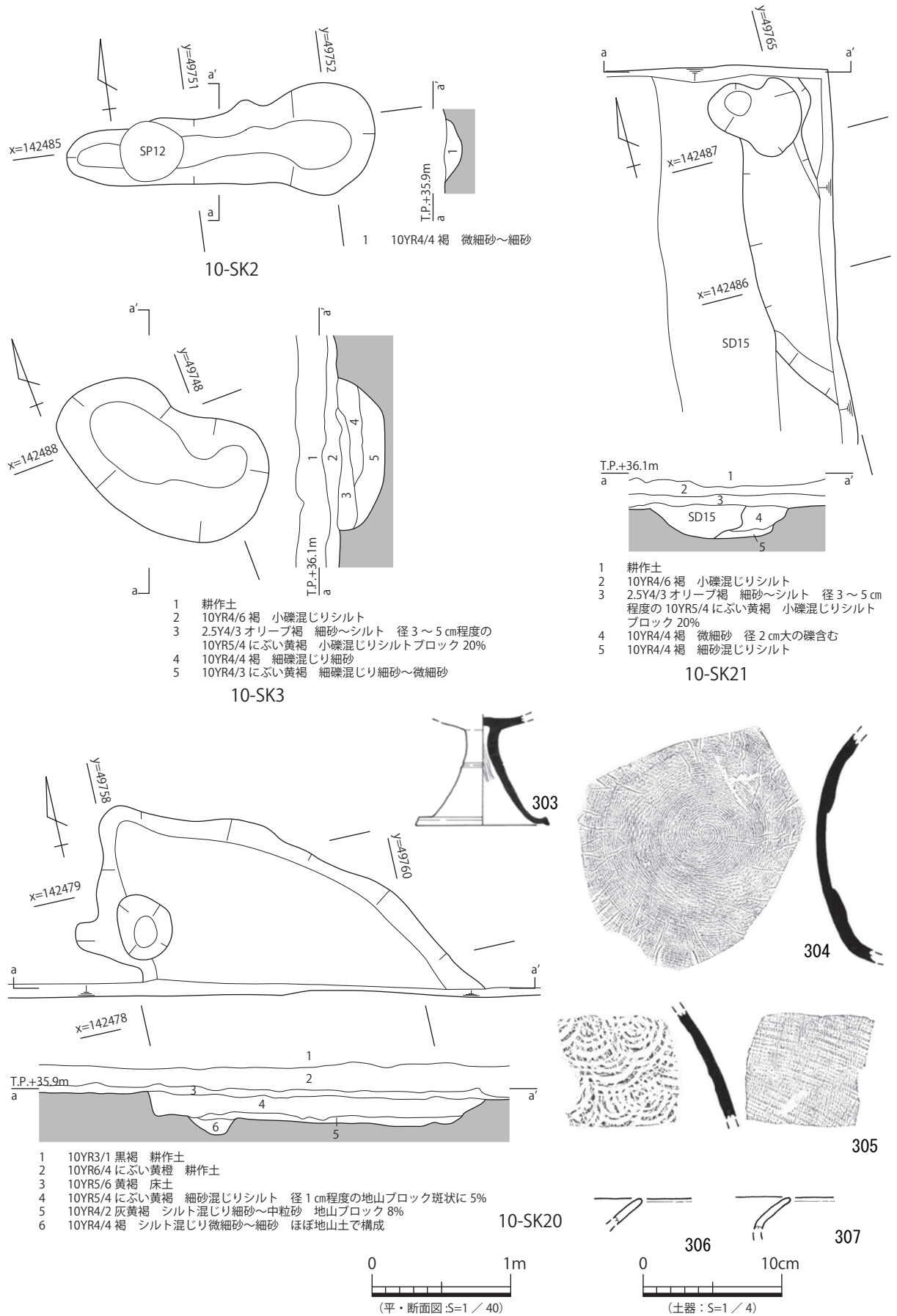


図 112 10-SK 2・3・20・21 平・断面図、出土遺物実測図

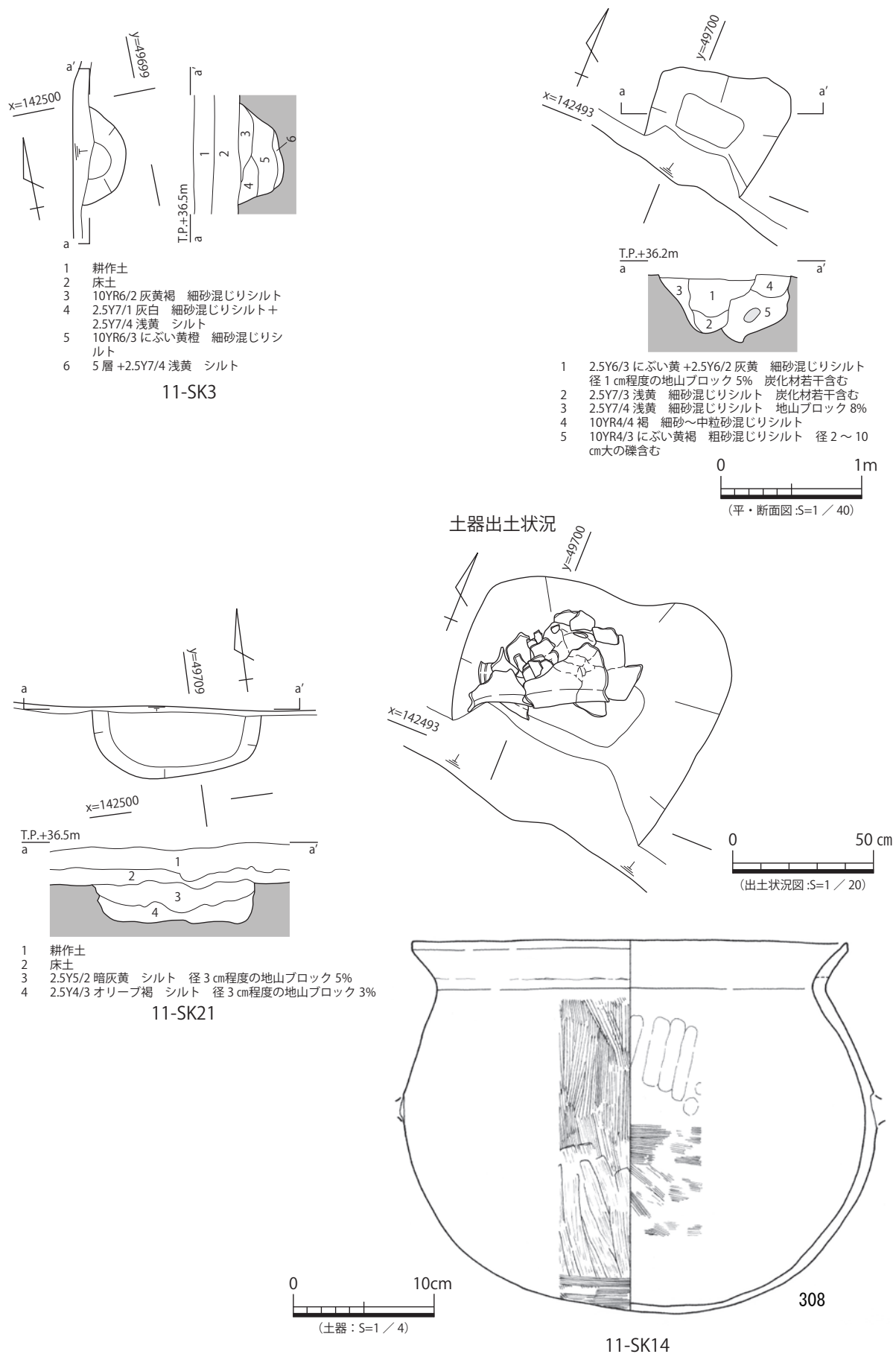
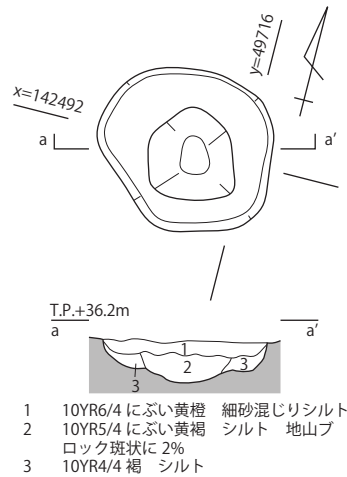


図 113 11-SK 3・14・21 平・断面図、出土遺物実測図

12 - SK 3 (図 114)

第 12 調査区の南西隅付近で検出した土坑である。検出面の標高は 36.10 m である。

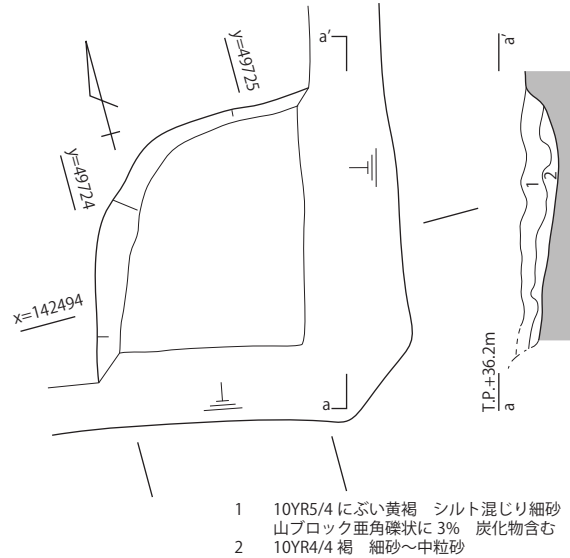
平面形は円形である。直径は 0.98 m、深さ 0.22 m を測る。断面形状は底面に段を有する逆台形である。



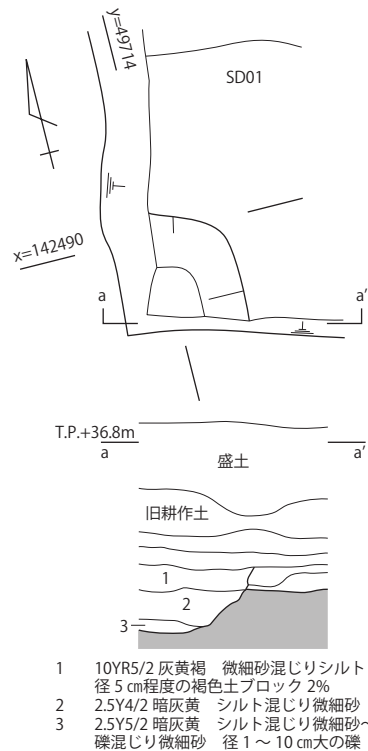
12-SK3

埋土は 3 層に分層でき、上層からにぶい黄褐細砂混じりシルト、地山ブロックを 2 % 含むにぶい黄褐シルト、褐シルトである。

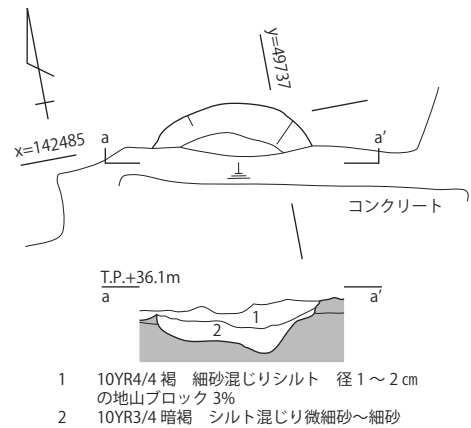
遺物が出土していないため、時期は不明である。



12-SK104



12-SK6



13-SK3

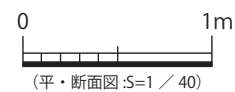


図 114 12-SK 3・6・104、13-SK 3 平・断面図

12 - SK 6 (図 114)

第 12 調査区の南西隅で検出した土坑であり、南側と西側は調査区外である。検出面の標高は 36.00 m である。

平面形は方形である。検出した一辺は 0.54 m、深さ 0.24 m を測る。断面形状は U 字形である。

埋土は 3 層に分層でき、上層から褐シルトブロックを 2 % 含む灰黄褐微細砂混じりシルト、暗灰黄シルト混じり微細砂、礫を含む暗灰黄シルト混じり微細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

12 - SK104 (図 114)

第 12 調査区の東端中央で検出した土坑であり、東側は調査区外である。検出面の標高は 36.10 m である。

平面形は円形である。検出した径は 1.36 m、深さ 0.17 m を測る。断面形状は U 字形であり、南側は掘り込みが消滅する。

埋土は 2 層に分層でき、上層から地山ブロック 3 % と炭化物を含むにぶい黄褐シルト混じり細砂、褐細砂～中粒砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

13 - SK 3 (図 114)

第 12 調査区の南東隅で検出した土坑であり、南

側は調査区外である。検出面の標高は 36.00 m である。

平面形は円形である。検出した径は 0.85 m、深さ 0.27 m を測る。断面形状は不整な U 字形である。

埋土は 2 層に分層でき、上層から地山ブロックを 3 % 含む褐細砂混じりシルト、暗褐シルト混じり細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

(4) ピット

10 - SP16 (図 115)

第 10 調査区の西部南側で検出したピットである。検出面の標高は 35.80 m である。

平面形は円形である。直径は 0.32 m、深さ 0.11 m を測る。断面形状は U 字形である。

遺物は土師器杯 (309) が出土したが、詳細な時期は不明である。

11 - SP 6 (図 115)

第 11 調査区の北西隅付近で検出したピットである。検出面の標高は 36.00 m である。

平面形は円形である。直径は 0.45 m、深さ 0.21 m を測る。断面形状は U 字形である。

遺物は須恵器提瓶 (310・311) が出土した。遺物の年代から古墳時代後期と判断できる。

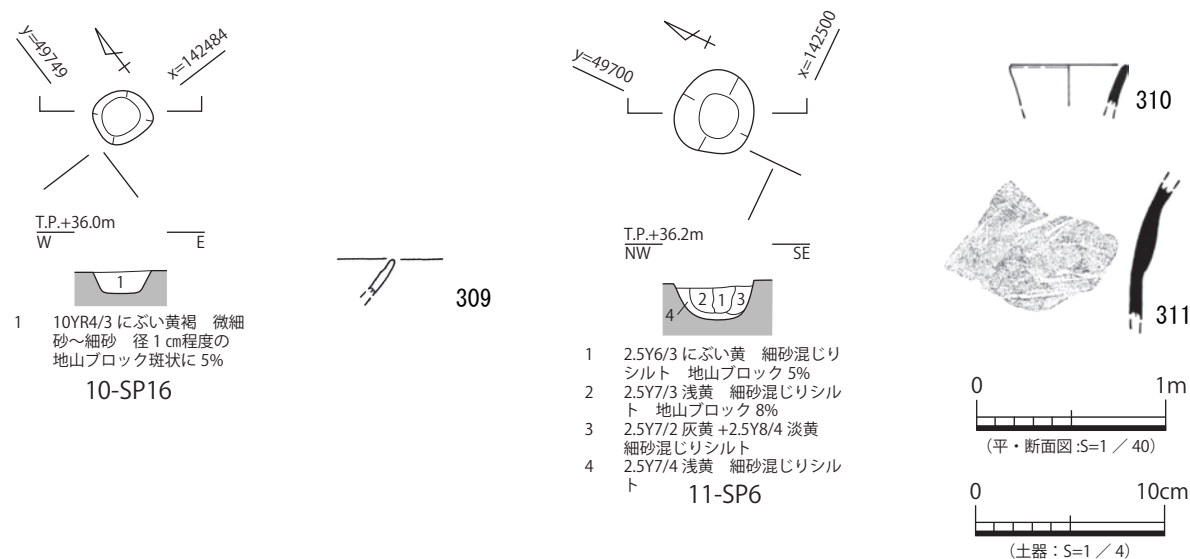


図 115 10-SP16、11-SP 6 平・断面図、出土遺物実測図

(5) 性格不明遺構

11 - SX 2 (図 116)

第 11 調査区の北西側で検出した性格不明遺構であり、11 - SP5 ～ 8・23 に切られる。北側と西側は調査区外である。検出面の標高は 36.10 m である。

平面形は不整な円形である。検出した南北方向の長さは約 5.50 m、東西方向は約 5.00 m、深さ 0.45 ～ 0.30 m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は 14 層に分層でき、不規則な堆積である。上層から礫を含む暗褐微細砂、礫を含む褐シルト混じり細砂～中粒砂、灰黄褐砂礫、多量の地山と炭化物を含む褐シルト混じり微細砂、礫を含む褐シルト混じり細砂～中粒砂、にぶい黄褐粘土混じり細砂、地山ブロックを 10 % 含む暗褐シルト混じり細砂～中粒砂、地山ブロックを 5 % 含む暗褐シルト混じり中粒砂～粗砂、地山ブロック 8 % と細礫を含む暗褐シルト混じり細砂、地山ブロックを 10 % 含む暗褐シルト混じり微細砂～細砂、にぶい黄褐細砂～中粒砂混じりシルト、黒褐シルト混じり微細砂～細砂、褐シルト、地山ブロックを 5 % 含む暗褐粘土混じり微細砂～細砂である。

遺物は須恵器杯蓋 (312)・杯身 (313～315)・高杯 (316)・提瓶 (317)、土師器蛸壺 (318)・甕 (319) が出土した。出土遺物の年代から T K 43 ～ T K 209 形式併行期と判断できる。

11 - SX17 (図 117)

第 11 調査区の南西隅で検出した性格不明遺構である。検出面の標高は 36.10 m である。

平面形は不整な楕円形である。長軸は 2.67 m、短軸は 1.53 m、深さ 0.67 m を測る。断面形状は U 字形であり、底面は中央に最深部があり、北側と南側に段を有する。西側の掘方に段を有する。

埋土は 6 層に分層でき、不規則な堆積である。上層から地山ブロックを 3 % 含むにぶい黄＋浅黄細砂混じりシルト、地山ブロックを若干含むにぶい黄褐＋にぶい黄細砂混じりシルト、灰黄褐細砂混じりシルト、灰黄褐＋にぶい黄橙細砂混じりシルト、黒褐シルト、細砂を若干含む灰黄シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

12 - SX101 (図 117)

第 12 調査区の北端で検出した性格不明遺構であり、北側は調査区外である。12 - SD102 に切られる。

検出面の標高は 36.10 m である。

平面形は不整な円形である。検出した東西方向の長さは約 7.20 m、南北方向の長さは約 1.80 m、深さ 0.38 m を測る。断面形状は逆台形である。底面の東側に少し深い部分が円形に存在し、その東側に段を有する。

埋土は 2 層に分層でき、上層から灰白シルト、にぶい黄褐細砂混じりシルトである。

遺物は須恵器杯身 (320)・甕 (321)、須恵器小片が出土したが、詳細な時期は不明である。

12 - SX 2 (図 118・119)

第 12 調査区の南側で検出した性格不明遺構であり、12 - SD 1 に切られる。南側と東側は調査区外である。検出面の標高は 36.10 m である。

平面形は不整形であり、南側は円形を呈し、北方向と東方向に溝状に延びる。円形部の東西方向の長さは約 5.30 m、南北方向の長さは約 2.20 m、深さ 0.15 m を測り、北方向に延びる溝状部分は長さ約 3.30 m、幅 1.10 ～ 0.60 m、深さ 0.13 m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は 9 層に分層でき、にぶい黄褐シルトにぶい黄褐シルト混じり細礫、炭化物を含むにぶい黄褐粘土混じりシルト、褐シルトブロック 5 % 含むにぶい黄褐微細砂混じりシルト、にぶい黄褐シルト混じり微細砂、地山ブロックを 3 % 含むにぶい黄褐粘土混じり細砂、にぶい黄褐シルト混じり微細砂、にぶい黄褐微細砂混じりシルトである。

遺物は須恵器杯蓋 (322～328)・杯身 (329～333)・杯 (334)・高杯 (335)・短頸壺 (336)・甕 (337・338)、土師器甕 (339) が出土した。出土遺物の年代から T K 10 ～ T K 217 形式併行期と判断できる。

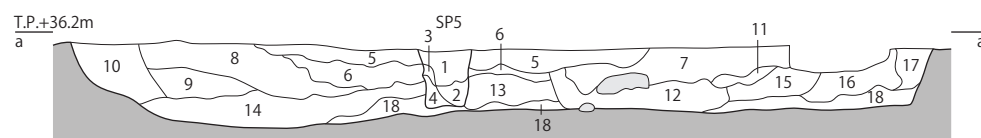
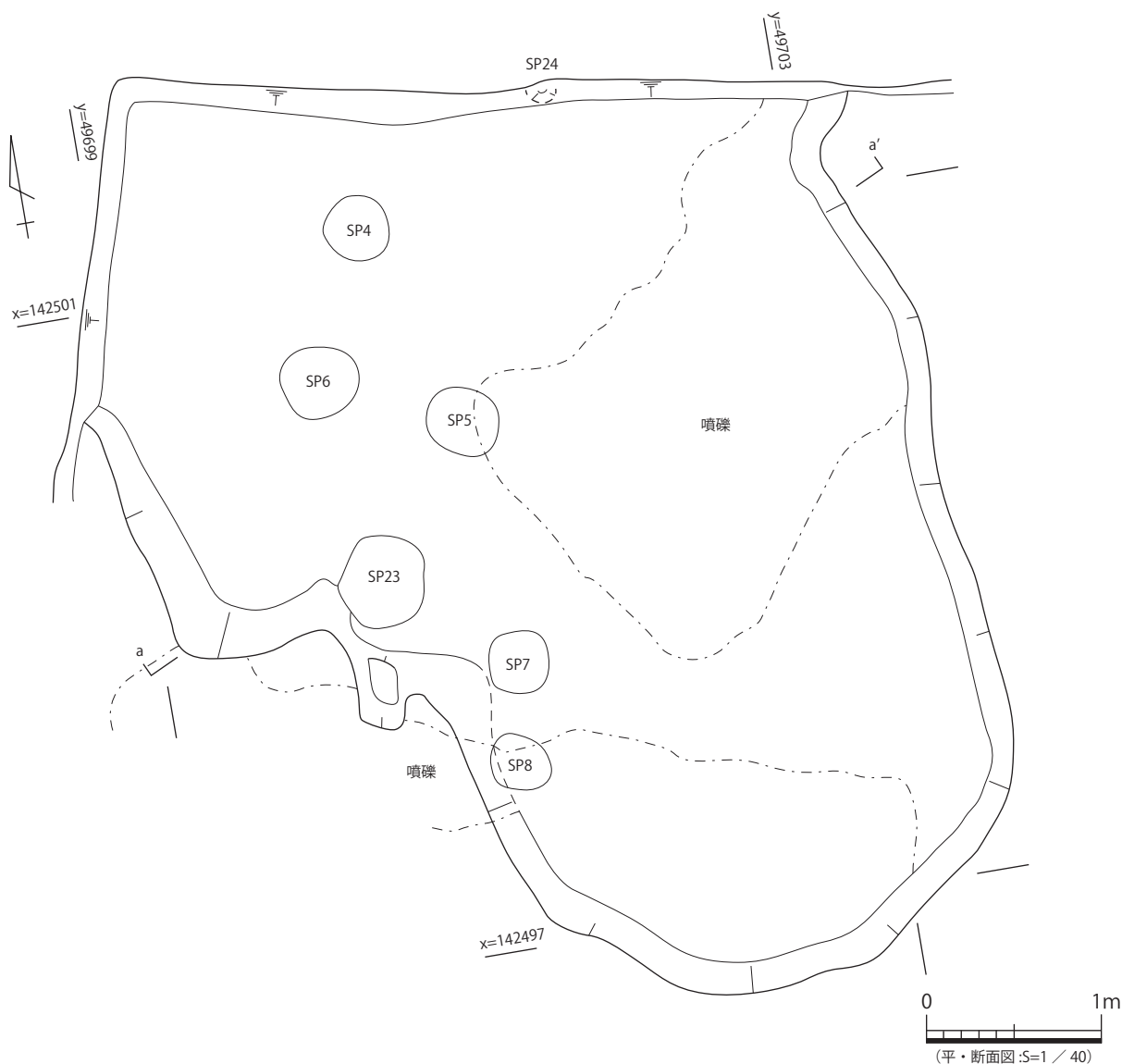
13 - SX 2 (図 120)

第 13 調査区の南西隅で検出した性格不明遺構であり、西側は攪乱により削平される。南側と西側は調査区外である。検出面の標高は 36.00 m である。

平面形は不整形である。検出した南北方向の長さは約 5.10 m、東西方向の長さは約 4.10 m、深さ 0.10 m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土はオリーブ褐シルト混じり微細砂～中粒砂の単一層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。



- | | | | |
|---|--|----|--|
| 1 | 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト 黒褐 シルトブロック 10% | 10 | 10YR4/3 にぶい黄褐 粘土混じり細砂 |
| 2 | 10YR4/4 褐 シルト混じり細砂 径 1～2 cm程度の地山ブロック含む | 11 | 7.5YR3/4 暗褐 シルト混じり中粒砂～中粒砂 地山ブロック 10% |
| 3 | 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト混じり細砂 黒褐 シルト・地山ブロック含む | 12 | 10YR3/4 暗褐 シルト混じり中粒砂～粗砂 径 1～3 cm程度の地山ブロック 5% |
| 4 | 10YR4/4 褐 シルト混じり微細砂 ほぼ地山土で構成 | 13 | 7.5YR3/3 暗褐 シルト混じり細砂 地山ブロック 8% 細礫含む |
| 5 | 10YR3/3 暗褐 微細砂 径 1～3 cm大の礫含む | 14 | 10YR3/4 暗褐 シルト混じり微細砂～細砂 地山ブロック 10% |
| 6 | 10YR4/4 褐 シルト混じり細砂～中粒砂 径 1～10 cm大の礫含む | 15 | 10YR4/3 にぶい黄褐 細砂～中粒砂混じりシルト |
| 7 | 10YR4/2 灰黄褐 砂礫 | 16 | 10YR3/2 黒褐 シルト混じり微細砂～細砂 |
| 8 | 10YR4/4 褐 シルト混じり微細砂 ほぼ地山土で構成 炭化物含む | 17 | 7.5YR4/4 褐 シルト |
| 9 | 7.5YR4/3 褐 シルト混じり細砂～中粒砂 径 3 cm大の礫含む | 18 | 10YR3/4 暗褐 粘土混じり微細砂～細砂 地山ブロック 5% |

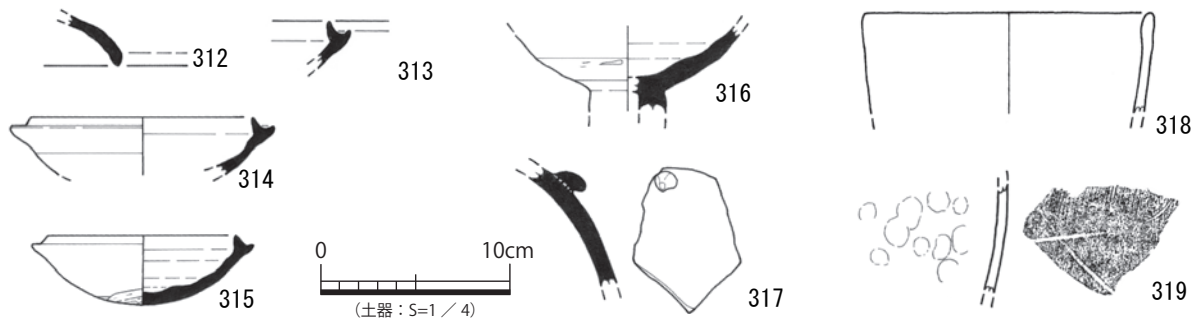


図 116 11-SX 2 平・断面図、出土遺物実測図

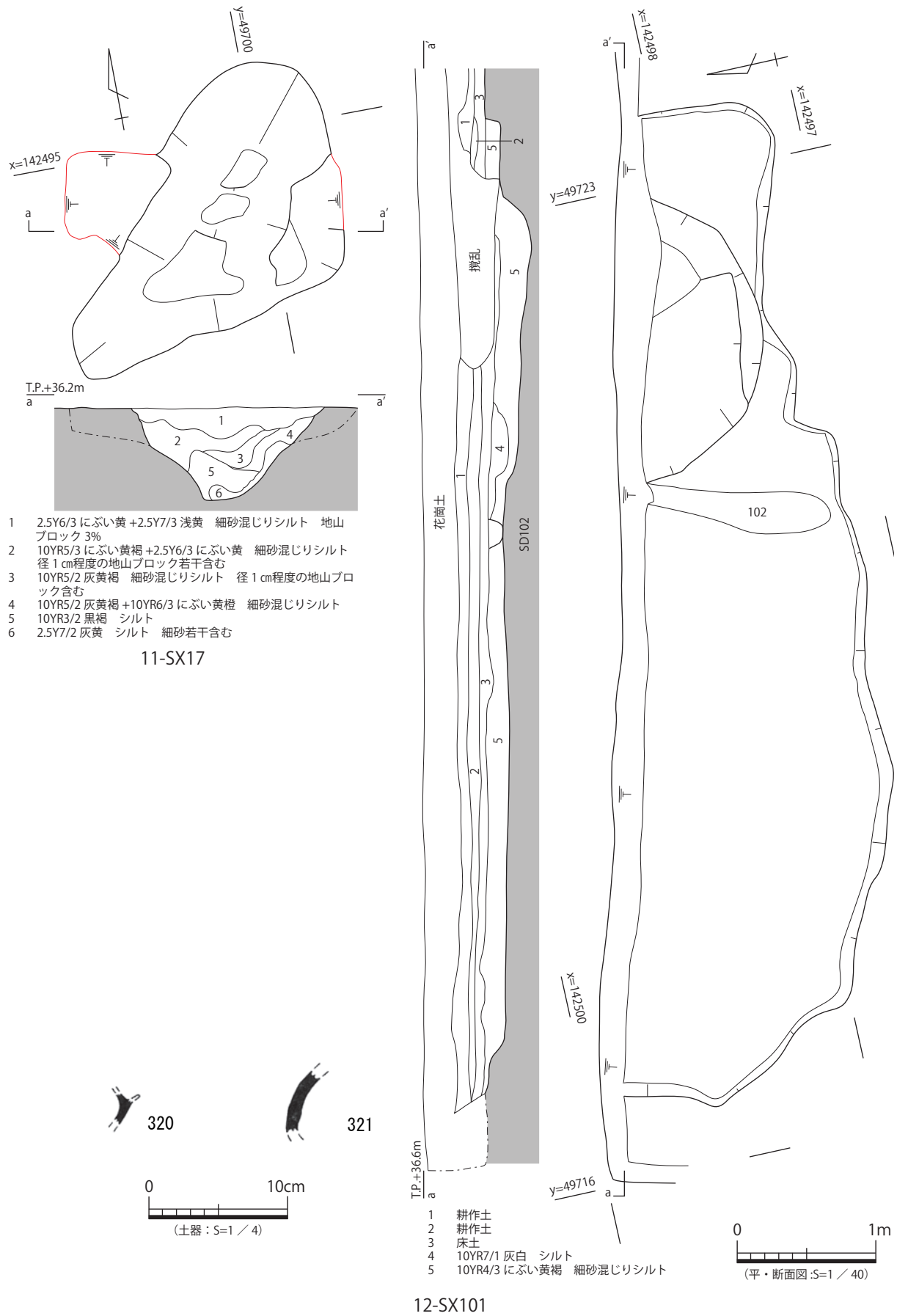


図 117 11-SX17、12-SX101 平・断面図、出土遺物実測図

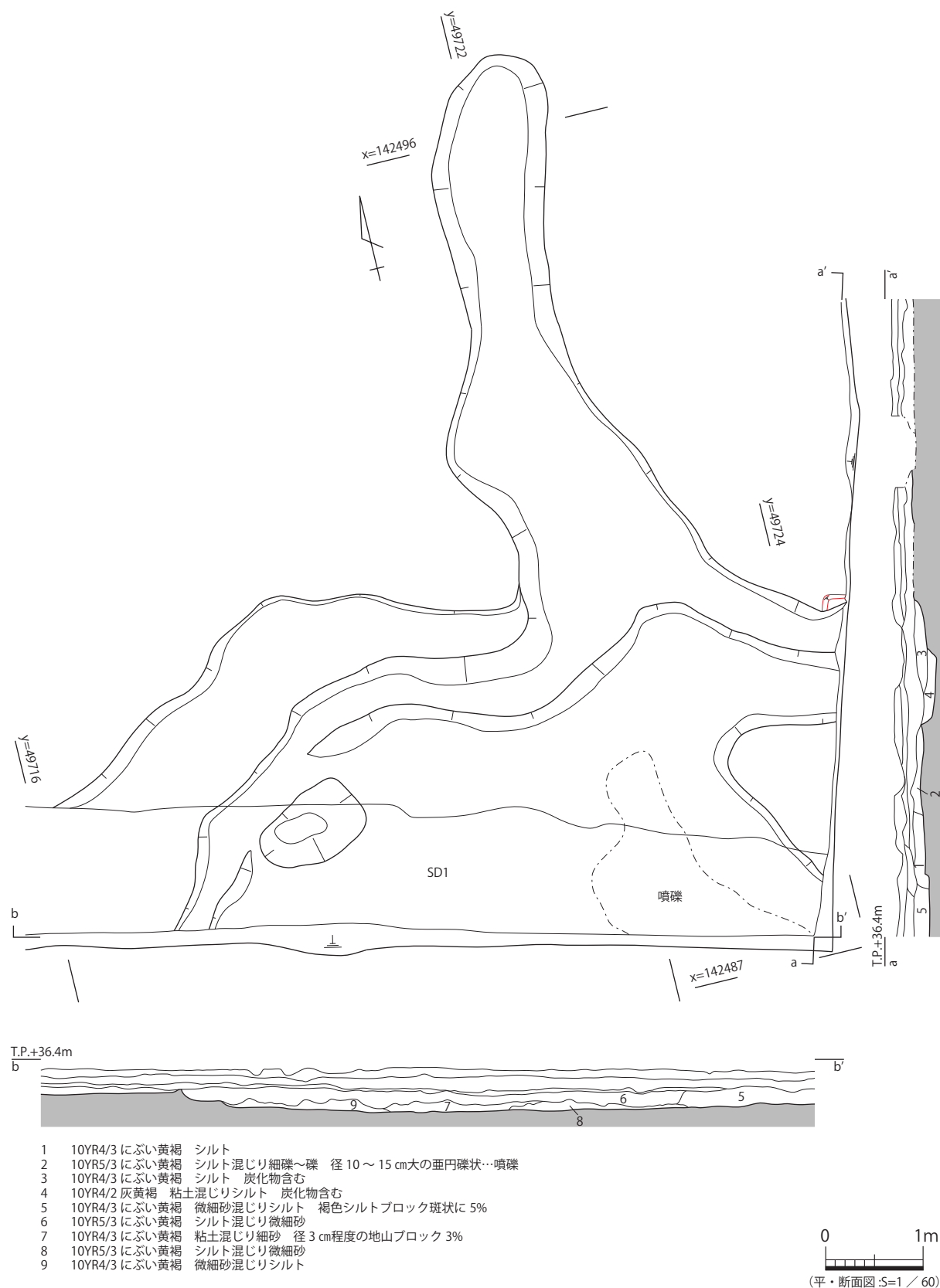


図 118 12-SX 2 平・断面図

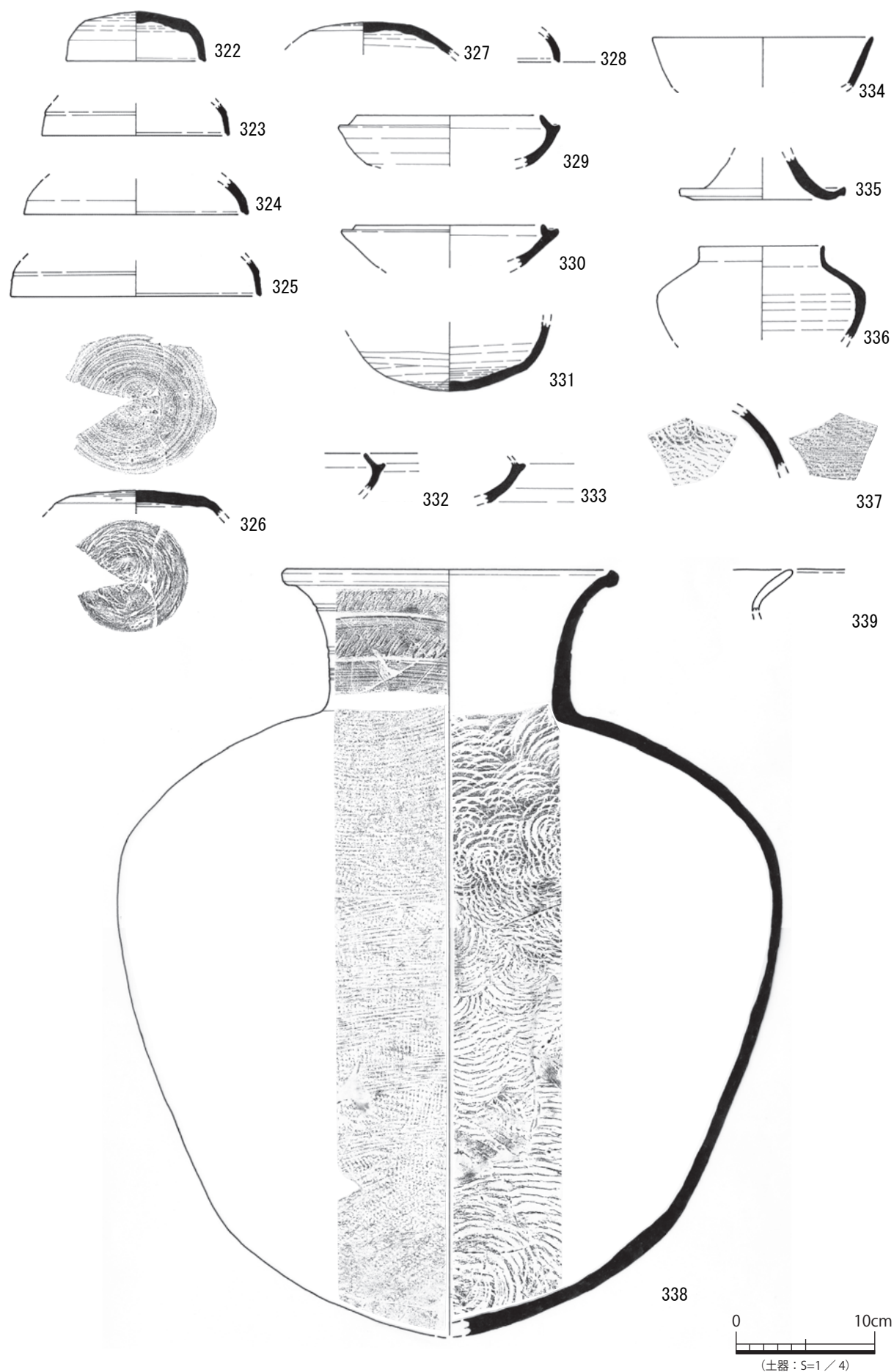


図 119 12-SX 2 出土遺物実測図

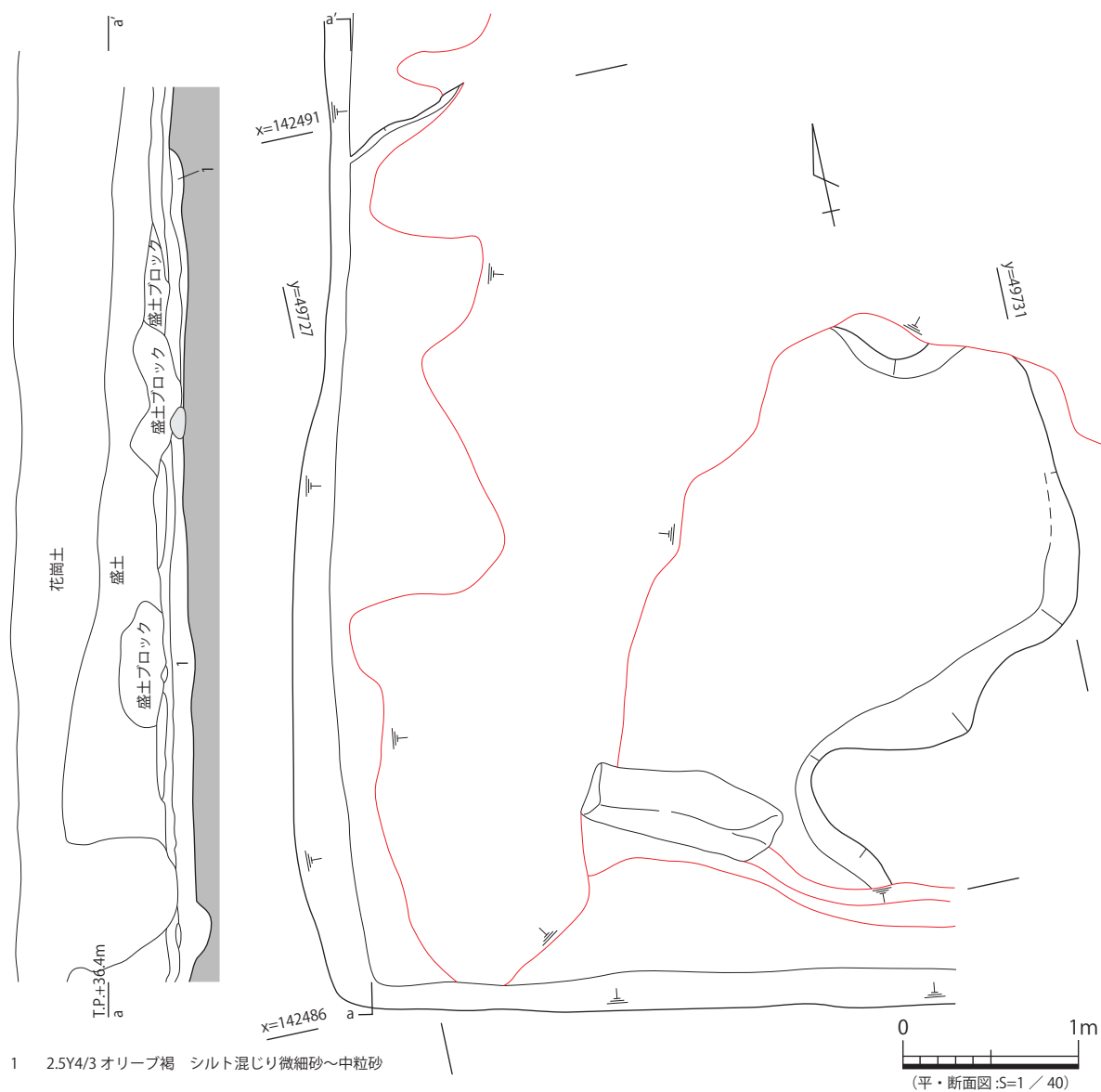


図 120 13-SX 2 平・断面図

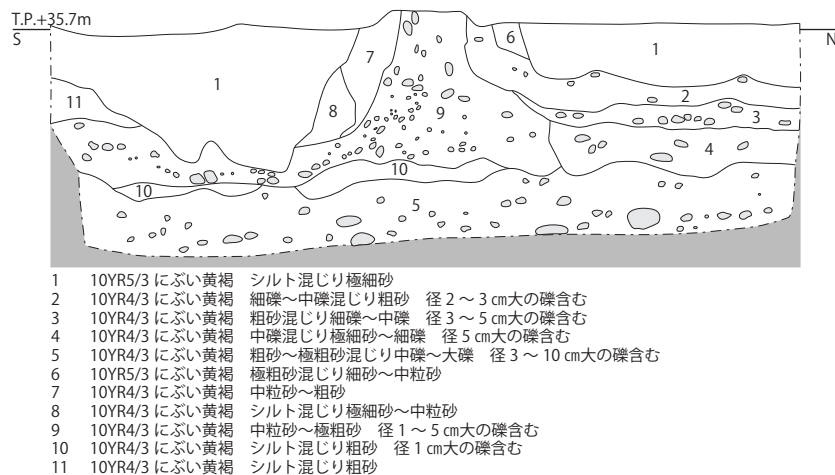
(6) 噴礫 (図 121)

第 10・11・12 調査区において噴礫の存在が確認された。第 10 調査区では、調査区の中央部と南西隅の 2 ヶ所に噴礫を確認した。中央の噴礫は、遺構検出面において全長 1.77 m、幅 0.45 m を測る帯状であり、10 - SD5 を切る。断割りを行い、断面図を作成した (図 121 上)。南西隅の噴礫は南側の調査区外にかかっており、全様は不明である。遺構検出面では長さ 0.95 m を測る。

第 11 調査区では、調査区の中央部と南西部と北西部の 3 ヶ所に噴礫を確認した。中央部の噴礫は

遺構検出面では全長 0.93 m、幅 0.50 m を測る帯状であり、断割りを行い、断面図を作成した (図 121 下)。南西部の噴礫は遺構面では全長 2.75 m、幅 1.10 ~ 0.50 m を測る帯状である。北西部の噴礫は遺構検出面では 2.35×1.60 m を測る長方形である。

第 12 調査区では、調査区の南東隅の 1 ヶ所に噴礫を確認した。東側の調査区外にかかっており、全様は不明である。遺構検出面では 1.65×1.25 m を測る。



第 10 調査区



第 11 調査区

図 121 第 10・11 調査区噴礫 断面図

4 第25調査区（図122）

第25調査区は第26調査区の西側に設定した。調査区の規模は東西方向の長辺3.00 m、南北方向の短辺1.25 mを測る長方形である。発掘調査では遺構・遺物は全く検出できなかった。ただし、南壁の土層観察において噴礫を確認した。

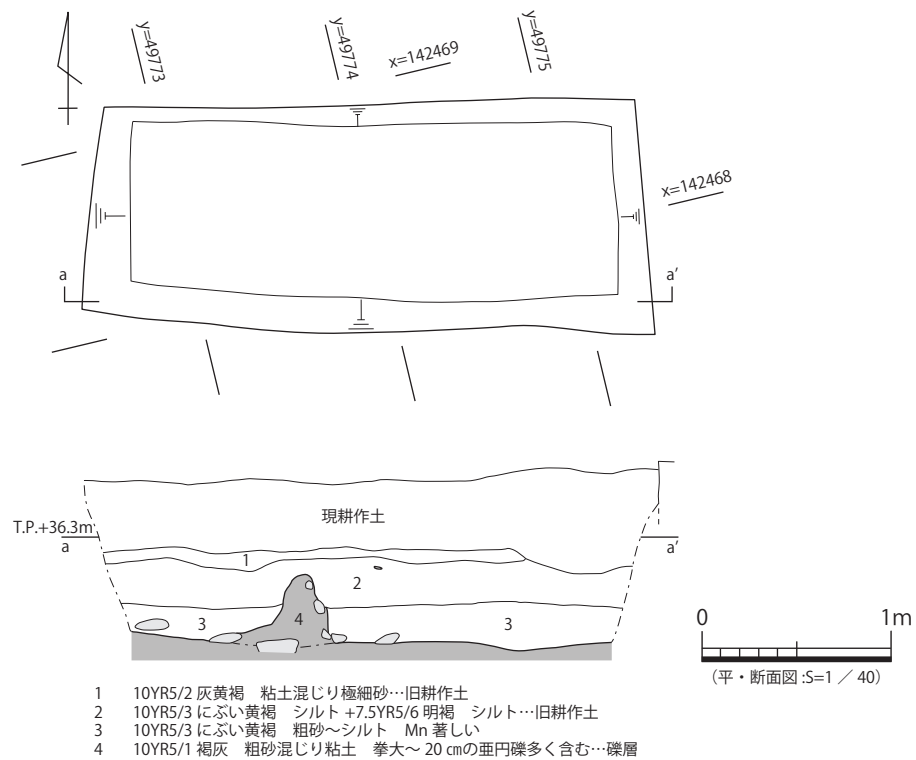


図122 第25調査区 平・断面図

第Ⅲ章 まとめ

第1節 遺構の変遷

1 はじめに

今回の萩前・一本木遺跡の調査では、竪穴建物 24 棟、掘立柱建物 8 棟を検出した。このほか集落に付属する柵列や溝、土坑、柱穴などを確認した。これまでに報告された『萩前・一本木遺跡Ⅰ』・『萩前・一本木遺跡Ⅱ』に記載された建物を含める総数は、竪穴建物 132 棟、掘立柱建物 53 棟である。

これまでの調査成果により古墳時代中期～飛鳥時代までの約 200 年間は連続して、飛鳥時代以降 14 世紀前半までは断続的に人間の営みが行われてきたことが判明している。今回の調査成果もほぼ同様な様相を呈するが、古墳時代中期に比定される遺構は検出されていない点と古墳時代後期中葉～後期末に比定される建物の検出が多い点がこれまでと異なる。

2 時期区分と集落の変遷

今回の発掘調査成果と「萩前・一本木遺跡Ⅰ・Ⅱ」の発掘調査成果をもとに、竪穴建物と掘立柱建物を中心とした萩前・一本木遺跡の集落変遷を 8 時期に区分する(第 123～126 図)。

I 期：古墳時代中期中葉～後半

(須恵器出現以前～T K 208 型式併行期)

Ⅱ期：古墳時代中期後半～中期末

(T K 23～T K 47 型式併行期)

Ⅲ期：古墳時代後期初頭～後期前半

(M T 15～M T 85 型式併行期)

Ⅳ期：古墳時代後期中葉～後期末

(T K 43～T K 209 型式併行期)

V 期：飛鳥時代(T K 217～T K 46 型式併行期)

Ⅵ期：古代

Ⅶ期：中世

Ⅷ期：近世

第 123～126 図は、今回の調査区を入れるために「萩前・一本木遺跡Ⅰ」の第 30～33 調査区、「萩前・一本木遺跡Ⅱ」の第 17・19 調査区を除いた図面である。

【Ⅰ期：古墳時代中期中葉～後半】

I 期は、萩前・一本木遺跡の集落の開始期に相当する。今回の調査では遺構はないが、これまでの調査成果を合わせると、竪穴建物 10 棟、掘立柱建物

2 棟、溝 2 条、土坑 1 基となる。

竪穴建物と掘立柱建物は調査範囲に散発的に確認できる。

【Ⅱ期：古墳時代中期後半～中期末】

Ⅱ期は、萩前・一本木遺跡の集落の拡大期に相当する。今回の調査では遺構はないが、これまでの調査成果を合わせると、竪穴建物 24 棟、掘立柱建物 1 棟、溝 2 条、土坑 6 基となる。

I 期と比較して竪穴建物は倍増し、建物間の距離が短くなり、集住する傾向を示し始める。掘立柱建物は少なくなるが存在する。竪穴建物が調査範囲の南側にも検出され、居住域の拡大が認められる。

【Ⅲ期：古墳時代後期初頭～後期前半】

Ⅲ期は、萩前・一本木遺跡の最盛期に相当する。今回の調査では、竪穴建物 4 棟、掘立柱建物 2 棟、土坑 1 基を確認した。これまでの調査成果を合わせると、竪穴建物 34 棟、掘立柱建物 9 棟、溝 4 条、土坑 1 基となる。

Ⅱ期と比較して竪穴建物と掘立柱建物は増加しており、竪穴建物の規模が拡大し、建物間の距離がより一層短くなっている。掘立柱建物では総柱建物が確認できた。調査範囲の北側に集住する傾向を示し、集落の中心が形成されてきたと考えられる。

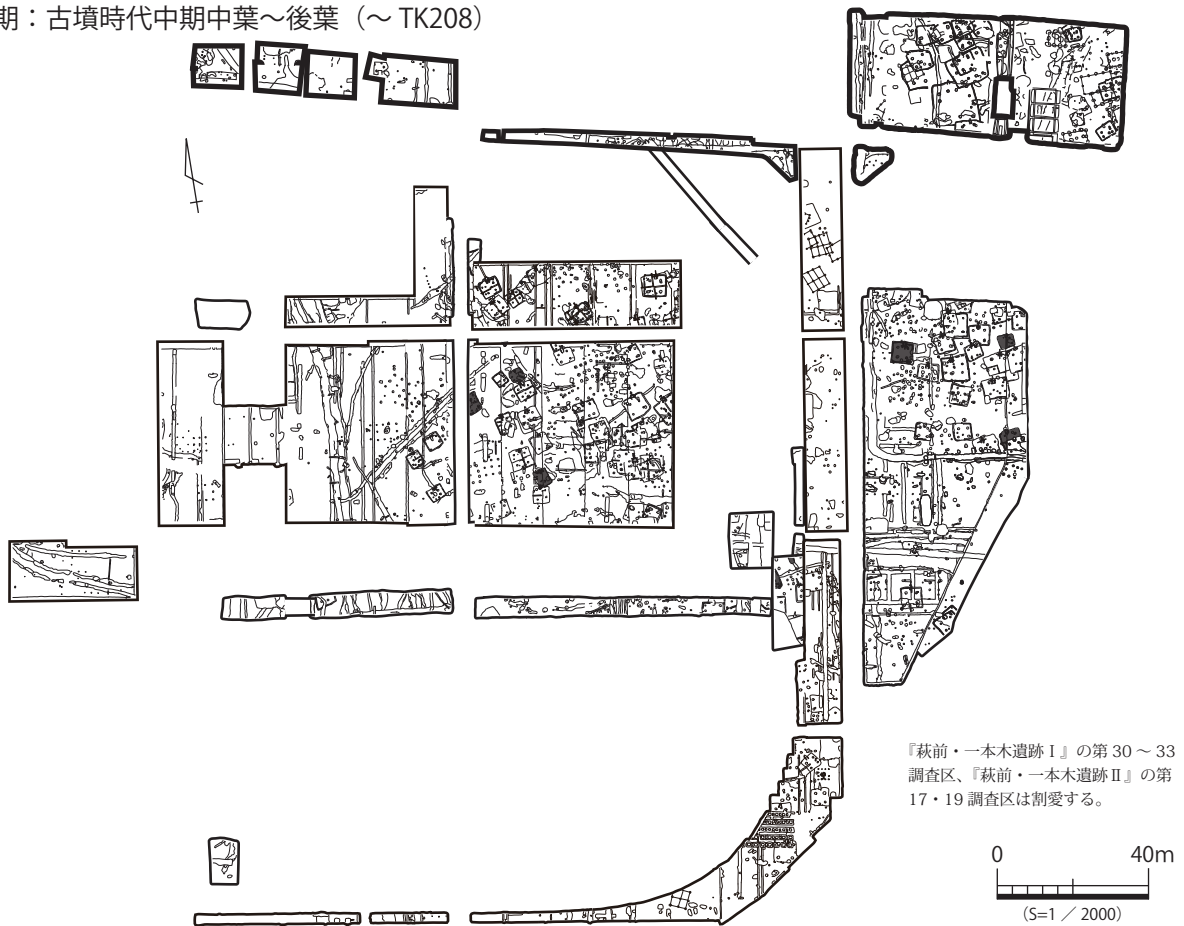
建物が集住する北側において、首長居館に伴うと想定される大溝(14・27 - S D 70)によって区画された内側と少し距離を隔てる西側の 2 ヶ所に建物の集中が認められる。注目すべき点は、この首長居館区画内と区画外における建物の様相の違いである。区画内の竪穴建物が区画外の建物と比較して大型化することである。面積が 50㎡前後の大型竪穴建物であり、2・3 - 掘立 1 は桁行長 5.88 m を測り、2・5 - 掘立 6 は廂付き総柱建物である。これに関しては第 2 節において論考する。

今回の調査では、「萩前・一本木遺跡Ⅰ」で確認した首長居館区画の大溝が検出されていないが、現有水路と重なり合っていると考えられる。

【Ⅳ期：古墳時代後期中葉～後期末】

Ⅳ期は、『萩前・一本木遺跡Ⅰ・Ⅱ』では衰退期に相当するとしているが、今回の調査では、竪穴建

I 期：古墳時代中期中葉～後葉（～TK208）



Ⅱ期：古墳時代中期後葉～末葉（TK23～TK47）

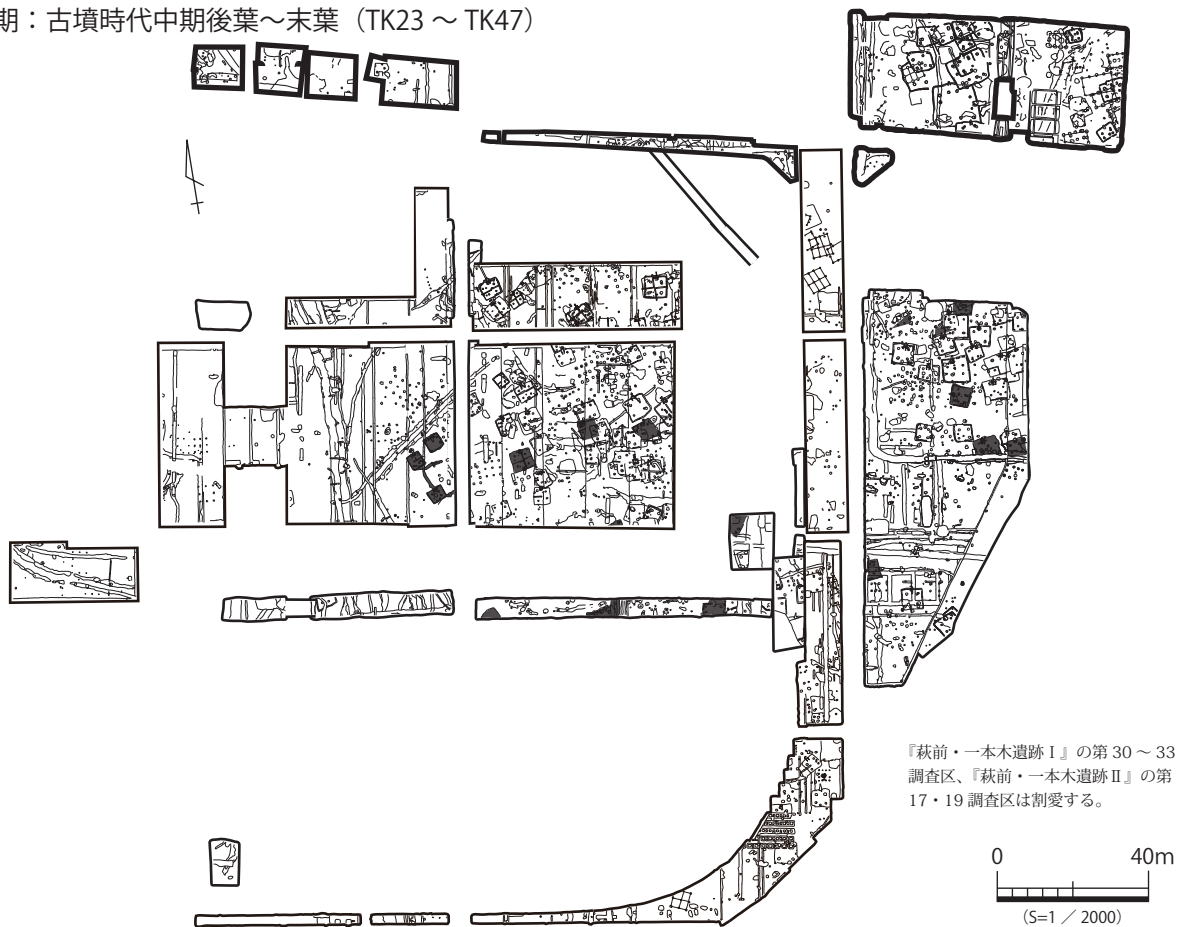
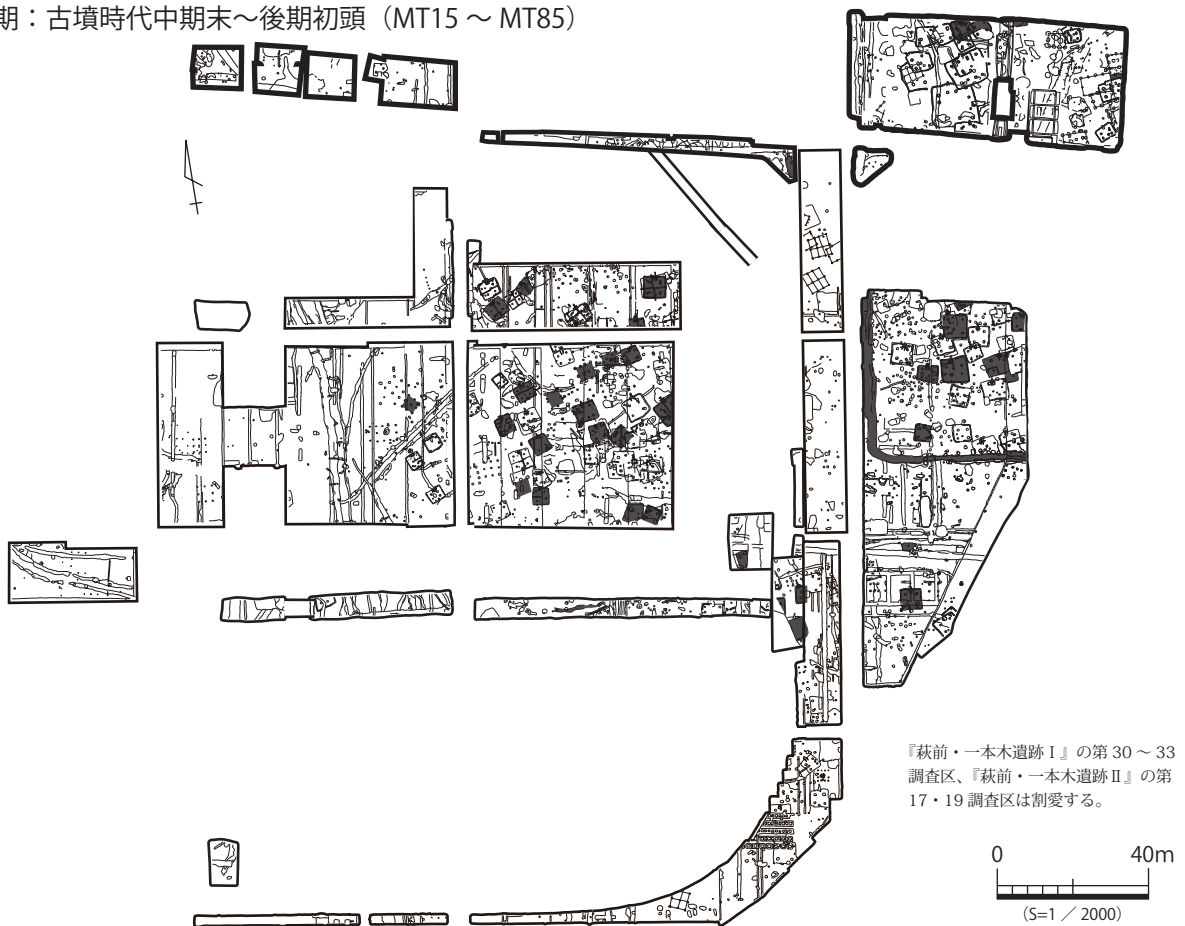


図 123 遺構変遷図（1）

Ⅲ期：古墳時代中期末～後期初頭（MT15 ～ MT85）



Ⅳ期：古墳時代後期前葉～後期末（TK43 ～ TK209）

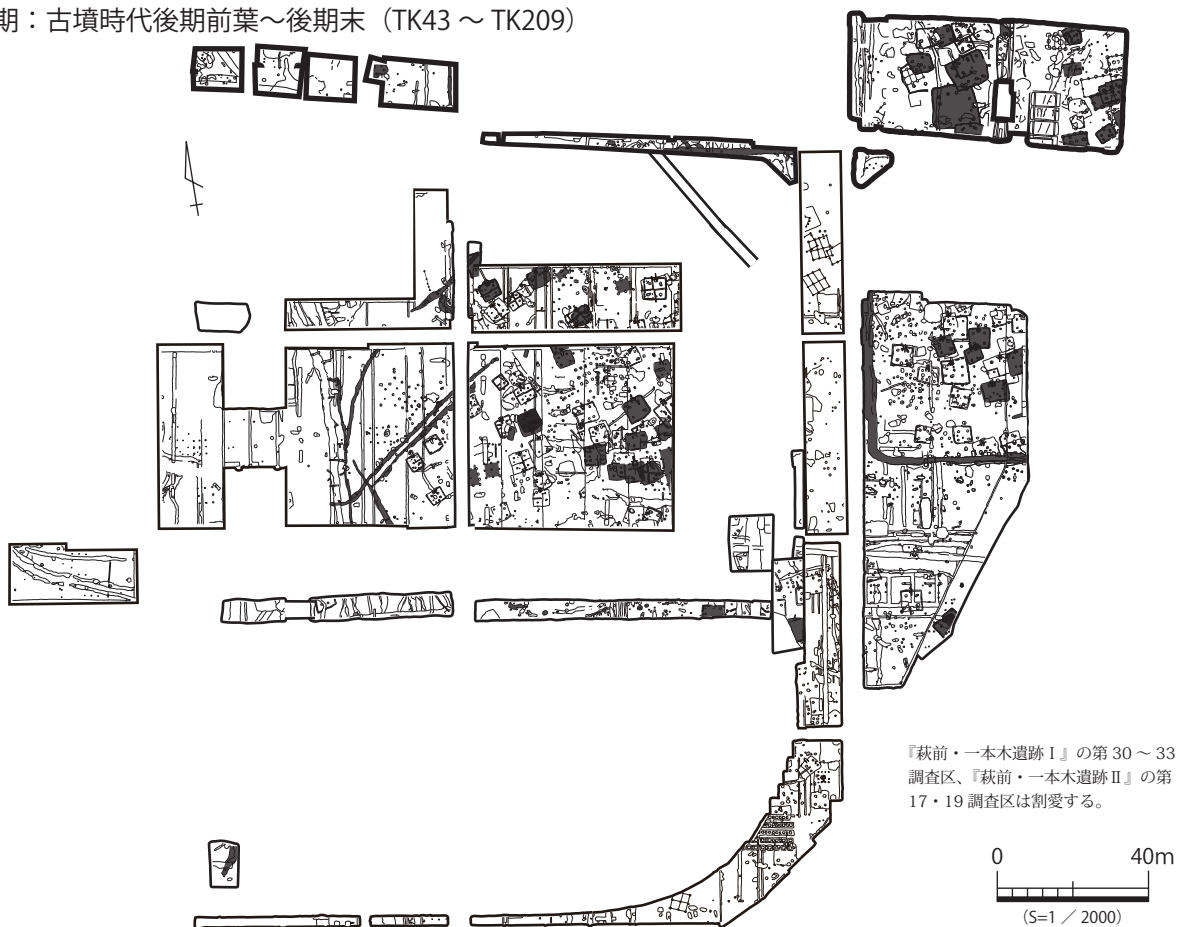
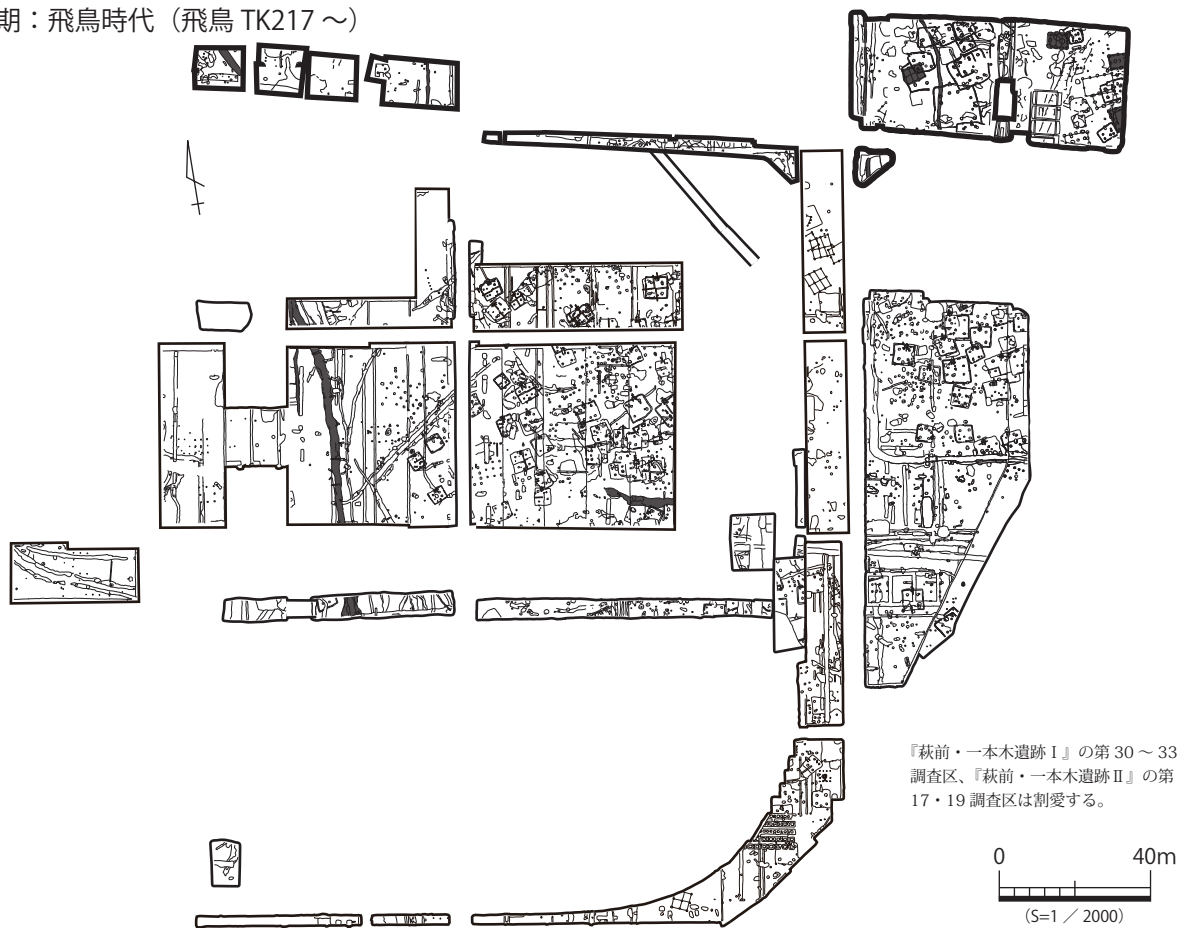


図 124 遺構変遷図（2）

V期：飛鳥時代（飛鳥 TK217 ～）



VI期：古代

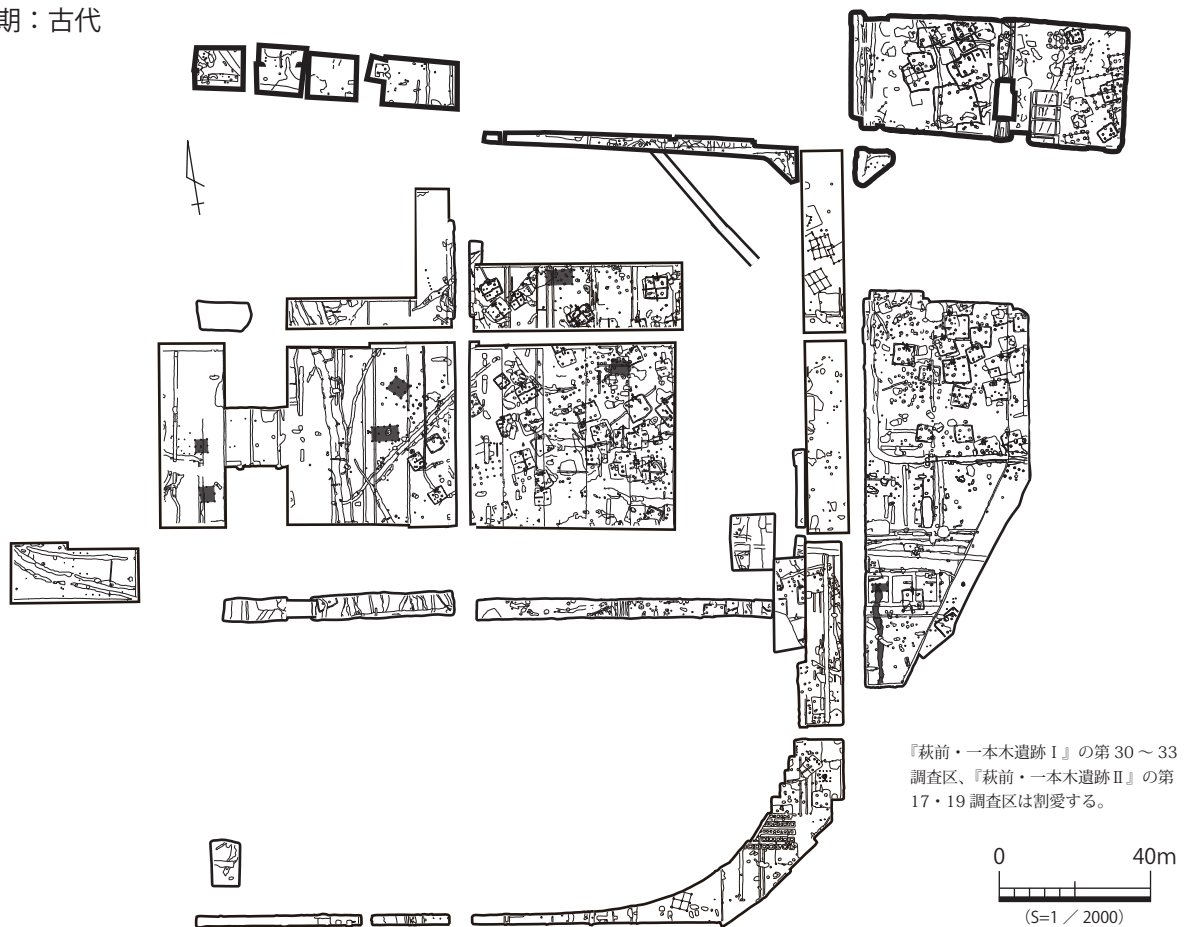
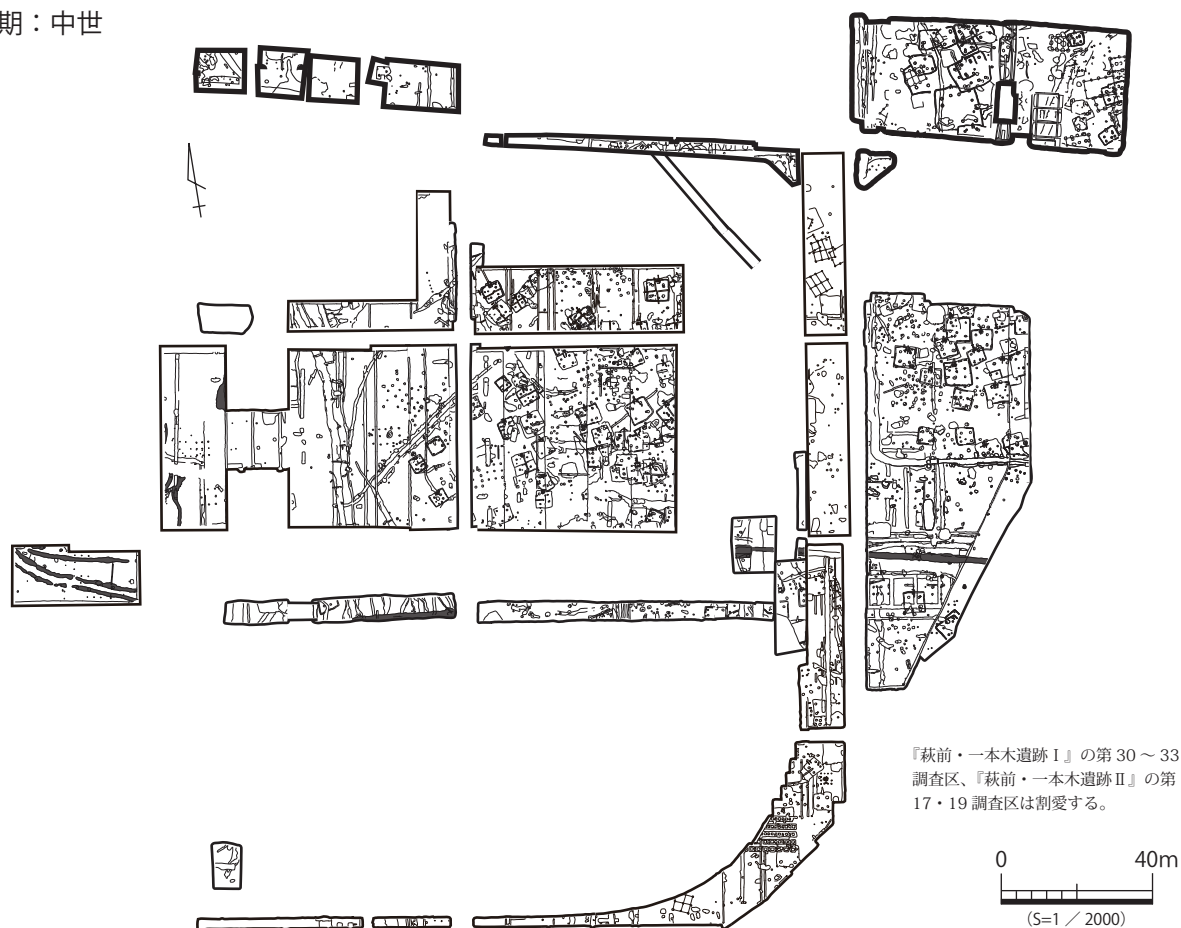


図 125 遺構変遷図（3）

Ⅶ期：中世



Ⅷ期：近世

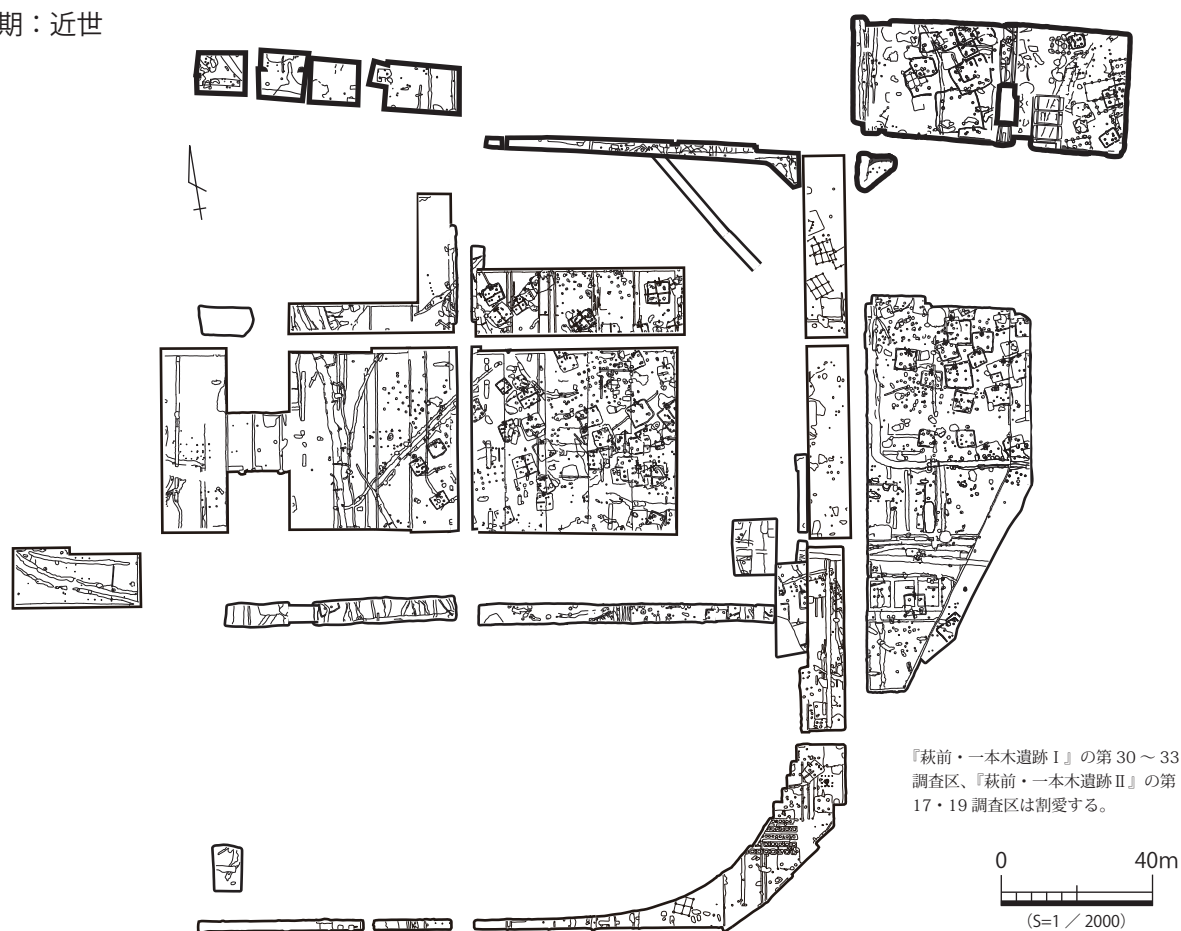


図 126 遺構変遷図 (4)

物 13 棟、掘立柱建物 4 棟、柵列 1 基、溝 5 条、土坑 1 基、性格不明遺構 3 基を確認しており、Ⅲ期と同様に最盛期と考えられる。これまでの調査成果を合わせると、竪穴建物 36 棟、掘立柱建物 11 棟、溝 13 条、土坑 15 基、柵列 5 基、性格不明遺構 4 基となる。

首長居館区画内の竪穴建物は、南西部で減少傾向を示しているが、今回調査した北東部ではやや密集状況を呈し、7 - 竪穴 10 のような面積 76㎡の大型竪穴建物や 7・8 - 竪穴 14 のような面積 120㎡以上を測る超大型竪穴建物が存在する。掘立柱建物は大型建物や総柱建物である。北東部が首長居館区画内での中心となり、重要な機能を持つ地域になったと考えられる。

首長居館区画外の竪穴建物は、棟数にあまり変化はないが、居住域がやや拡大し、14・27 - S D 70 の西側と南側にも建物が検出された。また、区画を意図する溝が掘削され、柵列も確認できることから、集落内で区画を意図していることが窺われる。

【Ⅴ期：飛鳥時代】

Ⅴ期では、この時期の建物は確認できておらず、集落の中心が移動した可能性が考えられる。今回の調査では、溝 7 条、土坑 2 基を確認した。これまでの調査成果を合わせると、溝 10 条、土坑 3 基となる。

『萩前・一本木遺跡Ⅰ』では、首長居館区画の大溝は埋められ、建物が密集する範囲の西側に大溝（9 - S D 205・11 - S D 2・32 - S D 20・36 - S D 10）が掘削される。大溝は条里に沿った南北方向に延びている。今回調査の第 11 調査区で検出した 11 - S D 1 はこの大溝の延長線上に位置し、その規模も同様であることから同一の溝である可能性が高い。

【Ⅵ期：古代】

今回の調査では遺構の検出はないが、これまでの調査成果を合わせると、掘立柱建物 6 棟、溝 6 条、土坑 2 基を確認した。掘立柱建物は調査範囲の西側に確認されるが、建物間の距離が広く、点在している。その他の遺構も同様に点在する傾向を示している。

【Ⅶ期：中世】

今回の調査では遺構の検出はないが、これまで

の調査成果を合わせると、掘立柱建物 1 棟、溝 6 条、土坑 2 基を確認した。掘立柱建物は 1 × 1 間の建物であり、居住のための建物とは考えられないので、居住域としての利用はされていなかったと想定できる。

【Ⅷ期：近世】

今回の調査では、溝 2 条を確認した。2・3・5・8 - S D 5 は条里地割に沿う東西方向に延びる溝であり、香川郡条里二条 11 里と 12 里の境界線を踏襲していると考えられる。

3 まとめ

以上、萩前・一本木遺跡の変遷をみてきた。

竪穴建物等の遺構は検出されていないが、弥生土器や石器が出土していることから、当該地で人の活動が開始するのは弥生時代である。

集落として機能するのは、古墳時代中期中葉からであり、その後の飛鳥時代までの約 200 年間にわたって活発な活動が展開された。その変遷をまとめると、『萩前・一本木遺跡Ⅱ』で記述するように「Ⅰ期は散発的に居住を開始。Ⅱ期は集落域全体が拡大。Ⅲ期は集住化。Ⅳ期は集落の境界の明確化と集住」である。飛鳥時代以降は建物が消滅し、集落の機能が急速に衰退していく。古代において一時的に掘立柱建物がみられるが、その後は溝を中心とする遺構が確認され、生産域として機能したと考えられる。

萩前・一本木遺跡は高松平野において古墳時代中期から飛鳥時代にかけての最大級の集落である。今回の調査区域は、その集落の中で重要な位置をなす首長居館区画内の北部にあたり、居館の中核となる施設の一端を明らかにすることができた。

今後の周辺の調査が蓄積されるに伴い、居館の全貌が解明され、さらに集落としての萩前・一本木遺跡の全様が明らかになる可能性が考えられる。

第 2 節 居館区画に伴う建物に関する一考察

1 はじめに

第 1 節において萩前・一本木遺跡の集落の変遷を明らかにした。Ⅲ期とⅣ期では首長居館区画に伴うと想定される大溝（14・27 - S D 70）が確認され、竪穴建物・掘立柱建物が区画内と区画外によって異なる様相を呈することが判明した。当該期の竪穴建物床面積のデータを提示し、そこから各時期

の建物の様相の特徴を考えてみたい。なお、データとして抽出した資料は竪穴建物の確実性が高く、かつ床面積測定に堪えるだけの残存状況を有するものに限定する。

2 Ⅲ期の建物の様相

Ⅲ期の竪穴建物の棟数は26棟であり、その内訳は区画内10棟、区画外16棟である。区画内では20㎡台と30～50㎡台に二分される。20㎡台が5棟、30㎡台が2棟、40㎡台が2棟、50㎡台が1棟である。区画外では10～20㎡台が9割近くを占めており、一般的な規模の竪穴建物がほとんどである。区画内の建物は区画外の建物より大型化が顕著であるといえる。

掘立柱建物に関しては、全体を検出した建物が少ないためデータ化できないが、区画内の掘立柱建物は20㎡台以上の床面積であるのに対して、区画外の掘立柱建物は10㎡台である。竪穴建物と同様に掘立柱建物においても区画内が大型である。さらに、構造上の違いもある。区画外の建物が側柱建物であるに対し、区画内は2・5 - 掘立6のような廂付き総柱建物や2・3 - 掘立1のように桁行長5.88mを測る建物が存在する。

3 Ⅳ期の建物の様相

Ⅳ期の竪穴建物の棟数は27棟であり、その内訳は区画内12棟、区画外15棟である。区画内では、10～20㎡台に7割強が集中するが、特筆すべきは床面積約76㎡の7 - 竪穴10と床面積が124.7㎡を測る7・8 - 竪穴14の存在である。Ⅲ期は大型の建物が数棟あるのに対して、Ⅳ期では超大型の建物が2棟存在する。さらに、全体が検出できなかったために資料に含まれてないが、7・8 - 竪

穴14と同規模の可能性がある8 - 竪穴12も存在する。区画外では10～20㎡台は減少するが、30㎡台は大幅に増加している。しかし、超大型の建物は存在しない。

掘立柱建物に関して、区画内は10㎡台の床面積である建物4棟と41.3㎡の建物1棟がある。区画外の掘立柱建物は10㎡未満と10㎡台である。つまり、区画内に大型の建物が1棟存在する。竪穴建物と同様に掘立柱建物においても区画内が大型である。

4 まとめ

区画内と区画外の建物の様相の違いを論じてきたが、まとめると以下になる。

- ・区画内の建物は、区画外の建物と比較すると大型である。
- ・区画内の建物はⅢ期とⅣ期で異なる様相を呈する。Ⅲ期は、建物の規模から小型の建物と大型の建物の2種類に分類され、その比率は5:5である。Ⅳ期は、建物の規模から小型の建物とやや大型の建物と超大型の建物の3種類に分類され、その比率は10:1:2である。つまり大型建物に関すると、Ⅲ期は30～50㎡台に分散型であるのに対して、Ⅳ期は一極集中型であると言える。

以上のことから、区画内の集落は区画外より大きな勢力を有し、区画内の集落においては、Ⅲ期が勢力の分散化、Ⅳ期が勢力の一極集中化した状態であると考えられる。しかし、この考えは建物の規模という1要素から導かれたものであり、萩前・一本木遺跡の集落構造や性格等を解明するためには、建物の位置関係や建物の属性（主軸方位・カマド・柱配置等）、出土遺物などを総合的に検討する必要がある。さらに資料の蓄積も必要である。

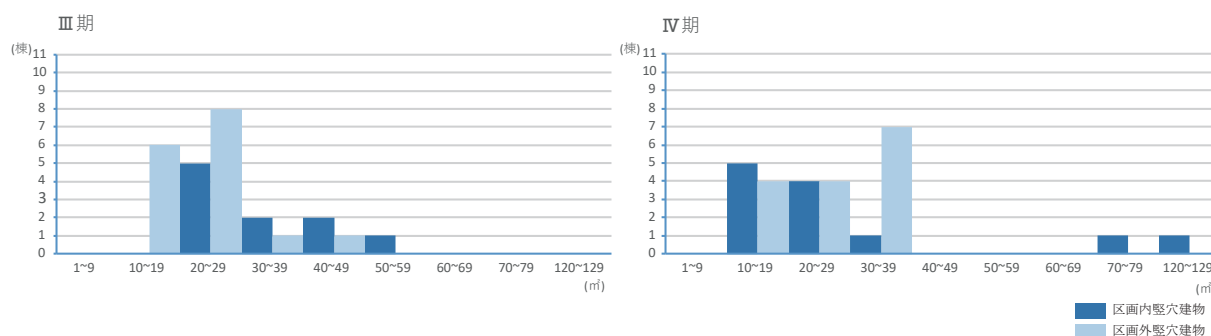


図 127 建物規模分布図

表3 土器観察表(1)

法量：単位 cm (推定値) [残存値]

遺物 番号	挿図 番号	出土遺構	種別 器種	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土	焼成	備考
1	4	26-Ⅰ竪穴18	須恵器 杯蓋	14.9 - 4.5	口縁部と天井部の境は稜が巡り、口縁部はやや直立し、端部は凹斜面を有す。天井部は高く、丸い。 [外]回転ヘラケズリ、回転ナデ [内]ナデ、回転ナデ	[外]N4/灰 [内]N7/灰白 精良:1~3mmの石英・長石含む		
2	4	26-Ⅰ竪穴18	須恵器 底部	- (6.7) [1.3]	底部は平底であり、中央が凹む。 [外]回転ナデ、回転ヘラケリ [内]ナデ	[外]N6/灰 [内]N7/灰白 普:1mm以下の石英・長石・黒色粒含む		
3	4	26-Ⅰ竪穴18	須恵器 壺	(19.0) - [7.8]	口縁部は体部から鋭角に屈曲し、外反する。端部は折り返しされる。 [外]回転ナデ、カキ目、平行タキ→ナデ [内]回転ナデ、青波状タキ→ナデ	[外]N6/灰 [内]N6/灰 普:1~2mmの石英・長石・黒色粒含む		
4	4	26-Ⅰ竪穴18	土師器 壺	(16.6) - [15.0]	口縁部は球形の体部からほぼ直立する。端部は丸い。 [外]ヨコナデ、指頭圧、指ナデ、ナデ [内]摩滅	[外]7.5YR5/6明褐 [内]10YR5/1褐灰 普:1mm以下の石英・長石・赤色粒含む		
5	4	26-Ⅰ竪穴18	土師器 壺	- 5.2 [13.2]	体部は丸底の底部から急傾斜で立ち上がる。外面の一部に黒斑がある。 [外]ナデ [内]ナデ、指頭圧	[外]10YR8/3浅黄橙 [内]10YR8/3浅黄橙 普:1~5mmの石英・長石・赤色粒含む		
6	10	26-SD20	須恵器 杯身	- - [2.1]	立ち上がりは細く短く、直立する。受端部は丸く細い。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N5/灰 [内]N5/灰 普:1mm以下の石英・長石含む		
7	10	26-SD20	須恵器 無蓋高杯	- - [4.5]	体部は若干内弯気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は凹斜面を有する。 外面に2本1対の沈線が2組巡り、その間を斜行文が施される。 [外]回転ナデ、沈線、斜行文 [内]回転ナデ	[外]N5/灰 [内]N5/灰 普:1mm以下の石英・長石含む		
8	10	26-SD20	須恵器 壺(底部)	- (8.0) [3.5]	底部は中央が凹む丸底である。 [外]回転ヘラケズリ [内]回転ナデ、工具痕	[外]N6/灰 [内]N7/灰白 普:1mm以下の石英・長石含む		
9	10	26-SD20	須恵器 壺	- (9.6) [20.6]	体部は球形を呈し、底部は丸底である。 [外]平行タキ→カキ目 [内]青波状タキ	[外]5Y6/1灰 [内]N6/灰 普:1mm以下の石英・長石含む		
10	10	26-SD20	土師器 壺	(12.2) - (18.4)	口縁部はゆるやかに外反し、端部は丸い。体部は球形を呈し、底部は丸底である。 体部中位に最大径がある。体部内面に輪積み痕が残存する。 [外]ヨコナデ、ハケ→ナデ [内]ヨコナデ、ハケ、ナデ	[外]7.5YR6/4にぶい橙 [内]7.5YR7/4にぶい橙 普:1~3mmの石英・長石・赤色粒含む		
11	10	26-SD20	土師器 壺	(15.0) - [17.0]	口縁部は球形の体部から鋭角に屈曲し、外反する。端部は面を有す。底部は丸底である。 [外]ヨコナデ、ハケ、摩滅 [内]ヨコナデ、指ナデ、指頭圧	[外]7.5YR5/4にぶい褐 [内]7.5YR6/4にぶい橙 普:1~5mmの石英・長石含む		
12	11	26-SD29	土師器 瓶	(23.5) - [13.8]	ほぼ直線的な体部から口縁部に至る。口縁部はわずかに外反する。位置は不明だが把手を有する。 [外]指頭圧→ハケ [内]ヨコナデ、ヘラケズリ	[外]7.5YR6/4にぶい橙 [内]7.5YR5/3にぶい褐 普:1~4mmの石英・長石・赤色粒含む		
14	13	26-SD41	須恵器 杯身	- - [1.8]	器高が低い杯身である。立ち上がりは短く、内傾する。受端部は丸い。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N7/灰白 普:0.5mm以下の石英・長石含む		
15	15	26-SK2	須恵器 壺	(21.4) - [5.5]	水平に延びる肩部から口縁部は外反する。端部は折り返しである。端部に砂が付着する。 [外]回転ナデ、タキ→カキ目、斜行文 [内]回転ナデ、青波状タキ→ナデ	[外]N7/灰白 [内]N7/灰白 普:1~2mmの石英・長石・黒色粒含む		
17	18	26-SX33	須恵器 無蓋高杯(杯部)	(11.0) - 5.75	体部は半球形を呈し、体部から口縁部に至る。口縁端部は丸い。 脚部との接合痕がある。体部中位に2条の凹線が巡る。 [外]回転ナデ、ナデ [内]回転ナデ、指ナデ	[外]N5/灰 [内]N6/灰 普:1mm以下の石英・長石含む		
18	20	第26調査区包含層	須恵器 杯B	- - [1.25]	底部に断面方形の低い高台が付く。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N6/灰 普:1~2mmの石英・長石・黒色粒含む		
19	20	第26調査区包含層	須恵器 壺(底部)	- - [4.75]	体部は平底の底部から急斜面で立ち上がる。 [外]回転ナデ、ナデ、回転ヘラケリ [内]ナデ、回転ナデ	[外]N7/灰白 [内]7.5Y6/1灰 普:1~2mmの石英・長石含む		
20	20	第26調査区包含層	土師器 壺(口縁)	(17.4) - [3.9]	口縁部は鋭角に屈曲し、中位でわずかに内傾する。端部は斜面をもつ。 [外]ヨコナデ [内]ヨコナデ	[外]7.5YR5/4にぶい褐 [内]7.5YR6/4にぶい橙 普:1~4mmの石英・長石含む		
21	22	2・3-Ⅰ竪穴20	須恵器 杯身	- - [1.8]	立ち上がりは短く、ほぼ直立する。受部は短く、丸い。 [外]摩滅 [内]摩滅	[外]2.5Y8/2灰白 [内]2.5Y8/2灰白 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
22	22	2・3-Ⅰ竪穴20	須恵器 高杯	- (9.0) [2.0]	脚部はハの字状に開き、裾端部は外端面を持つ。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N6/灰 普:1mmの石英・0.5mm以下の白色粒含む	良	

表 4 土器観察表 (2)

遺物 番号	挿図 番号	出土遺構	種別 器種	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土	焼成	備考
23	22	2・3- 竪穴20	土師器 壺	- - [2.85]	口縁部は大きく外反し、端部は先細りし、面を持つ。 [外]ナデ、ハケ [内]ハケ	[外]2.5YR5/6明赤褐 [内]2.5YR5/6明赤褐 普:1cm以下の石英・金雲母・白色粒含む	良	
24	22	2・3- 竪穴20	土師器 壺	- - [9.1]	体部の上半である。 [外]指頭圧→ハケ [内]指頭圧→ナデ	[外]10YR8/3浅黄橙 [内]7.5YR6/6橙 普:2mm以下の石英・白色粒・黒色粒多量 に含む	良	
25	24	2・3- 竪穴30	須恵器 杯蓋	- - [2.5]	口縁部と天井部の境は丸く、なめらか。 口縁部は少し厚い。端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]10Y6/1灰 [内]10Y6/1灰 普:	良	
26	24	2・3- 竪穴30	須恵器 杯蓋	- - [2.9]	口縁部と天井部の境は丸く、なめらか。口縁端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]7.5Y6/1灰 [内]7.5Y6/1灰 普:	良	
27	24	2・3- 竪穴30	須恵器 杯身	(7.6) - [2.1]	立ち上がりは短く、内傾する。受端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]2.5Y6/1黄灰 [内]2.5Y6/1黄灰 普:	良	
28	24	2・3- 竪穴30	須恵器 杯身	9.4 - (2.4)	立ち上がりは短く、内傾する。 受端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]2.5Y7/2灰黄 [内] 粗:	良	
29	24	2・3- 竪穴30	須恵器 杯身	(11.8) - [3.0]	立ち上がりは短く、内傾する。受端部は丸く、おさめる。天井部は高い。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N7/灰白 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
30	24	2・3- 竪穴30	須恵器 杯身	(15.6) (11.6) [3.2]	口径は大きく、器高は低い。立ち上がりは内傾し、やや短い。 受端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ、回転ヘラズリ [内]回転ナデ	[外]N5/灰 [内]N5/灰 普:	良	
31	24	2・3- 竪穴30	須恵器 杯身	- - [3.4]	立ち上がりは内傾し、受部は短く、丸くおさめる。 [外]回転ナデ、ナデ [内]回転ナデ	[外]2.5Y7/1灰白 [内]N8/灰白 普:1mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
32	24	2・3- 竪穴30	須恵器 杯身	- - [1.5]	底部は平底である。 [外]回転ナデ、回転ヘラズリー板目 [内]回転ナデ→ナデ	[外]N7/灰白 [内]N7/灰白 普:	良	
33	25	2・3- 竪穴30	須恵器 甕	14.0 - 16.6	口頸部は外反気味に立ち上がり、口縁部に至る。 口縁部は浅い沈線を境にして鋭角に外上方にのび、端部は面を有する。 体部は丸味をもち体部中位に円孔を穿っている。 底部は丸底。体部中位と口頸部中位に沈線が巡る。 [外]回転ナデ、ヘラナデ、ナデ [内]回転ナデ、ヘラナデ、しぼり目	[外]N7/灰白 [内]N7/灰白 普:0.5mm以下の石英・白色粒含む	良	
34	25	2・3- 竪穴30	須恵器 壺	- - [3.2]	口頸部はほぼ直立する。 [外]回転ナデ、自然釉 [内]回転ナデ	[外]10YR7/1灰白 [内]N8/灰白 精良:	良	
35	25	2・3- 竪穴30	須恵器 壺	- - [3.8]	体部の上位である。 [外]回転ナデ、ナデ [内]回転ナデ、青波状タタキ	[外]5Y7/1灰白 [内]5Y7/1灰白 普:	良	
36	25	2・3- 竪穴30	須恵器 壺?	- - [2.2]	体部の肩部の破片である。 [外]回転ナデ、ハケ、ナデ [内]回転ナデ、青波状タタキ→ナデ	[外]2.5Y7/1灰白 [内]2.5Y7/1灰白 普:	良	
37	25	2・3- 竪穴30	須恵器 高杯	- 8.6 [3.5]	脚部はハの字状に開き、裾端部は外端面をもつ。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]7.5Y6/1灰 [内]7.5Y3/1オリーブ黒 普:	良	
38	25	2・3- 竪穴30	須恵器 高杯	- 19.6 [2.4]	裾端部は下方に肥厚し外端面をもつ。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N7/灰白 [内]N7/灰白 普:	良	
39	25	2・3- 竪穴30	須恵器 高杯	- - [2.5]	裾端部は外端面をもつ。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]7.5Y7/1灰白 [内]7.5Y7/1灰白 普:	良	
40	25	2・3- 竪穴30	須恵器 壺	- - [7.2]	体部の下半であり、器厚が厚い。 [外]平行タタキ [内]青波状タタキ	[外]N6/灰 [内]N6/灰 普:	良	
41	25	2・3- 竪穴30	土師器 壺	20.0 - [2.7]	口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさめる。 [外]摩滅 [内]摩滅	[外]7.5YR5/6明褐 [内]7.5YR5/6明褐 白色、赤色、黒色粒、石英多量に含む	良	
42	25	2・3- 竪穴30	土師器 壺	- - [2.0]	口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさめる。 [外]ヨコナデ [内]ヨコナデ	[外]10YR7/4にぶい黄橙 [内]10YR7/4にぶい黄橙 普:	良	

表5 土器観察表(3)

遺物 番号	挿図 番号	出土遺構	種別 器種	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土	焼成	備考
43	25	2・3－竪穴30	土師器 壺	－ － [2.3]	口縁端部は若干肥厚し、外端面をもつ。 [外]摩減 [内]ハケ、摩減	[外]7.5YR7/3にぶい橙 [内]10YR5/3にぶい黄褐 普:	良	
44	25	2・3－竪穴30	土師器 高杯	－ － [3.5]	脚部はハの字状に開く。 [外]摩減 [内]摩減	[外]5YR6/6橙 [内]7.5YR6/2灰褐 粗:	良	
45	25	2・3－竪穴30	土師器 高杯	－ － [2.9]	脚部はハの字状に広がる。 [外]摩減 [内]摩減	[外]10YR6/6明黄褐 [内]10YR6/6明黄褐 普:	良	
46	25	2・3－竪穴30	土師器 壺	－ － [7.5]	直線的な体部から、口頸部が大きく外反する。 [外]指頭圧、ナデ、ハケ [内]指頭圧→ハケ、接合痕	[外]7.5YR7/4にぶい橙 [内]7.5YR6/2灰褐 普:1mm以下の白色粒含む	良	
47	25	2・3－竪穴30	土師器 鍋	－ － －	牛角状を呈し、端部は面をもつ。 [外]指頭圧 [内]ナデ	[外]7.5YR8/4浅黄橙 [内]10YR8/2灰白 普:1～3mmの石英・0.5mm以下の白色粒 含む	良	
50	27	2・4－竪穴58	須恵器 杯身	－ － [2.25]	器高は低い。受端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ、ナデ、回転ヘラケズリ [内]回転ナデ	[外]5Y6/1灰 [内]N6/灰 精良:0.5mm以下の白色粒少量含む	良	
51	27	2・4－竪穴58	須恵器 高杯	－ (8.2) [2.4]	脚部はハの字状に開く。裾部は水平に延び、端部は下方に肥 厚する。 [外]摩減 [内]摩減	[外]5Y4/1灰 [内]5Y4/1灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
52	27	2・4－竪穴58	土師器 杯	(18.8) － [3.2]	体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部に至る。端部は丸い。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]5YR6/6橙 [内]5YR6/6橙 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
53	27	2・4－竪穴58	土師器 甌	(23.8) － [9.6]	体部は内弯し立ち上がり口縁部に至る。口縁端部は丸い。把 手は牛角状を呈す。 [外]ナデ、ハケ、指頭圧→ハケ [内]ナデ	[外]7.5YR8/6浅黄橙 [内]7.5YR8/6浅黄橙 粗:1～5mmの石英・1mm以下の白色粒含 む	良	
54	28	3－竪穴70	須恵器 壺	(14.0) － [2.2]	器高は低い。口縁部と天井部の境は若干の稜が巡る。 口縁端部は丸い。内面にヘラ記号がある。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ、ヘラ記号	[外]2.5Y7/2灰黄 [内]2.5Y7/2灰黄 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
55	28	3－竪穴70	須恵器 甕	－ (6.0) [6.6]	体部中位に最大径を有し、中位上方に2条の凹線を巡らす。 底部は丸底。 [外]回転ナデ、回転ヘラケズリ [内]回転ナデ	[外]2.5Y7/1灰白 [内]2.5Y7/1灰白 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
56	28	3－竪穴70	土師器 小型丸底壺	－ － [3.5]	口縁部と体部の境に明瞭な稜を有する。 [外]回転ナデ [内]摩減	[外]2.5Y7/3浅黄 [内]2.5Y7/3浅黄 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
57	28	3－竪穴70	土師器 甌	－ － [2.7]	器厚が厚く、口縁端部は丸くおさめる。 [外]摩減 [内]摩減	[外]10YR7/6明黄褐 [内]10YR7/6明黄褐 粗:1mm以下の白色粒・黒色粒含む	不良	
58	30	3－竪穴100	須恵器 壺	－ － [1.5]	口縁部は直立し、端部は斜面を有する。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N6/灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
59	30	3－竪穴100	須恵器 壺	－ － [2.9]	体部の上半である。 [外]カキ目、ナデ [内]青波状タタキ	[外]7.5Y6/1灰 [内]7.5Y6/1灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
60	30	3－竪穴100	須恵器 壺	－ － [3.4]	体部下半の破片である。 [外]平行タタキ [内]青波状タタキ	[外]5Y6/1灰 [内]5Y6/1灰 精良:0.5mm以下の白色粒少量含む	良	
61	32	4－竪穴110	須恵器 壺	－ － [1.9]	つまみは上面が凹んだ扁平な形である。 [外]回転ナデ、回転ヘラケズリ [内]回転ナデ	[外]N7/灰白 [内]N7/灰白 普:1mm以下の白色粒含む	良	
62	32	4－竪穴110	須恵器 杯壺	(13.4) － [3.5]	天井部は丸く、口縁部と口縁端部の境は丸く、なめらか。口縁 部はほぼ直立する。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]2.5Y7/3浅黄 [内]2.5Y7/3浅黄 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
63	32	4－竪穴110	須恵器 杯壺	(13.6) － [2.6]	天井部は浅い。口縁部と天井部の境は丸く、口縁部は直立す る。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]10YR7/2にぶい黄橙 [内]10YR7/2にぶい黄橙 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
64	32	4－竪穴110	須恵器 杯壺	(14.2) － [2.6]	口縁部と天井部の境は丸く、わずかな稜を持つ。口縁部はや や外傾する。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]7.5Y7/1灰白 [内]7.5Y7/1灰白 精良:0.5mm以下の白色粒少量含む	良	
65	32	4－竪穴110	須恵器 杯壺	(14.4) － [3.6]	口縁部と天井部の境は丸く、口縁部は直立する。天井部は浅 い。 [外]回転ヘラケズリ→ナデ、回転ナデ [内]回転ナデ→ヘラナデ、回転ナデ	[外]10Y7/1灰白 [内]10Y7/1灰白 精良:0.5mm以下の白色粒少量含む	良	

表 6 土器観察表（４）

遺物 番号	挿図 番号	出土遺構	種別 器種	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土	焼成	備考
66	32	4－竪穴110	須恵器 杯壺	(14.2) － [2.5]	口縁部と天井部の境は不明瞭で、口縁部は垂直に下がり、端部は鋭い。 外面に重ね焼き痕が残る。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N8/灰白 [内]N7/灰白 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
67	32	4－竪穴110	須恵器 杯壺	(15.0) － [2.9]	口縁部と天井部の境は丸く、内面に若干の稜を有する。口縁部は直立する。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]10Y6/1灰 [内]10Y6/1灰 普:1mm以下の白色粒含む	良	
68	32	4－竪穴110	須恵器 杯壺	(15.4) － [2.2]	口縁部と天井部の境は不明瞭で、口縁部は丸い。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N7/灰白 [内]N7/灰白 普:1mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
69	32	4－竪穴110	須恵器 杯身	12.2 － [3.4]	立ち上がりは短く、内傾する。受端部は丸い。体部外面にヘラ記号が施され、受部に自然釉が付着する。 [外]回転ナデ、回転ヘラケズリ、ナデ [内]回転ナデ	[外]7.5Y7/1灰白 [内]7.5Y7/1灰白 普:3mmの石英・0.5mm以下の黒色粒含む	良	
70	32	4－竪穴110	須恵器 高杯	－ (11.2) [2.2]	裾部は水平に延び、端部は下方に肥厚し、外端面を有する。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]10Y5/1灰 [内]10Y7/1灰白 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
71	32	4－竪穴110	須恵器 壺	－ － [7.1]	外反して立ち上り、口縁部に至り、折り返して厚い帯状になる。端部は面をなす。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]10Y6/1灰 [内]10Y6/1灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
72	32	4－竪穴110	須恵器 提瓶	－ － [21.3]	頸基部は細い。体部は一方が丸く、一方が平坦な扁球形を呈する。 体部側面に把手を貼り付ける痕跡があり、2個1対の把手が想定される。 [外]ナデ、カキ目ヘラナデ、回転ヘラケズリヘラナデ [内]回転ナデ	[外]N5/+N7/灰 [内]N7/灰白 普:1mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
73	33	4－竪穴110	須恵器 甔	(21.6) (12.0) [27.8]	体部は長胴で、そのまま口縁部に至る。口縁端部はわずかに内傾する。 底部は円孔が穿ってある。体部中位上方に2条の凹縁が巡る。把手の接合痕が残る。 [外]回転ナデ、平行タキヘラナデ [内]回転ナデ、青波状タキヘラナデ、ヘラケズリ	[外]2.5Y7/2灰黄 [内]2.5Y7/2灰黄 普:1mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
74	33	4－竪穴110	土師器 壺	－ － [4.1]	底部は丸底である。 [外]ナデ、指頭圧 [内]摩滅	[外]5YR6/4にぶい橙 [内]10YR7/3にぶい黄橙 普:1mm以下の白色粒・黒色粒多量に含む	良	
76	34	4－竪穴120	須恵器 高杯	－ (7.8) [1.3]	脚部はハの字状に開く。裾部は水平に開き、端部は下方に肥厚し、外端面をなす。 [外]摩滅 [内]摩滅	[外]2.5Y7/1灰白 [内]2.5Y7/2灰黄 普:0.5mm以下の石英・白色粒含む	良	
77	35	4・14－竪穴130	須恵器 杯壺	－ － [2.2]	口縁部と天井部の境は若干の稜を有する。口縁端部はわずかに外反する。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ、ナデ	[外]N5/灰 [内]N5/灰 普:1mm以下の白色粒含む	良	
78	35	4・14－竪穴130	須恵器 高杯	－ － [0.75]	裾部は水平に開き、端部は下方にわずかに肥厚する。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]5Y6/1灰 [内]N5/灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
79	35	4・14－竪穴130	須恵器 高杯	－ － [3.5]	裾端部を欠損。脚部はハの字状に開く。裾部は水平に短く延び、端部は下方に肥厚する。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ、ヘラナデ	[外]10YR7/3にぶい黄橙 [内]10YR7/3にぶい黄橙 普:1mm以下の石英・黒色粒含む	良	
80	35	4・14－竪穴130	須恵器 壺	－ － [3.5]	外反して立ち上がり、口縁部で内弯気味になり、内面が小さく屈曲する。外面に凹凸が巡る。 [外]回転ナデ、カキ目 [内]回転ナデ	[外]5Y6/1灰 [内]5Y6/1灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
81	35	4・14－竪穴130	土師器 壺	－ － [2.7]	口縁部は大きく外反し、端部は面を持つ。 [外]摩滅 [内]摩滅	[外]10YR7/6明黄褐 [内]10YR7/6明黄褐 普:1mm以下の白色粒・黒色粒・茶色粒多量に含む	良	
82	36	7－竪穴1	須恵器 壺	(19.6) － [9.1]	体部はやや肩が張る。口縁部は外反し、中位からわずかに内弯する。 端部は外側に肥厚する。 [外]ナデ [内]ナデ、青波状タキ	[外]2.5Y8/3淡黄 [内]10YR8/3淡黄橙 普:1mm以下の石英・白色粒・黒色粒含む	良	
83	36	7－竪穴1	土師器 壺	18.0 － [4.9]	口縁部はくの字状に屈折し、端部は丸い。 [外]ナデ、摩滅 [内]摩滅	[外]5YR6/6橙 [内]5YR6/6橙 粗:1～3mmの小石・1mm以下の白色粒・茶色粒含む	良	
84	36	7－竪穴1	土師器 壺	(19.6) － [9.3]	口頸部は湾曲・外反し、端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ、ハケ、ナデ [内]回転ナデ、ヘラナデ、ヘラケズリ	[外]7.5YR7/4にぶい橙 [内]7.5YR7/3にぶい橙 普:2mm以下の石英・長石含む		
85	36	7－竪穴1	土師器 壺	－ － [4.0]	体部は球形を呈する。 [外]指頭圧、ナデ [内]指頭圧ヘラナデ	[外]5YR5/8明赤褐 [内]5YR5/8明赤褐 普:2mm以下の石英・金雲母・黒色粒含む		

表7 土器観察表(5)

遺物 番号	挿図 番号	出土遺構	種別 器種	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土	焼成	備考
86	41	7-竪穴5	須恵器 杯蓋	- - [3.4]	口縁部と天井部の境はわずかな稜をもつ。 [外]ナデ、回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N7/灰白 [内]N7/灰白 粗:1mm以下の白色粒・黒色粒多量に含む	良	
87	41	7-竪穴5	須恵器 杯身	(17.0) - [2.5]	立ち上がりは短く、内傾する。受端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]7.5Y6/1灰 [内]7.5Y6/1灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
88	41	7-竪穴5	須恵器 杯身	(16.4) - [3.1]	立ち上がりは短く、内傾する。受端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]5GY6/1オリーブ灰 [内]5GY6/1オリーブ灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
89	41	7-竪穴5	須恵器 杯身	- - [1.6]	立ち上がりは細く、内傾する。受端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N6/灰 普:3mm以下の石英・長石含む		
90	41	7-竪穴5	須恵器 杯身	- - [2.3]	立ち上がりは短く、ほぼ直立し、受端部は短く、丸い。器厚が厚い。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]10YR6/3にぶい黄橙 [内]7.5YR6/3にぶい褐 普:0.5mm以下の白色粒・赤色粒含む	良	
91	41	7-竪穴5	須恵器 高杯	- (11.6) [1.2]	裾部は水平に延び、端部は下方に肥厚する。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]5Y5/1灰 [内]5Y5/1灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
92	41	7-竪穴5	須恵器 高杯	- - [3.0]	裾端部は外側に若干肥厚し、丸くおさめる。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N6/灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
93	41	7-竪穴5	須恵器 壺	- - [5.2]	体部の上半である。外面に自然釉がかかる。 [外]平行タタキ、自然釉 [内]青波状タタキ	[外]7.5Y4/2灰オリーブ [内]2.5Y6/1黄灰 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
94	41	7-竪穴5	土師器 壺	- - [3.1]	口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさめる。 [外]ヨコナデ [内]ヨコナデ、ハケ	[外]2.5YR5/6明赤褐 [内]2.5YR5/6明赤褐 普:1mm以下の石英・白色粒・黒色粒含む	良	
97	43	7-竪穴6	須恵器 杯身	- - [2.2]	立ち上がりは内傾し、受端部は丸い。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]5Y5/1灰 [内]5Y7/1灰白 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
98	43	7-竪穴6	土師器 小型壺	- - [3.9]	口縁部は直線的に外傾する。 [外]摩滅 [内]摩滅	[外]7.5YR7/6橙 [内]7.5YR7/6橙 粗:1～3mmの小石・1mm以下の白色粒多量に含む	良	
100	45	7-竪穴7	須恵器 杯身	(12.2) - [2.6]	立ち上がりは短く、内傾する。受端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N6/灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
101	45	7-竪穴7	須恵器 杯身	- - [3.5]	立ち上がりは短く、内傾する。受端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ、回転ヘラケズリ [内]回転ナデ	[外]5Y5/1灰 [内]5Y7/1灰白 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
102	45	7-竪穴7	須恵器 壺	(8.2) - [2.3]	口縁部は直立気味に立ち上がる。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]5Y7/1灰白 [内]5Y7/1灰白 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
103	45	7-竪穴7	須恵器 壺	23.3 - [12.3]	口縁部は非常にいびつである。口縁部は外反し、中位で上方に屈曲し、端部は上下に若干肥厚し、凹斜面を有する。 口縁部内面に重ね焼き痕の突起が3個残存する。頭部内面に輪積み痕がある。 [外]回転ナデ、カキ目 [内]回転ナデ、回転ナデーナデ、青波状タタキ	[外]7.5Y7/1灰白 [内]7.5Y7/1灰白 普:1mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
104	47	7-竪穴10	須恵器 杯身	- - [1.8]	立ち上がりは内傾し、受端部は丸くおさめる。 [外]摩滅 [内]摩滅	[外]2.5Y8/2灰白 [内]2.5Y8/2灰白 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
105	47	7-竪穴10	須恵器 杯身	- - [1.7]	立ち上がりは短く、内傾する。受部は短く、丸い。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]2.5GY7/1明オリーブ灰 [内]2.5GY6/1オリーブ灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
106	47	7-竪穴10	須恵器 壺	- - [2.6]	頸部の下方である。 [外]回転ナデ、ヘラ記号 [内]回転ナデ	[外]N5/灰 [内]N5/灰 精良:0.5mm以下の白色粒含む	良	
107	47	7-竪穴10	土師器 杯	(12.2) - [3.2]	器形は半球形を呈し、口縁部はやや直立し、先細りする。 [外]ナデ [内]ナデ	[外]5YR6/6橙 [内]5YR6/6橙 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
108	47	7-竪穴10	土師器 壺	- - (11.0)	口縁部は外反し、端部は外側に肥厚する。 [外]平行タタキ、摩滅 [内]摩滅	[外]2.5Y8/3淡黄 [内]2.5Y8/3淡黄 普:1～5mmの石英・0.5mm以下の白色粒含む	良	
110	49	7-竪穴11	須恵器 杯蓋	12.8 - 4.3	天井部は高く、丸い。口縁部と天井の境は丸く、なめらかである。 口縁部はほぼ直立する。内面に凹凸が著しい。 [外]回転ナデ、ヘラケズリ、摩滅 [内]回転ナデ	[外]2.5Y7/3浅黄 [内]2.5Y7/3浅黄 普:1mm以下の石英・黒色粒・白色粒含む	良	

表 8 土器観察表（6）

遺物 番号	挿図 番号	出土遺構	種別 器種	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土	焼成	備考
111	49	7-Ⅰ竪穴11	須恵器 杯身	(12.8) - [4.7]	体部は丸い。立ち上がりはやや長く、内傾する。受部は短く、丸い。 [外]回転ナデ、回転ヘラケズリ [内]回転ナデ	[外]2.5YR5/1赤灰 [内]10R5/3赤褐 普:1mm以下の白色粒含む	良	
112	49	7-Ⅰ竪穴11	須恵器 杯身	- - [2.6]	立ち上がりは内傾し、受端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ、ナデ [内]回転ナデ	[外]7.5Y5/1灰 [内]N6/灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
113	49	7-Ⅰ竪穴11	須恵器 壺	- - [3.2]	口縁部は外反し、端部は上下に肥厚する。 [外]回転ナデ、押圧痕 [内]回転ナデ	[外]5Y6/1灰 [内]N4/灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
114	49	7-Ⅰ竪穴11	須恵器 壺	- - [2.4]	口縁端部は外面に肥厚する。 [外]摩滅 [内]摩滅	[外]2.5Y8/2灰白 [内]2.5Y8/2灰白 普:1～2mmの石英・1mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
115	49	7-Ⅰ竪穴11	土師器 小型壺	11.4 - 12.7	球形の体部から口縁部はゆるやかに外反する。底部は丸底である。内面に輪積み痕がある。 [外]ナデ、ハケ、摩滅 [内]ハケ、指頭圧→ナデ	[外]7.5YR6/6橙 [内]7.5YR7/6橙 普:1～2mmの白色粒・0.5mm以下の白色粒・赤色粒含む	良	
116	49	7-Ⅰ竪穴11	土師器 鍋	- - -	把手は先端で上方への反りが強い。 [外]ナデ、指頭圧 [内]-	[外]7.5YR8/3浅黄橙 [内]7.5YR8/3浅黄橙 普:1mm以下の白色粒・黒色粒含む		
117	51	8-Ⅰ竪穴12	須恵器 杯蓋	(10.8) - [3.9]	天井部は深く、丸い。口縁部と天井部の境は若干の稜を有す。 口縁端部はわずかに外反し、丸くおさめる。内外面に自然釉が部分的にかかる。 [外]回転ヘラケズリ、回転ナデ、自然釉 [内]回転ナデ、自然釉	[外]5Y7/1灰白 [内]5Y7/1灰白 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
118	51	8-Ⅰ竪穴12	須恵器 杯蓋	- - [2.1]	天井部は平らである。 [外]回転ヘラケズリ、回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]5GY6/1オリーブ灰 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒少量含む	良	
119	53	7-8-Ⅰ竪穴14	須恵器 杯蓋	- - [1.9]	口縁部はほぼ直立し、端部は丸い。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]2.5GY6/1オリーブ灰 [内]2.5GY6/1オリーブ灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
120	53	7-8-Ⅰ竪穴14	須恵器 杯身	(12.6) - [1.8]	立ち上がりは短く、内傾する。受部は短く、丸い。受部境に溝を有する。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]5Y7/2灰白 [内]7.5Y6/1灰 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
121	53	7-8-Ⅰ竪穴14	須恵器 高杯	- (14.4) [0.95]	裾部は水平に延び、端部は下方に肥厚し、側端面を有する。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N6/灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
122	53	7-8-Ⅰ竪穴14	須恵器 壺	- - [1.7]	口縁端部は丸い。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]7.5Y4/1灰 [内]7.5Y4/1灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
123	53	7-8-Ⅰ竪穴14	須恵器 壺	- - [20.6]	底部は丸底であり、体部はゆるやかに立ち上がる。 [外]格子状タタキ、ナデ [内]青波状タタキ	[外]N7/灰白 [内]N7/灰白 普:	良	
124	53	7-8-Ⅰ竪穴14	土師器 壺	(15.6) - [16.5]	球形の体部から口縁部は鋭角に屈折し、口縁端部でわずかに上方にまがる。端部は平坦面をなす。 [外]ヨコナデ、ナデ、 ナデーハケ [内]ヨコナデ、指頭圧→ハケ、指頭圧→ヘラナデ	[外]5YR6/4にぶい橙 [内]5YR6/4にぶい橙 普:1mm以下の白色粒・黒色粒含む		
125	53	7-8-Ⅰ竪穴14	土師器 壺	- - [16.2]	体部は丸底の底部から急傾斜で立ち上がる。外面に黒斑があり、体部下位～底部の内面は黒色である。底部は輪積み痕により丸く割れる。 [外]ハケ→ナデ、ナデ [内]指頭圧→ハケ、ヘラナデ 指頭圧→ナデ	[外]7.5YR5/4にぶい褐 [内]7.5YR5/3にぶい褐 普:2mm以下の石英・白色粒・黒色粒多量含む		
128	57	14-Ⅰ竪穴10	須恵器 杯蓋	- - [1.7]	口縁部と天井部の境は丸く、なめらかで、口縁部がやや直立する。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N4/灰 [内]N6/灰 普:1mm以下の石英・長石含む		
129	57	14-Ⅰ竪穴10	須恵器 杯身	(11.6) - [2.8]	立ち上がりは内傾し、受端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]2.5Y7/2灰黄 [内]2.5Y6/2灰黄 普:3mm以下の石英・長石含む		
130	57	14-Ⅰ竪穴10	須恵器 壺	- - [3.5]	口縁端部は上方にやや肥大する。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]2.5Y7/2灰黄 [内]2.5Y7/2灰黄 普:1mm以下の石英・長石含む		
131	57	14-Ⅰ竪穴10	土師器 壺	(11.2) - 10.4	口縁部は直立する。体部はやや肩の張る球形を呈する。 [外]ハケ [内]指頭圧→ナデ	[外]2.5YR5/4にぶい赤褐 [内]2.5YR4/1赤灰 普:2mm以下の石英・長石含む		
133	60	2-3-Ⅰ掘立1	須恵器 杯蓋	- - [2.5]	口縁部と天井部の境は不明瞭であり、口縁端部は短く直立する。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N6/灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	

表9 土器観察表(7)

遺物 番号	挿図 番号	出土遺構	種別 器種	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土	焼成	備考
134	60	2・3－掘立1	須恵器 杯蓋	－ － [1.3]	天井部は平らである。 [外]回転ヘラケズリ [内]ナデ	[外]5Y8/1灰白 [内]5Y8/1灰白 普:0.5mm以下の黒色粒含む	良	
135	60	2・3－掘立1	須恵器 杯身	(11.0) － [2.4]	立ち上がりは短く、内傾する。受端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]2.5Y6/1黄灰 [内]2.5Y6/1黄灰 普:1mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
136	60	2・3－掘立1	須恵器 壺	－ － [1.8]	裾端部は下方に肥厚し、外端面を持つ。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N6/灰 精良:0.5mm以下の白色粒少量含む	良	
137	60	2・3－掘立1	土師器 壺	－ － [3.0]	口縁部は直線的であり、端部は上方に若干肥厚する。 [外]ナデ、こまかいハケ [内]ナデ、こまかいハケ	[外]7.5YR6/6橙 [内]10YR7/4にぶい黄橙 普:3～5mmの小石・1mm以下の白色粒含む	良	
138	60	2・3－掘立1	土師器 壺	－ － [2.5]	口縁端部は外に若干屈曲する。 [外]ハケ [内]摩滅	[外]10YR7/4にぶい黄橙 [内]5YR7/4にぶい橙 普:1mm以下の白色粒・赤色粒・黒色粒含む	良	
139	60	2・3－掘立1	土師器 壺	－ － [2.0]	口縁端部は丸くおさめる。 [外]ナデ [内]ナデ	[外]5YR6/6橙 [内]7.5YR6/6橙 普:1mm以下の石英・白色粒・黒色粒多量に含む	良	
140	60	2・3－掘立1	土師器 壺	－ 4.0 [2.75]	底部は丸底である。 [外]摩滅 [内]摩滅	[外]5YR5/8明赤褐 [内]5YR5/8明赤褐 普:3mmの石英・1mm以下の石英・白色粒を多量に含む	良	
141	61	2・3－掘立2	須恵器 杯蓋	－ － [1.5]	口縁端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]7.5Y5/1灰 [内]7.5Y5/1灰 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
142	61	2・3－掘立2	須恵器 杯蓋	－ － [1.5]	天井部は平らである。 [外]切り離し→ナデ、回転ナデ [内]回転ナデ→ヘラナデ、回転ナデ	[外]7.5Y6/1灰 [内]7.5Y6/1灰 普:0.5mm以下の白色粒少量含む	良	
143	61	2・3－掘立2	須恵器 短頸壺	(9.2) － [1.3]	口縁部は直立し、端部は外端面をなす。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N5/灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
144	61	2・3－掘立2	須恵器 壺	－ － [3.8]	体部は頸部から大きく屈曲する。 [外]ナデ [内]回転ナデ	[外]5Y7/1灰白 [内]5Y7/1灰白 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
145	61	2・3－掘立2	土師器 高杯	－ － [3.5]	脚部は角度を変えて屈曲する。 [外]摩滅 [内]摩滅	[外]7.5YR6/6橙 [内]5YR7/8橙 普:1～3mmの石英・1mm以下の白色粒多量に含む	良	
146	61	2・3－掘立2	土師器 高杯	－ － [1.4]	裾端部は外端面をもつ。 [外]ナデ [内]ナデ	[外]10YR7/4にぶい黄橙 [内]10YR7/4にぶい黄橙 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
147	61	2・3－掘立2	土師器 壺	－ － [1.9]	口縁端部は丸い。 [外]摩滅 [内]摩滅	[外]7.5YR7/6橙 [内]7.5YR7/6橙 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒・赤色粒含む	良	
148	62	4－掘立3	須恵器 杯蓋	－ － [2.3]	口縁部と天井部の境は不明瞭である。口縁端部は丸い。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]2.5Y5/2暗灰黄 [内]5Y7/1灰白 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
149	62	4－掘立3	土師器 壺	－ － [4.9]	[外]ナデ、ハケ [内]ナデ	[外]7.5YR5/4にぶい褐 [内]7.5YR5/4にぶい褐 普:1mm以下の石英・金雲母・黒色粒多量に含む	良	
150	64	4－掘立4	須恵器 杯蓋	(12.4) － [3.4]	口縁部と天井部の境は丸くなからである。口縁部は直立する。外面、口縁端部内面に自然釉がかかる。 [外]ナデ、回転ナデ [内]回転ナデ	[外]7.5Y4/1灰 [内]N8/灰白 普:1mm以下の白色粒含む	良	
151	64	4－掘立4	須恵器 杯蓋	－ － [3.4]	器厚の厚い杯蓋である。口縁部と天井部の境は不明瞭である。口縁端部は丸い。 [外]ヘラナデ、回転ナデ [内]回転ナデ	[外]5Y5/1灰 [内]5Y5/1灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
152	64	4－掘立4	須恵器 杯蓋	－ － [2.3]	口縁部と天井部の境は丸くなからである。口縁部は短く、直立し、端部は丸い。 [外]回転ナデ [内]摩滅	[外]2.5Y7/2灰黄 [内]2.5Y8/1灰白 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
153	64	4－掘立4	須恵器 壺	－ － [1.2]	口縁部はやや内傾し、端部は丸い。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]10Y6/1灰 [内]10Y6/1灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
154	64	4－掘立4	須恵器 杯蓋	－ － [1.6]	器高の低い杯蓋である。口縁部と天井部の境は不明瞭である。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N5/灰 [内]N5/灰 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	

表 10 土器観察表（8）

遺物 番号	挿図 番号	出土遺構	種別 器種	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土	焼成	備考
155	64	4－掘立4	須恵器 杯蓋	－ [2.6]	口縁部と天井部の境は不明瞭である。口縁端部はわずかに 凹む斜面をもつ。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]2.5Y7/2灰黄 [内]2.5Y7/2灰黄 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
156	64	4－掘立4	須恵器 杯身	(11.2) － [2.7]	立ち上がりは短く、内傾する。受端部は丸い。 [外]回転ナデ、ナデ [内]回転ナデ	[外]10Y7/1灰白 [内]10Y7/1灰白 普:1mm以下の白色粒含む	良	
157	64	4－掘立4	須恵器 杯身	(12.4) － [3.2]	立ち上がりは短く、内傾する。受端部は丸くなめらか。 [外]回転ナデ、ヘラナデ [内]回転ナデ	[外]JN4/灰 [内]5YR5/2灰褐 普:0.5mm以下の白色粒少量含む	良	
158	64	4－掘立4	須恵器 杯身	－ － [2.8]	立ち上がりは短く、内傾する。受端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]5Y6/1灰 [内]5Y6/1灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
159	64	4－掘立4	須恵器 杯身	－ － [2.1]	立ち上がりは短く、内傾する。受端部は丸い。 [外]回転ナデ、ヘラナデ [内]回転ナデ	[外]JN7/灰白 [内]JN7/灰白 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
160	64	4－掘立4	須恵器 杯身	－ － [1.5]	器厚が厚い。立ち上がりは短く、内傾する。受端部は丸い。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]5Y7/1灰白 [内]5Y7/1灰白 普:1mm以下の白色粒含む	良	
161	64	4－掘立4	須恵器 高杯	－ － [3.3]	脚部はハの字状に開き、器厚が厚い。2条の凹線が巡る。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ、しぼり目	[外]7.5Y5/1灰 [内]JN7/灰白 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
162	64	4－掘立4	須恵器 高杯	－ (11.0) [5.6]	脚部はハの字状に開き、裾部は強く外反し、ラッパ状に開く。 端部は下方に肥厚し外端面をもつ。 脚部に1条の沈線が巡り、長方形の透しがある。 [外]回転ナデ [内]しぼり目、ヘラナデ、回転ナデ	[外]2.5Y6/2灰黄 [内]2.5Y6/2灰黄 普:1mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
163	64	4－掘立4	須恵器 壺	－ － [11.0]	体部下半の破片である。 [外]格子状タタキカキ目 [内]青波状タタキ	[外]5Y7/1灰白 [内]5Y7/1灰白 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
164	64	4－掘立4	土師器 壺	(21.2) － [2.2]	口縁部は大きく外反し、端部はやや凹む面を持つ。 [外]ヨコナデ [内]ナデ	[外]5YR6/6橙 [内]5YR6/6橙 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
165	64	4－掘立4	土師器 壺	－ － [2.1]	口縁端部の近くでわずかに屈曲する。端部は丸く、なめらか。 [外]ナデ、ヘラナデ [内]ナデ	[外]5YR7/6橙 [内]5YR6/6橙 普:2mm以下の石英、1mm以下の黒色粒含む	良	
166	64	4－掘立4	土師器 壺	－ － [3.8]	[外]ヨコナデ、ハケ [内]ヨコナデ、ヘラナデ	[外]2.5Y7/2灰黄 [内]2.5Y7/2灰黄 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
167	64	4－掘立4	土師器 壺	－ － [9.0]	球形の体部上半の破片である。 [外]ハケ [内]指頭圧、ナデ	[外]5YR5/8明赤褐 [内]5YR6/8橙 普:1～5mmの石英、1mm以下の白色粒・赤 色粒含む	良	
168	64	4－掘立4	土師器 甗	－ － [3.7]	口縁部は内傾する。端部は面を持つ。 [外]ヨコナデ、ハケ→ヨコナデ、ハケ [内]ナデ	[外]5YR6/6橙 [内]5YR6/6橙 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
169	66	2・5－掘立6	須恵器 杯蓋	－ － [1.3]	口縁部は直立し、端部は狭い斜面を有する。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]5PB6/1青灰 [内]5PB6/1青灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
170	66	2・5－掘立6	須恵器 杯身	－ － [3.3]	立ち上がりは短く、内傾する。受端部は丸い。 [外]回転ナデ、回転ヘラケズリ [内]回転ナデ	[外]5Y5/1灰 [内]JN7/灰白 普:1mm以下の白色粒含む	良	
171	66	2・5－掘立6	須恵器 杯身	(14.6) － [2.7]	器高は低い。立ち上がりは短く、やや内傾する。受部は水平 に延びる。 [外]回転ナデ、回転ヘラケズリ [内]回転ナデ	[外]7.5Y6/1灰 [内]JN6/灰 精良:0.5mm以下の白色粒含む	良	
172	68	9－掘立1	須恵器 杯蓋	－ － [2.5]	口縁部と天井部の境は不明瞭で、器高は低い。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]2.5Y7/2灰黄 [内]2.5Y7/1灰白 普:1mm以下の石英・長石含む		
173	70	1・16－SD20	須恵器 杯蓋	(15.0) － [0.8]	口縁端部は下方にわずかに垂下する。 [外]摩滅 [内]摩滅	[外]2.5Y8/3淡黄 [内]2.5Y8/3淡黄 普:	良	
174	70	1・16－SD20	須恵器 杯蓋	－ － [1.3]	天井部は平ら。外面にヘラ記号がある。 [外]回転ナデ、ヘラ記号 [内]回転ナデ	[外]5Y6/1灰 [内]5Y6/1灰 普:	良	
175	70	1・16－SD20	須恵器 杯身	－ － [1.4]	立ち上がりを欠損。受端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]5P6/1紫灰 [内]5P6/1紫灰 普:	良	
176	70	1・16－SD20	須恵器 高杯	－ － [2.5]	脚部はハの字状に広がる。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]7.5Y6/1灰 [内]7.5Y6/1灰 普:	良	

表 11 土器観察表（9）

遺物 番号	挿図 番号	出土遺構	種別 器種	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土	焼成	備考
177	70	1・16—SD20	須恵器 高杯	— — [3.1]	脚部はハの字状に広がる。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]5Y7/1灰白 [内]5Y7/3浅黄 普:	良	
178	70	1・16—SD20	須恵器 壺	— — [7.1]	体部の上半である。内面は凹凸が著しい。 [外]平行タタキ→カキ目、ナデ [内]工具による削り	[外]7.5Y6/1灰 [内]7.5Y6/1灰 普:	良	
179	72	2・4・5—SD1	須恵器 杯蓋	— — [1.3]	[外]回転ヘラケズリ、回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N7/灰白 普:1mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
180	72	2・4・5—SD1	須恵器 杯蓋	— — [2.1]	器厚は厚い。 [外]回転ヘラケズリ、回転ナデ [内]青波状タタキ→ナデ、回転ナデ	[外]7.5Y6/1灰 [内]7.5Y6/1灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
181	72	2・4・5—SD1	須恵器 杯身	— — [1.8]	立ち上がりは短く、直立する。受端部は丸い。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N7/灰白 [内]N7/灰白 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
182	72	2・4・5—SD1	須恵器 杯身	— — [2.3]	立ち上がりは短く、内傾する。受端部は丸い。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]5Y6/1灰 [内]5Y6/1灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
183	76	7・8・9—SD21	土師器 杯	— — [2.4]	内湾する体部から口縁部に至る。口縁端部は短く外交する。 [外]摩減 [内]ナデ、摩減	[外]5YR6/6橙 [内]5YR5/6明赤褐 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
184	79	14—SD4	須恵器 杯身	— — [2.2]	立ち上がりは短く、ほぼ直立する。受端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N7/灰白 普:3mm以下の石英・長石含む		
185	80	15—SD1	陶器 小型壺蓋	3.3 — 0.7	備前焼 [外]指オサエ [内]指オサエ	[外]2.5YR5/6明赤褐 [内]2.5YR4/6赤褐 普:		
186	80	15—SD1	陶器 小型壺	3.9 2.8 3.5	備前焼 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]2.5YR4/4にぶい赤褐 [内]2.5YR4/4にぶい赤褐 普:		
187	80	15—SD1	須恵器 杯	— (10.0) [1.65]	底部に角高台を張り付ける。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N7/灰白 [内]N7/灰白 普:2mm以下の石英・長石含む		
188	81	15—SD11	須恵器 杯身	— — [1.9]	立ち上がりは短く、ほぼ直立する。受端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N6/灰 普:1mm以下の石英・長石含む		
189	83	4—SK44	須恵器 杯身	— — [2.5]	薄い器厚の杯身である。受端部は丸い。 [外]回転ナデ、回転ヘラケズリ [内]回転ナデ	[外]5PB7/1明青灰 [内]5PB7/1明青灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
190	84	14—SK97	須恵器 平瓶	(7.4) — [4.5]	口縁部は直線的に延び、端部は細く丸くおさめる。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]7.5YR7/1明褐灰 [内]7.5YR6/1褐灰 普:2mm以下の石英・長石含む		
191	85	4・14—SK140	須恵器 壺	— — [4.5]	体部上半の破片である。 [外]平行タタキ→カキ目 [内]青波状タタキ	[外]N5/灰 [内]N5/灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
192	85	4・14—SK140	土師器 壺	— — [2.1]	[外]ナデ [内]ナデ	[外]7.5YR6/4にぶい橙 [内]7.5YR6/4にぶい橙 普:1mm以下の白色粒・石英・茶色粒含む	良	
193	87	7—SK23	須恵器 杯蓋	— — [1.5]	天井部の器厚は厚い。 [外]回転ヘラケズリ、回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N7/灰白 [内]N7/灰白 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
194	87	7—SK23	須恵器 高杯	— (10.6) [0.6]	裾部は水平に延び、端部は丸くおさめる。 [外]ナデ [内]ナデ	[外]2.5Y8/2灰白 [内]2.5Y8/2灰白 普:0.5mm以下の黒色粒含む	良	
195	87	7—SK23	須恵器 高杯	— — [0.9]	裾部は水平に延び、端部は上下に肥厚し、凹断面をもつ。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]7.5Y6/1灰 [内]7.5Y6/1灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
196	87	7—SK23	土師器 壺	— — [2.1]	口縁部は大きく外反し、端部は外端面をもつ。 [外]摩減 [内]摩減	[外]7.5YR7/6橙 [内]7.5YR7/6橙 普:1～2mmの石英、0.5mm以下の黒色粒・赤色粒含む	良	
197	87	7—SK23	土師器 甗	— — —	大きな把手。断面は楕円形。 [外]摩減 [内]—	[外]5YR6/6橙 [内]5YR6/6橙 普:1～5mmの石英、1mm以下の白色粒・赤色粒含む	良	
200	93	1—SP25	土師器 椀	— — [2.3]	半球形の体部から口縁部は外交する。 [外]ナデ [内]ナデ	[外]5YR6/6橙 [内]5YR6/6橙 普:	良好	
201	93	4—SP41	須恵器 壺	— — [5.9]	体部の上位である。 [外]回転ナデ、平行タタキ [内]回転ナデ、青波状タタキ	[外]2.5Y6/1黄灰 [内]5P7/1明紫灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	

表 12 土器観察表 (10)

遺物 番号	挿図 番号	出土遺構	種別 器種	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土	焼成	備考
202	93	7-SP34	土師器 高杯	- [2.7]	脚部は大きく開き、裾部に至る。裾部端部は丸い。 [外]ハケ、摩滅 [内]ナデ	[外]10YR7/4にぶい黄橙 [内]10YR7/4にぶい黄橙 普:1~3mmの小石、1mm以下の白色粒・金 雲母・黒色粒含む	良	
204	95	2-6-SX7	土師器 甔	- [13.0]	直線的に開く体部である。 [外]ハケ [内]摩滅	[外]2.5YR6/6橙 [内]2.5YR6/6橙 粗:1~5mmの小石、1mm以下の白色粒含 む	良	
206	97	2-5-SX24	土師器 杯	(14.8) - [2.6]	器高の低い器形である。内湾する体部から口縁部に至る。口 縁端部は丸い。 [外]ナデ、ヘラナデ [内]ナデ	[外]2.5YR5/8明赤褐 [内]2.5YR5/6明赤褐 粗:2~5mmの石英、0.5mm以下の雲母・白 色粒含む	良	
207	98	2-5-SX40	須恵器 杯蓋	12.8 - 4.8	天井部は深く丸い。口縁部と天井部の境は丸くなめらか。口 縁部は短く、直立する。 [外]回転ヘラケズリ、回転ナデ [内]回転ナデ	[外]5Y8/1灰白 [内]2.5Y7/3浅黄 普:1~2mmの石英、0.5mm以下の黒色粒 含む	良	
208	98	2-5-SX40	須恵器 杯蓋	- [3.2]	器高は高い。口縁部と天井部の境は丸い。口縁部はほぼ直 立する。 [外]摩滅 [内]摩滅	[外]2.5Y8/3淡黄 [内]2.5Y8/1灰白 普:1mm以下の黒色粒・白色粒含む	良	
209	98	2-5-SX40	須恵器 杯身	(8.4) - [2.0]	立ち上がりは非常に短く、内傾する。受端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]5YR5/1褐灰 [内]5YR5/1褐灰 普:1mm以下の石英・長石含む		
210	98	2-5-SX40	須恵器 杯身	(11.0) (5.6) 3.5	器高は低い。立ち上がりは短く、内傾する。受端部は丸くおさ める。 [外]回転ナデ、回転ヘラケズリ、回転ヘラキリーナデ [内]回転ナデ	[外]5P6/1紫灰 [内]N7/ 灰白 精良:0.5mm以下の黒色粒少量含む	良	
211	98	2-5-SX40	須恵器 杯身	(10.6) - [4.2]	器高は深い。立ち上がりは短く、内傾する。受端部は丸くおさ める。 [外]回転ナデ、回転ヘラケズリ [内]回転ナデ	[外]N7/ 灰白 [内]N6/ 灰 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
212	98	2-5-SX40	須恵器 杯身	- [2.4]	立ち上がりは短く、ほぼ直立する。受部は短く、丸い。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N7/ 灰白 [内]2.5Y7/1灰白 精良:0.5mm以下の黒色粒若干含む	良	
213	98	2-5-SX40	須恵器 杯身	- [2.2]	立ち上がりは短く、内傾する。受端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N7/ 灰白 [内]N7/ 灰白 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
214	98	2-5-SX40	須恵器 杯身	- [2.3]	立ち上がりは内傾し、受端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ、回転ヘラケズリ [内]回転ナデ	[外]5Y6/1灰 [内]5Y6/1灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
215	98	2-5-SX40	須恵器 杯身	- [3.5]	全体的に器厚が厚い。立ち上がりは短く、内傾する。受部は 短く丸い。外面の調整はあらい。 [外]回転ナデ、ナデ [内]回転ナデ	[外]2.5Y7/2灰黄 [内]2.5Y7/2灰黄 普:1mm以下の黒色粒・白色粒含む	良	
216	98	2-5-SX40	須恵器 甔	- [7.9]	体部はやや扁平な球形を呈し、上位に凹線1条が施される。 中央に円孔が穿ってある。 [外]回転ナデ、カキ目、ナデ、ヘラケズリーナデ [内]ナデ、回転ナデ	[外]2.5Y7/2灰黄 [内]2.5Y7/2灰黄 普:1mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
217	98	2-5-SX40	須恵器 甔	- 3.0 [18.5]	左右非対称の器形である。口頸部は基部細く外反して立ち上 る。 体部中央上位に2条の凹線を巡らす。中央に円孔が穿ってあ る。 [外]回転ナデ、回転ヘラケズリーナデ、一部に自然釉 [内]回転ナデ、ナデ、一部に自然釉	[外]5Y7/1灰白 [内]5Y7/1灰白 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
218	98	2-5-SX40	須恵器 壺	8.2 - [3.8]	台付長頸壺か。脚部はハの字状に開き、裾端部は下方に肥 厚する。 [外]回転ナデ、ナデ [内]回転ナデ、ナデ	[外]10YR6/1褐灰 [内]10YR6/1褐灰 普:1mm以下の白色粒含む	良	
219	98	2-5-SX40	須恵器 壺	- [2.9]	台付長頸壺か。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ、回転ナデ→ナデ	[外]7.5Y4/1灰 [内]N7/ 灰白 普:1mm以下の白色粒含む	良	
220	98	2-5-SX40	須恵器 高杯	(13.0) - [4.1]	口縁部と体部の境は若干の稜があり、口縁端部は丸い。脚部 との接合面が残存する。 [外]回転ナデ、摩滅 [内]回転ナデ	[外]5Y6/1灰 [内]5Y6/1灰 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
221	98	2-5-SX40	須恵器 高杯	12.6 8.8 7.0	器高は低い。口縁部と体部の境は若干の稜をもち、口縁部は 直立する。 脚部はハの字状に大きく開き、裾端部は下方に肥厚する。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]2.5Y7/1灰白 [内]2.5Y7/1灰白 普:1mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
222	98	2-5-SX40	須恵器 高杯	- [4.5]	脚部はハの字状に開く。 [外]回転ナデ [内]ナデ、回転ナデ	[外]5Y6/1灰 [内]5Y6/1灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
223	98	2-5-SX40	須恵器 高杯	- [5.2]	脚部はハの字状に開く。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]5Y7/1灰白 [内]5Y7/1灰白 普:1mmの石英、0.5mm以下の白色粒含む	良	
224	98	2-5-SX40	須恵器 高杯	- [5.9]	脚部はハの字状に開く。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ、ナデ	[外]5Y6/1灰 [内]5Y6/1灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	

表 13 土器観察表 (11)

遺物 番号	挿図 番号	出土遺構	種別 器種	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土	焼成	備考
225	98	2・5-SX40	須恵器 高杯	- - [5.4]	脚部はハの字状に大きく開き、左右非対称の器形である。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ、ヘラナデ	[外]2.5Y8/2灰白 [内]2.5Y8/2灰白 普:0.5mm以下の黒色粒・白色粒含む	良	
226	98	2・5-SX40	須恵器 高杯	- - [5.9]	脚部はハの字状に開き、外面に低い凸帯を巡らす。 [外]回転ナデ [内]ナデ、しぼり目、回転ナデ	[外]5PB6/1青灰 [内]5Y6/1灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
227	98	2・5-SX40	須恵器 高杯	- 9.6 [6.0]	脚部はハの字状に開き、裾部は横方向に延び、裾端部は下方に肥厚し、外端面を持つ。 [外]摩滅 [内]摩滅	[外]2.5Y8/3淡黄 [内]2.5Y8/3淡黄 普:1～2mmの石英、0.5mm以下の白色粒含む	良	
228	98	2・5-SX40	須恵器 高杯	- 10.8 [7.2]	脚部はハの字状に開き、裾部は大きく上方に屈折し、端部は下方に肥厚し、外端面を持つ。 [外]回転ナデ、沈線2条 [内]回転ナデ、ヘラナデ	[外]N7/灰白 [内]N7/灰白 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
229	98	2・5-SX40	須恵器 高杯	- - [6.3]	脚部はハの字状に開き、裾端部は外面に肥厚する。波状文、押圧文が巡る。 [外]回転ナデ、波状文、押圧文 [内]回転ナデ	[外]5P6/1紫灰 [内]5P6/1紫灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
230	98	2・5-SX40	須恵器 壺	11.0 - [12.1]	口縁部は上位でわずかに内弯し、端部は内傾する平面を有する。口縁部中位に1条の凹線が巡る。 肩部はなだらかに内弯して下る。3個の把手を有する。口縁部内外面に自然釉が部分的にかかる。 口縁部内面にへら記号がある。 [外]回転ナデ、平行タキ→カキ目 [内]回転ナデ、ナデ、青波状タキ	[外]N6/灰 [内]N7/灰白 普:	良	
231	98	2・5-SX40	須恵器 壺	- - [9.4]	体部上半の破片である。 [外]格子目状タキ→カキ目 [内]青波状タキ	[外]2.5GY4/1暗オリーブ灰 [内]5Y6/1灰 精良:0.5mm以下の白色粒少量含む	良	
232	98	2・5-SX40	須恵器 高杯	(12.4) (8.4) 7.4	杯部は浅く、口縁部が直立する。脚部はハの字状に開き、裾部は横に延び、裾端部は下方に若干肥厚する。 [外]回転ナデ、回転ヘラケズリ [内]回転ナデ	[外]10YR7/6明黄褐 [内]10YR7/6明黄褐 普:2～4mmの石英、0.5mm以下の白色粒含む	良	
233	98	2・5-SX40	土師器 壺	(11.4) - [9.6]	口縁部はわずかに外反し、端部は先細りする。体部は球形を呈する。 [外]ナデ、ハケ、ナデ [内]指頭圧、ナデ、接合痕	[外]2.5YR6/8橙 [内]2.5YR7/8橙 普:4mm以下の石英・長石含む		
234	98	2・5-SX40	土師器 製塩土器	(12.8) - [8.5]	口縁部は直立し、先細りする。体部上位に最大径を有する。 [外]ナデ、指頭圧 [内]ナデ	[外]5YR5/6明赤褐 [内]2.5Y6/3にぶい黄 普:1mm以下の石英・白色粒・黒色粒多量に含む	不良	
235	98	2・5-SX40	土師器 壺	(18.2) - [5.4]	口縁部は体部からゆるやかに屈曲する。口縁端部は先細る。 [外]摩滅 [内]摩滅	[外]10YR7/4にぶい黄橙 [内]10YR7/4にぶい黄橙 粗:1mm以下の石英・白色粒・赤色粒多量に含む	良	
236	98	2・5-SX40	土師器 壺	- - [3.0]	口縁部は体部からゆるやかに屈曲し、端部は丸い。 [外]摩滅 [内]摩滅	[外]10R5/6赤 [内]7.5YR7/3にぶい橙 普:2～3mmの石英、0.5mm以下の白色粒含む	良	
237	98	2・5-SX40	土師器 壺	- - [3.0]	口縁部は大きく外反する。 [外]ナデ [内]ナデ	[外]5YR6/6橙 [内]5YR6/6橙 普:1～5mmの石英、1mm以下の白色粒含む	良	
238	98	2・5-SX40	土師器 壺	(26.6) - [7.3]	口縁部は体部からくの字状に外反する。口縁部は厚くなり、端部は面を持つ。 [外]ヨコナデ、ハケ [内]ハケ、指頭圧後→ヘラナデ	[外]5YR5/8明赤褐 [内]7.5YR6/4にぶい橙 普:1mm以下の白色粒・石英含む	良	
239	98	2・5-SX40	土師器 壺	(35.1) - [12.7]	口縁部はくの字状に湾曲し、端部は面をなす。最大径は口縁端部に持つ。 [外]ナデ、摩滅 [内]ナデ、指頭圧、ハケ、接合痕	[外]7.5YR7/4にぶい橙 [内]7.5YR7/4にぶい橙 普:2mm以下の石英・長石含む		
240	99	2・5-SX40	土師器 鍋	(23.2) - [16.8]	口縁部は内弯する体部から、くの字状に屈曲し、端部は外端面をなす。把手を1対有する。 [外]ナデ、ハケ→ナデ、ハケ、指頭圧 [内]ハケ、指頭圧→ヘラナデ、ヘラケズリ	[外]7.5YR6/4にぶい橙 [内]7.5YR6/4にぶい橙 普:2mmの石英、0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む		
241	99	2・5-SX40	土師器 瓶	(23.8) - [11.5]	直線的な体部から口縁部に至る。 [外]ナデ、摩滅 [内]ナデ、摩滅	[外]5Y7/1灰白 [内]2.5Y7/3淡黄 普:1～5mmの石英、1mm以下の白色粒含む	良	
242	99	2・5-SX40	土師器 製塩土器	- - [2.8]	口縁部は直立気味に外反する。 [外]摩滅 [内]摩滅	[外]7.5YR4/3褐 [内]7.5YR4/3褐 普:1～2mmの石英、0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
246	99	2・5-SX50	須恵器 杯壺	(14.6) - [2.5]	口縁部と天井部の境は丸く、口縁部は直立気味である。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]2.5Y8/2灰白 [内]2.5Y8/2灰白 普:1mmの石英、0.5mm以下の黒色粒・白色粒含む	良	
247	99	2・5-SX50	須恵器 杯身	(10.8) - [3.9]	立ち上がりは短く、内傾する。受端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ、回転ヘラケズリ [内]回転ナデ	[外]7.5Y6/1灰 [内]7.5Y6/1灰 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	

表 14 土器観察表 (12)

遺物 番号	挿図 番号	出土遺構	種別 器種	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土	焼成	備考
248	99	2・5—SX50	須恵器 杯身	12.0 — 4.6	立ち上がりは短く、内傾する。受端部は丸くおさめる。器高が高い。 [外]回転ナデ、回転ヘラケズリ [内]回転ナデ	[外]5Y7/1灰白 [内]5Y7/1灰白 普:3～5mmの小石、1mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
249	99	2・5—SX50	須恵器 高杯	— — [3.2]	脚部はハの字状に開く。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ、未調整	[外]7.5Y6/1灰 [内]5PB6/1青灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
250	99	2・5—SX50	須恵器 高杯	— (9.6) [2.55]	脚部はハの字状に開く。裾部は横方向に延び、端部は外端面を持つ。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]7.5Y7/1灰白 [内]7.5Y7/1灰白 普:2～3mmの小石、0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
251	99	2・5—SX50	須恵器 杯	— 5.6 [2.2]	底部は丸みのある平底である。底部外面にヘラ記号がある。体部外面に自然釉がかかる。 [外]回転ナデ、回転ヘラケズリ、ナデ、ヘラ記号 [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N7/灰白 精良:0.5mm以下の白色粒含む	良	
252	99	2・5—SX50	須恵器 杯蓋	— (6.8) [2.2]	天井部は平らで、一部の器厚が厚い。 [外]ナデ、回転ナデ [内]回転ナデ	[外]7.5YR6/1褐灰 [内]10YR6/2灰黄褐 普:2～3mmの小石、0.5mm以下の黒色粒含む	良	
253	99	2・5—SX50	須恵器 杯	— (8.0) [2.15]	底面は丸味を帯びる。内面は凹凸が著しい。 [外]ヘラケズリ、静止ヘラケズリ [内]回転ナデ	[外]2.5Y8/2灰白 [内]2.5Y8/2灰白 普:1mm以下の黒色粒・白色粒含む	良	
254	99	2・5—SX50	須恵器 杯	(13.4) — [3.4]	内湾気味の体部から口縁部に至る。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]2.5Y4/1黄灰 [内]2.5Y7/1灰白 普:1mmの小石、0.5mm以下の白色粒含む	良	
255	99	2・5—SX50	土師器 杯	— — [2.6]	内湾気味の体部から口縁部に至る。 [外]摩滅 [内]ナデ	[外]5YR6/6橙 [内]5YR6/6橙 普:1～2mmの石英、0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
256	99	2・5—SX50	土師器 壺	— (10.0) [3.5]	底部は平底気味である。 [外]ナデ [内]ナデ、ヘラナデ	[外]7.5YR6/2灰褐 [内]7.5YR6/3にぶい褐 普:3mm以下の石英・長石含む		
257	99	2・5—SX50	土師器 壺	(42.4) — [9.4]	口縁部は球形の体部からくの字状に屈曲する。端部は面を有する。 [外]ナデ、ハケ [内]ナデ、指頭圧→ナデ	[外]5YR6/6橙 [内]7.5YR6/6橙 普:3～5mmの小石、1mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
258	99	2・5—SX50	土師器 壺	(9.0) — [3.5]	口縁部は体部からゆるやかに屈曲し、立ち上がる。 [外]摩滅 [内]摩滅	[外]5YR6/6橙 [内]5YR6/6橙 普:1～2mmの石英、0.5mm以下の白色粒含む	良	
259	99	2・5—SX50	土師器 製塩土器	(11.6) — [2.8]	口縁部はほぼ直立し、端部は丸い。 [外]摩滅 [内]摩滅	[外]7.5YR6/3にぶい褐 [内]7.5YR6/3にぶい褐 普:1mm以下の白色粒・黒色粒・赤色粒多量に含む	不良	
260	99	2・5—SX50	土師器 移動式カマド	— — —	下端に黒斑(煤)。 [外]ナデ [内]ナデ	[外]7.5YR8/4浅黄橙 [内]10YR8/4浅黄橙 普:1mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
263	100	7—SX4	須恵器 高杯	(9.0) — [2.9]	口縁部は直立した後、わずかに外反する。端部は内傾する浅い凹面を有する。 受部は短く、丸い。体部外面に波状文を施す。内面に自然釉がかかる。 [外]回転ナデ、波状文 [内]回転ナデ、自然釉	[外]5P7/1明紫灰 [内]5P7/1明紫灰 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
264	100	7—SX4	土師器 壺	— — [3.0]	口縁部はわずかに内湾気味になり、端部は内側に凹斜面をもつ。 [外]ナデ [内]ナデ	[外]5YR5/6明赤褐 [内]5YR5/6明赤褐 普:1mm以下の白色粒・黒色粒・雲母含む	良	
266	102	8—SX13	須恵器 杯蓋	(11.6) — [2.8]	口縁部と天井部の境は丸く、なめらか。口縁端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N5/灰 [内]N5/灰 普:0.5mm以下の石英・長石含む		
267	102	8—SX13	須恵器 杯蓋	13.8 — 3.9	天井部は浅く、平らである。口縁部と天井部の境は丸く、口縁部はやや内傾する。端部は丸い。 [外]回転ヘラケズリ、回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N6/灰 普:1mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
268	102	8—SX13	須恵器 杯蓋	(14.6) — [3.1]	口縁部と天井部の境は若干の稜をもち、口縁部はほぼ直立し、端部は凹斜面をなす。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]5Y7/1灰白 [内]5Y7/1灰白 普:0.5mm以下の白色粒少量含む	良	
269	102	8—SX13	須恵器 杯身	(11.6) — [3.25]	立ち上がりは短く、内傾する。受部は短く、丸い。 [外]回転ナデ、ナデ [内]回転ナデ	[外]10Y7/1灰白 [内]10Y7/1灰白 普:1mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
270	102	8—SX13	須恵器 杯身	(12.4) — [3.7]	器高は低い。立ち上がりは短く、内傾する。受端部は丸い。体部下位は外側に肥厚する。 [外]回転ナデ、回転ヘラケズリ、未調整 [内]回転ナデ	[外]7.5Y7/1灰白 [内]10Y7/1灰白 普:1mm以下の白色粒・黒色粒含む	良好	
271	102	8—SX13	土師器 高杯	(10.0) — [2.1]	裾部は広く開き、先細る。 [外]摩滅 [内]摩滅	[外]7.5YR7/6橙 [内]7.5YR7/6橙 普:0.5mm以下の白色粒若干含む	良	

表 15 土器観察表 (13)

遺物 番号	挿図 番号	出土遺構	種別 器種	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土	焼成	備考
272	102	8-SX13	土師器 壺	(20.6) - [4.8]	口縁部は体部からくの字状に屈曲し、端部は若干上方に延び、凹斜面をもつ。 [外]ヨコナデ、ハケ [内]ヨコナデ、ハケ→ナデ、ハケ	[外]7.5YR6/4にぶい橙 [内]7.5YR6/4にぶい橙 普:0.5mm以下の白色粒多量に含む	良	
273	102	8-SX13	土師器 壺	- - [4.8]	体部の上半である。 [外]格子状タタキ [内]青波状タタキ	[外]7.5YR7/6橙 [内]2.5Y6/3にぶい黄 普:0.5mm以下の白色粒・赤色粒含む	良	
274	102	8-SX13	土師器 壺	- - [11.0]	体部の中位である。 [外]格子状タタキ [内]青波状タタキ	[外]2.5Y7/4浅黄 [内]2.5Y7/4浅黄 普:1mm以下の白色粒・茶色粒含む	良	
276	105	第7調査区包含層	須恵器 甕	- (3.4) [3.6]	球形の体部で、中位下方に1条の凹線が巡り、その上下に波状文を施す。 [外]波状文、ナデ、ヘラケズリ [内]回転ナデ	[外]5P7/1明紫灰 [内]5P7/1明紫灰 普:1mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
277	105	第7調査区包含層	須恵器 壺	- - [8.2]	体部中位の破片である。 [外]カキ目、格子状タタキ→カキ目 [内]青波状タタキ	[外]N5/灰 [内]N5/灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
278	105	第7調査区包含層	土師器 壺	- - [3.0]	口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさめる。 [外]摩滅 [内]摩滅	[外]2.5Y7/3浅黄 [内]2.5Y7/3浅黄 普:1～2mmの小石、1mm以下の白色粒多量に含む	不良	
280	107	10-竖穴1	須恵器 杯壺	- - [1.9]	天井部はやや平らで、つまみを欠損する。 [外]回転ヘラケズリ、回転ナデ [内]指ナデ、回転ナデ	[外]7.5Y6/1灰 [内]7.5Y6/1灰 普:1mm以下の白色粒含む	良	
281	107	10-竖穴1	須恵器 杯壺	- - [2.2]	天井部は丸い。内面はわずかな凹凸がある。 [外]回転ヘラケズリ、回転ナデ [内]回転ナデ	[外]2.5GY6/1オリーブ灰 [内]2.5GY6/1オリーブ灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
282	107	10-竖穴1	須恵器 高杯	- (10.0) [1.7]	裾部は水平に延び、端部は下方に肥厚し、外端面をもつ。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]7.5Y7/2灰白 [内]7.5Y7/2灰白 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
283	107	10-竖穴1	須恵器 壺	(16.0) - [4.8]	口縁部はゆるやかに立ち上がり端部はわずかに肥厚し、端斜面を有する。外面に若干の凹凸がある。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N7/灰白 [内]7.5Y7/1灰白 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
284	107	10-竖穴1	土師器 鉢	(22.8) - [4.5]	内湾する体部から口縁部に至る。口縁端部は外端面を有する。 [外]ナデ、ハケ [内]摩滅	[外]5YR7/6橙 [内]5YR7/6橙 普:2mm以下の石英・白色粒含む	良	
285	107	10-竖穴1	土師器 鍋	(35.0) - 16.5	丸底の底部から体部に立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部は丸く、最大径となる。体部中位以下の外面は被熱する。 [外]ナデ、指頭圧→ハケ [内]ナデ、指頭圧→ヘラナデ、ヘラナデ	[外]10YR7/4にぶい黄橙、10YR4/2灰黄褐 [内]10YR2/1黒 普:4mm以下の白色粒・黒色粒・茶色粒含む		
287	108	10-SD10	須恵器 杯身	(11.4) - [2.3]	立ち上がりは短く、内傾する。受端部は丸い。 [外]回転ナデ、摩滅 [内]回転ナデ	[外]2.5Y8/2灰白 [内]2.5Y8/2灰白 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
288	108	10-SD10	須恵器 壺	- - [3.25]	体部中位がやや鋭角に屈折する。外面にヘラ記号?がある。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ、指頭圧→ナデ	[外]7.5YR5/2灰褐 [内]5PB5/1青灰 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
289	108	10-SD10	須恵器 高杯	- (9.0) [4.7]	脚部は短く、ハの字状に開く。裾部は水平に延び、端部は外端面をもつ。 [外]回転ナデ [内]ナデ、指ナデ、回転ナデ、ナデ	[外]5Y7/1灰白 [内]5Y8/2灰白 普:2mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
290	108	10-SD10	須恵器 平瓶	7.2 - 13.8	口縁部は外傾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。体部は丸底から立ち上がり、やや鋭角に屈折して稜を有する。 [外]回転ナデ、ナデ、ヘラナデ、回転ヘラケズリ、未調整 [内]回転ナデ、ナデ	[外]N7/灰白 [内]N7/灰白 普:1mm以下の白色粒含む	良	
291	109	10-SD15	須恵器 高杯	- - [4.1]	脚部はハの字状に開き、外面に1条の凹線が巡る。方形のスカシの一部が残存する。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]10Y6/1灰 [内]10Y6/1灰 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
292	109	10-SD15	須恵器 壺	- - [5.1]	体部の上半である。 [外]ヘラナデ [内]ナデ	[外]N5/灰 [内]N5/灰 普:1mm以下の白色粒含む	良	
294	110	11-SD1	須恵器 杯壺	- - [2.4]	天井部は丸い。内面は凹凸がある。 [外]回転ナデ、摩滅 [内]回転ナデ	[外]5Y8/1灰白 [内]5Y8/1灰白 普:2mmの石英、1mm以下の白色粒・黒色粒多量に含む	良	
295	110	11-SD1	須恵器 杯	- (6.6) [2.5]	体部は平底の底部からゆるやかに立ち上がる。 [外]回転ナデ→ナデ、 回転ヘラキリ→ナデ→板目 [内]回転ナデ	[外]2.5Y8/2灰白 [内]2.5Y8/2灰白 精良:0.5mm以下の黒色粒少量含む	良	
296	110	11-SD1	須恵器 壺	(26.0) - [5.3]	口縁部は大きく外反し、端部は上方、外側に肥厚し、外端面をもつ。 [外]回転ナデ [内]ナデ、摩滅	[外]N4/灰 [内]2.5GY6/1オリーブ灰 普:2mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	

表 16 土器観察表 (14)

遺物 番号	挿図 番号	出土遺構	種別 器種	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土	焼成	備考
297	110	11-SD1	須恵器 壺	- - [4.3]	体部の上半である。 [外]カキ目?、格子状タタキ [内]ナデ、青波状タタキ	[外]N7/灰白 [内]N7/灰白 普:1mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
298	111	12-SD1	須恵器 杯身	- - [1.8]	立ち上がりは欠損。受端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N7/灰白 [内]N7/灰白 普:0.5mm以下の白色粒含む		
299	111	12-SD1	須恵器 杯身	- - [4.3]	立ち上がりは短く、ほぼ直立する。受端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ、ナデ [内]回転ナデ	[外]7.5Y6/1灰 [内]7.5Y6/1灰 普:0.5mm以下の白色粒含む		
300	111	12-SD1	須恵器 壺	- - [3.6]	底部は平底で、外面は未調整。 [外]回転ヘラケズリーナデ [内]回転ナデ、ゴマ付着	[外]10R4/2灰赤 [内]10R4/2灰赤 普:1mm以下の白色粒・黒色粒含む		
301	111	12-SD1	土師器 高杯	- - [1.8]	裾端部は直線状に延び、細く丸くおさめる。 [外]摩減 [内]摩減	[外]2.5YR6/8橙 [内]2.5YR6/8橙 普:1mm以下の白色粒・赤色粒含む		
302	111	12-SD102	須恵器 杯蓋	- - [1.4]	天井部は平坦である。 [外]回転ナデ、回転ヘラケズリ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N6/灰 普:0.5mm以下の白色粒含む		
303	112	10-SK20	須恵器 高杯	- (9.4) [7.9]	脚部はハの字状に開く。裾部は水平に延び、端部は上下に肥厚し、凹斜面を有する。 脚部に1条の凹線が巡る。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ、しぼり目	[外]N6/灰 [内]N6/灰 精良:0.5mm以下の白色粒若干含む	良	
304	112	10-SK20	須恵器 提瓶	- - [16.5]	体部であり、一方が丸く、一方が平坦な扁球形を呈する。 [外]カキ目 [内]回転ナデ、未調整	[外]N7/灰白 [内]N7/灰白 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
305	112	10-SK20	須恵器 壺	- - [7.8]	体部の上半である。外面に自然釉がかかる。 [外]格子状タタキ、自然釉 [内]青波状タタキ	[外]5Y7/1灰白 [内]5Y7/1灰白 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
306	112	10-SK20	土師器 壺	- - [1.7]	口縁部は直線的に外反し、端部は丸い。 [外]摩減 [内]摩減	[外]5YR7/6橙 [内]5YR7/6橙 普:1mm以下の白色粒・赤色粒含む	良	
307	112	10-SK20	土師器 壺	- - [2.3]	口縁部は外反し、端部は丸い。 [外]ナデ [内]ナデ	[外]7.5YR7/4にぶい橙 [内]7.5YR7/4にぶい橙 普:1mm以下の白色粒・赤色粒含む	良	
308	113	11-SK14	土師器 鍋	30.8 - 26.4	体部は歪な球形で、底部は丸底である。口縁部は外反し、端部は少しつまみ上げる。1対の把手の接合部が残存する。 口縁部外面に輪積み痕が残る。 [外]ヨコナデ、2種類のハケ、2種類のヘラナデ [内]ハケ、指ナデ、指頭圧→ナデ、ハケ、摩減	[外]5YR7/6橙 [内]5YR7/6橙 普:3mm以下の石英、1mm以下の白色粒・黒色粒・茶色粒含む。		
309	115	10-SP16	土師器 杯	- - [1.9]	体部から直線的に延び、口縁部に至る。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]5Y8/2灰白 [内]5Y8/2灰白 普:	良	
310	115	11-SP6	須恵器 提瓶	(6.0) - [2.1]	口縁部は直線的に内傾し、端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]7.5Y6/1灰 [内]7.5Y6/1灰 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
311	115	11-SP6	須恵器 提瓶	- - [7.2]	体部の中位であり、内面に凹凸が見られる。 [外]ナデ [内]回転ナデ、未調整	[外]7.5Y7/1灰白 [内]7.5Y7/1灰白 普:2mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
312	116	11-SX2	須恵器 杯蓋	- - [2.6]	口縁部と天井部の境は丸くならで、端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N7/灰白 [内]N7/灰白 普:1mm以下の白色粒・黒色粒含む		
313	116	11-SX2	須恵器 杯身	- - [2.5]	立ち上がりは短く、内傾する。受端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]5Y7/2灰白 [内]5Y7/2灰白 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む		
314	116	11-SX2	須恵器 杯身	(11.8) - [3.0]	立ち上がりは短く、内傾する。受端部は丸い。 [外]回転ナデ、ナデ [内]回転ナデ	[外]7.5Y7/1灰白 [内]7.5Y7/1灰白 普:0.5mm以下の白色粒含む	良	
315	116	11-SX2	須恵器 杯身	9.8 - 3.7	立ち上がりは短く内傾する。受端部は丸くおさめる。器高が高い。 [外]回転ナデ、ナデ、回転ヘラケズリーヘラナデ [内]回転ナデ	[外]N7/灰白 [内]N7/灰白 普:1mm以下の白色粒含む		
316	116	11-SX2	須恵器 高杯	- - [4.5]	杯部は内湾して立ち上がる。器厚が厚い。 [外]回転ナデ、回転ヘラケズリ [内]回転ナデ、回転ナデ→ヘラナデ	[外]5Y7/2灰白 [内]5Y7/2灰白 普:1mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
317	116	11-SX2	須恵器 提瓶	- - [7.7]	体部の肩付近であり、1個の把手が残存する。 [外]ナデ [内]回転ナデ	[外]7.5Y7/1灰白 [内]7.5Y7/1灰白 普:0.5mm以下の白色粒・黒色粒含む	良	
318	116	11-SX2	土師器 タコ壺	(15.0) - [5.3]	体部はほぼ直立し、口縁部に至る。 [外]摩減 [内]摩減	[外]7.5YR6/6橙 [内]7.5YR6/6橙 普:3mm以下の白色粒・黒色粒多量に含む	良	

表 17 土器観察表 (15)

遺物 番号	挿図 番号	出土構	種別 器種	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土	焼成	備考
319	116	11-SX2	土師器 壺	- - [6.7]	体部の中位である。外面に黒斑がある。 [外]ハケ、ヘラの押圧文 [内]指頭圧→ナデ	[外]5YR4/6赤褐 [内]5YR4/6赤褐 普:2mm以下の石英・白色粒・黒色粒含む		
320	117	12-SX101	須恵器 杯身	- - [2.2]	口縁部と受端部を欠損。立ち上がりは内傾する。 [外]回転ナデ→ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N6/灰 普:0.5mm以下の白色粒含む		
321	117	12-SX101	須恵器 壺	- - [4.4]	頸部は外反する。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N7/灰白 [内]N7/灰白 普:2mm以下の白色粒含む		
322	119	12-SX2	須恵器 杯蓋	(10.0) - 3.5	口縁部と天井部の境は非常に弱い稜が巡り、内端部は斜面を有す。 [外]回転ナデ、回転ヘラケズリ [内]回転ナデ	[外]N5/灰 [内]N5/灰 普:0.5mm以下の白色粒含む		
323	119	12-SX2	須恵器 杯蓋	(13.2) - [2.3]	口縁部と天井部の境は弱い稜が巡り、内端部は弱い凹線が巡る。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N7/灰白 [内]N7/灰白 普:1mm以下の白色粒・黒色粒含む		
324	119	12-SX2	須恵器 杯蓋	(16.0) - [2.5]	口縁部と天井部の境は丸くなだらからで、内端部は斜面を有す。 [外]回転ナデ、回転ヘラケズリ [内]回転ナデ	[外]5YR5/2灰褐 [内]5YR5/2灰褐 普:1mm以下の白色粒含む		
325	119	12-SX2	須恵器 杯蓋	(17.8) - [2.6]	口縁部と天井部の境は弱い稜が巡り、内端部は斜面を有する。口径は大きい。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N5/灰 [内]N7/灰白 普:2mm以下の白色粒・黒色粒含む		
326	119	12-SX2	須恵器 杯蓋	- - [1.7]	天井部は平らである。 [外]回転ヘラケズリ、回転ナデ [内]青波状タタキ→ナデ、回転ナデ	[外]5PB6/1青灰 [内]5PB6/1青灰 普:1mm以下の白色粒含む		
327	119	12-SX2	須恵器 杯蓋	- - [2.3]	天井部は平らである。内面は凹凸が著しい。 [外]回転ヘラケズリ、回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N7/灰白 [内]N7/灰白 普:1mm以下の白色粒含む		
328	119	12-SX2	須恵器 杯蓋	- - [2.1]	口縁部と天井部の境は丸くなだらからで、内端部は斜面を有す。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N6/灰 普:1mm以下の白色粒含む		
329	119	12-SX2	須恵器 杯身	(13.2) - [3.6]	立ち上がりは強く内傾し、端部は先細りしている。受端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ、回転ヘラケズリ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N6/灰 普:1mm以下の白色粒少量含む		
330	119	12-SX2	須恵器 杯身	(13.4) - [3.1]	立ち上がりは短く内傾する。受端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]7.5Y6/1灰 [内]7.5Y6/1灰 普:1mm以下の白色粒・黒色粒含む		
331	119	12-SX2	須恵器 杯身	- - [5.0]	天井部は高く、丸い。内外面は凹凸が著しい。外面に火罨がある。 [外]回転ヘラケズリ、回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N5/灰 [内]N5/灰 普:1mm以下の白色粒少量含む		
332	119	12-SX2	須恵器 杯身	- - [2.6]	立ち上がりは細く、内傾する。受端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N6/灰 普:1mm以下の白色粒含む		
333	119	12-SX2	須恵器 杯身	- - [2.9]	立ち上がりを欠損。受端部は丸くおさめる。 [外]回転ナデ、回転ヘラケズリ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N6/灰 普:0.5mm以下の黒色粒含む		
334	119	12-SX2	須恵器 杯	(15.8) - [3.6]	体部は直線的に外傾し、口縁部に至る。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N7/灰白 [内]N7/灰白 普:1mm以下の白色粒・黒色粒含む		
335	119	12-SX2	須恵器 高杯	- (12.0) [3.1]	脚部はハの字状に開き、裾端部は上方に湾曲し、外端面を持つ。 [外]摩滅 [内]摩滅	[外]2.5Y7/2灰黄 [内]2.5Y7/2灰黄 普:1mm以下の白色粒・黒色粒含む		
336	119	12-SX2	須恵器 短頸壺	(9.0) - [6.7]	口縁部は短く直立し、端部は丸くおさめる。体部は扁球形を呈す。 [外]回転ナデ [内]回転ナデ	[外]N6/灰 [内]N6/灰 普:0.5mm以下の白色粒少量含む		
337	119	12-SX2	須恵器 壺	- - [4.3]	体部上半である。 [外]格子状タタキ→ヘラナデ [内]青波状タタキ	[外]10Y7/1灰白 [内]N5/灰 普:0.5mm以下の黒色粒含む		
338	119	12-SX2	須恵器 壺	(23.4) - [54.8]	口縁部は基部から直立し、中位で上外方に延び、端部は上下に肥厚し、丸い。体部は肩が張り、最大径をもつ。底部は丸底である。底面内面に重ね焼き痕がある。口縁部外形の文様は上から波状文、凹線、波状文、凹線、3条の沈線である。 [外]回転ナデ、波状文、凹線、沈線、ハケ、ナデ、格子状タタキ、格子状タタキ→ハケ [内]回転ナデ、青波状タタキ→ナデ、ヘラナデ、青波状タタキ	[外]N7/灰白+N5/灰 [内]N6/灰 普:2mm以下の白色粒・黒色粒多量含む		
339	119	12-SX2	土師器 壺	- - [3.1]	口縁部は湾曲し、大きく外反する。端部は丸くおさめる。 [外]摩滅 [内]摩滅	[外]5Y7/2灰白 [内]5Y7/2灰白 普:1mm以下の白色粒含む		

表 18 土製品観察表

遺物 番号	挿図 番号	出土遺構	種別 機種	長さ 幅 厚み	重量(g)	色調[外][内] 胎土 焼成	備考
48	25	2・3―竪穴30	土師器 円盤	6.4×6.0 － 0.8	[35.7]		
243	99	2・5―SX40	羽口	[3.3] [5.3] [1.7]			自然釉がかかる。
261	99	2・5―SX50	粘土塊 －	4.5 3.4 2.9		[外]10YR8/4浅黄橙 良	
262	99	2・5―SX50	粘土塊	3.0 2.3 1.9		[外]7.5YR8/3浅黄橙 良	

表 19 金属製品観察表

遺物 番号	挿図 番号	出土遺構	種類	機種	法量				備考
					最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	
13	11	26―SD29	鉄製品	鉄斧	11.1	4.1	3.0	218.3	
49	25	2・3―竪穴30	鉄製品	刀子	[3.4]	1.3	0.6		
99	43	7―竪穴6	スラグ		3.9	3.3	2.0		
127	53	7・8―竪穴14	鉄製品	不明	(7.5)	1.4	1.6	12.6	
132	57	14―竪穴10	鉄製品	釘?	(2.6)	1.1	1.1	2.4	
203	93	15―SP2	鉄製品	釘?	(6.2)	1.2	0.9	6.9	
205	95	2・4―SX10	鉄製品	釘	[3.4]	0.3	0.3		
265	101	7・14―SX9	鉄製品	釘	[4.0]	0.3	0.3	[1.1]	
279	105	第4調査区攪乱	青銅製	つりばり	4.3	径0.3	－	2.4	

表 20 石器・石製品観察表

遺物 番号	挿図 番号	出土遺構	機種	石材	法量				備考
					最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	
16	16	26―SP3	石鏃	サヌカイト	(1.5)	1.2	0.35	0.6	平基式
75	33	4―竪穴110	管玉	滑石	5.0	0.7	0.8	3.1	
95	41	7―竪穴5	スクレイパー	サヌカイト	5.1	4.1	0.5	13	
96	41	7―竪穴5	剥片	サヌカイト	4.5	2.3	0.5	7.8	
109	47	7―竪穴10	スクレイパー?	サヌカイト	(6.5)	7.0	1.75	85.2	
126	53	7・8―竪穴14	石器	砂岩	[9.9]	[9.2]	[3.6]	[376]	
198	87	7―SK23	たたき石	砂岩	11.5	8.0	4.95	532.7	敲打痕および線状の打痕あり
199	87	7―SK23	砥石	砂岩	(13.4)	9.1	9.2	1250	被熱
244	99	2・5―SX40	砥石	安山岩	[15.2]	[8.5]	[3.7]	[681.1]	擦痕多数
245	99	2・5―SX40	台石	砂岩	13.4	12.7	4.4	[998.7]	
275	102	8―SX13	砥石?		24.9	18.2	5.4	3800	一部被熱か? →赤色化が確認できる
286	107	10―竪穴1	打製石斧	サヌカイト	3.0	[2.0]	0.35	2.1	使用痕あり
293	109	10―SD15	石鏃	サヌカイト	1.65	1.5	0.35	0.4	凹基式

写真図版 1



(1) 第26調査区 完掘 (南から)



(2) 第26調査区 完掘 (東から)



(3) 第26調査区 完掘 (西から)



(1) 第 25 調査区完掘 (北から)



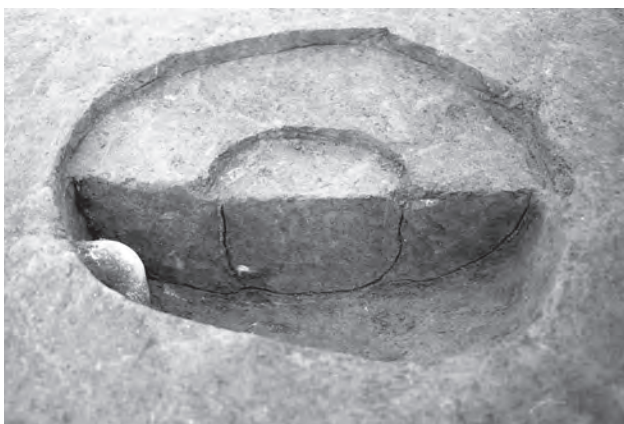
(2) 26- 竖穴 18 断面 (南から)



(3) 26- 竖穴 18 断面 (北西から)



(4) 26- 竖穴 18 カマド 断面 (西から)



(5) 26- 竖穴 18 P 1 断面 (南から)



(6) 26- 竖穴 45 完掘 (北西から)



(7) 26- 竖穴 45 カマド (南東から)



(8) 26- 掘立 52 SP 4 断面 (西から)



(1) 26-掘立 52 SP 9断面 (南から)



(2) 26-掘立 53 SP11・12断面 (南東から)



(3) 26-SD 1 断面 (北から)



(4) 26-SD17 断面 (南から)



(5) 26-SD20 断面 (西から)



(6) 26-SD20 遺物出土 (南から)



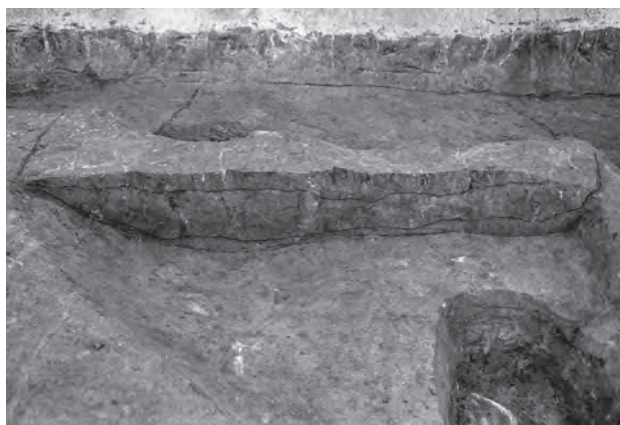
(7) 26-SD29 遺物出土 (南から)



(8) 26-SD40 断面 (南から)



(1) 26-SK 2 断面 (西から)



(2) 26-SK37 断面 (南から)



(3) 26-SP 3 断面 (南から)



(4) 26-柵列 54 SP25 断面 (北から)



(5) 26-柵列 54 SP26 断面 (北から)



(6) 26-SX33 完掘 (南東から)



(7) 26-SX39 断面 (西から)



(8) 26-SX51 完掘 (東から)



(1) 第1調査区(東側) 完掘(南から)



(2) 第1調査区(西側) 完掘(南から)



(3) 第15調査区(第2遺構面) 完掘(南から)



(1) 第2調査区(西側) 完掘(東から)



(2) 第2調査区(東側) 完掘(西から)



(3) 第2調査区(東側) 完掘(南から)



(1) 第3調査区 完掘（北から）



(2) 第4調査区 完掘（西から）



(1) 第5調査区 完掘(南西から)



(2) 第7調査区 完掘(南西から)



(1) 第8調査区 完掘（南東から）



(2) 第9調査区 完掘（北から）



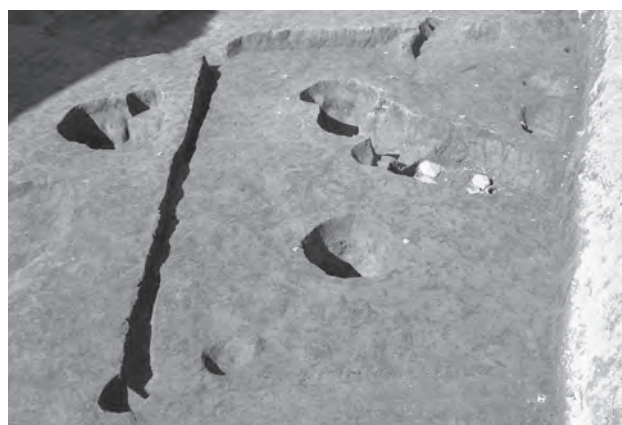
(1) 2・3-竪穴 20 完掘 (西から)



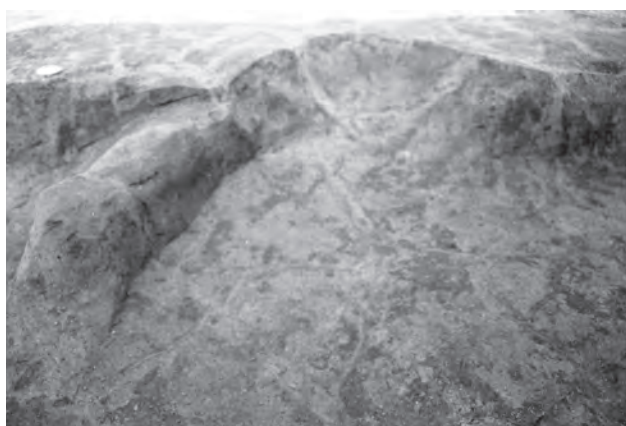
(2) 2・3-竪穴 20 掘方 (南から)



(3) 2・3-竪穴 20 カマド断面 (西から)



(4) 2・3-竪穴 30 完掘 (南から)



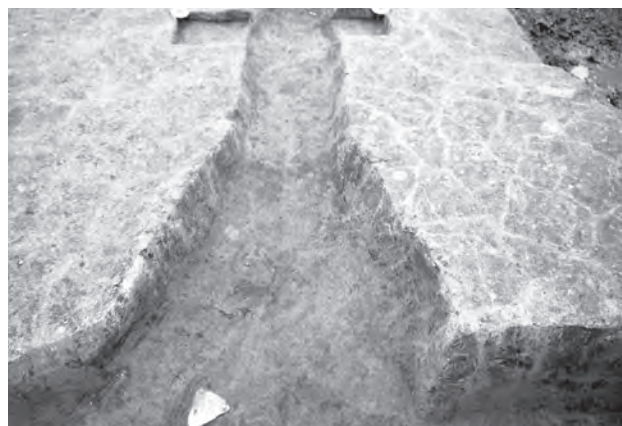
(5) 2・3-竪穴 30 カマド (南から)



(6) 2・3-竪穴 30 遺物出土 (東から)



(7) 2・4-竪穴 58 完掘 (南から)



(8) 2・4-竪穴 58 カマド (南から)



(1) 3- 竖穴 70 断面 (南から)



(2) 3- 竖穴 70 完掘 (北から)



(3) 3- 竖穴 90 断面 (南から)



(4) 3- 竖穴 100 完掘 (南から)



(5) 3- 竖穴 100 カマド (南から)



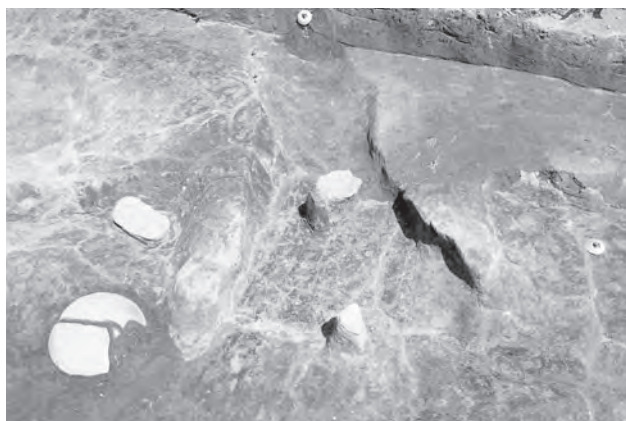
(6) 4- 竖穴 110 断面 (南西から)



(7) 4- 竖穴 110 SP94 断面 (南から)



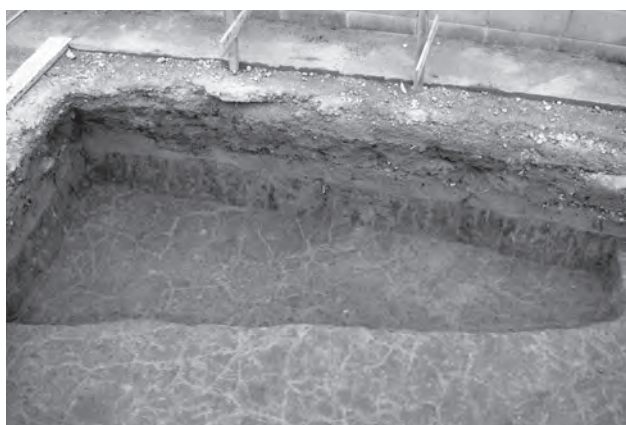
(8) 4- 竖穴 110 完掘 (南から)



(1) 4- 竪穴 110 カマド (南から)



(2) 4- 竪穴 120 完掘 (南から)



(3) 4- 竪穴 130 完掘 (南から)



(4) 7- 竪穴 1 P 1 断面 (南から)



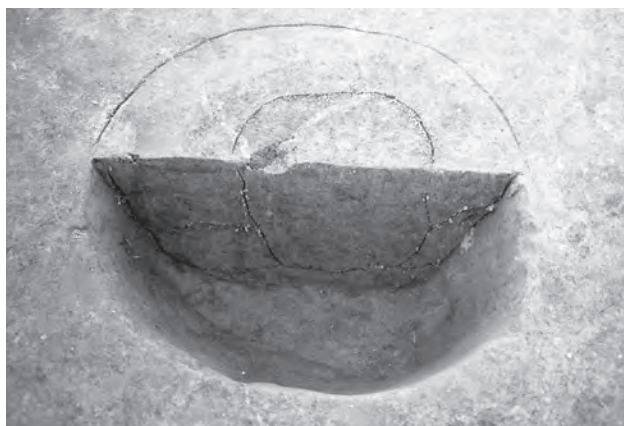
(5) 7- 竪穴 1 完掘 (南東から)



(6) 7- 竪穴 1 遺物出土 (南から)



(7) 7・9- 竪穴 2 断面 (南西から)



(8) 7・9- 竪穴 2 P 3 断面 (南から)



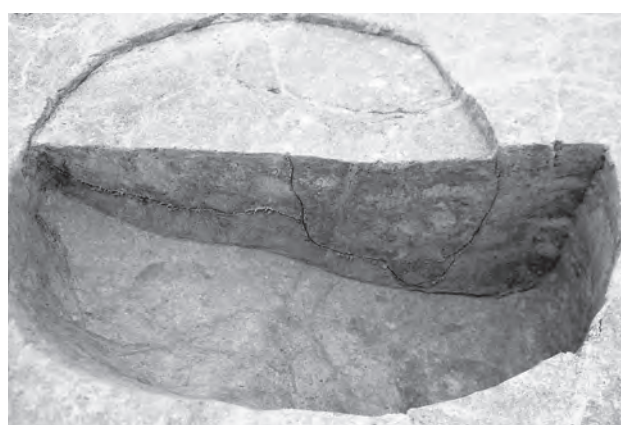
(1) 7・9-竪穴2 完掘(南から)



(2) 7・9-竪穴3 断面(東から)



(3) 7・9-竪穴3 カマド(南東から)



(4) 7-竪穴5 P3断面(南から)



(5) 7-竪穴5 断面(南東から)



(6) 7-竪穴5 完掘(南東から)



(7) 7-竪穴5 カマド(南から)



(8) 7-竪穴5 旧カマド(南から)



(1) 7- 竪穴6 断面 (南西から)



(2) 7- 竪穴6 完掘 (南から)



(3) 7- 竪穴6 カマド (南から)



(4) 7- 竪穴7 断面 (南東から)



(5) 7- 竪穴7 完掘 (南から)



(6) 7- 竪穴7 遺物出土 (南から)



(7) 7- 竪穴10 P4断面 (南から)



(8) 7- 竪穴10 完掘 (南から)



(1) 7- 竖穴 10 遺物出土 (西から)



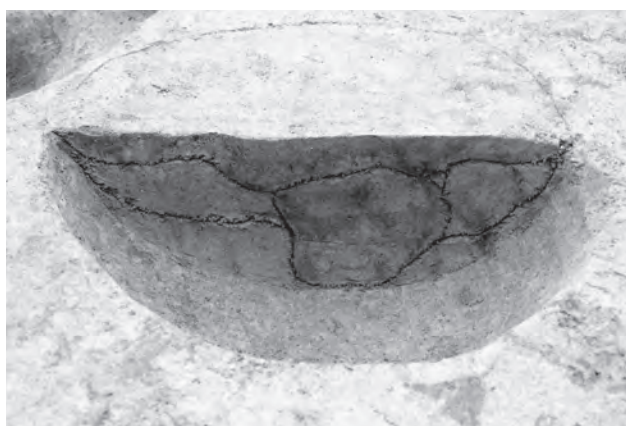
(2) 7- 竖穴 11 P 2断面 (南から)



(3) 7- 竖穴 11 完掘 (南から)



(4) 7- 竖穴 11 カマド (南から)



(5) 8- 竖穴 12 P 3断面 (南から)



(6) 8- 竖穴 12 完掘 (東から)



(7) 8- 竖穴 12 カマド (南から)



(8) 8- 竖穴 14 完掘 (北から)



(1) 8- 竪穴 14 カマド (南から)



(2) 8- 竪穴 14 掘方 (北から)



(3) 9- 竪穴 1 P 1 断面 (南から)



(4) 9- 竪穴 1 P 2 断面 (南から)



(5) 9- 竪穴 1 完掘 (南東から)



(6) 7・14- 竪穴 8 完掘 (南東から)



(7) 7・14- 竪穴 8 カマド (南から)



(8) 14- 竪穴 10 断面 (南西から)



(1) 14- 竖穴 10 完掘 (南西から)



(2) 15- 竖穴 12 完掘 (南から)



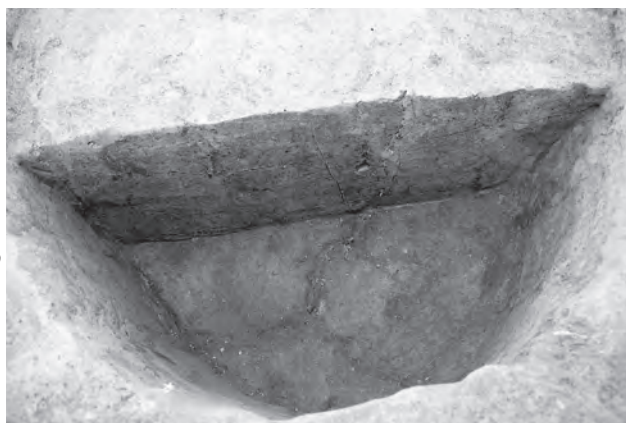
(3) 2・3- 掘立 1 SP33 断面 (南から)



(4) 2・3- 掘立 1 SP37 断面 (北から)



(5) 2・3- 掘立 1 完掘 (西から)



(1) 4-掘立3 SP22 断面 (南から)



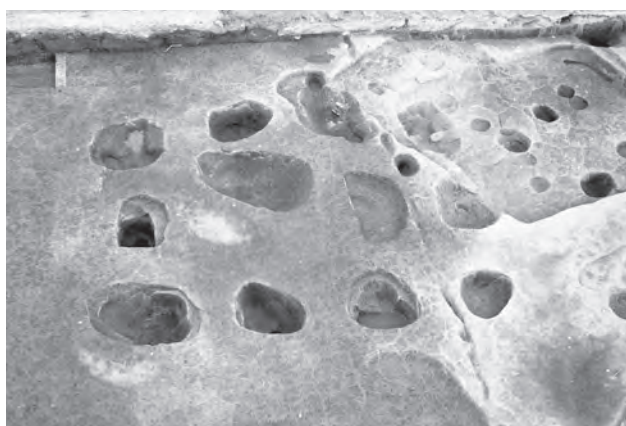
(2) 4-掘立3 完掘 (南から)



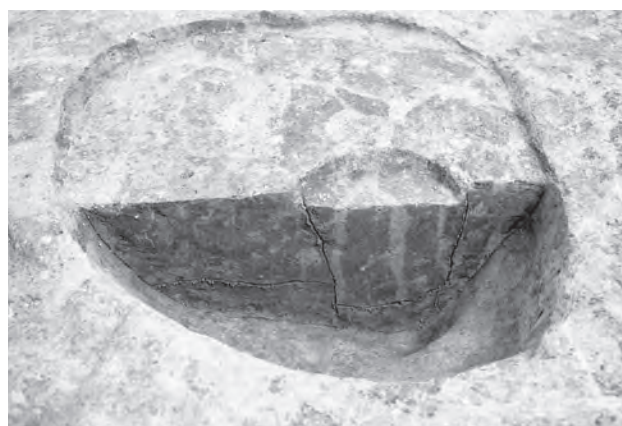
(3) 4-掘立4 上面検出 (南から)



(4) 4-掘立4 SP73 断面 (北から)



(5) 4-掘立4 完掘 (南から)



(6) 2・5-掘立6 SP17 断面 (南から)



(7) 2・5-掘立 SP20 断面 (南から)



(8) 2・5-掘立6 完掘 (東から)



(1) 2-掘立7 SP23 断面 (南から)



(2) 2-掘立7 完掘 (北から)



(3) 9-掘立1 SP 2 断面 (南から)



(4) 9-掘立1 SP 7 断面 (北から)



(5) 9-掘立1 完掘 (東から)



(1) 1-SD20 完掘 (北から)



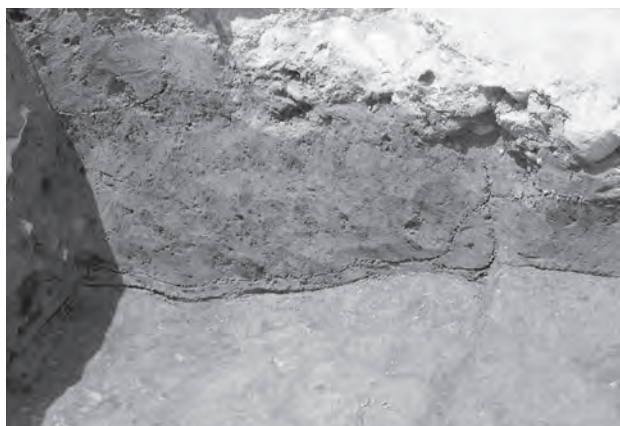
(2) 16-SD50 完掘 (北から)



(3) 2・4・5-SD 1、2-SD 2・3 (北から)



(4) 2・4・5-SD 1 断面 (南から)



(5) 2・3・5・8-SD 5 断面 (東から)



(1) 1-SD20 完掘 (北から)



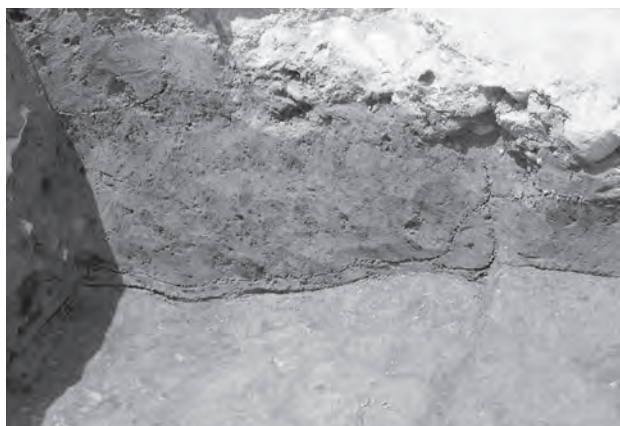
(2) 16-SD50 完掘 (北から)



(3) 2・4・5-SD 1、2-SD 2・3 (北から)



(4) 2・4・5-SD 1 断面 (南から)



(5) 2・3・5・8-SD 5 断面 (東から)



(1) 5-SD 2 断面 (東から)



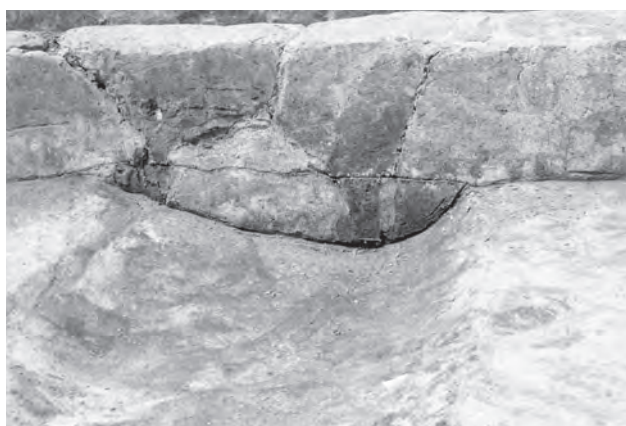
(2) 7・8・9-SD21 断面 (南から)



(3) 7・8・9-SD21 断面 (南から)



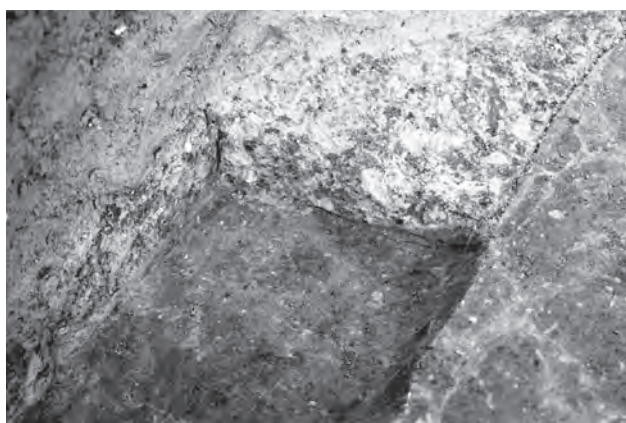
(4) 7-SD25 断面 (西から)



(5) 7-SD39 断面 (南から)



(6) 8-SD60 断面 (北から)



(7) 14-SD 4 断面 (南から)



(8) 14-SD 5 断面 (西から)



(1) 15-SD1 断面(東から)



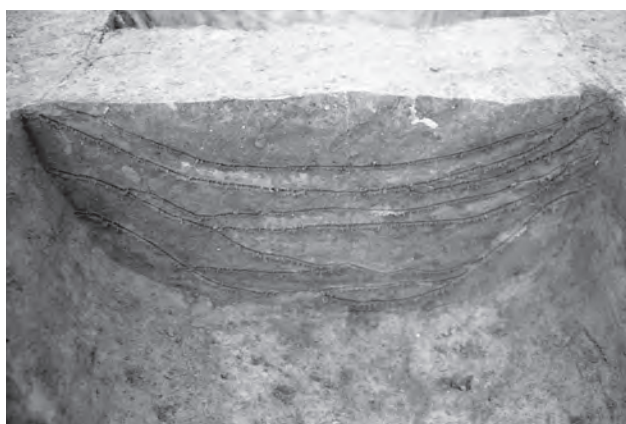
(2) 15-SD1 完掘(西から)



(3) 15-SD11 断面(南から)



(4) 15-SD11 完掘(南から)



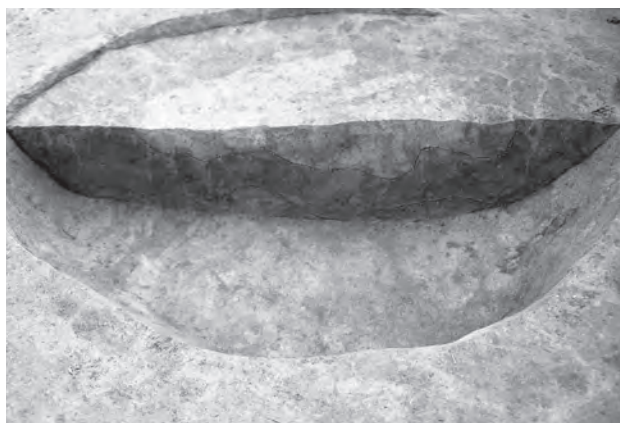
(5) 15-SD13 断面(南から)



(6) 15-SD13 完掘(南から)



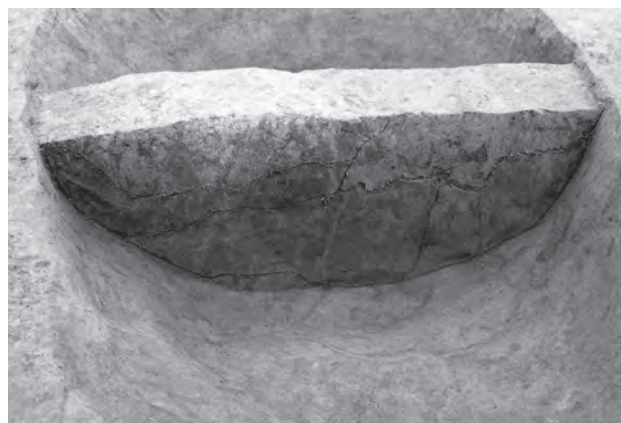
(7) 2-SK 5 断面(南から)



(8) 2-SK47 断面(南西から)



(1) 4-SK47 断面 (南東から)



(2) 4-SK75 断面 (西から)



(3) 4-SK76 断面 (西から)



(4) 4・14-SK97 断面 (南から)



(5) 7-SK23 断面 (北東から)



(6) 7-SK27 断面 (東から)



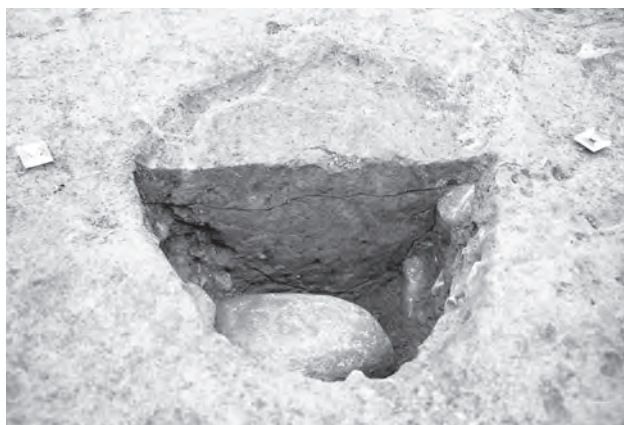
(7) 7-SK30 断面 (東から)



(8) 9-SK23 断面 (南から)



(1) 16-SK57 断面 (南から)



(2) 1-SP25 断面 (南から)



(3) 2・4-SX10 断面 (南から)



(4) 2・5-SX40・50 断面 (東から)



(5) 2・5-SX40 遺物出土 (東から)



(6) 2・5-SX40 断面 (南西から)



(7) 2・5-SX50 断面 (北東から)



(8) 2・5-SX40・50 完掘 (南から)



(1) 7-SX 4 断面 (北東から)



(2) 8-SX13 断面 (東から)



(3) 9-SX29 断面 (南東から)



(4) 第10調査区 完掘 (東から)



(5) 第11調査区 完掘 (北東から)



(6) 第12調査区 (南側) 完掘 (東から)



(7) 第12調査区 (北側) 完掘 (南東から)



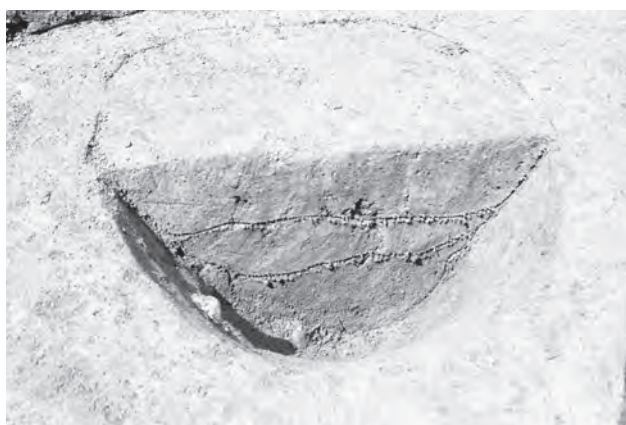
(8) 第13調査区 完掘 (北東から)



(1) 10- 竖穴 1 断面 (西から)



(2) 10- 竖穴 1 遺物出土 (西から)



(3) 10- 竖穴 1 P 2 断面 (南から)



(4) 10- 竖穴 1 P 3 断面 (南から)



(5) 10-SD 5 断面 (北から)



(6) 10-SD10 断面 (南から)



(7) 10-SD10 遺物出土 (北西から)



(8) 10-SD15 断面 (南から)



(1) 11-SD 1 断面 (南東から)



(2) 11-SD 1 完掘 (南東から)



(3) 10-SK 3 断面 (東から)



(4) 10-SK20 断面 (北西から)



(5) 10-SK20 遺物出土 (北から)



(6) 11-SK14 遺物出土 (北から)



(7) 11-SK14 完掘 (南から)



(8) 11-SK21 完掘 (南から)



(1) 12-SK 3 断面 (南から)



(2) 13-SK 3 断面 (北から)



(3) 11-SX 2 断面 (北西から)



(4) 12-SX101 完掘 (南東から)



(5) 第10調査区 噴礫断面 (東から)



(1) 第11調査区 噴礫断面(南東から)



(2) 調査風景



(3) 調査風景



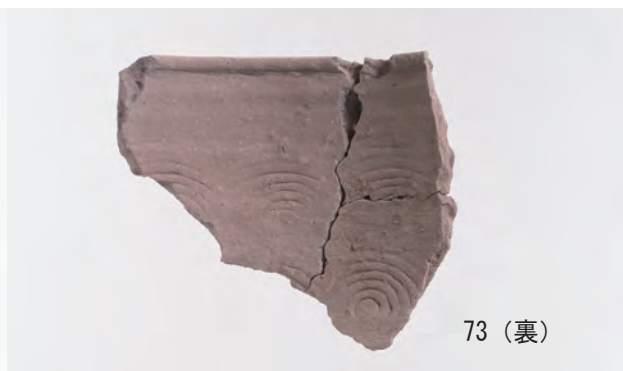
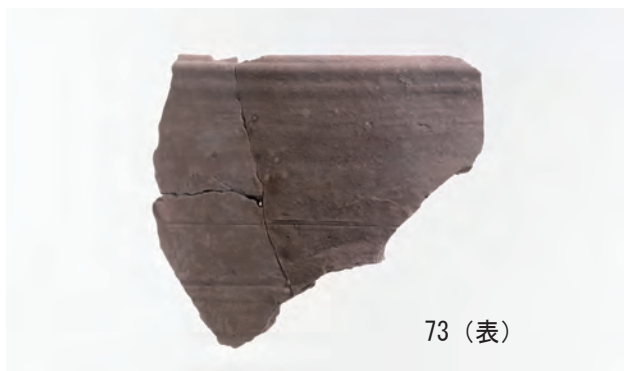
(4) 調査風景



(5) 調査風景









210



218



211



221



215



228



216



232



217



230



238



267



239



276



240



285



248



290



260



308





報告書抄録

ふりがな	はぎのまえ・いっぽんぎいせきⅢ							
書名	萩前・一本木遺跡Ⅲ							
副書名	市道仏生山円座線新設改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	第3冊							
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第 220集							
編著者名	中西 克也							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760－8571 香川県高松市番町一丁目 8 番 15 号 TEL087－839－2660							
発行年月日	令和３年３月３１日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ′ "	東経 ° ′ "	調査期間	調査面積	発掘原因
はぎのまえ・いっぽんぎいせき 萩前・一本木遺跡	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 ぶつしょうざんちょう 仏生山町 こう甲	37201	10971	34° 17′ 00″	134° 2′ 31″	2012. 10. 15～ 2018. 1. 13	2, 927㎡	市道 仏生山 円座線 新設改良事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
萩前・一本木遺跡	集落遺跡	古墳時代後期 飛鳥時代 近世	竪穴建物 土坑 溝 堀立柱建物 柵		土師器（古墳時代） 須恵器（古墳時代・ 飛鳥時代） 鉄器 石器など		古墳時代後期の竪穴 建物や堀立柱建物を検 出した。 その他、飛鳥時代の 溝及び近世の基幹水路 を検出した。	
要約	高松市仏生山町甲に所在する、古墳時代中期から飛鳥時代を中心とする集落遺跡である。今回の調査では、古墳時代後期の竪穴建物・堀立柱建物を検出しており、首長居館区画内と区画外の建物を面積から比較検討し、居館の中核となる建物の様相の一端を明らかにすることができた。							

高松市埋蔵文化財調査報告第 220 集
市道仏生山円座線新設改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
萩前・一本木遺跡Ⅲ

編集・発行	高松市教育委員会 高松市番町一丁目 8 番 15 号
発行日	2021 年 3 月 31 日
印刷	有限会社 中央ファイリング